渋山池古墳群

(SIBUYAMAIKE KOHUNGUN)

一般国道９号（安来道路）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅺ

１９９８年３月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

渋山池古墳群

(SIBUYAMAIKE KOHUNGUN)

一般国道９号（安来道路）建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅺ

１９９８年３月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道９号のバイパスとして高規格道路安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当道路においても道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、６～７年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものです。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術並びに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成10年３月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長　大石　龍太郎

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成４年度から一般国道９号安来道路建設予定地内（西地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本報告書は平成６～７年度に実施した八束郡東出雲町揖屋の「渋山池古墳群」の調査結果をとりまとめたものです。

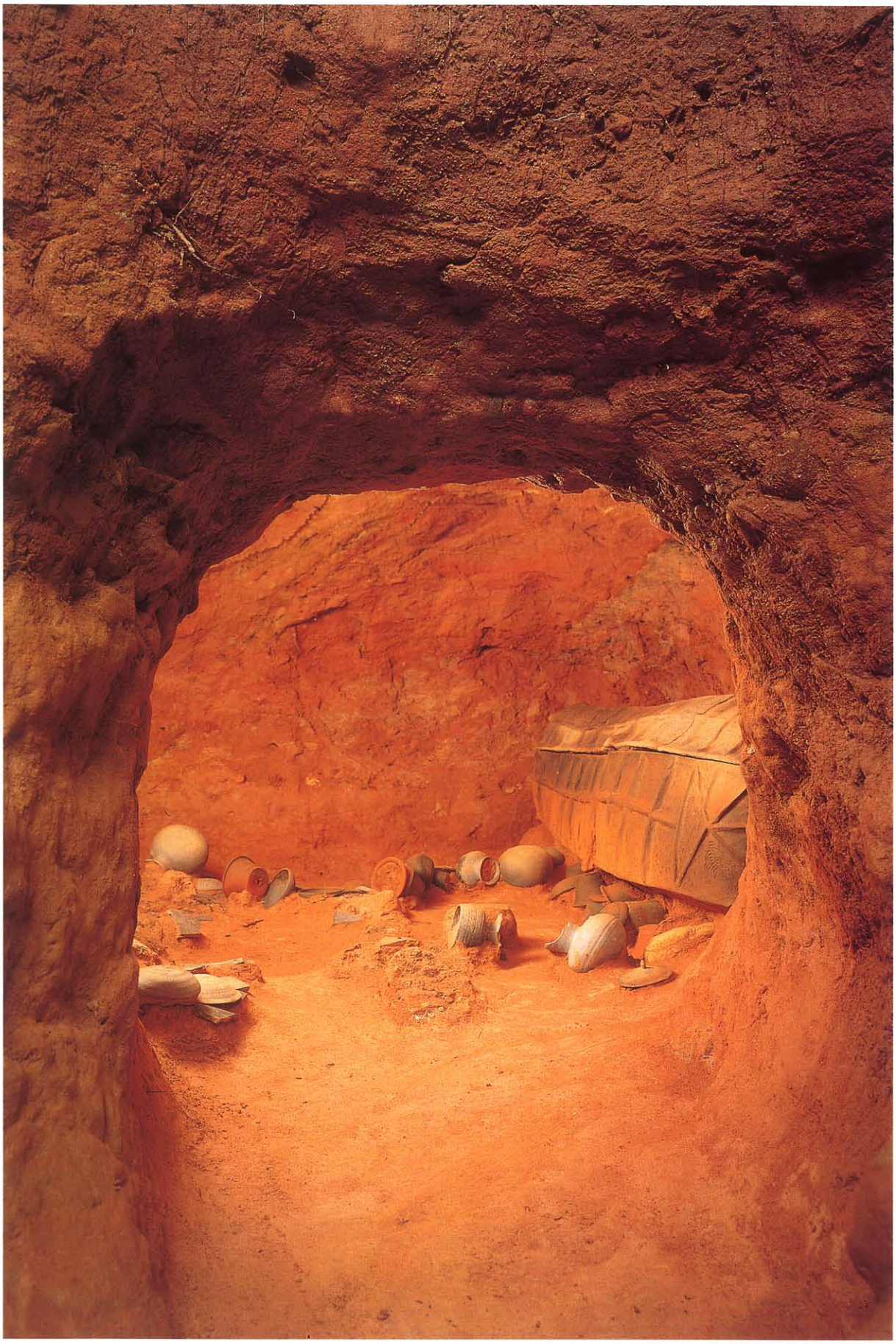
本遺跡は意宇平野と安来平野の中間位置にあり、周辺部は縄文時代から奈良・平安時代にかけての重要な遺跡が多数存在するなど古くから重要な地域であったことがうかがえます。今回調査した渋山池古墳群では弥生時代・奈良時代の住居跡などのほか古墳時代中期～終末期の古墳や横穴墓が見つかりました。また、平安時代頃の窯跡も確認されるなど、この地域の歴史像を解明する手がかりとなる資料が得られたことは大きな成果と言えます。本報告書が地域の歴史を解明する糸口となり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力を頂きました建設省松江国道工事事務所、東出雲町教育委員会をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成10年３月

島根県教育委員会

教育長　江　口　博　晴



Ⅳ区　１号横穴墓　玄室内遺物出土状況

1 号横穴墓出土陶棺

54－26　68－7　68－8　107－32

68－9　68－10　68－11　68－13　68－14

横穴墓出土玉類

例　　言

1．本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成６～７年度にかけて実施した、一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．本書に掲載した遺跡は八束郡東出雲町揖屋に所在する渋山池古墳群である。

3．調査組織は次の通りである。

調査主体　　島根県教育委員会

事務局

（平成６年度）文化課　広沢卓嗣（課長）、野村純一（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　勝部　昭（センター長）、佐伯善治（課長補佐）、
工藤直樹（企画調整係主事）

（平成７年度）文化財課　勝部　昭（課長）、森山洋光（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、佐伯義治（課長補佐）、
澁谷昌宏（企画調整係主事）

（平成９年度）文化財課　勝部　昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）
埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、古崎蔵治（課長補佐）、
澁谷昌宏（企画調整係主事）

調査員

（平成６年度）埋蔵文化財調査センター　宮澤明久（主幹・調査第１係長）、北尾浩之（教諭兼文化財保護主事）、勝部智明（主事）

（平成７年度）埋蔵文化財調査センター　宮澤明久（主幹・調査第１係長）、藤原尚幸（教諭兼文化財保護主事）、亀井彰子（講師兼主事）、石倉敬子（教諭兼主事）、
椿　真治（主事）、深田　浩（主事）、勝部智明（主事）、清水初美（臨時職員）、上河淳浩（臨時職員）、松近正巳（臨時職員）、大西憲和（臨時職員）

（平成９年度）石倉敬子（教諭兼文化財保護主事）、勝部智明（主事）、小田川悠美（臨時職員）
遺物整理　石倉紀子、板垣見知子、門脇由己子、陶山佳代、錦織美千恵、
山本千草、渡辺恵子

4．発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の三者協議に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部　布村幹夫（現場事務所長）、原　博明（技術員）、
木村昌義（技術員）、小川剛史（技術員）、与倉明子（事務員）、高木由佳（事務員）、
高崎益美（事務員）、加藤道恵（事務員）

5．発掘調査ならびに報告書作成にあたっては以下の方々から有益なご助言を頂いた。記して謝意を表したい。（敬称略）

池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）、村上久和（大分県教育委員会）、和田晴吾（立命館大学文学部教授）、新納　泉（岡山大学文学部助教授）、間壁葭子（倉敷考古館）、大谷晃二（島根県八雲立つ風土記の丘資料館学芸員）、中村唯史（島根大学地球資源環境学教室）

〈写真撮影〉牛島　茂（奈良国立文化財研究所）

6．本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

7．挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位である。

8．挿図中の縮尺は図中に明示した。

9．本書で使用した遺跡記号は以下の通りである。

ＳＩ（竪穴住居跡）、ＳＢ（掘建柱建物跡）、ＳＤ（溝状遺構）、ＳＫ（土坑）

Ｐ（ピット）、ＳＸ（その他）

10．遺物の実測は以下の者が行った。また、陶棺の立面図作成にはアジア航測（株）の協力を得た。

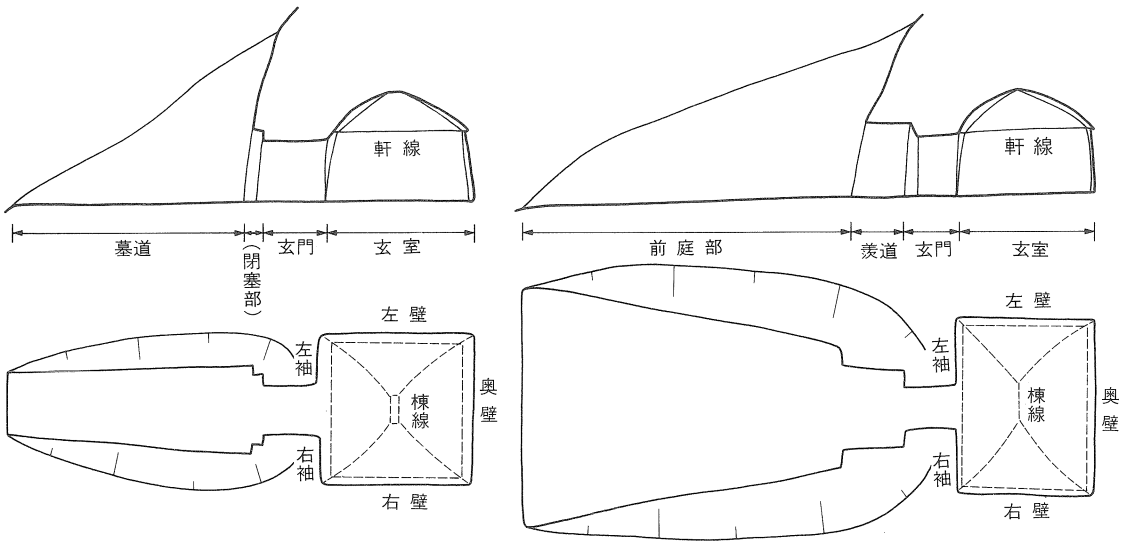
藤原、亀井、石倉、勝部、清水、大西、小田川

11．本書に掲載した遺物の写真撮影は石倉、勝部が行った。

12．本書の執筆・編集は調査員が協議分担して行い、文責は目次に明示した。

13．出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

14．本書で呼称する横穴墓の部分名称は以下のとおりである。



横穴墓各部名称図

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　周辺の遺跡 …… 4
第３図　渋山池古墳群周辺地形図・調査区配置図 …… 6
第４図　渋山池古墳群調査後地形測量図・遺構配置図（Ⅲ～Ⅴ区） …… 7
第５図　Ⅰ区出土遺物実測図 …… 8
第６図　１～３号墳周辺調査前地形測量図 …… 9
第７図　１～３号墳周辺調査後地形測量図 …… 10
第８図　１～３号墳墳丘土層断面図（１） …… 10
第９図　１～３号墳墳丘土層断面図（２） …… 11
第10図　１号墳主体部実測図 …… 12
第11図　１号墳出土遺物実測図 …… 12
第12図　２号墳主体部実測図 …… 13
第13図　３号墳溝内土師器出土状況 …… 14
第14図　３号墳溝出土遺物実測図 …… 15
第15図　ＳＸ01実測図・遺物出土状況 …… 16
第16図　ＳＸ01出土遺物実測図 …… 16
第17図　ＳＸ02実測図・遺物出土状況 …… 17
第18図　ＳＸ02出土遺物実測図 …… 17
第19図　ＳＸ03実測図・遺物出土状況 …… 18
第20図　ＳＸ03出土遺物実測図 …… 18
第21図　ＳＫ01実測図・遺物出土状況 …… 19
第22図　ＳＫ01出土遺物実測図 …… 20
第23図　４、10、11号墳周辺調査前地形測量図 …… 21
第24図　４、10、11号墳周辺調査後地形測量図 …… 22
第25図　４号墳溝出土遺物実測図 …… 22
第26図　ＳＸ04実測図・土師器出土状況 …… 23
第27図　５～９、12、13号墳周辺調査前地形測量図 …… 24
第28図　５～９、12、13号墳周辺調査後地形測量図 …… 25
第29図　墳丘土層断面図 …… 26
第30図　５号墳主体部実測図 …… 27
第31図　５号墳出土遺物実測図 …… 27
第32図　６号墳主体部実測図 …… 28
第33図　８号墳主体部実測図 …… 30
第34図　９号墳出土遺物実測図 …… 31
第35図　12号墳出土遺物実測図 …… 31

第36図　Ⅲ区遺構に伴わない遺物実測図（１）…… 32
第37図　Ⅲ区遺構に伴わない遺物実測図（２）…… 33
第38図　Ⅳ区調査後地形測量図・遺構配置図 …… 34
第39図　１号横穴墓実測図（１）…… 36
第40図　１号横穴墓実測図（２）…… 37
第41図　１号横穴墓玄室内遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 38
第42図　１号横穴墓陶棺内遺物出土状況 …… 39
第43図　１号横穴墓陶棺除去後遺物出土状況 …… 39
第44図　１号横穴墓出土陶棺実測図 …… 40
第45図　１号横穴墓玄室内出土遺物実測図（１）…… 42
第46図　１号横穴墓玄室内出土遺物実測図（２）…… 43
第47図　１号横穴墓玄室内出土遺物実測図（３）…… 45
第48図　１号横穴墓玄室内出土遺物実測図（４）…… 46
第49図　１号横穴墓前庭部出土遺物実測図 …… 47
第50図　２号横穴墓実測図（１）…… 48
第51図　２号横穴墓実測図（２）…… 49
第52図　２号横穴墓遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 50
第53図　２号横穴墓出土石棺実測図 …… 52
第54図　２号横穴墓玄室内出土遺物実測図 …… 55
第55図　２号横穴墓前庭部出土遺物実測図（１）…… 56
第56図　２号横穴墓前庭部出土遺物実測図（２）…… 57
第57図　３号横穴墓実測図 …… 58
第58図　３号横穴墓遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 59
第59図　３号横穴墓玄室内出土遺物実測図 …… 60
第60図　３号横穴墓前庭部出土遺物実測図 …… 61
第61図　４号横穴墓実測図 …… 63～64
第62図　４号横穴墓前庭部遺物出土状況 …… 65～66
第63図　４号横穴墓前庭部出土遺物実測図 …… 67
第64図　５号横穴墓実測図（１）…… 69
第65図　５号横穴墓実測図（２）…… 70
第66図　５号横穴墓玄室内遺物出土状況 …… 71
第67図　５号横穴墓出土石棺実測図 …… 72
第68図　５号横穴墓玄室内出土遺物実測図（１）…… 73
第69図　５号横穴墓玄室内出土遺物実測図（２）…… 74
第70図　５号横穴墓前庭部遺物出土状況 …… 75
第71図　５号横穴墓前庭部出土遺物実測図（１）…… 76
第72図　５号横穴墓前庭部出土遺物実測図（２）…… 77
第73図　６号横穴墓実測図 …… 78

第74図　6号横穴墓玄室内遺物出土状況 …… 79
第75図　6号横穴墓前庭部遺物出土状況 …… 80
第76図　6号横穴墓前庭部出土遺物実測図 …… 81
第77図　7号横穴墓実測図 …… 83～84
第78図　7号横穴墓前庭部出土遺物実測図 …… 85
第79図　8号横穴墓実測図 …… 86
第80図　8号横穴墓前庭部遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 87
第81図　8号横穴墓前庭部出土遺物実測図 …… 88
第82図　9号横穴墓実測図 …… 89
第83図　10号横穴墓実測図 …… 91
第84図　10号横穴墓前庭部閉塞石出土状況 …… 92
第85図　10号横穴墓前庭部出土遺物実測図 …… 93
第86図　11号横穴墓実測図 …… 94
第87図　11号横穴墓玄室内遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 96
第88図　11号横穴墓玄室内出土遺物実測図（1） …… 97
第89図　11号横穴墓玄室内出土遺物実測図（2） …… 98
第90図　11号横穴墓前庭部出土遺物実測図（1） …… 98
第91図　11号横穴墓前庭部出土遺物実測図（2） …… 99
第92図　12号横穴墓実測図 …… 101
第93図　12号横穴墓玄室内遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 102
第94図　12号横穴墓玄室内出土遺物実測図（1） …… 105
第95図　12号横穴墓玄室内出土遺物実測図（2） …… 106
第96図　12号横穴墓玄室内出土遺物実測図（3） …… 107
第97図　12号横穴墓墓道出土遺物実測図 …… 108
第98図　13号横穴墓実測図 …… 109
第99図　13号横穴墓遺物出土状況 …… 110
第100図　13号横穴墓玄室内・墓道出土遺物実測図 …… 111
第101図　14号横穴墓実測図 …… 112
第102図　14号横穴墓遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 114
第103図　14号横穴墓玄室内・墓道出土遺物実測図 …… 115
第104図　15号横穴墓実測図 …… 116
第105図　15号横穴墓玄室内遺物出土状況・閉塞石実測図 …… 117
第106図　15号横穴墓玄室内出土遺物実測図（1） …… 119
第107図　15号横穴墓玄室内出土遺物実測図（2） …… 120
第108図　15号横穴墓墓道出土遺物実測図 …… 121
第109図　甕・横瓶接合関係図 …… 121
第110図　2号横穴墓甕片分布状況 …… 122
第111図　3号横穴墓甕片分布状況 …… 123

第112図　4号横穴墓甕片分布状況 …… 123
第113図　5号横穴墓甕片分布状況 …… 124
第114図　9号横穴墓甕片分布状況 …… 124
第115図　10号横穴墓甕片分布状況 …… 125
第116図　11号横穴墓甕片分布状況 …… 125
第117図　12号横穴墓甕片分布状況 …… 126
第118図　14号横穴墓甕片分布状況 …… 126
第119図　横穴墓出土甕・横瓶実測図（1） …… 128
第120図　横穴墓出土甕実測図（2） …… 129
第121図　横穴墓出土甕実測図（3） …… 130
第122図　横穴墓出土甕実測図（4） …… 131
第123図　横穴墓出土甕実測図（5） …… 132
第124図　横穴墓出土甕実測図（6） …… 133
第125図　横穴墓出土甕実測図（7） …… 134
第126図　横穴墓出土甕実測図（8） …… 135
第127図　Ⅲ・Ⅳ区出土須恵器ヘラ記号拓本 …… 136
第128図　ＳＫ02実測図 …… 137
第129図　ＳＫ02出土遺物実測図 …… 137
第130図　Ⅳ区遺構に伴わない遺物実測図 …… 138
第131図　Ⅴ区調査後地形測量図・遺構配置図 …… 139
第132図　ＳＩ01実測図 …… 140
第133図　ＳＩ01出土遺物実測図 …… 141
第134図　ＳＢ01、ＳＤ03、加工段２、加工段３実測図 …… 142
第135図　ＳＢ01出土遺物実測図 …… 143
第136図　ＳＢ02実測図 …… 144
第137図　ＳＢ03実測図 …… 145
第138図　ＳＢ03出土遺物実測図 …… 146
第139図　ＳＫ03実測図 …… 147
第140図　ＳＫ03出土遺物実測図 …… 147
第141図　ＳＫ04実測図 …… 147
第142図　１号窯実測図・遺物出土状況 …… 148
第143図　１号窯出土遺物実測図（1） …… 149
第144図　１号窯出土遺物実測図（2） …… 150
第145図　山陰の陶棺分布図 …… 156
第146図　安来道路西地区で調査した横穴墓分布図 …… 161

図　版　目　次

巻頭カラー１　Ⅳ区１号横穴墓玄室内遺物出土状況

巻頭カラー２　１号横穴墓出土陶棺、横穴墓出土玉類

図版１　渋山池古墳群遠景

図版２　渋山池古墳群調査前遠景、
Ⅲ区調査前近景、
Ⅲ・Ⅳ区調査前近景

図版３　ＳＸ01検出状況、遺物出土状況

図版４　ＳＸ02検出状況、遺物出土状況、
ＳＸ03検出状況

図版５　ＳＸ03埋土除去後、ＳＫ01遺物出土状況

図版６　１号墳主体部検出状況、完掘状況、
２号墳主体部調査風景

図版７　２号墳完掘状況、
３号墳溝遺物出土状況、完掘状況

図版８　４号墳溝検出状況、完掘状況、
５号墳主体部検出状況

図版９　５号墳主体部木棺痕検出状況、完掘状況

図版10　６号墳周溝検出状況、主体部検出状況、
主体部横断土層

図版11　６号墳主体部完掘状況

図版12　８号墳主体部検出状況、完掘状況

図版13　９号墳周溝検出状況、
８・９号墳溝土層断面、遺物出土状況

図版14　10・11号墳完掘状況、
ＳＸ04土師器出土状況

図版15　12号墳完掘状況、１号横穴墓縦断土層

図版16　１号横穴墓玄室内堆積状況、
陶棺内横断土層、陶棺内遺物出土状況

図版17　陶棺除去後遺物出土状況、玄室完掘状況

図版18　２号横穴墓前庭部遺物出土状況、土層、ノミ痕

図版19　２号横穴墓家形石棺、人骨出土状況、全景

図版20　３号横穴墓前庭部遺物出土状況、縦断土層、
閉塞状況

図版21　３号横穴墓玄門部土層堆積状況、
玄室内遺物出土状況、玄室右袖～天井部

図版22　４号横穴墓前庭部遺物出土状況、
閉塞石出土状況、全景

図版23　４号横穴墓玄門・羨道部、
玄室右袖～右壁・玄室天井部ノミ痕

図版24　５号横穴墓前庭部・玄室内遺物出土状況

図版25　５号横穴墓石棺内遺物出土状況、
石棺組み合わせ状況、石棺取り出し作業風景

図版26　６号横穴墓前庭部縦断土層、炭溜り、炭除去後

図版27　６号横穴墓全景、７号横穴墓前庭部縦断土層

図版28　７号横穴墓全景、玄室内完掘状況

図版29　８号横穴墓前庭部縦断土層、遺物出土状況、
９号横穴墓前庭部横断土層

図版30　９号横穴墓全景、10号横穴墓全景、
10号横穴墓前庭部横断土層

図版31　11号横穴墓閉塞状況、玄室内人骨出土状況、
玄室内遺物出土状況

図版32　12号横穴墓墓道土層、玄室内遺物出土状況

図版33　13号横穴墓全景、玄室完掘状況

図版34　14号横穴墓墓道遺物出土状況、閉塞状況、
玄室内遺物出土状況

図版35　15号横穴墓墓道横断土層、
玄室内遺物出土状況、完掘状況

図版36　ＳＫ02遺物出土状況、Ⅳ区全景

図版37　Ⅴ区全景

図版38　ＳＩ01調査風景、ピット検出状況、
中央ピット断面

図版39　ＳＩ01遺物出土状況、完掘状況

図版40　ＳＢ01・ＳＤ03検出状況、土層堆積状況
ＳＢ01・加工段２・３・ＳＤ03完掘状況

図版41　ＳＢ02完掘状況、ＳＢ03完掘状況
図版42　ＳＫ03完掘状況、ＳＫ04完掘状況、
１号窯調査風景
図版43　１号窯検出状況、横断土層
図版44　１号窯遺物出土状況、完掘状況
図版45　Ｉ区出土遺物、１号墳出土遺物
３号墳溝出土遺物、ＳＸ01～03出土遺物
図版46　ＳＫ01出土遺物
図版47　４・５・９号墳出土遺物
12号墳出土遺物、Ⅲ区出土遺物
図版48　１号横穴墓玄室内出土遺物（１）
図版49　１号横穴墓玄室内出土遺物（２）、
出土陶棺
図版50　１号横穴墓前庭部出土遺物
２号横穴墓玄室内出土遺物（１）
図版51　２号横穴墓玄室内出土遺物（２）、
前庭部出土遺物
図版52　３号横穴墓出土遺物
図版53　４号横穴墓前庭部出土遺物
図版54　５号横穴墓出土遺物
図版55　６号横穴墓前庭部出土遺物
図版56　７号横穴墓前庭部出土遺物、
８号横穴墓前庭部出土遺物（１）
図版57　８号横穴墓前庭部出土遺物（２）、
10号横穴墓前庭部出土遺物
図版58　11号横穴墓出土遺物
図版59　５・６・11号横穴墓出土金属器
図版60　12号横穴墓玄室内出土遺物（１）
図版61　12号横穴墓玄室内出土遺物（２）
図版62　12号横穴墓墓道出土遺物、
13号横穴墓出土遺物
図版63　14号横穴墓出土遺物
図版64　15号横穴墓玄室内出土遺物（１）
図版65　15号横穴墓玄室内出土遺物（２）、
墓道出土遺物
図版66　12・15号横穴墓出土金属器、
ＳＫ02・Ⅳ区出土遺物
図版67　横穴墓出土甕（１）
図版68　横穴墓出土甕（２）
図版69　ＳＩ01・ＳＢ03・ＳＫ03出土遺物、
ＳＢ01出土遺物
図版70　ＳＩ01出土遺物、ＳＢ01出土遺物、
１号窯出土遺物（１）
図版71　１号窯出土遺物（２）

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表 …… 4
第２表　横穴墓別甕出土数 …… 122
第３表　出雲東部の主要な古式群集墳 … 152
第４表　山陰の陶棺出土地一覧表 …… 157
第５表　渋山池古墳群出土遺物一覧表 …… 158
第６表　安来道路西地区で調査した
横穴墓一覧表 …… 159

本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯 ……（勝部）… 1
第２章　遺跡の位置と環境 ……（石倉）… 2
第３章　調査の概要と経過 ……（勝部）… 5
第４章　遺構と遺物 ……（勝部）… 8
　１節　Ⅰ・Ⅱ区の調査 …… 8
　２節　Ⅲ区の調査 …… 9
　３節　Ⅳ区の調査 …… 35
　４節　Ⅴ区の調査 ……（石倉）… 139
第５章　まとめ ……（勝部）… 151
　１節　古式群集墳について …… 151
　２節　土壙墓・箱式石棺について …… 154
　３節　横穴墓について …… 154
第６章　自然科学的分析 …… 163
（１）渋山池古墳群Ⅳ区横穴墓群出土人骨 ……（井上晃孝）… 163
（２）渋山池遺跡１号窯と渋山池古墳群１号窯の地磁気年代 ……（時枝克安・成亨美）… 188
（３）島田遺跡Ⅰ区４号横穴墓出土人骨 ……（井上晃孝）… 194
（４）島田池横穴墓から検出された人骨について …（井上孝央・影岡優子・亀崎豊美）… 195

第１章　調査に至る経緯

昭和47年、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に国道９号バイパス建設の基本設計資料作成のため、安来市吉佐町から松江市乃白町に至る30.3km区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて、県教育委員会では地元教育委員会の協力を得て、昭和47～48年にこの区間の分布調査を実施した。この結果をふまえてルート案が作成され、昭和50～51年にかけて松江市竹矢町の才の峠古墳群等の発掘調査を実施した。

昭和55年度・56年度には、昭和57年度開催の「くにびき国体」の主要幹線道となる「松江東バイパス」東出雲町出雲郷～松江市古志原町に至る5.4km区間の７遺跡のうち２車線分の調査を実施した。

その後「松江バイパス」が高規格道路「松江道路」に設計変更され、昭和60年に建設省から７遺跡の残り４車線分の調査依頼があった。これを受けて昭和61年度から発掘調査を実施し、平成３年度に調査を完了した。

昭和61年度には安来市島田町～同赤江町に至る6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、同63年度には「松江道路」と接続する東出雲町出雲郷～安来市吉佐町間18.7kmの高規格道路「安来道路」に設計変更された。この変更に伴い、昭和62・63年度に再度遺跡分布調査を実施した。

安来市荒島町～東出雲町出雲郷に至る２－２工区間８kmの「安来道路西地区」については平成４年度から発掘調査を開始し、東出雲町内の御崎谷遺跡等３遺跡の本調査と22遺跡のトレンチ調査を実施し、平成５年度には、東出雲町内の四つ廻Ⅱ遺跡・林廻り遺跡・受馬遺跡・巻林遺跡・鶴貫遺跡、安来市内の桐の木Ⅰ遺跡・桐の木Ⅱ遺跡・亀尻Ⅰ遺跡・亀尻Ⅱ遺跡・中山遺跡の発掘調査を実施した。

平成６年度には安来市荒島町塩津山遺跡、東出雲町出雲郷の島田池遺跡の発掘調査を開始するとともに、竹ヶ崎遺跡ほか５遺跡の試掘調査を実施した。また、渋山池古墳群も工事用道路の設置に伴い一部本調査を行った。

平成７年度は、島田池遺跡・島田遺跡・岸尾遺跡・渋山池古墳群・渋山池遺跡・原ノ前遺跡・堂床古墳・勝負遺跡の本調査を行った。

第２章　遺跡の位置と環境

渋山池古墳群は、八束郡東出雲町揖屋に所在する。東は安来市荒島町、八束郡八雲村、西は松江市と接し、北には中海干拓地を経て、中海が広がる。海岸からは約3.5km程南に入ったところで、東西に連なる標高約30m程の丘陵上に位置する。丘陵の東には渋山池遺跡が隣接し、原の前遺跡、四廻Ⅱ遺跡と続く。丘陵の谷部には水田が広がり、小規模な集落も見られる。縄文時代には海岸線が丘陵の内部にまで入り込んでいたと考えられ、当時の集落も谷ごとに１つの単位を作っていたものと思われる。

今回の一般国道９号安来道路建設に伴う発掘調査によって、今まで未調査であった各時代の歴史的な資料が一気に増加した。

以下、東出雲町内の遺跡を中心に時代毎の概略を述べる。

縄文時代

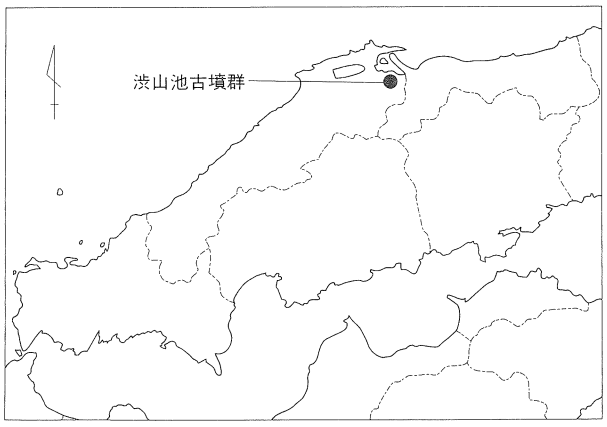
東出雲町では、縄文時代前期から晩期の土器が出土している竹ノ花上遺跡、後期の土器片が出土している寺床遺跡が知られている。大木権現山２号墳丘から縄文時代晩期の土器片を含むピットが検出されており、縄文時代の住居等が存在していたと考えられる。近年調査された渋山池遺跡では、数点の石鏃とともに26基の落とし穴が見つかっており、近くに住居跡がある可能性がある。鷺貫遺跡では、後・晩期の土器片が出土しただけでなく、当時の中海の海岸線を推定させる土層が確認された。さらに、安来市岩屋遺跡でも当時の汀跡が発見された。このことにより、当時の海面は現在よりも少なくとも１m程度上で、海岸線は現在のそれよりも内陸部へ入り込んでいて、丘陵の裾まで迫っていたと推定される。当時の環境を推定する上で非常に有益な資料となった。

弥生時代

磯近遺跡、春日遺跡、寺床遺跡などがある。磯近遺跡では完形の壷形土器、打製・磨製石斧、敲石、土錘が出土しており、底部に籾殻痕が付着している土器も発見されている。春日遺跡で水田跡が見つかっていることも合わせると、当時既に稲作農耕を行っていたことが分かる。寺床遺跡からは丘陵に立地している竪穴住居跡が確認された。

鷺貫遺跡からは、弥生時代中期にあたる遺物が大量に出土している。その中で周囲に列点文のある分銅形土製品の破片が出土しており注目される。

後期末になると、四隅突出型墳丘墓の可能性をもつ大木権現山１号墳が築造された。盛土中から、弥生時代後期の土器片が検出されていることから、当時から墳墓だけでなく生活の地としても利用されていたと考えられている。当遺跡に隣接する渋山池遺跡では竪穴



第１図　遺跡の位置

住居２軒、掘立柱建物２軒、県内に数例しか見られない布掘建物１棟が認められた。これらの遺跡以外にも姫津遺跡、古城遺跡、阿太加夜神社境内遺跡等がある。

古墳時代

縄文、弥生時代に比較して格段に遺跡数が増す。前期には、排水施設と礫床構造をもつ寺床１号墳があり、出雲地方としては大規模な墳丘を持っている。副葬品には舶載と考えられる斜縁二神二獣鏡、硬玉製勾玉、鉄剣、鉄製大刀がある。この他にも舶載の内向花文鏡が出土した古城山２号墳や、中期になると埴輪片、三連櫛が出土した箱式石棺を持つ大木権現山２号墳、春日岩船古墳が有名である。春日岩船古墳は岩盤を穿って作られた主体部をもつ古墳である。

古墳時代後期になると、石棺式石室を有する栗坪古墳群、四注式の天井を持つ内馬池横穴墓群、古城山横穴墓群、高井横穴墓群、四ツ廻横穴墓群、平賀横穴墓群、焼田古墳群などの群集墳が丘陵上に多数造られるようになる。本遺跡付近には、丘陵上に36基もの横穴墓が作られた島田池遺跡、７世紀後半に築造された島田遺跡の横穴墓などがある。また、近年東出雲町が調査した岩屋１号墳は30m程度の前方後方墳である。さらに、横穴式石室と考えられる下中意東古墳が海岸部で発見されたことは注目に値する。当遺跡でも、陶棺、灯明台石付き家形石棺などを内包する横穴墓が３穴検出された。

古墳時代の集落としては多数の土器が出土した四廻遺跡、玉作工房跡が検出された四廻Ⅱ遺跡、勝負遺跡、夫敷遺跡などがある。

奈良～平安時代

現在は消滅しているが、意宇川沿いには条里制が敷かれていたことが過去の航空写真から分かる。意宇平野の周辺は、国府があったと推定される地域で、昔から重要視されていた。付近には平安時代の須恵器窯が見つかった渋山池遺跡や八稜鏡が出土した勝負遺跡、島田池遺跡などがある。また、岸尾遺跡、林廻り遺跡などでは集落跡が見つかっている。

鎌倉～室町時代

山城がいくつか残っている。現在も本丸・出丸・空掘が残っている春日城は下河原氏が尼子氏と激しい攻防を繰り広げた末に、落城した城である。井戸・曲輪などが残る古城山城跡は見張りなどの砦となっていた。また、京羅木山城跡、福良城跡なども毛利氏と尼子氏との激しい攻防戦の地であった。

（参考文献）

東出雲町教育委員会『東出雲町の遺跡』東出雲町内遺跡分布調査報告書、1988
東出雲町教育委員会『寺床遺跡調査概報』1983
東出雲町教育委員会『四ツ廻遺跡』1994
東出雲町教育委員会『岩屋１号墳・中意東遺跡』1997
島根県教育委員会『一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅰ』1993

第２図　周辺の遺跡（Ｓ＝１／50,000）

第１表　周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	渋山池古墳群	横穴墓・古墳ほか	30	野呂城跡	城跡	59	石橋窯跡	窯跡
2	阿太加夜神社境内遺跡	集落跡	31	小倉城跡	城跡	60	横屋古墳群	古墳群
3	榎廻古墳群	古墳群	32	京羅木山城跡	城跡	61	湯田横穴墓群	横穴墓
4	金成山古墳	古墳	33	春日神社裏古墳群	古墳群	62	神子谷古墳	古墳
5	油免古墳群	古墳	34	古城山遺跡	散布地	63	鳥越寺院跡	寺院跡
6	高井横穴墓群	横穴墓群	35	須田神社境内遺跡	集落	64	古城山城跡	城跡
7	揖屋神社古墳	古墳	36	オノ峠古墳	古墳	65	後谷横穴墓群	横穴墓
8	四ツ廻横穴墓群	横穴墓	37	栗坪遺跡	集落	66	岸尾遺跡	集落
9	中意東遺跡	住居跡・古墳	38	戸田屋敷横穴墓群	横穴墓	67	鶺貫遺跡	散布地
10	福良城跡	城跡	39	島田池遺跡	横穴墓・古墳ほか	68	島田遺跡	古墳・横穴墓
11	夫敷遺跡	水田跡ほか	40	後谷池東横穴墓群	横穴墓	69	長廻横穴墓群	横穴墓
12	平賀遺跡	祭祀	41	安垣古墳群	古墳群	70	長廻古墳	古墳
13	意宇平野条里制遺構	条里跡	42	渋山池遺跡	集落	71	赤坂池横穴墓群	横穴墓
14	栗坪古墳群	古墳群	43	東出雲学校校庭遺跡	散布地	72	大鳥才の神遺跡	祭祀
15	春日遺跡	散布地	44	東出雲中学校東側遺跡	散布地	73	中尾崎古墳	古墳
16	岩屋１号墳	古墳群	45	五反田遺跡	散布地	74	毛無横穴墓	横穴墓
17	屋台垣横穴墓群	横穴墓	46	五反田１号墳	古墳	75	毛無遺跡	集落跡
18	古城山横穴墓群	横穴墓	47	崎田遺跡	散布地	76	巻林遺跡	集落跡
19	古城山古墳群	古墳群	48	雉子谷古墳群	古墳	77	御崎谷遺跡	集落跡
20	磯近遺跡	散布地	49	意東焼窯跡	窯跡	78	土元遺跡	散布地
21	姫津古墳群	古墳群	50	流田遺跡	集落	79	恵比須遺跡	散布地
22	大木権現山古墳群	古墳群	51	焼田古墳群	古墳	80	堂床遺跡	集落跡
23	寺床遺跡	古墳・住居跡	52	焼田遺跡	集落	81	堂床古墳	古墳
24	竹ノ花上遺跡	散布地	53	堤谷古墳群	古墳	82	勝負遺跡	集落跡
25	内馬池横穴墓群	横穴墓	54	春日シヌン谷Ⅱ遺跡	住居跡	83	林廻り古墳	古墳
26	春日城跡	城跡	55	古屋窯跡	窯跡	84	四ツ廻Ⅰ遺跡	集落跡
27	春日岩船古墳	古墳	56	金成山窯跡	窯跡	85	四ツ廻Ⅱ遺跡	集落跡
28	湯谷横穴墓群	横穴墓群	57	鳩峰山焼窯跡	窯跡	86	原ノ前遺跡	集落跡
29	城山城跡	城跡	58	永島窯跡	窯跡	87	出雲国庁跡	官衙

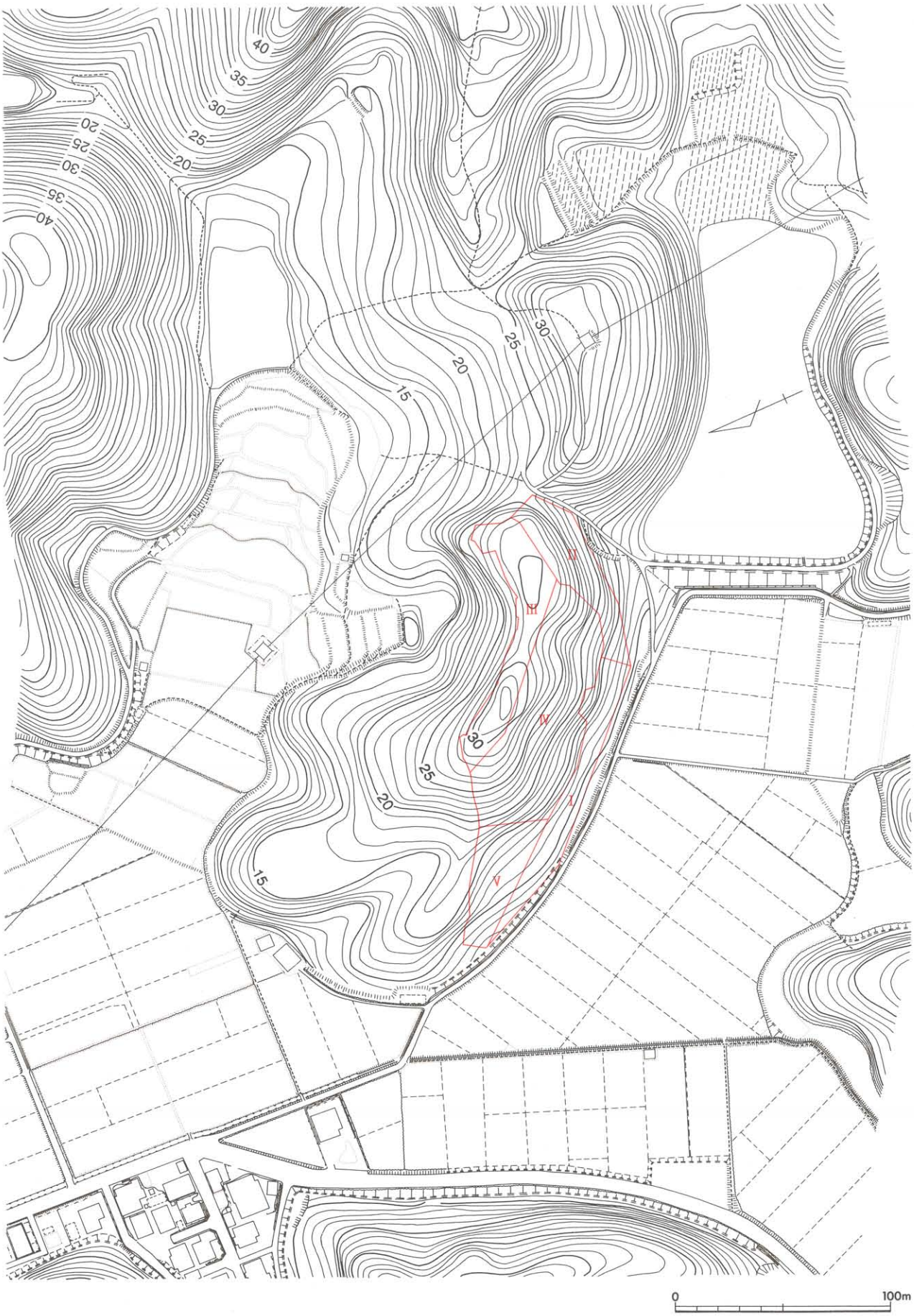
第３章　調査の概要と経過

渋山池古墳群は八束郡東出雲町揖屋の、標高約30ｍの丘陵尾根部から斜面に位置する。もともと周知の遺跡として知られており、平成４年の試掘調査によって尾根に古墳２基以上、南斜面に横穴墓が５穴存在することが明らかになった。

平成６年12月、古墳群の南斜面裾部から隣接する渋山池遺跡に至る部分について工事用道路設置のために急きょ調査を開始し、重機掘削と人力により作業を行った。８日には、重機で斜面を掘削中に横穴墓の墓道先端部の断面が確認され、この部分については全面調査の際にゆずることにし、翌年１月13日に一端終了した（Ⅰ区）。平成７年３月14日から工事用道路部分の続きの調査を再開し３月28日まで実施した（Ⅱ区）。

全面的な調査は平成７年４月17日から開始し、調査区は平成４年度の試掘調査の成果と地形などから尾根部をⅢ区、南側斜面をⅣ区、北西緩斜面をⅤ区と便宜上設定した。４月10日からⅢ区の平板測量を開始した。Ⅳ区は重機による表土掘削後、17日から掃除を行った結果１～７号穴墓を検出した。その後、新たに３穴が確認され、前年度に検出したものも含め計11穴を確認した。この時点で、横穴墓が上下２段に分布し、下段は更にその数を増すと推測されたが、廃土置場と斜面での作業の安全確保のためⅣ区下半分を廃土でステップ状に残し、２～10号横穴墓の調査後速やかにⅣ区の残りの部分とⅤ区の調査を行うという方針で調査を進めた。

21日にはⅢ区の掘削も開始し、５月30日にはＳＫ01～04を完掘し、その後１号墳から順次精査を行っていった。９月８日からⅣ区下段の廃土を除去しつつ表土剥ぎを開始し、11日には11～15号横穴墓を検出した。10月17、18日には鳥取大学医学部の井上晃孝先生の指導のもと上段の横穴墓出土人骨を取り上げた。11月２日からⅤ区の掘削を開始し、弥生後期の竪穴住居跡、平安時代前半期の窯跡等を検出した。30日には遺跡の全容が明らかになったことから現地指導会を開催し、遺構・遺物の検討を行った。これに基づき12月９日には隣接する渋山池遺跡・原ノ前遺跡、勝負遺跡と併せて現地説明会を開催し、翌年２月19日にはⅣ区２号穴と５号穴の石棺を運び出し、すべての作業が終了した。



第３図　渋山池古墳群周辺地形図・調査区配置図（Ｓ＝１／2,500）

第４図　渋山池古墳群調査後地形測量図・遺構配置図（Ⅲ～Ⅴ区）（Ｓ＝１／800）

第４章　遺構と遺物

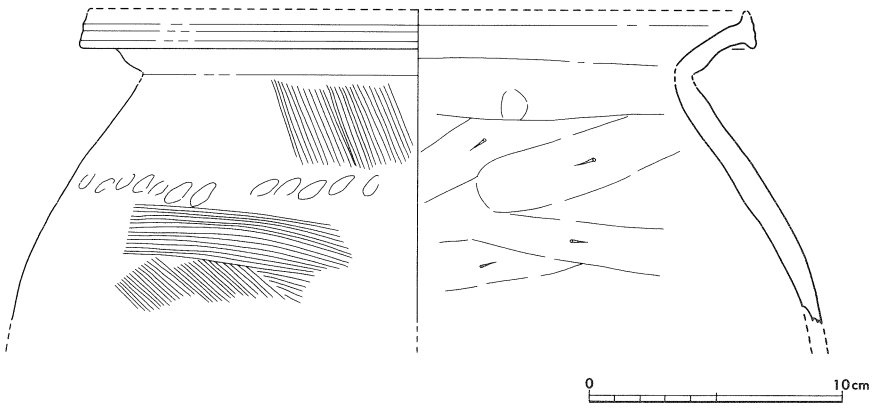
１節　Ⅰ・Ⅱ区の調査

渋山池古墳群南側斜面西端から隣接する渋山池遺跡に至る工事用道路設置のために、本調査の前年（平成６年度）に調査した部分を便宜的にⅠ・Ⅱ区とした。Ⅰ区は、地形的にはⅤ区のつづきの部分の比較的なだらかな緩斜面と、Ⅳ区下方の南斜面裾部にあたる。緩斜面部については、土層は暗赤褐色土、黒褐色土の順で地山に達していた。重機による表土掘削ののち精査を行った結果、明確な遺構は確認することはできなかったが、暗赤褐色土中より弥生土器片を数点採取した。一方、Ⅳ区下方では概ね赤褐色土、黄褐色土、黒褐色土の順で地山に達し、赤褐色土から須恵器小片が多数出土した。赤褐色土は、地山とよく似たブロック混じりの土だが非常にやわらかく、堆積も厚いところとそうでないところがあり、横穴墓の掘削土であると推測される。遺構は重機掘削中に14号穴の墓道の断面を検出した。同レベルにあと数基は存在する可能性があったため、掘削もその周辺は避けて調査は次年度に先送りとした。

Ⅱ区はⅣ区下方からⅢ区に至る部分である。地形がかなり急斜面となっていたため表土下の堆積土はほとんどなく、遺物も土師器小片が数点採取されたにすぎなかった。遺構は土壙状のプランを検出したが、これについても次年度の調査にゆずることにした。

遺物（第５図）

Ⅰ・Ⅱ区では弥生土器、土師器、須恵器の破片が出土しているが、このうち図化できた遺物は１点である。Ⅰ区の緩斜面で出土した弥生後期の甕で、復元口径は26cmを測る。口縁部は上下にわずかに拡張して内傾する。外面には３～４条の凹線文が施される。胴部上半に列点文が施される。外面の調整は列点文以上が縦方向、列点文以下は横ないしは斜め方向のハケを施す。内面は、口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリを施す。後期前葉の頃のものであろう。



第５図　Ⅰ区　出土遺物実測図（S＝１／３）

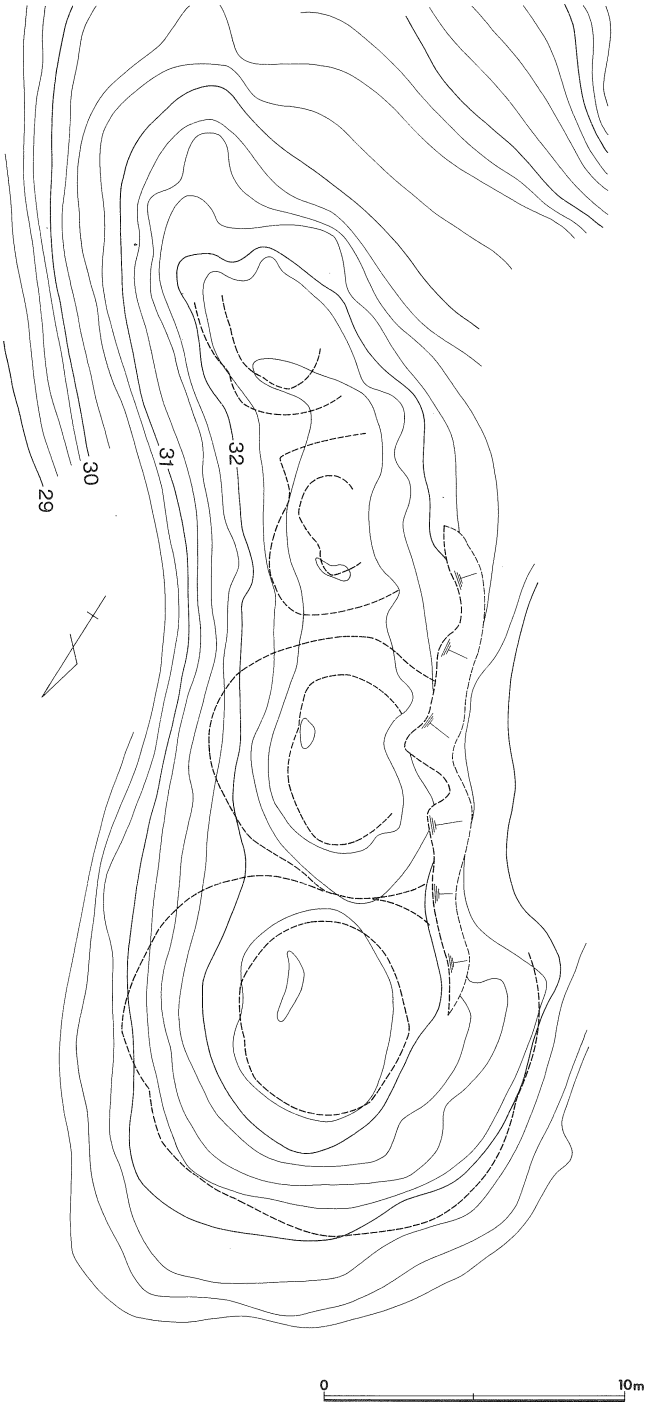
2節　Ⅲ区の調査

（1）1～3号墳

Ⅲ区は遺跡の標高約30mの丘陵尾根部に位置する。東西に伸びる尾根はちょうど中間あたりで北西方向に屈折し、西端部でピークに達する。平成4年度のトレンチ調査で土師器片、須恵器片が多数出土したことから2基以上の古墳が存在すると考えられた。

調査前の地形は西側尾根については比較的原形を保っていると考えられたが、東側はかなり平坦な地形で、後世にかなり削平されているという状況がみられた。測量を行った結果、西側尾根には4か所の高まりが確認でき、最も北側の古墳が円墳と思われた外はすべて小方墳と推定された。（第6図）

土層観察用のベルトを尾根筋に沿って設け、また古墳と推定されるものについては横断ベルトを残して調査を行った結果、4つのうち東端のものは埋葬施設・盛土・遺物などが確認されず、古墳と認識できる積極的な根拠を欠くことから残丘と判断した。



第6図　1～3号周辺調査前地形測量図（S＝1／250）

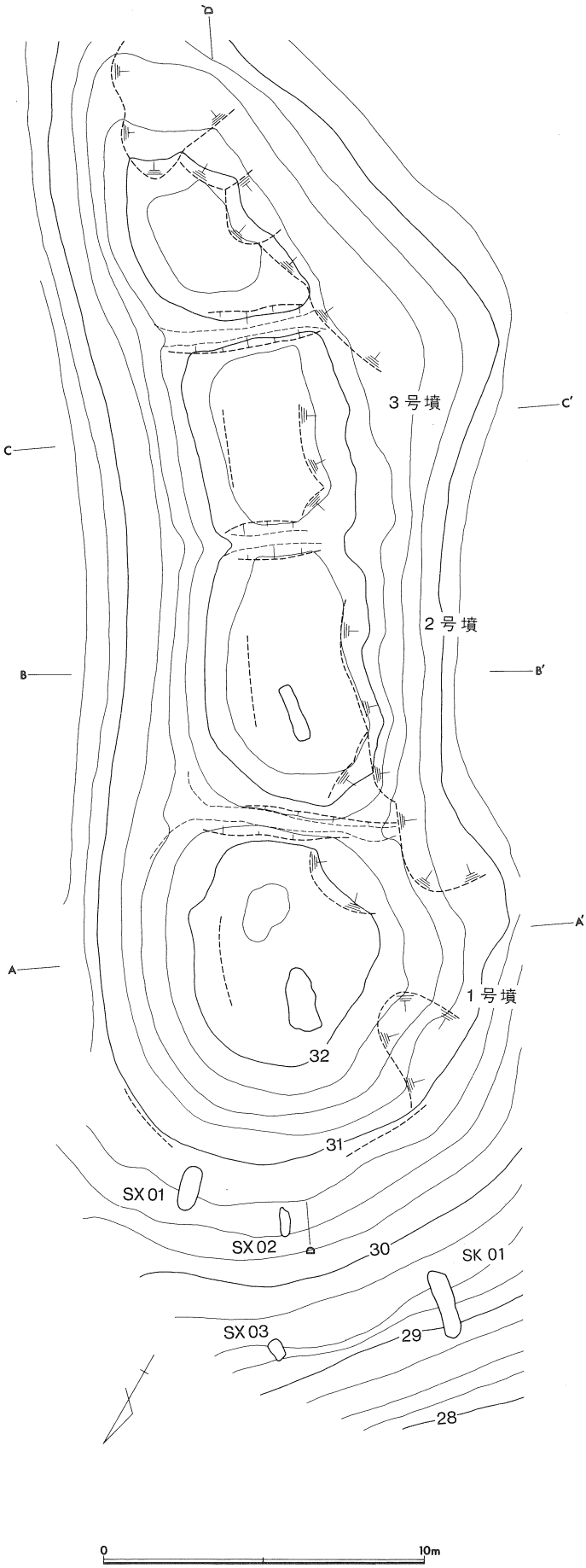
1号墳

墳丘（第7図、8図、9図）

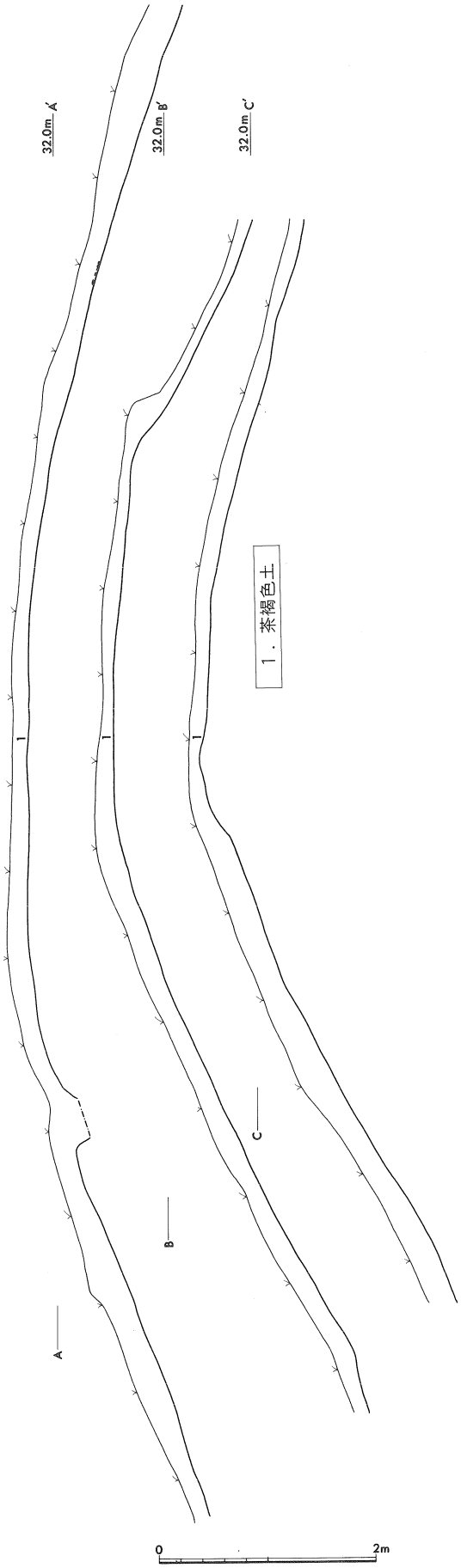
西側尾根の先端部に位置し、標高32mの墳頂部からは中海が一望できる。

墳丘形態は円墳と推定されたが、調査の結果一辺約11mほどの方墳であったと考えられる。墳丘南西側は残りが悪く、また2号墳の溝によって墳裾部が切られているため本来の規模ではなく、現況ではやや不整円形を呈している。1号墳に伴う周溝は確認されなかったが、墳丘北側の標高31m付近で平坦面が認められたので、そこを墳端と考えることもできる。墳端と墳頂の高低差は調査後で1m弱を測る。

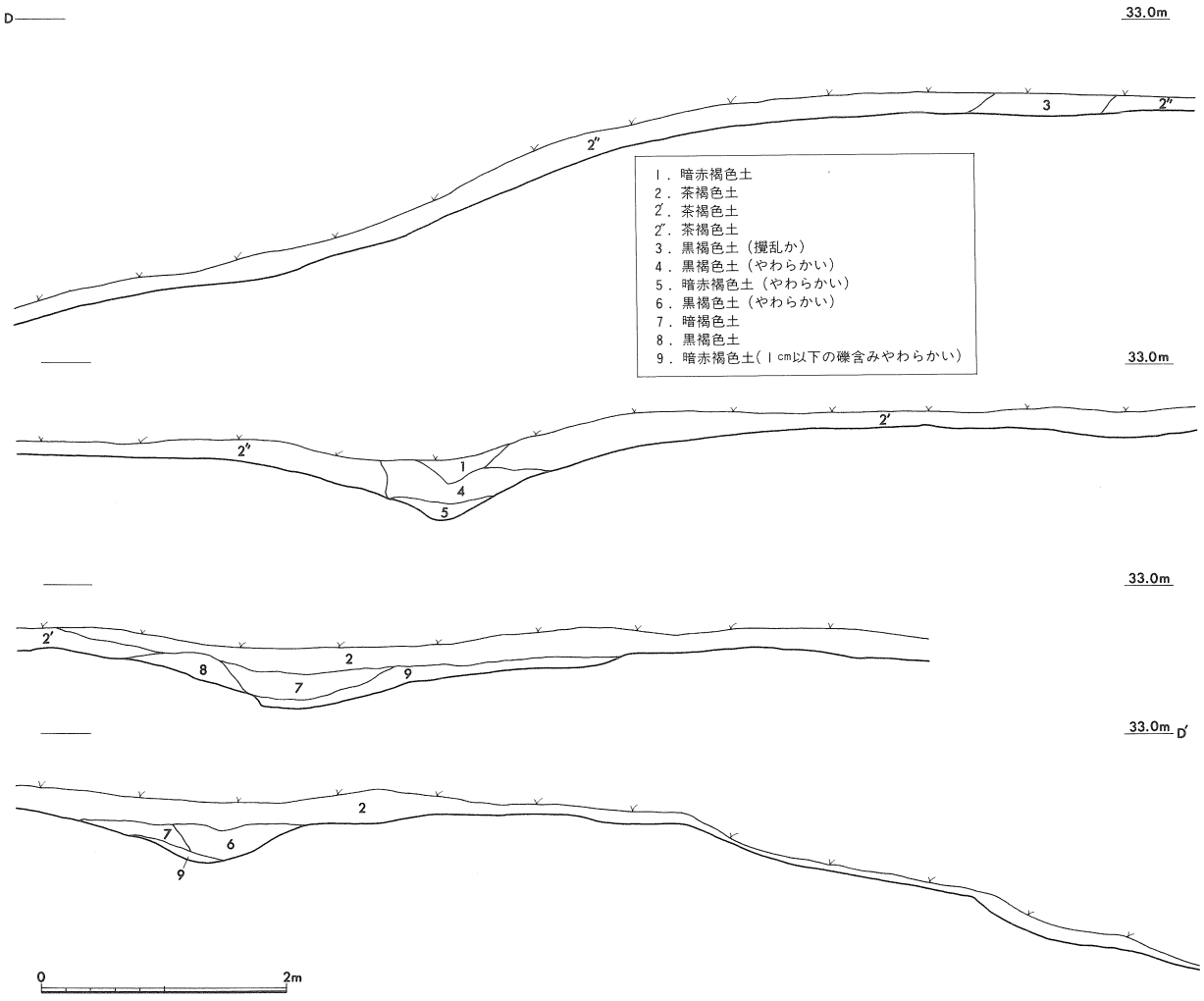
土層堆積状況は表土除去後、茶褐色土（第8図1層、第9図2”層）が墳丘周辺に広い範囲で堆積しており、その下は赤褐色の地山が検出された。盛土も旧表土も残っていない状況であった。墳頂部に一部黒褐色土が斜めに入り込んでいるのが認められ、主体部かとも考えたが、その後の状況から木根による撹乱と判断した。周囲には盛土が流れた様子もなく、築造時からあまり盛土を施さずに墳丘の大半は地山削りだしによって造られた可能性がある。



第7図　1～3号墳周辺調査後地形測量図（S＝1／200）



第8図　1～3号墳墳丘土層断面図(1)（S＝1／60）



第９図　１～３号墳墳丘土層断面図（S＝１／60）

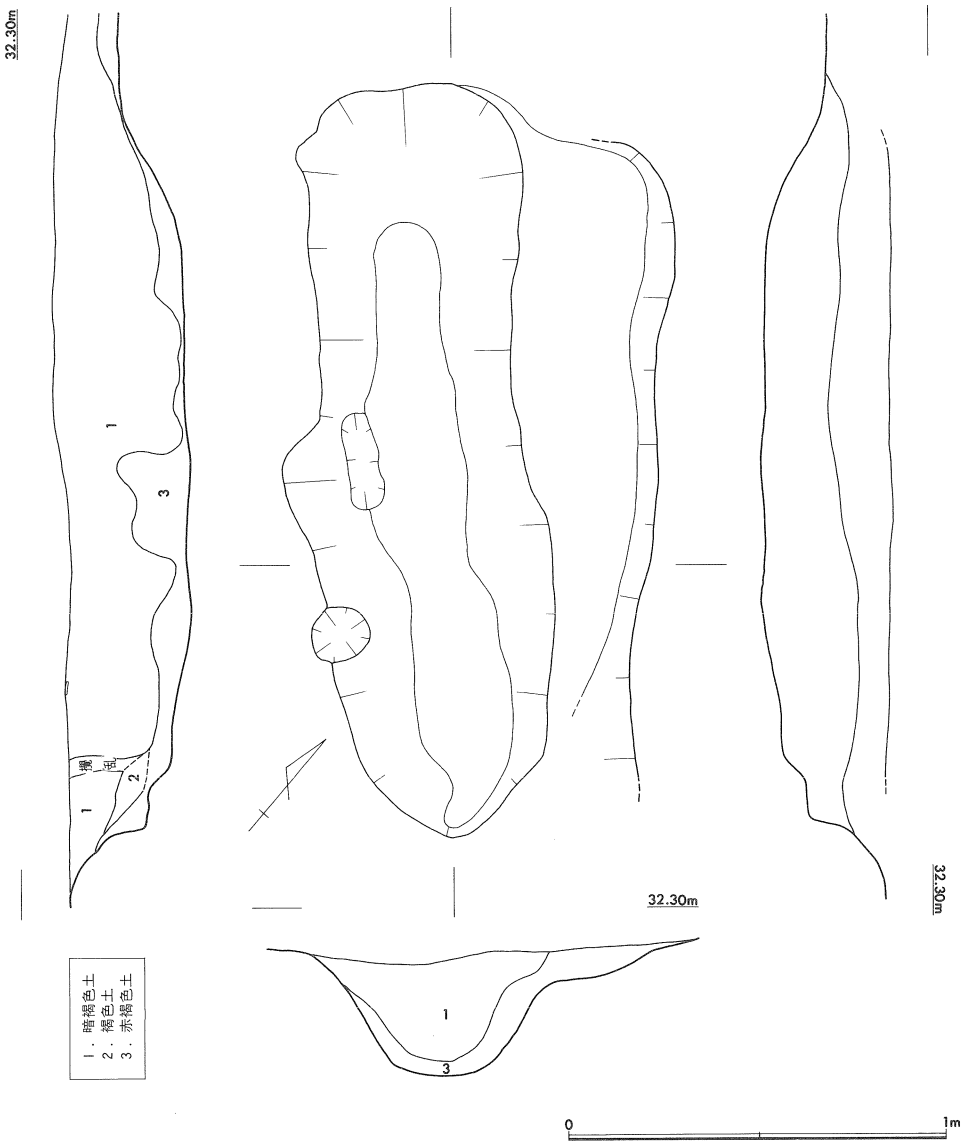
埋葬施設（第10図）

茶褐色土除去後に精査した際に、墳頂平坦面の中心から北西よりに片寄った位置で墓壙が１基検出された。壙内覆土は、暗褐色のやや粘質な流入土が厚く堆積しており、底部近くで地山によく似た赤褐色土が薄く層を成していた。

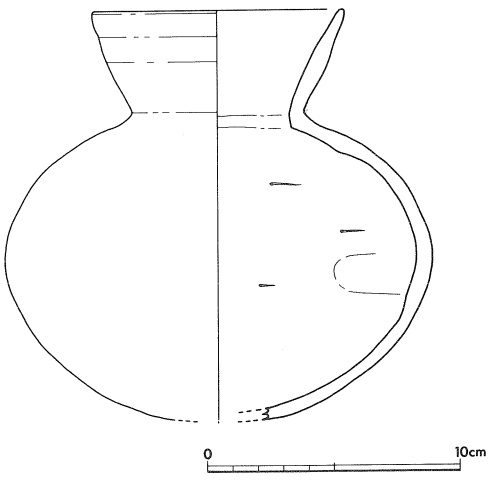
墓壙は北側だけが浅く段状に堀り窪められた状態であったが、墳頂部が削平された可能性もあるため埋葬当時からこうした状況であったかは定かではない。木棺直葬で主軸をＮ－45°－Ｗに置き、規模は現況で長さ約２ｍ、最大幅約１ｍ、深さ約0.36ｍを測る。小口底部の高低差はほとんど無く、２段目の堀り肩幅もあまり違いは無いので頭位は判断しがたいが、墓壙の下場の幅は南東側がやや広い。南東側の小口は比較的垂直に立ち上がるのに対し、北西側小口は緩やかに立ち上り、一見舟底形をしているようにもみえる。底部の平面形は蛇行する特徴が看取できる。よく似た構造を持つものとして、ＴＫ－47型式併行の須恵器蓋坏を出土した同じ東出雲町の島田遺跡１号墳主体部[1]があげられる。

１号墳出土遺物（第11図）

遺物は主体部の棺内、外からの出土は無く、南東の墳裾付近で採り上げた土師器片と、南西の墳裾付近で出土した土師器小片だけである。土師器片はいずれも茶褐色土を除去後、ほぼ地山に近い



第10図　１号墳主体部実測図（Ｓ＝１／20）



第11図　１号墳出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

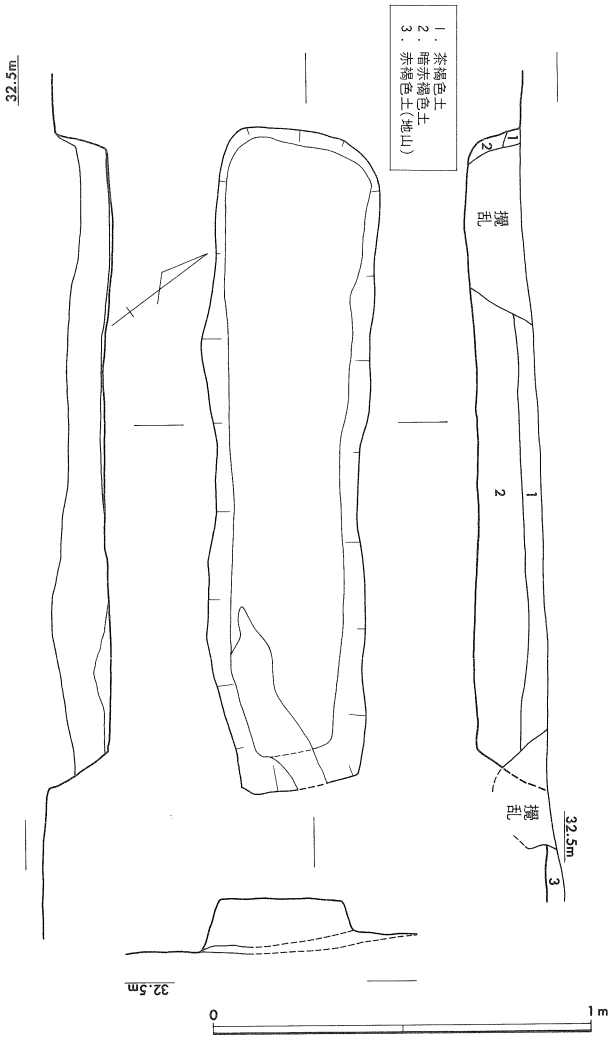
位置で比較的狭い範囲に散乱していた。南西墳裾の遺物は残りが悪く掲載するに至らなかったが器種は高坏である。南東の墳裾で出土した遺物は幸いにも実測可能なまで復元することができた。

図は土師器直口壷で、口径10cm、胴部最大幅17cm、器高は約16cmを測る。頸部は「く」の字形に強く屈曲し、口縁はまっすぐに開く。胴部はやや扁平である。調整は外面ナデ、口縁部内面はヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリを施す。時期は松山編年Ⅳ期[2]に相当し、古墳時代中期後半のものといえよう。

２号墳

墳丘（第７図・８図・９図）

標高約31～32mのところに１号墳の南側に隣接して築造されている。調査前から古墳があると予想されていたもので、調査の結果、墳丘の北西と南東側にそれぞれ１号墳と３号墳を画する直線状の溝が検出されたため方墳と判断した。溝は両方の斜面には認められず、北側斜面の31m付近でやや緩やかになる以外は際立った傾斜の変換点もないことから、北東側にもし墳裾があるとすれば標高31m付近と見ていいだろう。墳丘の南西側は10mにわたって大きく削り込まれているため、墳裾は確認できなかった。従って尾根に直交する辺の規模は不明といわざるをえない。



第12図　２号墳主体部実測図（Ｓ＝１／20）

１号墳との境になる溝は長さ約７m、幅約１m、深さ約0.7mを測る。１号墳の墳丘を切っていることから２号墳に伴うものとして問題ないと思われる。一方、後述する３号墳との間にある溝は残存長約3.2m、幅1.2m、深さ約0.8mで、はたしてどちらに伴うものかは検討する必要があろうが、平面的にはどちらかに周っていた形跡も無く、溝の土層堆積状況からも判断しがたい。立地などから２号墳築造の際に堀り込んだ溝をその後３号墳が共有したと考えるのが自然であろう。

現状では１号墳と同様に盛土は残っていない状況で、墳頂部にはわりと広い平坦面があり、後世に削平された可能性もあるが、基本的に２号墳は溝で区画しただけで盛土もさほどない一辺8.5m程の方墳であったと考えられる。

埋葬施設（第12図）

茶褐色土を除去した後、墳丘の中央からやや北西よりのところで墓壙１基を検出した。木棺直葬とみられるが、覆土には棺の痕跡は認められなかった。

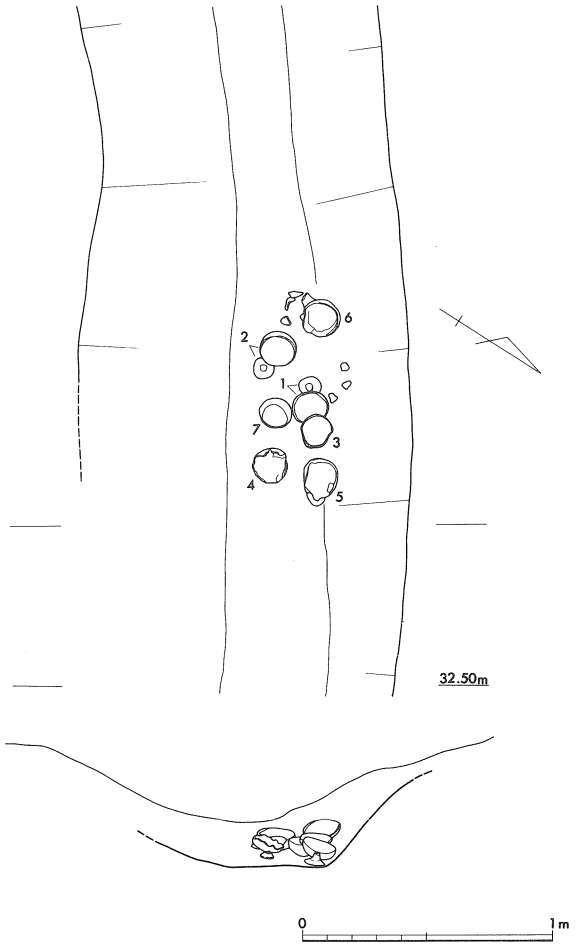
墓壙は主軸をＮ－53°－Ｗに置き、規模は現況で長さ約1.8m、北西側で幅約0.44cm、南東側の幅約0.36m、深さは中央で約0.18mを測り、上部はかなり削平されている可能性がある。墓壙底面のレベルは中央がやや高くなっているが両小口部にはほとんど差はない。北西側に頭位を持つと推定され、古墳の主軸からかなり西に振った状況で、主体部の主軸はむしろ古墳の対角線上にあるといえよう。

２号墳からは周辺及び主体部からの遺物は確認することが出来なかった。

3号墳

墳丘（第7図・8図・9図）

2号墳の南側に隣接して築造されている。前述したように2号墳構築後に造られたものと推定される。墳丘の南東側の溝は、現況で長さ5.2m、幅約1.2m、深さ約0.5mほどで、南北両斜面には溝はめぐらないが、調査後の地形測量図では北側斜面の標高31m付近で傾斜が変換し、そこを墳端と見ることもできる。南側は2号墳と同様に後世に削られており、明確な墳端はおさえられなかった。尾根を横切る溝内側の下場を墳端とすると一辺約6m程度の方墳であったと考えられる。墳頂部には広い平坦面が形成されているが、溝底との高低差はせいぜい30～50cm程度で、かなり削平されていると思われる。盛土、埋葬施設ともに確認できなかった。



第13図　3号墳溝内土師器出土状況（S＝1／30）

遺物出土状況（第13図）

遺物は南東側の溝内から土師器高坏が7個体出土した。溝の覆土（第9図6層、7層）を除去している際に検出したものである。高坏は溝中央の3号墳よりに一括して出土し、墳丘外側に3個、内側に4個が並んだ状況であった。脚部と坏部が分離してはいたものの、坏部、脚部ともに正位置にあり、墳裾に並べ置かれていたものがその場で壊れ、土砂に埋もれたという状況であった。

3号墳溝出土遺物

出土した土師器は全て椀形高坏で、7点を数える。

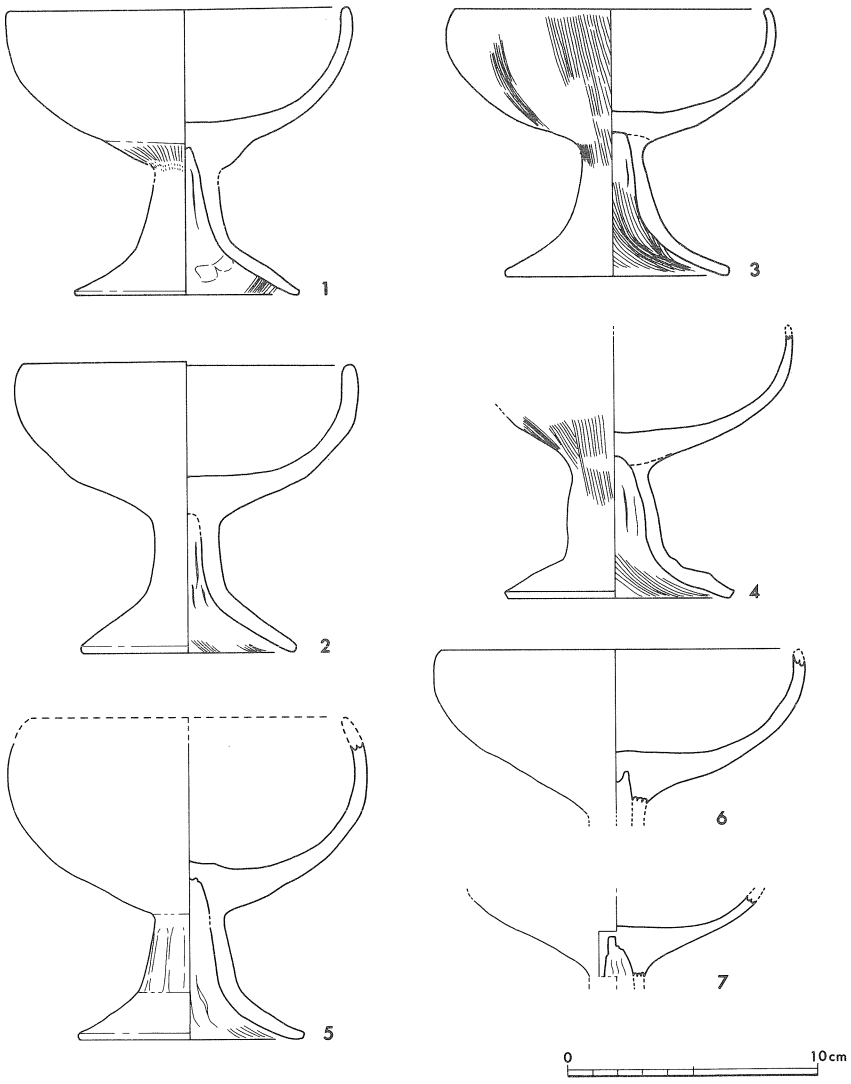
1は口径13.8cm、器高11.3cmを測る。脚部は「ハ」字状に屈折し、大きく開く。坏部と脚部は別作りで、接合部に粘土紐を巻きつけ、ハケで撫で付けた痕跡が観察できる。脚部内面にはしぼり目がみられ、脚底部には指頭圧痕と螺旋状にハケを施す。

2は口径13cm、器高11.6cmを測り、脚部は「ハ」字状に屈折する。風化が著しく外面調整は不明で、脚底部内面に1とは逆方向のハケが観察できる。脚端部は外傾してわずかな面をなす。

3は口径12.4cm、器高10.7cmを測り、1・2と比べ一回り小さく、坏部はやや内湾気味で、器壁も薄いものである。坏部外面から接合部にかけてハケを施す。脚部は大きく屈折し、内面は底部から屈曲部にかけて螺旋状に丁寧なハケを施す。

4は坏部をかなり欠損するが、3と同様に坏部がやや内湾し、器壁の薄いタイプのものである。脚部はやや膨らんだ後「く」字状に強く屈折し、端部は外傾して面をつくる。内面には螺旋状のハケが施される。接合部にハケで撫で付けた痕跡が観察できる。

5は坏部上端部が損なわれているが、復元すると口径12～12.5cm程になろう。坏部はほかのもの



第14図　3号墳溝出土遺物実測図（S＝1／3）

と比べかなり深く、全体的に大型の印象を受ける。脚筒部には八角柱状に浅い面がつくられ、脚底部内面にはハケが施される。

6は図示し得たのは坏部のみで、復元口径13.8cmを測り僅かに内湾するタイプのものである。

7は坏部下半と接合部だけだが、6と同様のものと考えられる。脚内面にシボリ目が観察できる。

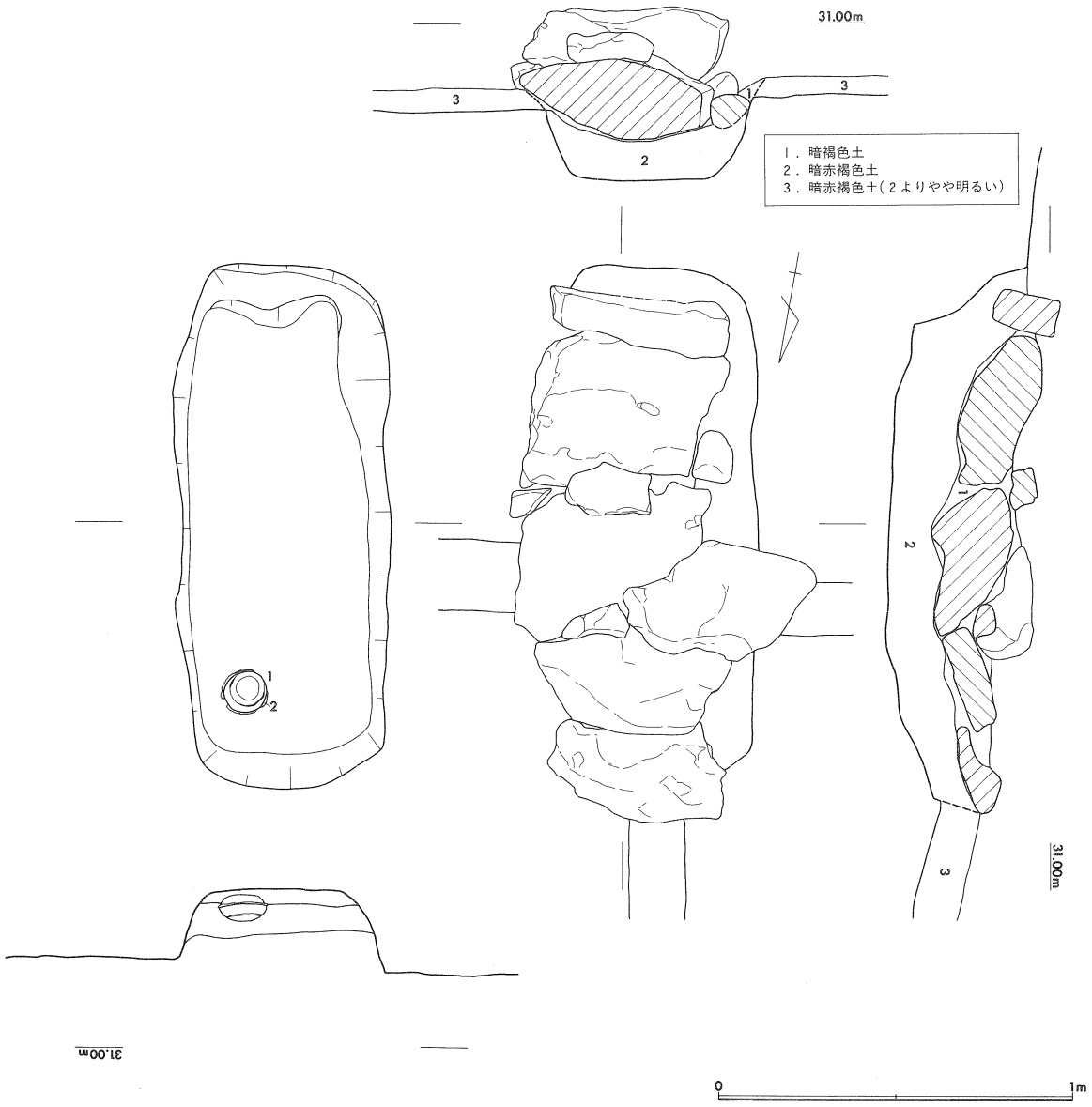
これらの高坏には坏部が内湾するものと、そうでないものの2種類に大別できるが、坏部と脚部の接合部に粘土紐を巻きつけて接合し、脚部内面に刺突痕を有するという点は共通している。松山編年のⅣ期に相当し、古墳時代中期後半の年代が与えられよう。

（2）土壙墓・箱式石棺

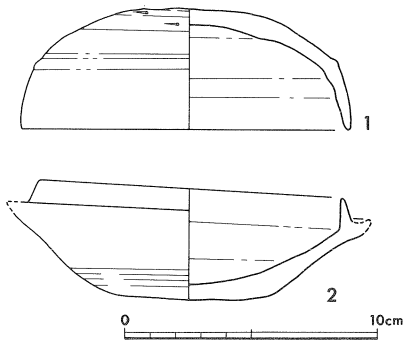
1号墳の北西側の比較的緩やかな斜面に近接して石蓋土壙墓2基、箱式石棺1基、土壙墓1基を検出した。（第7図）以下、検出した順にＳＸ01～03、ＳＫ01とし遺構、遺物の概要を述べることとする。

ＳＸ01（第15図）

石蓋土壙墓で、表土を剥いだ直後に蓋石を検出し、縦断・横断ベルトを設け調査を行った。本来3層（地山）上面が掘削面であったと考えられる。主軸をＮ－11°－Ｗに置く。規模は現況で長さ1.5m、南小口幅0.56m、北小口幅0.54m、南小口の深さ0.4mを測るが、下場では南小口幅0.4m、北小口幅0.48mと斜面下方の方がやや幅広である。南小口部は隅が若干抉られ、枕を造りだしているようにも見える。頭位は南と見て問題無かろう。蓋石は凝灰岩系の自然石で、長辺西側がずれて落ち込み、南小口の石材は立っていたが本来の状況かどうかは不明である。石材間には粘土目張りを施した痕跡はないが、隙間の部分に別材を重ね置き、北側2枚は組み合わせて用いていた痕跡が



第15図　ＳＸ01実測図・遺物出土状況（Ｓ＝１／20）



第16図　ＳＸ01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

見受けられる。蓋石を除去すると暗赤褐色の土砂が堆積していた。

遺物は須恵器蓋坏が足側の床直上でセットで出土した。

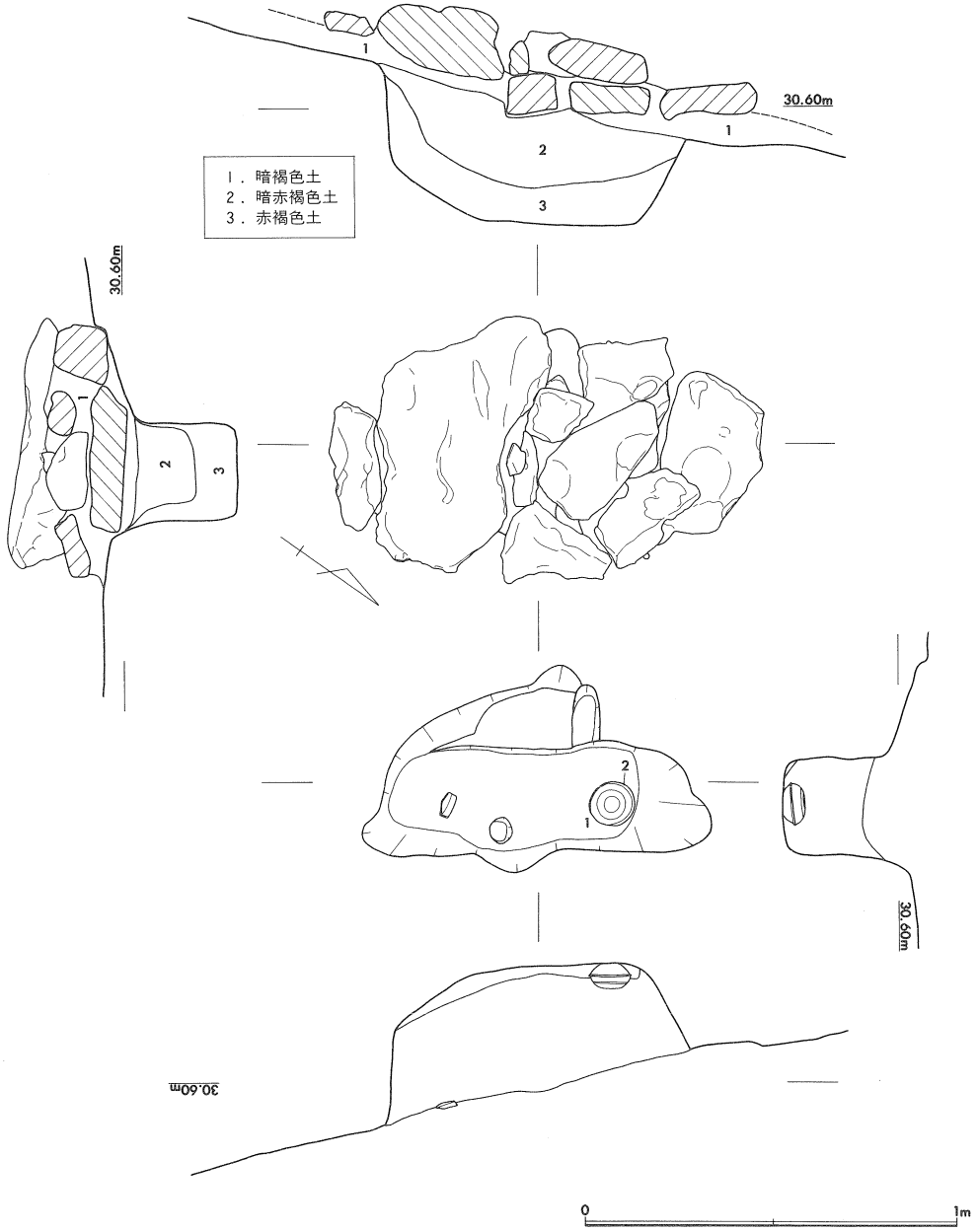
ＳＸ01出土遺物（第16図）

１は坏蓋で、焼成不良のためもろい。口径13.1cm、器高4.8cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ちナデ、周辺には粗いヘラ削りを施すがあまり明瞭ではない。天井部と口縁の境には稜をつくる。

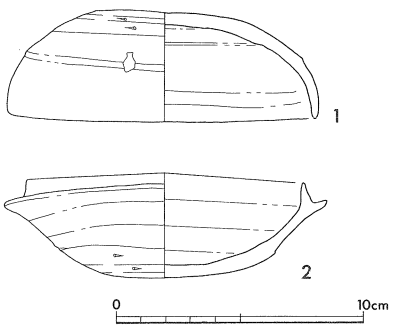
２は坏身で１と同様に焼成不良で口径12.0cm、器高4.7cmを測る。底部ヘラ切り後ち、回転ヘラ削りを施す。１・２ともに大谷編年の出雲４期[3]に相当する。

ＳＸ02（第17図）

石蓋土壙墓で、ＳＸ01の西側３ｍの表土直下において検出した。土壙の主軸はＮ－35°－Ｗを向



第17図　ＳＸ02実測図・遺物出土状況（Ｓ＝１／20）



第18図　ＳＸ02出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

き、斜面に直交して築かれている。規模は長さ0.84m、最大幅0.5m、深さ0.44mとかなり小型の土壙墓である。土壙の西側長辺だけがテラス状になり蓋石を受ける。蓋石は凝灰岩系の自然石で、大きさもまちまちである。粘土で目張りをした形跡は無く、継ぎ目に小石材を置く程度である。蓋石は総じて暗褐色土の上に浮いた状態で、壙内覆土は暗赤褐色土と赤褐色土の２層が堆積していた。床面まで掘り下げたところで北側小口で須恵器蓋坏がセットで出土した。

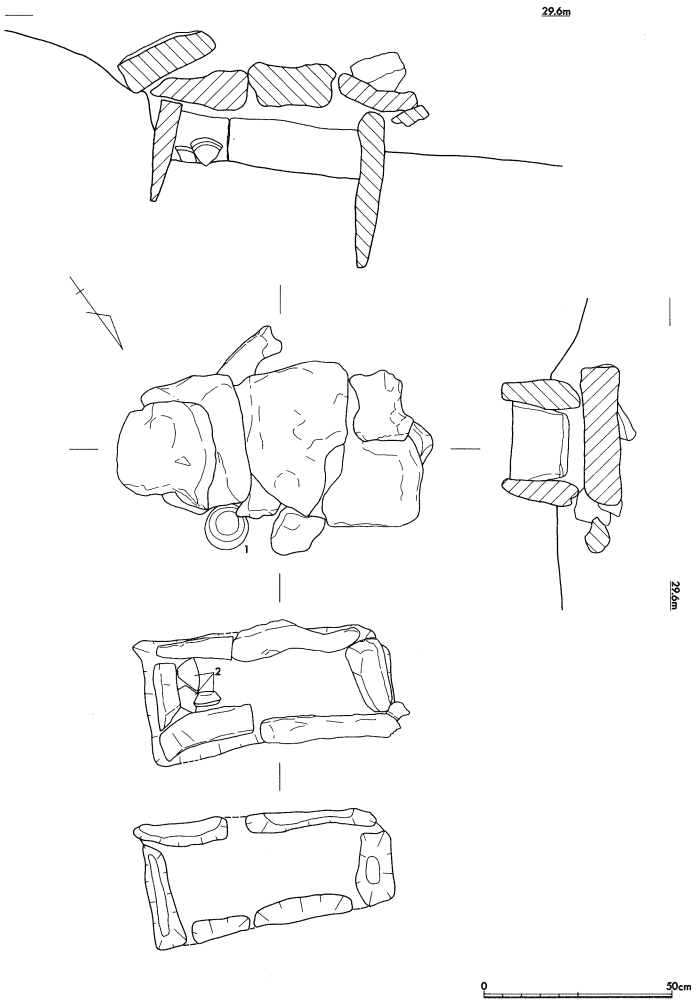
土壙の床面は南側が傾斜しながら高くなっており、こちらに頭を置いていたものと推定される。

従って蓋坏は土器枕として用いたものではなく、ＳＸ01と同様に足側に置いたものと考えられる。

ＳＸ02出土遺物（第18図）

１は坏蓋で、口径12.3cm、器高4.5cmを測る。天井部外面はヘラ切り後不定方向のナデ、周辺部は粗い回転ヘラ削りを施す。肩部には強いナデにより僅かに稜をつくる。

２は坏身で、焼歪が顕著である。口径は最大11.1cm、器高4.2cmを測る。底部外面はヘラ切り後ナデ、周辺部粗い回転ヘラ削りを施す。



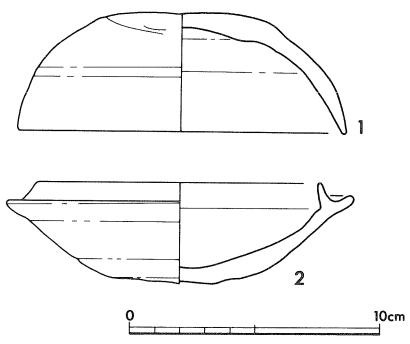
第19図　ＳＸ03実測・遺物出土状況（Ｓ＝１／20）

１・２共に大谷編年の出雲４期に該当する。

ＳＸ03（第19図）

箱式石棺で、検出地点はＳＸ02の斜面下方４ｍ付近で、斜面に直交する。３枚の蓋石で棺を覆い、隙間を小さめの石でふさぎ、目張りは施さない。

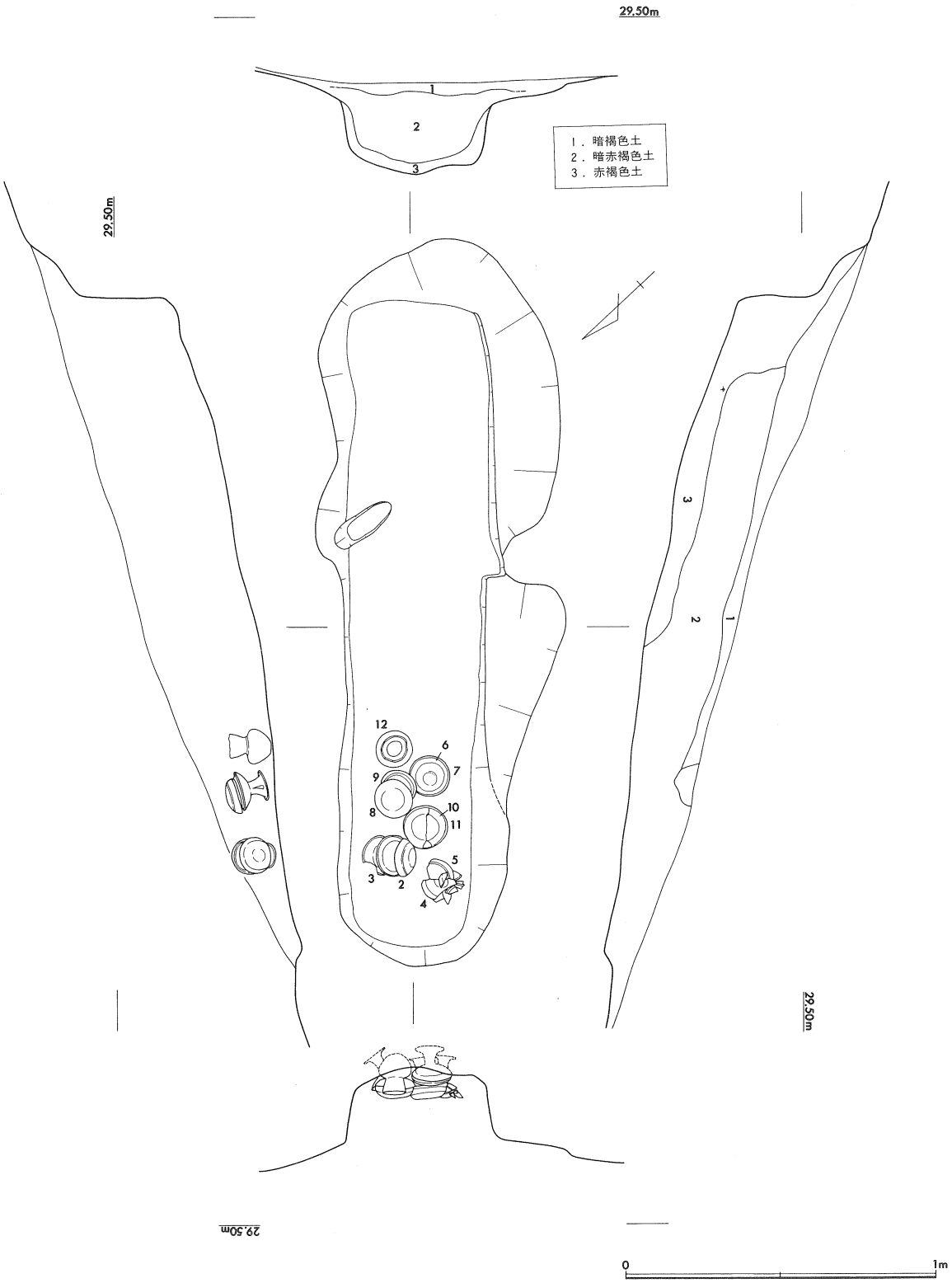
周囲を精査したところ、棺外から須恵器坏蓋１点が出土した。北側長辺部で伏せた状態に置かれていた。また、棺内覆土を除去すると東側小口に須恵器坏身片が３点伏せた状況で出土した。これらは同一個体で、枕として使用したものと推定される。棺は大小６つの石材で構成され、小口石を側石で挟みこむ。側石間の隙間には小礫を詰め込んでいるのが看取できた。また、小口石だけが異常に深く、この２材は先端も鋭いことから地面に打ち込んだ可能性がある。棺は内法で長さ0.5m、最大幅0.18m、深さ0.16mを測り、小箱式石棺といえる。



第20図　ＳＸ03出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＸ03出土遺物（第20図）

１は棺外出土の坏蓋で、口径13cm、器高4.6cmを測る。焼成不良で、天井部外面のヘラ削りの有無は風化が著しく定かでない。肩部は浅い２条の沈線を巡らす。２は棺内出土の坏身で、焼成不良。口径11.2cm、器高4.5cmを測る。底部ヘラ削りはなく返りも低い。いずれも大谷編年の出雲５期と考えられるが４期まで遡る可能性もある。



第21図　ＳＫ01実測図・遺物出土状況（Ｓ＝１／20）

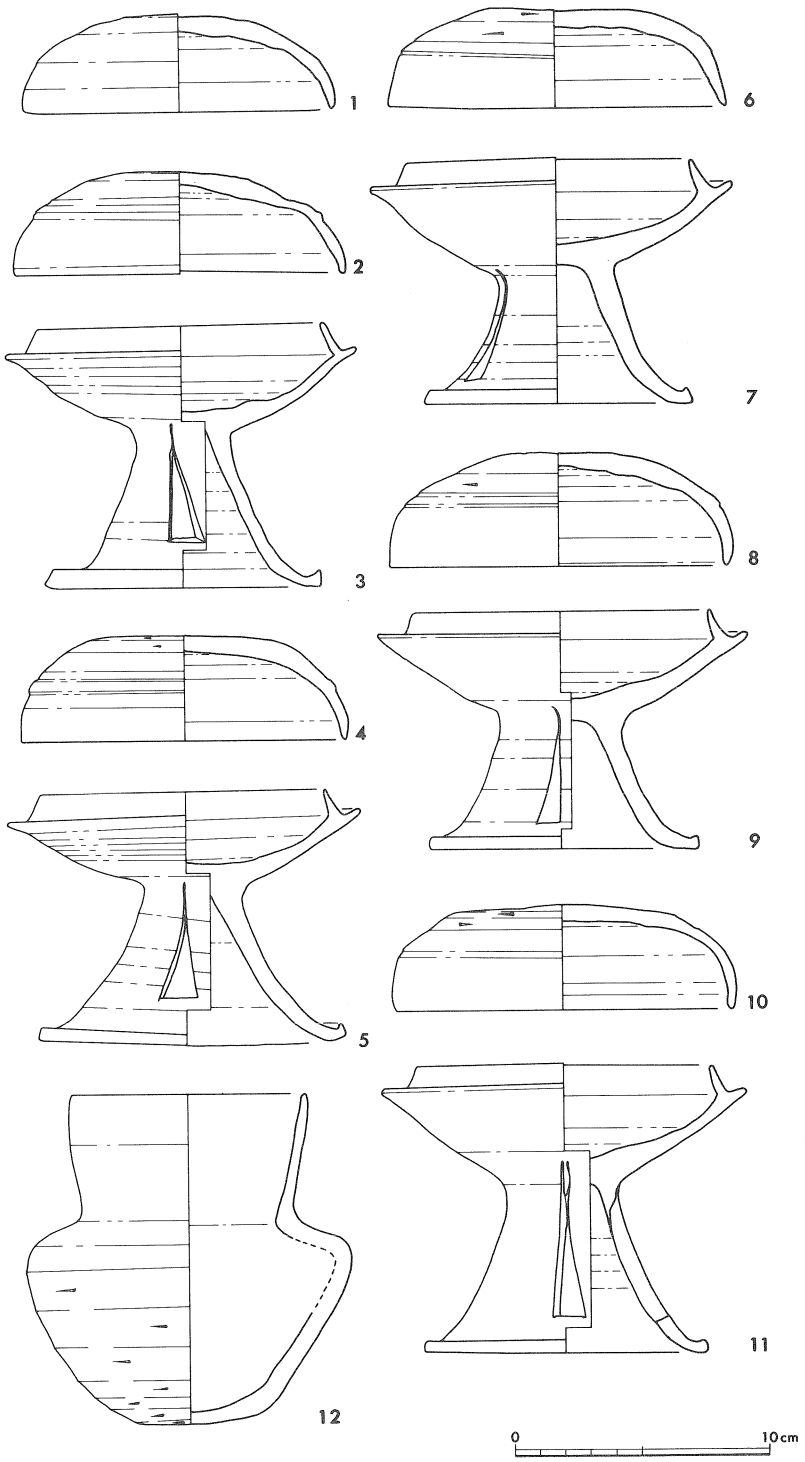
ＳＫ01（第21図）

ＳＸ03の南西側約５ｍ付近に位置する。表土直下で検出した土壙墓で、斜面に直交してつくられ、主軸をＮ－47°－Ｗにとる。規模は長さ約2.3m、最大幅約0.8m、深さ約0.4mを測る。床面は北西小口側に平均約12°傾斜している。木棺直葬で、頭位が南東であることは明らかである。北西小

口は現況で0.12mと浅いが、埋葬当時の深さではないと思われる。墓壙は頭側と南西長辺が浅く段をなす。

覆土は基本的に上から暗褐色土、暗赤褐色土、赤褐色土の３層だが、第２層は細かく分けられたかもしれない。堆積状況から木棺痕跡は確認できなかった。

覆土除去後床面直上で須恵器が11点出土し、うち直口壷以外は有蓋高坏のセットが蓋をかぶせた状態で出土した。遺物はすべて直立し、肩を寄せあう状態で出土している。こうした状況から遺物は原位置を保っていると考えられ、土器群と土壙壁との隙間は木棺の中に納められた痕跡を示すものと解釈できる。



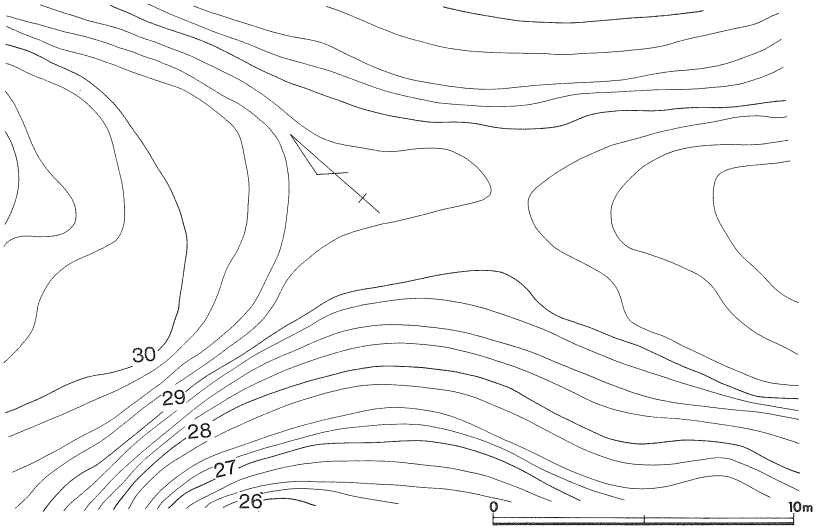
第22図　ＳＫ01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＫ01出土遺物（第22図）

１・２・４・６・８・10は坏蓋で、３・５・７・９・11は有蓋高坏、12は直口壷である。

１は第１・２層出土のもので、復元口径12.3cm、器高3.9cmを測る。焼成不良で、天井部外面の調整ははっきりしないが、ヘラ削りはないと思われる。肩部には回転ナデによるアクセントが観察できる程度である。混入遺物であろう。２は口径13.2cm、器高4.1cmを測る。天井部外面はヘラ切り後回転ヘラ削りを施す。肩部は２条の沈線で明瞭な稜を表現する。口縁端部は強いナデによりややなだらかな段をなす。３は口径11.4cm、器高10.4cm、脚口径11.0cmを測る。三角形２方透しで、脚端部は内傾ないしは直立して面をなす。４は口径12.9cm、器高4.2cmを測る。天井部外面はヘラ切りのちヘラ削りを施す。肩部は２条の沈線を巡らせ、突帯を作り出す。５は口径11.2cm、器高10.1cm、脚口径12.2cmを測る。三角形２方透

しで、脚端部はほぼ垂直に立上り面をつくる。6は口径13.5cm、器高4.0cmを測る。天井外面はヘラ削りを施し、肩部は2条の沈線で稜をつくる。口縁部は直線的に開き、端部はややとがる。7は口径11.3cm、器高9.8cm、脚口径10.6cmを測る。三角形3方透しで、外面には緑色自然釉が付着する。脚端部は内傾して面をなす。8は口径13.5cm、器高4.5cmを測る。天井部外面はヘラ削りを施す。肩部は2条の沈線で突帯を作り出す。9は口径11.8cm、器高9.5cm、脚口径10.6cmを測る。三角形3方透しで、外面に黄緑色の自然釉が付着する。脚端部は丸くおさめる。10は口径13.3cm、器高4.2cmを測り、天井部外面はヘラ削りを施す。肩部は浅い沈線を1条巡らしアクセントを付ける。口縁部は強いナデにより僅かに段をつくる。11は口径11.7cm、器高11.3cm、脚口径11.2cmを測る。三角形3方透しで、脚端部は丸くおさめる。12は口径9.3cm、器高13.1cmを測る。口縁部は僅かに内湾する。外面は、肩部以下回転ヘラ削りを施す。



第23図　4・10・11号墳周辺調査前地形測量図（S＝1／250）

1を除く坏蓋はすべて口径、調整ともに類似するのに対し、高坏は透しが2方と3方に、また脚端部が直立ないし内傾するものと丸くおさめるものとが見られる。坏蓋の型式から大谷編年の出雲4期に相当するものといえる。

（3）4・10・11号墳、SX04

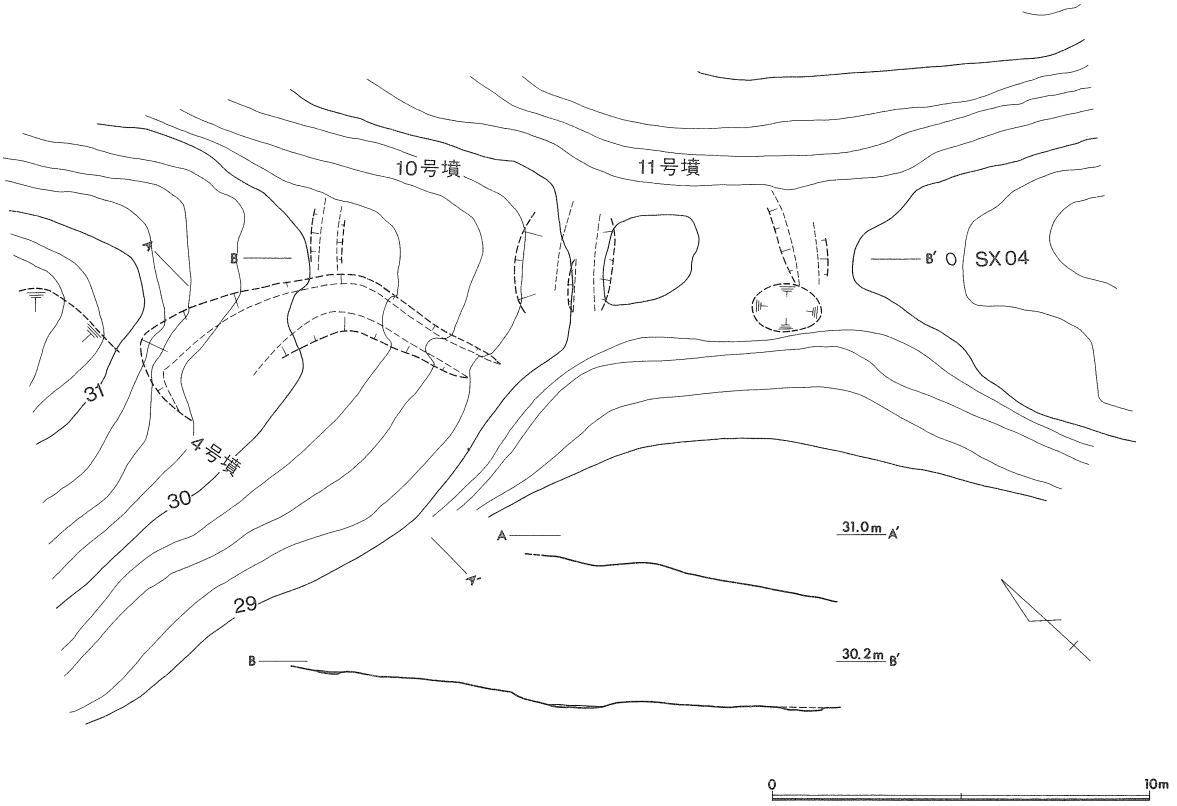
東西に伸びる東側尾根と北西方向に伸びる西側尾根の中間の、最も標高の低くなったところで、溝状遺構と遺物を検出した。

調査前の周辺の状況（第23図）は前述したように2つの丘陵ピークの中間で、尾根幅も最も狭くなり、比較的なだらかな地形であった。平成4年度の試掘調査で西側尾根の東端、標高約30m付近で溝状遺構と多量の甕片が確認され、当初からその付近に古墳もしくは横穴墓の後背墳丘が存在することが予想された。東側尾根は全体的に削平されていて、西端部もそうした状況が見られた。

土層観察のため尾根筋に縦断・横断ベルトを設定して調査した結果、溝状遺構を3基と土師器を埋納した土壙1基を検出した。以下、検出した順に概要を述べることとする。

4号墳（第24図）

試掘調査で確認さた遺構で、比較的遺存状況のよい南北方向の溝内から多数の甕片を採取した。溝の平面形は「く」字状で、削平されているため西側は原形を留めないが、本来は一辺約6m程度の「コ」字形を呈していたものと推定される。溝の幅は広いところで2m、狭いところで1m、深さ0.4～0.5mを測る。封土や埋葬施設はないが、溝の削り出しによって斜面側は墳丘状になっていたと考えられる。また、後述する2号横穴墓が南斜面下方に穿たれており、これらの状況から2号



第24図　4・10・11号墳周辺調査後地形測量図（S＝1／200）

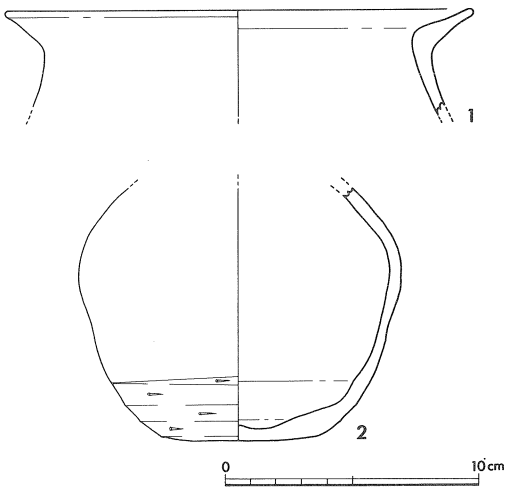
横穴墓を主体とする一辺6m程の方形後背墳丘と判断した。

4号墳出土遺物（第25図）

1・2は暗褐色の周溝覆土から出土したものである。ほかに甕片が多数出土したが、これらは2号横穴墓前庭部出土の甕片と接合したためここでの記述は控える。

1は土師器甕で、口縁部のみ残存し、「く」字に屈曲する。復元口径18.4cmを測る。外面ヨコナデ、内面調整は不明である。8世紀以降のものであろう。

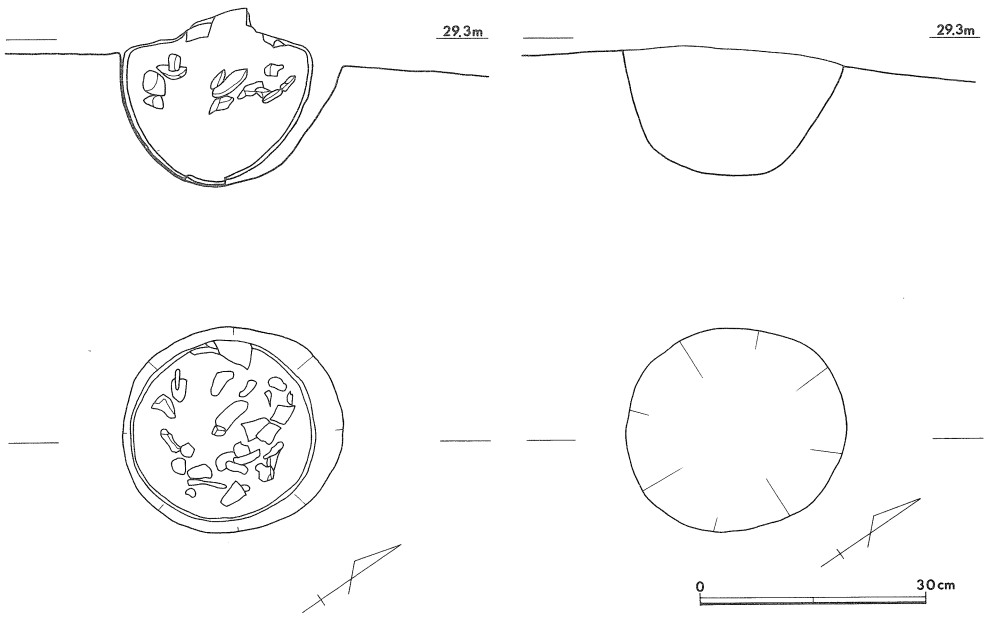
2は須恵器直口壷でヘラ切り後胴部との境から底部にかけて回転ヘラ削りを施す。



第25図　4号墳溝出土遺物実測図（S＝1／3）

10号墳（第24図）

尾根筋に直交する形で溝がつくられるが、遺存状態が悪く北西の溝幅0.8m、深さはせいぜい0.2m程である。北西の溝は、4号墳との切り合い関係からこれに先行するものといえる。また、南東の溝は隣接する11号墳と共有しているように見えたが、溝の内側にもう1つ溝を検出した。11号墳との先後関係は不明である。盛土や埋葬施設はなく正確な規模も不明だが、2・3号墳と同様の一辺6m前後の方墳であったと推測される。遺構に伴う遺物はない。



第26図　ＳＸ04実測図・土師器出土状況（Ｓ＝１／10）

11号墳（第24図）

10号墳に隣接して築かれた一辺５ｍ前後の方墳であったと考えられる。10号墳と同様に盛土、埋葬施設は確認できなかった。南東溝の幅は1.2ｍ、深さは20㎝にも満たない。現況からは推測の域をでないが、西側尾根の２・３号墳の状況に類似した地山削り出しを主とした築造方法であった可能性が有る。出土遺物はない。

ＳＸ04（第24図、26図）

土師器甕を埋納した土坑である。11号墳の南東側約７ｍのところに位置し、表土掘削中に検出したもので、鍬の一撃で口縁部は破損した。土師器内の覆土の中にはかなり破片が入っていたが、その他の混入物は確認していない。土坑の規模は最大径約30㎝、深さ17㎝を測る。

土師器甕は取り上げの際に小片になり、実測可能なまで復元することができなかった。

西側尾根や10・11号墳などのあり様から尾根筋には連綿と古墳が築造されていたことが推測され、それらに伴う可能性がある。

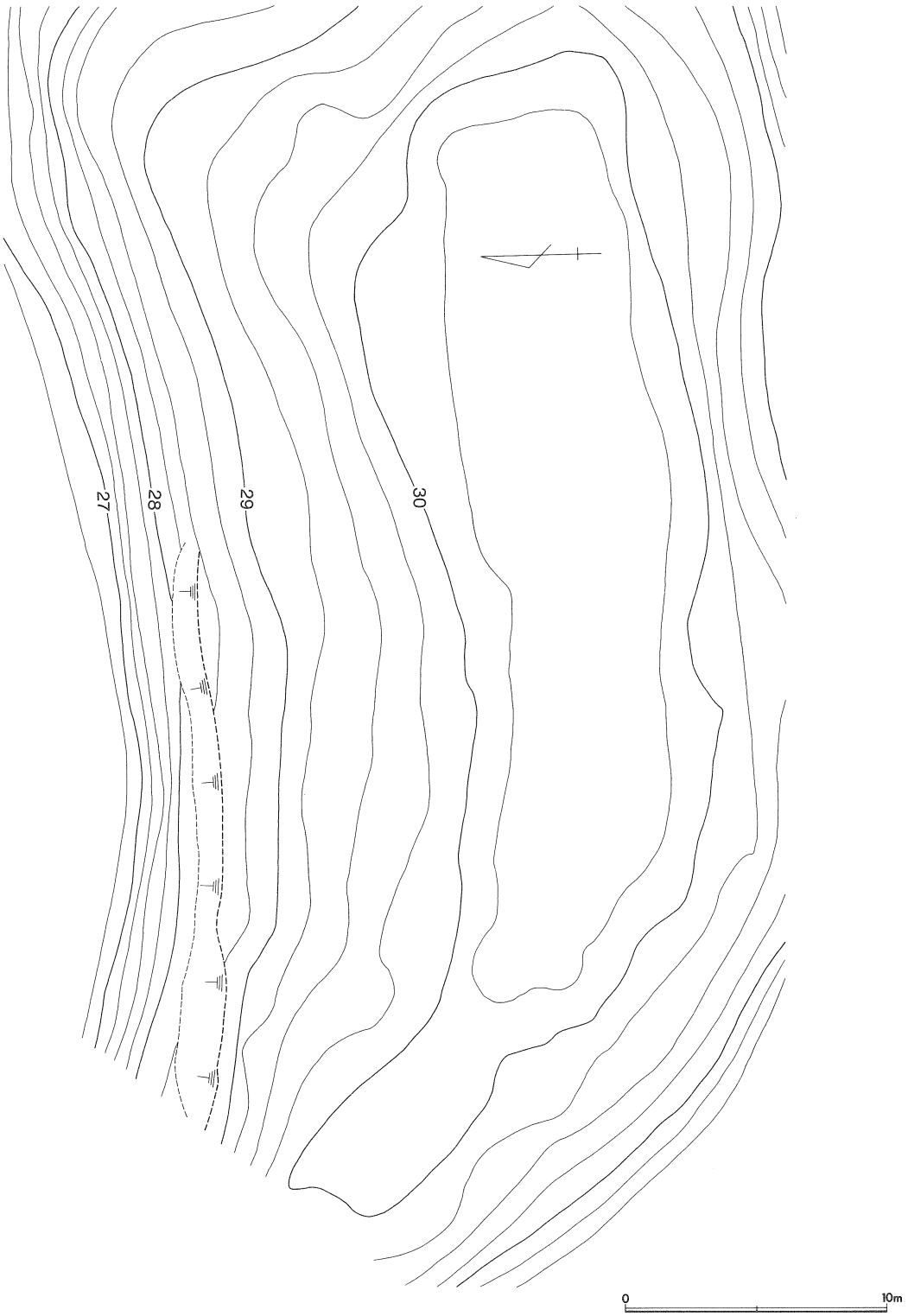
（４）５～９・12・13号墳

東西方向に約50ｍにわたって伸びる東側尾根で７基の古墳を検出した。調査前の地形測量図からは明らかに古墳と認識出来るものはない状況であった。（第27図）標高28～30ｍ付近は後世にかなり削平された様子で、起伏のあまりない平坦な地形が続いている。平成４年度に試掘調査を行った際に若干の遺物が出土している。こうしたことから、墳丘状の高まりは見られないものの周溝だけが残っている可能性もあり、他の尾根部と同様に尾根筋とそれに直交するベルトを設定して調査を行った。削平されているため表土が非常に薄く、10㎝も掘り下げると各所で明赤褐色土もしくは淡黄褐色粘土の地山が検出された。慎重に精査した結果、周溝だけがかろうじて残っている古墳が２基、比較的残りのいい円墳ないしは方墳が５基確認された。以下、検出した順に５～９号墳・12・13号墳とし、それらの概要を述べることとする。

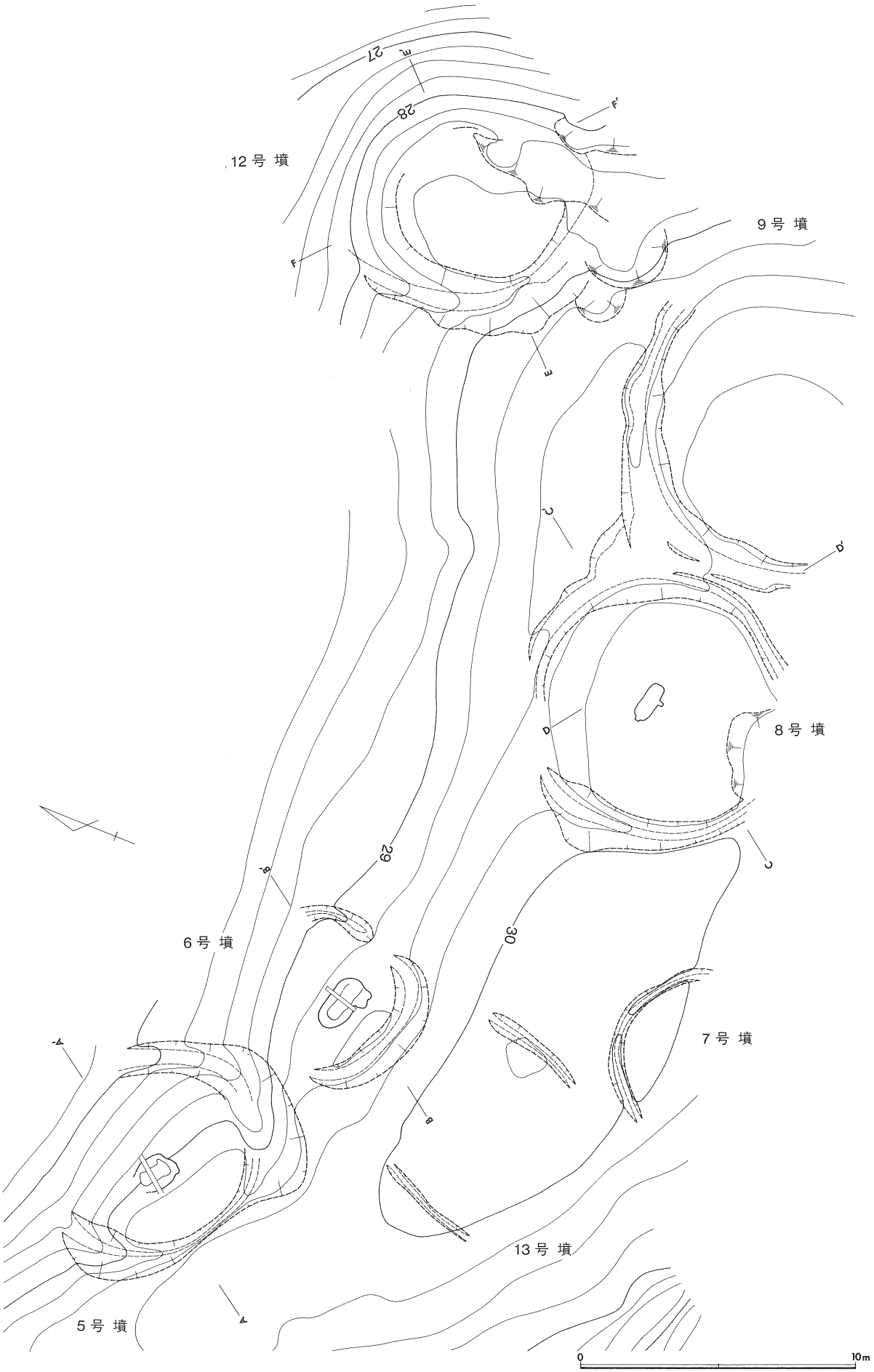
5号墳（第28図・29図）

周溝・墳丘

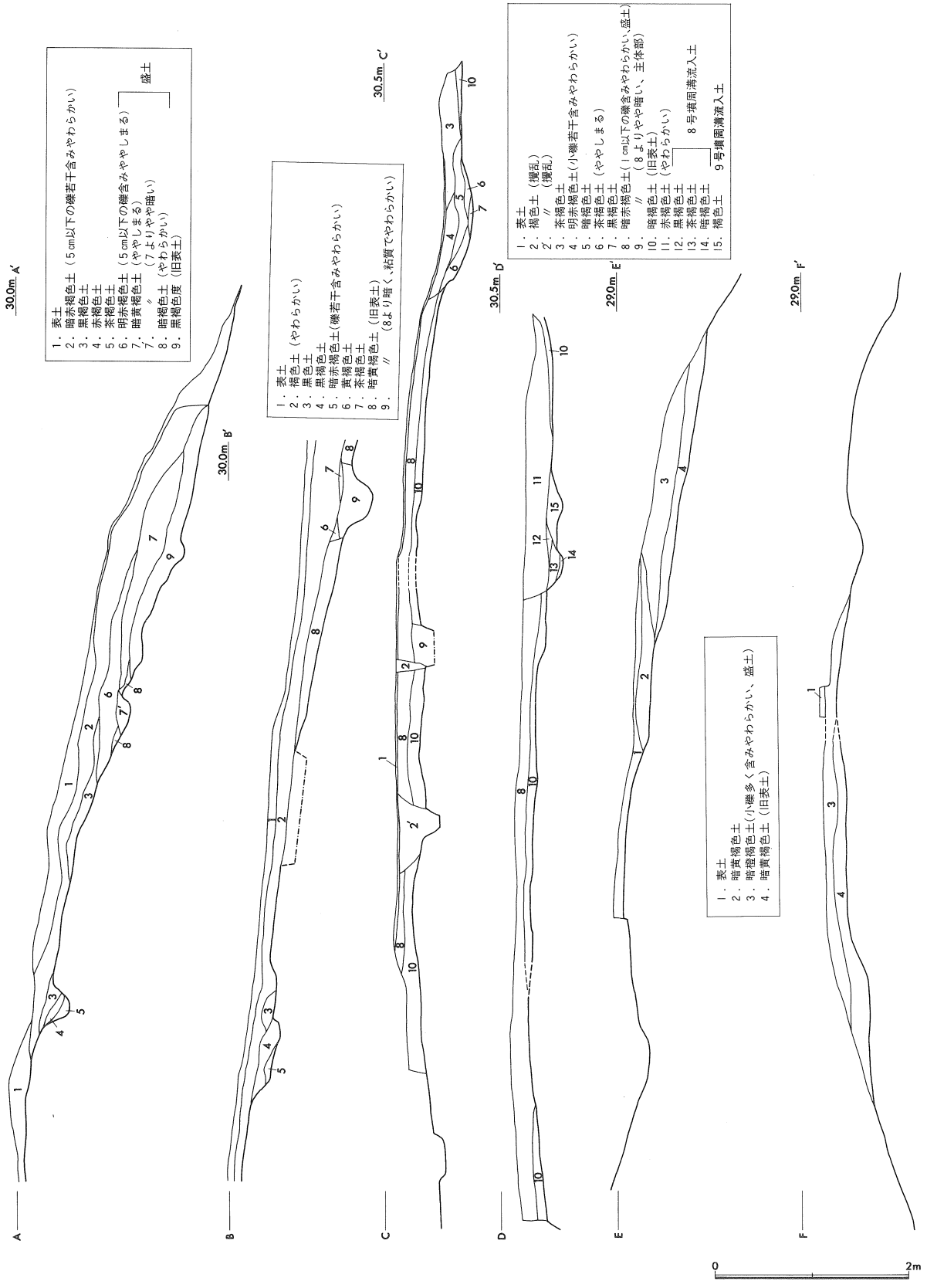
東側尾根の古墳群のうち最も西よりのところに位置し、尾根筋のやや北側斜面よりに築かれている。表土、暗赤褐色土を除去したところで、周溝を検出した。ほぼ円形に廻っており、現況での規模は広いところで底幅0.6m、深さ0.6mを測る。北側については溝の続きを検出することはできなかった。溝の南西部分は削平されたためにかなり幅が狭くなっている。周溝から浮いた位置からで



第27図　5～9・12・13号墳周辺調査前地形測量図（S＝1／250）



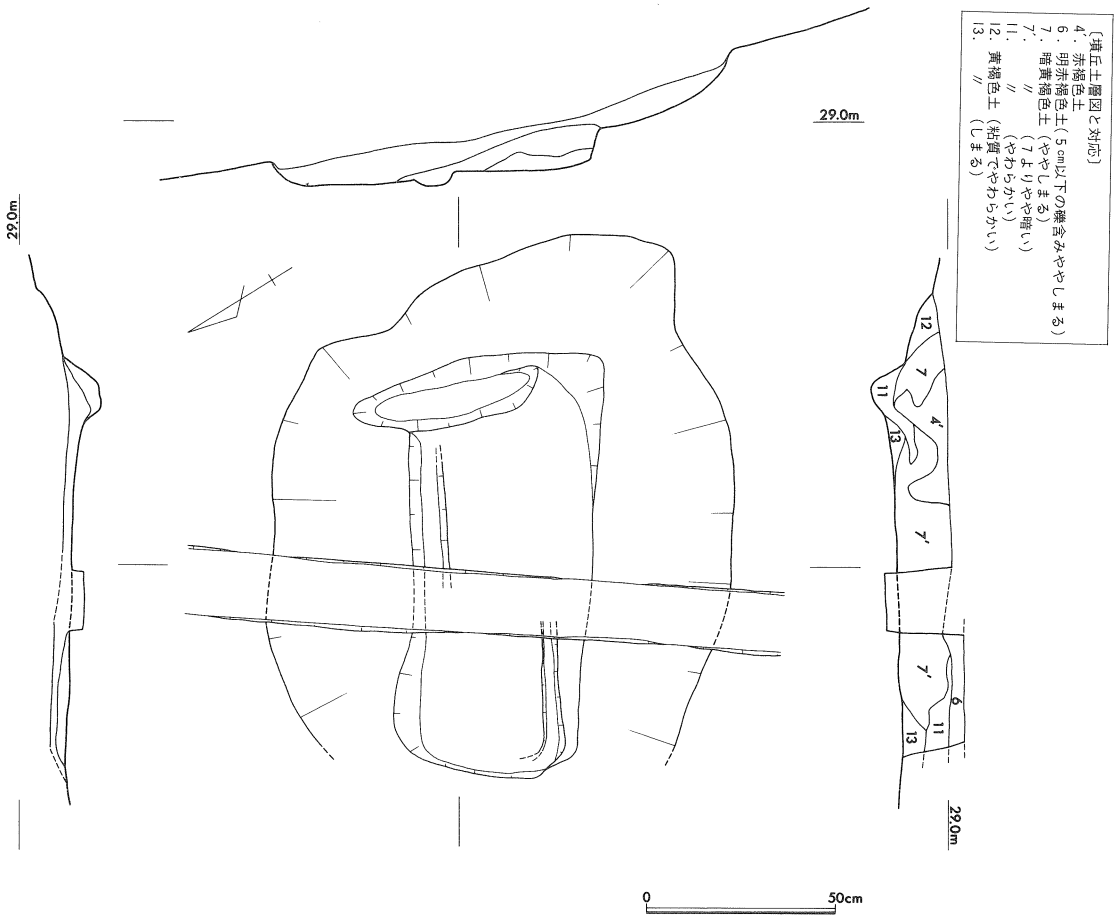
第28図　5～9・12・13号墳周辺調査後地形測量図（S＝1／200）



第29図　墳丘土層断面図（S＝1／60）

はあるが若干の土師器小片と須恵器坏蓋を採取した。また、試掘調査で溝付近から須恵器片が数点出土している。

墳丘は墳端を周溝の内側下場とすると、直径7m前後の円墳であったと推定される。葺石などの外表施設はない。墳丘北側は比較的残りがよく、盛土が約40cm程度残存していた。盛土の堆積状況

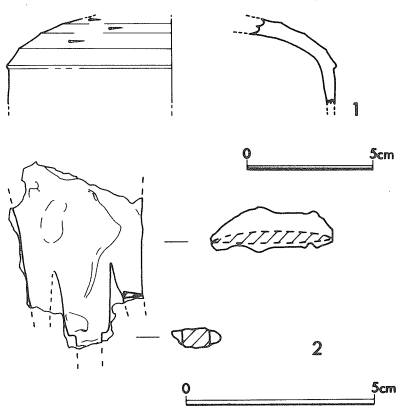


第30図　5号墳主体部実測図（S＝1／20）

から、周溝を円形に廻らせたのち、地山面に墓壙を掘り込んでいるが、この際に墳丘底面の整形は行われていないようである。墓壙の掘削とほぼ同時に周溝掘削土を盛り土して構築していったものと考えられる。

埋葬施設（第30図）

墳丘中央やや南西側に等高線と並行する形で掘り込まれている。墓壙の主軸はN－57°－Wに置き、不正楕円形を呈す。規模は長さ1.4m、幅1.24m、深さ0.35mを測る。トレンチをいれて土層観察を行った当初は墓壙に気付かず、トレンチ内から鉄鏃1点が出土したため再精査し検出するに至った。墓壙内に更に浅い掘り込みをつくるが、北側長辺の東半分と東側小口、そして南西長辺の一部で木棺の痕跡を検出した。棺の規模は内法で長さ約1m、幅0.25mと非常に小さく、小児一人が入るのが精一杯の大きさである。出土した鉄鏃は棺内もしくは墓壙内に副葬されていたものと考えられる。



第31図　5号墳出土遺物実測図
（S＝1／3、2は1／2）

5号墳出土遺物（第31図）

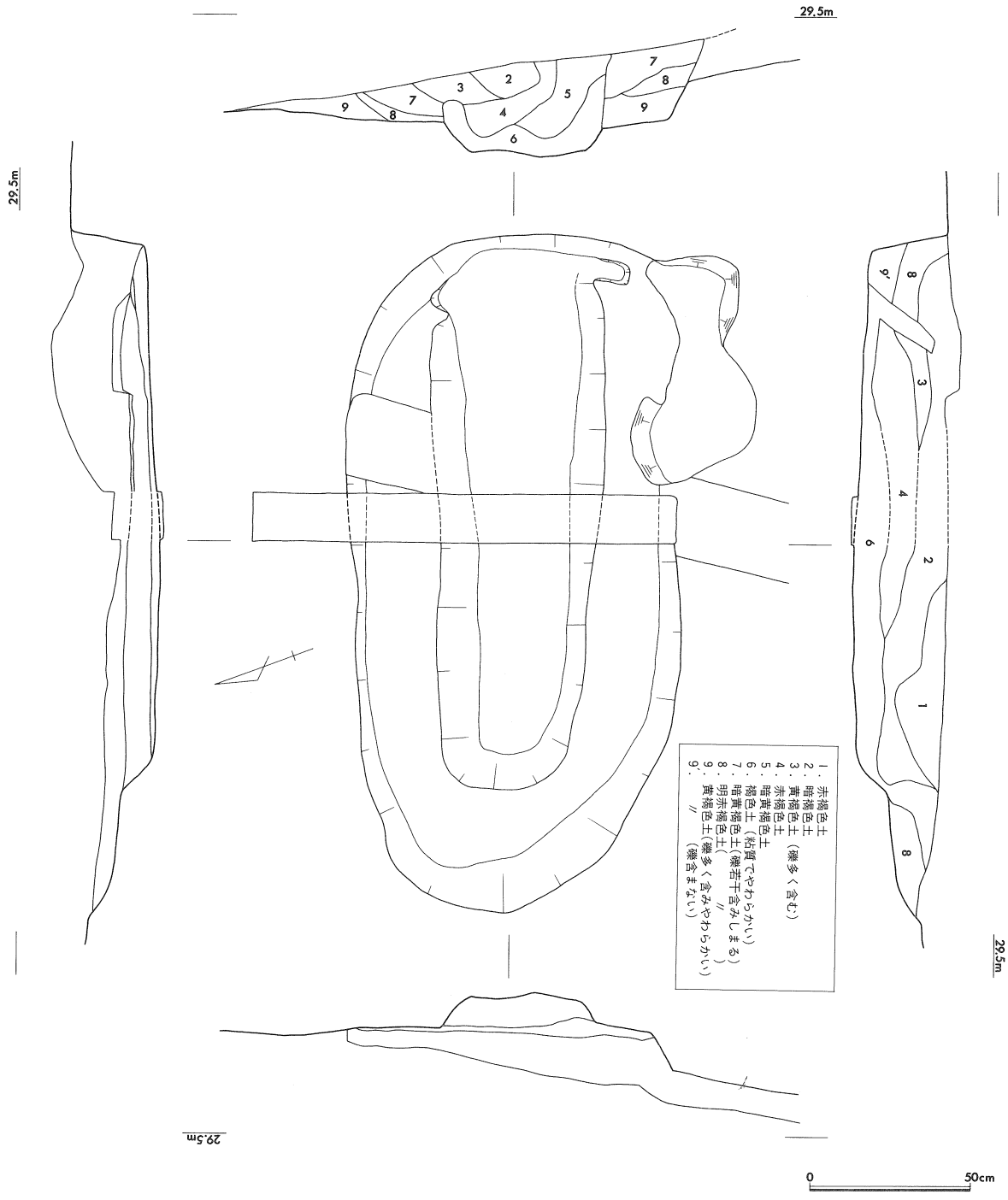
1は須恵器坏蓋で、復元すると口径12.5cmくらいになろうか。焼成は良好で、黒灰色を呈す。天

井部外面は丁寧な回転ヘラ削りを施し、肩部には突帯が廻り、天井部と口縁部の境が明瞭である。口縁端部は欠損しているが、こうした諸特徴は松江市薬師山古墳出土の蓋坏の時期と併行するもので大谷編年の１期に相当する。２は墓壙もしくは棺内から出土したもので、鏃身部下半と関部が残存する。鏃身部の上方がやや膨らみ加減で、短頸の逆刺柳葉式鏃[4]とみられる。現長５cm、最大幅3.4cm、篦被部幅1.2cmを測る。１の坏蓋の時期とも一致するといえる。

６号墳（第28図・29図）

周溝・墳丘

５号墳の東側に近接して築かれている。周溝はほぼ半周する形で遺存し、隅丸方形を呈している



第32図　６号墳主体部実測図（Ｓ＝１／20）

ことから方墳である可能性が高い。周溝の規模は底面幅0.5m、深さ0.3mを測り、北側は残りが悪い。残存する溝の下場の内側を墳端とすると一辺５m程度の方墳であったと考えられる。墳丘は葺石などの外表施設はなく、後世に削平を受けたと考えられ、盛土は全く残っていない状況であった。墳丘の堆積状況は、表土下に褐色土を挟み地山に至る。墳丘の北側では褐色土の下から旧表土を検出している。褐色土は周溝を覆って広い範囲に堆積していることから、削平された際のものであろう。地山検出面で埋葬施設を１基検出している。

埋葬施設（第32図）

褐色土除去後検出したもので、墳丘中央からやや南よりに位置する。盛土が残っていないためにどの段階で掘り込み、埋葬したのかは明らかでない。木棺直葬で、墓壙内に棺を安置する掘り込みがもう一段つくられるものである。墓壙は尾根に平行するかたちでつくられ、主軸をＮ－70°－Ｅにとる。平面形態は倒卵状の楕円形で、頭位と考えられる東側には木棺の小口板の痕跡が認められる。墓壙の規模は現況で長さ2.1m、中央幅1.0m、検出面から棺底までの深さ0.3mを測る。棺底部は比較的はっきりとした面をつくるが、小口板以外には側板を思わせるような痕跡はなく、割竹形木棺を使用していたものと推測する。棺の規模は長さ1.7m、中央幅0.5mを測る。

墓壙内の覆土は、基本的に赤褐色系と黄褐色系の土で、１～５層までは盛土もしくは埋土の落ち込みと見られる。７・８層はしまっており木棺の裏込めと推定される。

６号墳出土遺物

周溝内から若干の土師器片が出土しているが図化し得ないものばかりである。時期を考えうる遺物はないが５号墳と相前後して築かれた可能性が強いと考えられる。

７号墳（第28図）

６号墳の南側13m付近に位置する。表土除去後、精査中に見つかったもので、検出時から既に溝状になっており、当初は溝状遺構としていたものである。前述した10・11号墳や後述する13号墳と同様に削平を受けたため溝しか残ってないものの本来は墳丘をもつ古墳であったものと判断した。

溝は尾根のやや南斜面よりに半分程度残存し、底幅0.2m、深さ0.2m程度である。Ⅲ区外に延びていたと思われるが、前年度のⅡ区の調査では表土掘削した際には検出できなかった。現状では判断し難いが推定で直径約６m程度の円墳になろうか。遺物は出土していない。

８号墳（第28図・29図）

周溝・墳丘

尾根筋の平坦面、７号墳の北東12mのところに位置する。最大底幅約0.5m、深さ約0.2mの溝がほぼ円形に廻り、東側の一部は９号墳の周溝と切り合っている。周溝断面形は浅いながらもＵ字状を呈す。墳丘形態は、溝の下場内側を墳端とすると約9.2mの円墳であったと推定され、葺石などの外表施設は存在しない。表土除去後周溝を検出したためベルトを十字に残して調査を進めた。堆積状況は、削平されているため墳丘の大半は損なわれているが、表土下に１層だけ盛土が残存し、旧表土面から埋葬施設を掘り込んでいる。地山整形は行わず、埋葬を行った後に周溝を掘って盛り土したと推定される。９号墳との切り合い関係（第29図Ｄ－Ｄ´）は、９号墳溝覆土15層を８号墳溝が切っている状況が観察でき、９号墳が先行して築かれたといえよう。

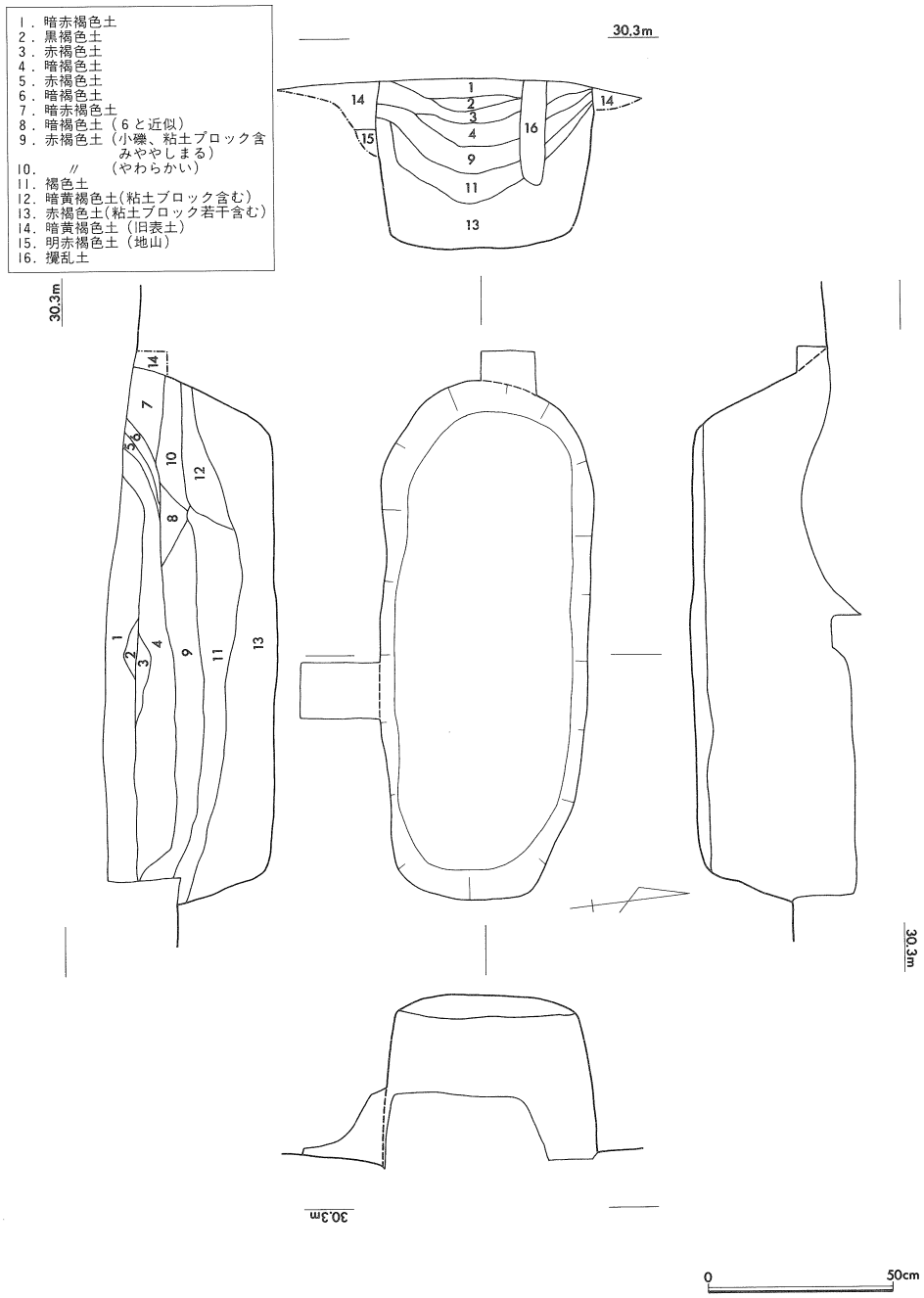
埋葬施設（第33図）

墳丘中央からやや北よりに位置し、主軸をＮ－97°－Ｗにとる。木棺直葬で、墓壙は平面隅丸長方形で、長さ1.4m、中央幅0.6m、深さ約0.5mを測る。幅は東西を比較すると西側がやや広くなっている。墓壙底面は平坦面をつくる。棺痕跡は特に認められなかった。

墓壙覆土は赤褐色土と暗褐色土が互層状に堆積しており、９層以下は粘土ブロックや小礫を包含するものが多い。盛土、埋土が陥没して流入したものであろう。

８号墳出土遺物

試掘調査の際、北側周溝部から土師器小片、須恵器甕片のほかＴＫ47型式併行の碧が出土している。今回の調査でも周溝内から土師器小片、須恵器小片が少量出土しているが、図化し得るものはなかった。試掘調査で出土した碧を古墳築造時のものとするならば古墳時代中期末の年代が与えられよう。



第33図　８号墳主体部実測図（Ｓ＝１／20）

９号墳（第28図）

周溝・墳丘

８号墳の東側に近接して築造されており、前述したように周溝の切り合いから８号墳に先行するもので、円墳と考えられる。丘陵尾根筋に立地し、墳丘と周溝の南東部分は工事用道路で切られている。Ⅱ区の調査ではこの部分で溝は検出していない。表土を剥ぐとすぐに地山を検出し、盛土は失われている。墳丘も溝で区画されて認識できるものの、かなり削平されほとんど

周囲との起伏の差がなく、そのため周溝を検出してはじめて古墳と判明したものである。

周溝は広いところで底幅約0.6m、深さ0.4mを測り、半周程度残存する。墳丘の正確な規模は不明だが、8号墳より一回り大きいもので、推定で直径11m前後の円墳になろうか。埋葬施設は遺存していない。

9号墳出土遺物（第34図）

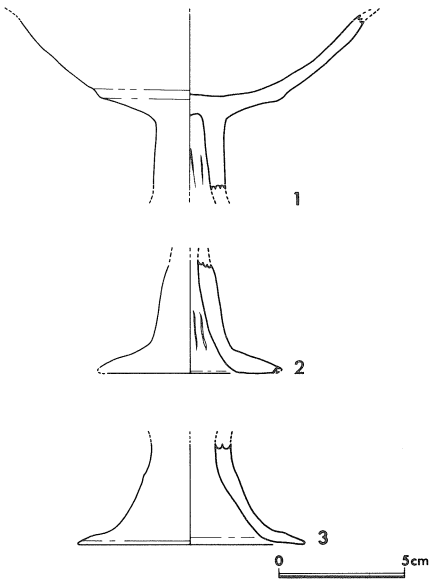
遺物は周溝から土師器の高坏片、甕小片のほか須恵器瓶か甕の小片が出土している。1～3は土師器高坏で、風化が著しい。1は口縁端部を欠損するが復元口径14.5cm程度になろうか。口縁部は緩やかに内湾して立ち上がり、坏底部には稜をつくる。坏底部外面には浅い刺突痕が観察できる。筒部は直線的である。2は脚部で、脚口径は端部を欠くが、復元して7.3cmにはなろうか。風化で剥離しており器厚は本来ではない。筒部はやや膨らみ、ハの字状に強く開いて端部に至る。3も脚部で脚口径は復元して9cmを測る。筒部は外湾気味に延びるため、開きがゆるく感じられる。

1は松山分類でいう高坏Bで、2・3は不明であるが脚部の形状から同様の坏部か3号墳溝出土の様な椀形のものが付くと推定される。時期は松山編年のⅣ期に相当する。

12号墳（第28図、29図）

周溝・墳丘

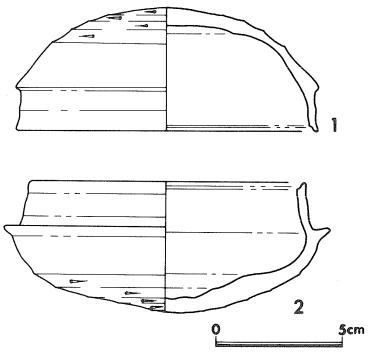
9号墳の北側、二股に分かれた尾根の根本に位置する。周溝の一部を検出したため、十字にベルトを設定して調査を行った。周溝は西側から南側にかけて半周程度残存する。底面幅0.6m、深さ0.4mを測る。断面は緩やかなU字形を呈す。墳丘の南と東は後世にかなり撹乱を受けた様子である。墳形は不正円形で、墳端ははっきりしないが標高27m付近で傾斜が変化していることから、ここでは直径11m前後の円墳と判断しておくが、あるいは方墳であった可能性もある。盛土は1層だけで、上部の盛土は残っていない。葺石などの外表施設はなく、埋葬施設も検出することはできなかった。



第34図　9号墳出土遺物実測図（S＝1／3）

12号墳出土遺物（第35図）

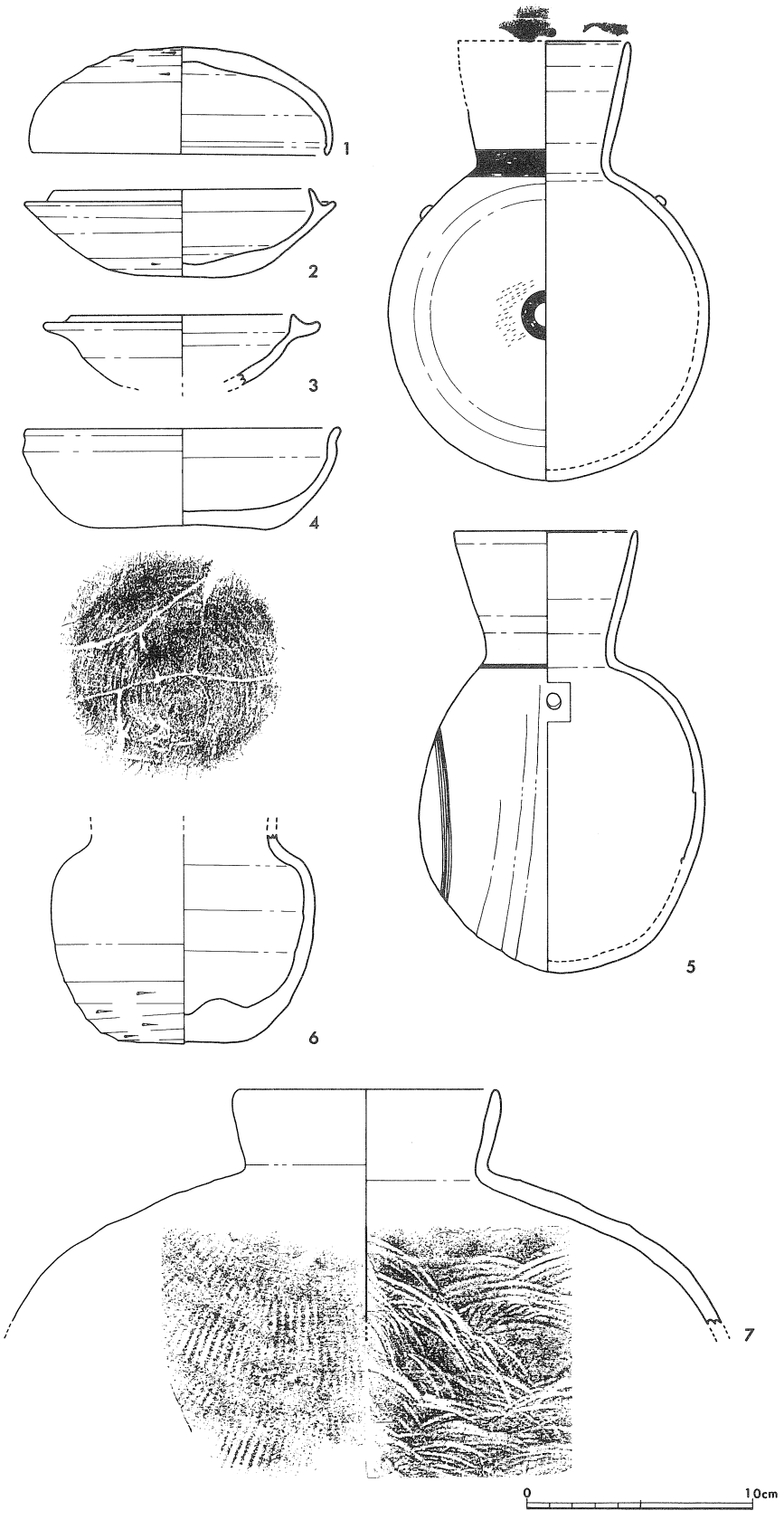
遺物は試掘調査で墳丘北東側の裾付近で須恵器小片が出土している。今回の調査では墳丘東側の撹乱を受けている溝内から須恵器蓋坏1セットが出土している。1は坏蓋で口径12cm、器高4.9cmを測る。天井外面は丁寧な回転ヘラ削りを施し、肩部には突帯を廻らす。口縁端部はわずかに内傾し、内面は沈線で段状に仕上げる。2は坏身で口径11cm、器高5.2cmを測る。底部外面は丁寧なヘラ削りを施す。口縁部はやや内傾して高く立上り、端部に明瞭な段をつくる。



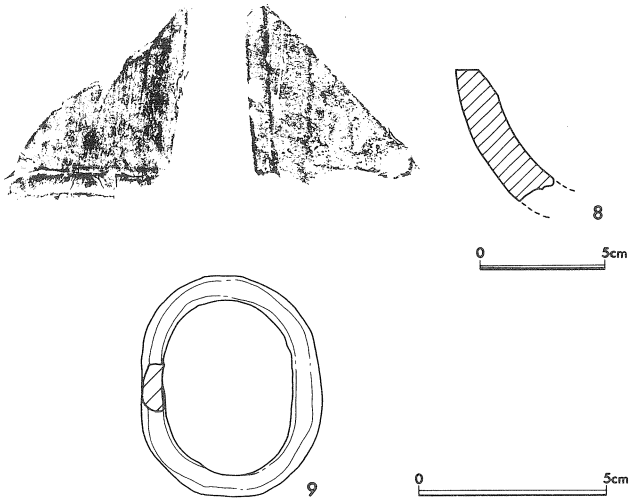
第35図　12号墳出土遺物実測図（S＝1／3）

13号墳（第28図）

7号墳の北側に位置し、溝だけ検出している。溝の底面幅0.2m、深さは10cmにも満たない。7mほどの方墳で



第36図　Ⅲ区　遺構に伴わない遺物実測図(1)（S＝1／3）



第37図　図Ⅲ区遺構に伴わない遺物と実測図(2)
（S＝1／3、9は1／2）

あったと推定される。

Ⅲ区遺構に伴わない遺物（第36図･37図）

4は1号墳付近、1・2・5・7は3号墳の南側付近、3・6・9は4号墳付近、8は5号墳付近で取り上げたものである。

1は坏蓋で口径13.1cm、器高4.7cmを測る。天井部外面はヘラ切り後回転ヘラ削りを施す。肩部はまるく、口縁部との境は不明瞭である。口縁部内面には沈線を廻らす。2は坏身で口径11.2cm、器高3.8cmを測る。底部外面は砂粒が動いているがヘラ切りの際にできたものと考えられる。3は坏身で復元して口径9.8cm、受け部径12.2cmを測る小形のものである。4は坏で口径13.8cm、器高4.3cmを測り、底部回転糸切り未調整である。内湾しながら外に開いて立上り、口縁部は短く外反するのが特徴である。8世紀中葉～末頃のものと考えられる。5は提瓶で口径7.6cm、器高19.3cmを測る。口縁部は直立する単純なもので、頸部にカキ目を施す。肩部にボタン上の把手を一対有し、胴部はタタキの後カキ目を施す。側面形は球形化している。6は直口壷で、口縁部を欠く。7は短頸壷とでも言うべきもので、口径11.4cmを測る。口縁部は直立して単純におさめる。外面平行タタキ、内面には径の大きい青海波文の当て具痕が残る。8は玉縁式丸瓦の狭端側で、玉縁部は欠損している。厚さ約1.5cmを測り、凸面はナデ調整、凹面は磨滅のためか明瞭な布目痕は認められない。側面は凹面側に削りによる面取りが見られる。9は鉄器で用途は不明である。長さ5.8cm、幅4.8cm、重量72.62ｇを測る。

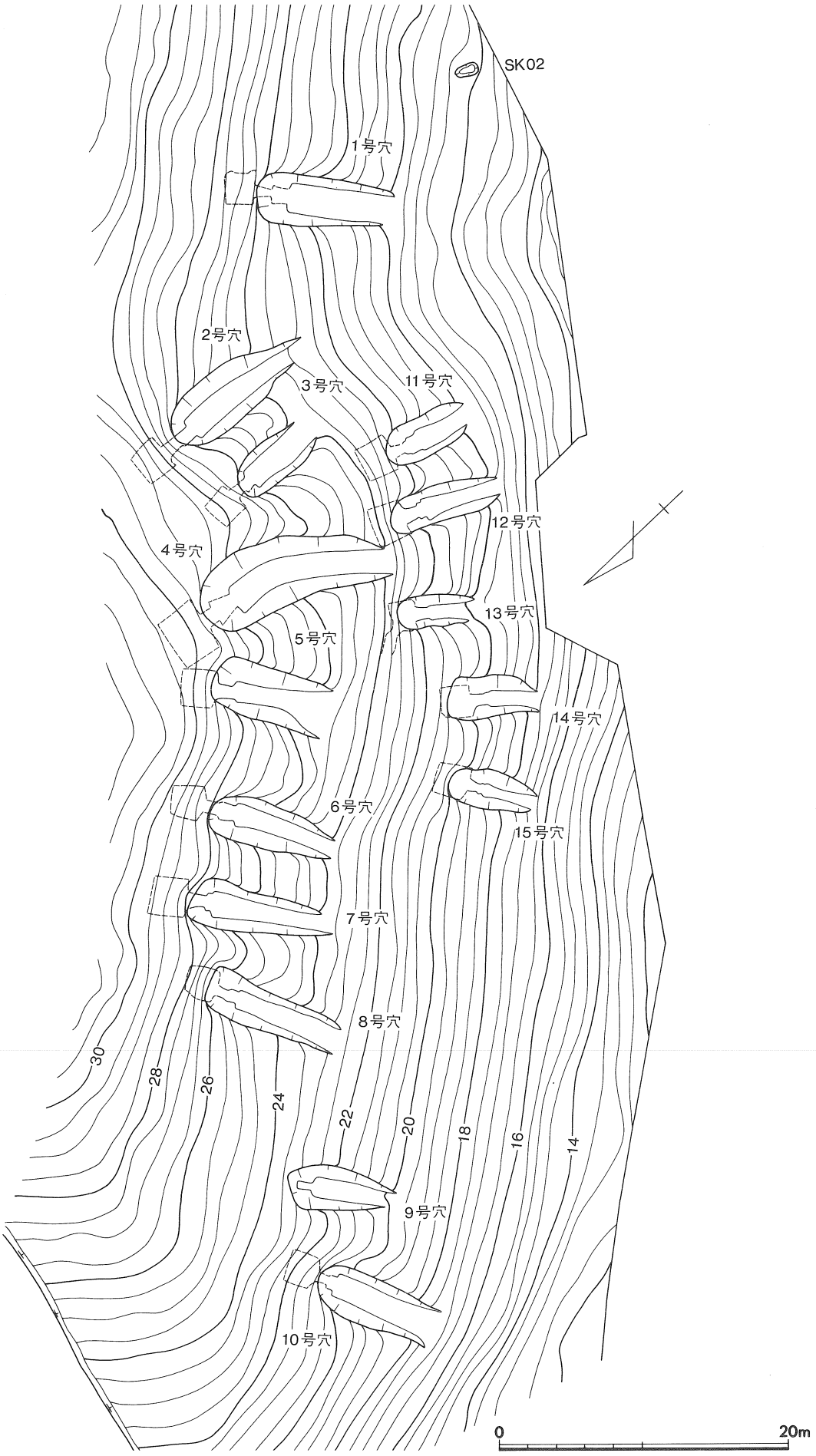
註

(1) 島根県教育委員会「岸尾遺跡・島田遺跡」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区Ⅴ』1997

(2) 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』8、1991

(3) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11、1994

(4) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』8、1988



第38図　Ⅳ区調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1／400）

3節　Ⅳ区の調査（第38図）

Ⅳ区は標高14～30mの丘陵南西側から南側にかけての斜面部である。平成４年度の試掘調査で落ち込みなどの地形の乱れが見られる箇所にトレンチを入れた結果、周辺から多量の須恵器甕片などが検出されるなど、少なくとも５穴の横穴墓が存在することが推定された。また、Ⅱ区の調査の際には横穴墓が１穴存在することが判明した。

試掘調査で確認された横穴墓の位置と、Ⅱ区調査時に検出した横穴墓の位置では標高差が５m余りもあり、あるいは２段にわたって墓域が形成されている可能性も考えられた。表土掘削の後上段に７穴（２～８号横穴墓）、下段に４穴（１・９・10・11号横穴墓）以上が穿たれていることが判明し、急斜面での作業の安全確保と廃土置場の問題から上段の調査後に下段に着手することとした。その後の調査の結果、下段で更に４穴（12～15号横穴墓）検出し、計15穴の横穴墓を確認することができた。斜面の地形上、横穴墓はすべて南から南西方向に開口しているが、非常に軟弱な地盤のため天井部などの遺存状態は悪い。調査は基本的には前庭（墓道）から玄室までの縦断ライン、前庭部の横断ラインを設定して土層の観察を行いながら進めた。

なお、各横穴墓の前庭（墓道）からは大量の甕片が出土しており、これらのうちの幾つかは隣接する横穴墓出土の甕と接合したため、それらについては特定の遺構出土遺物としては取り扱わず、別項でまとめて述べることとした。Ⅳ区ではその他の遺構としては土坑を１基検出している。

（１）横穴墓

１号横穴墓（第38図～40図）

Ⅳ区の最東端に位置し、他の横穴墓と異なり唯一単独で開口する。床面の標高約20mで、レベルは９・11～13号横穴墓とほぼ同じと言える。

前庭部　奥幅約2.3m、長さ約8.2mを測り、前端でやや細くなるものの平面的には広長なタイプである。床面は前端部に向かって緩やかに傾斜する。

羨道部　天井部崩落のため高さ、断面形態は不明であるが、平面は奥幅約1.1m、手前幅1.0m、長さ1.2mと幅に変化のないタイプである。

玄門部　奥幅約0.85m、手前幅約0.5m、長さ約1.3mを測り、天井部崩落のため高さ、断面形態は不明である。

玄室　前庭部の主軸よりやや北西側に振った状態で穿たれている。平面規模は奥壁側で幅2.1～2.2m、中央幅2.04m、袖側で2.32m、奥行き2.0mを測る。陶棺が据えてあった右壁側は横穴掘削後に拡幅されたもので、本来は正方形を呈していたと考えられる。天井部の全面が崩落しており、高さや天井・断面形態については不明である。また、各隅の壁も剥離しており壁の界線が立ち上がっていたか否かは明らかでない。

床面は部分的にではあるが溝が廻り、中央には幅20cm、深さ５cmの溝を掘り込んで左右の屍床を造り出すかたちとなっている。右壁から右袖にかけては幅0.68m、奥行き0.5mの小穴が穿たれている。

堆積状況（第39図）　前庭部から玄室内にかけての土砂は埋土、流入土、崩落土の３つに大別できる。24層はきれいな赤褐色系の土で初葬時の埋土と考えられ、閉塞石のところで途切れる。この上面が２次葬面と見られ、初葬時閉塞石の一部を取り外して後方に放置したものと思われ（第40図

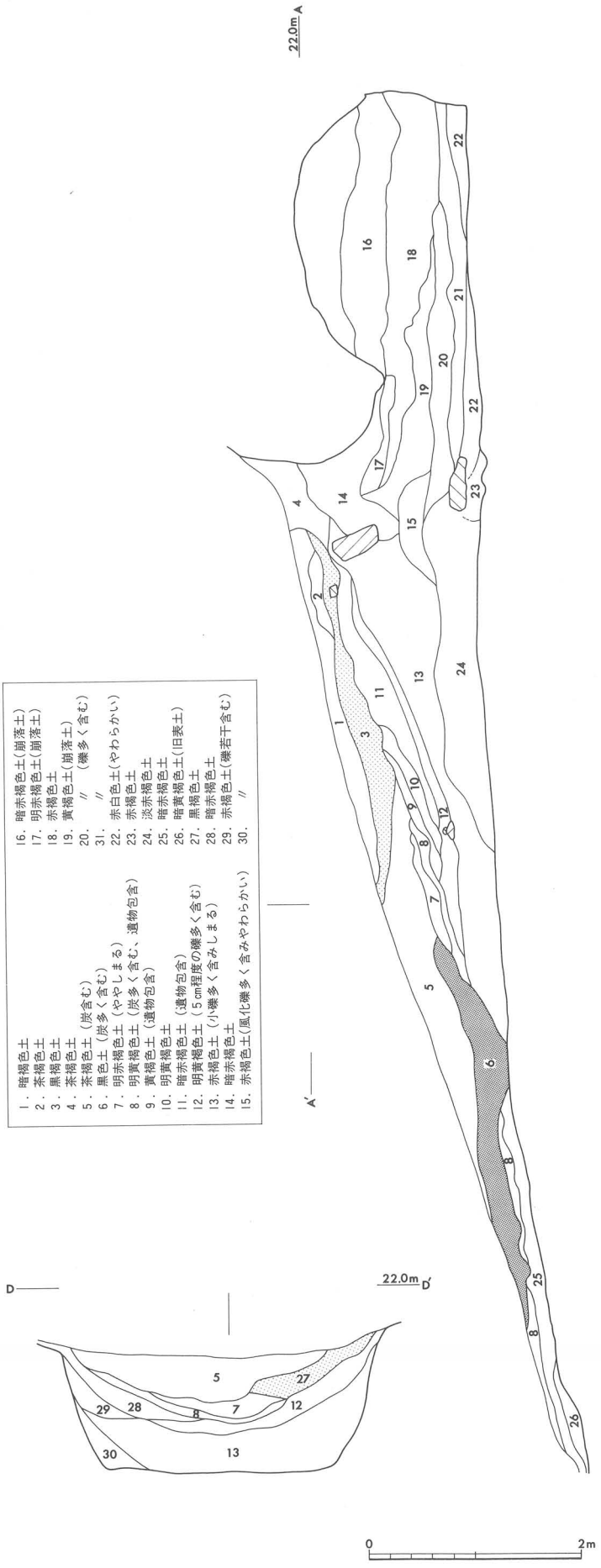
の立面図に見られる下位の石材群)、13層は2次葬の埋土で、14層脇の石がこの際の閉塞石であろう。発掘時には既に羨道部の天井は崩落していたが、このことから2次葬時点でまだ羨道天井部は落盤していなかったものと考えられる。7～12層の性格は不明だが、3層・5層下面で再度侵入を受けたと考えられ、その際の掻き出し土である5層によって6層の黒色土が形成されたものと考えられる。第40図立面図に見られる上位の石材は土層の3層下面に位置し、最終埋葬時の閉塞かもしくは3次葬の閉塞石を除去した時のものと考えられる。

以上のことから最低4回の埋葬行為が行われたことが推定される。

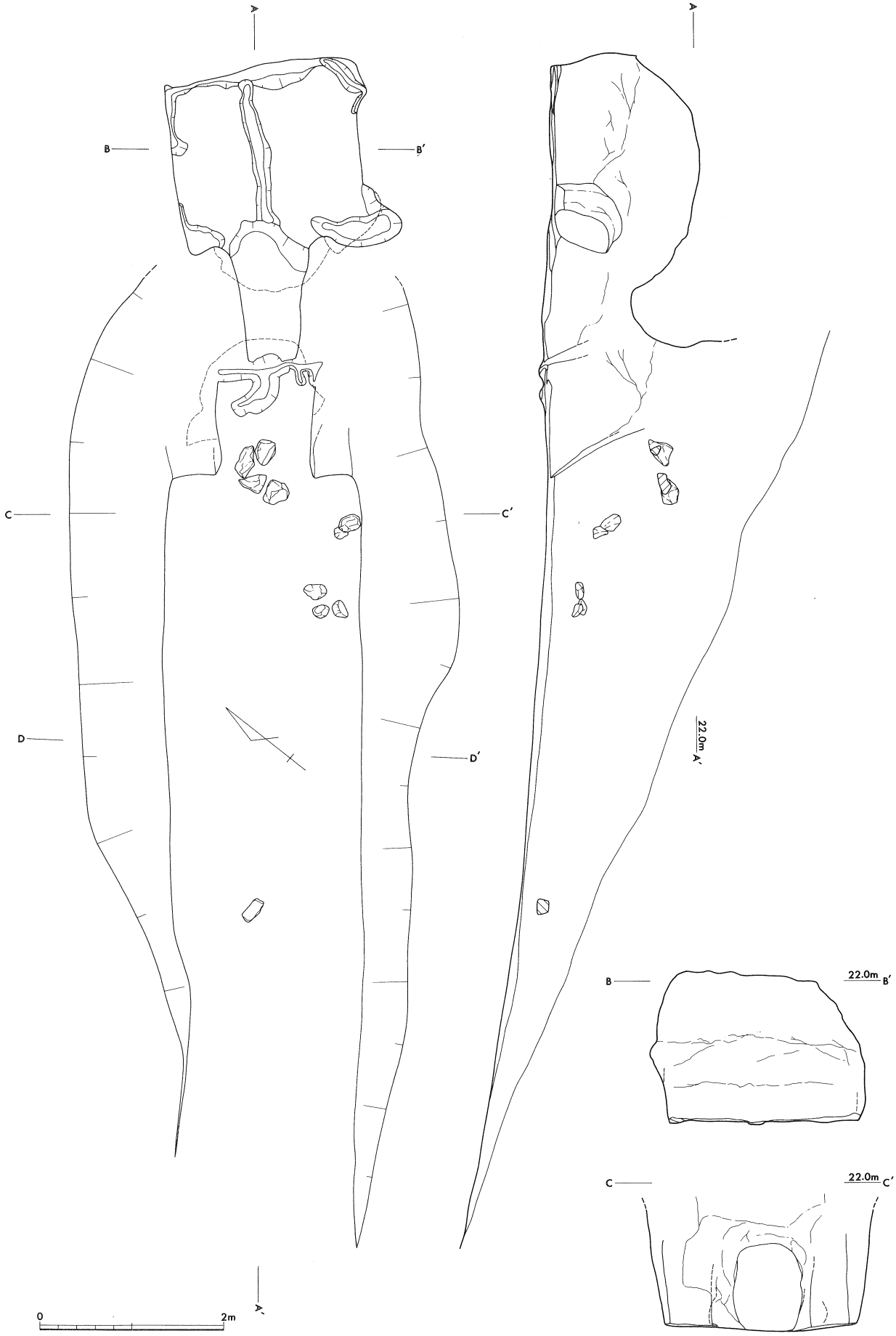
なお、羨道部から玄室内にかけての土砂の多くは天井部の崩落土あるいはそれらが風化したものである。

閉塞状況（第41図）　追葬時の閉塞状況の詳細は明らかでないが、堆積状況から追葬を重ねる度に侵入面のレベルが上がり、閉塞もその侵入箇所を石材で塞ぐという簡単なものであったと考えられる（第39･40図)。

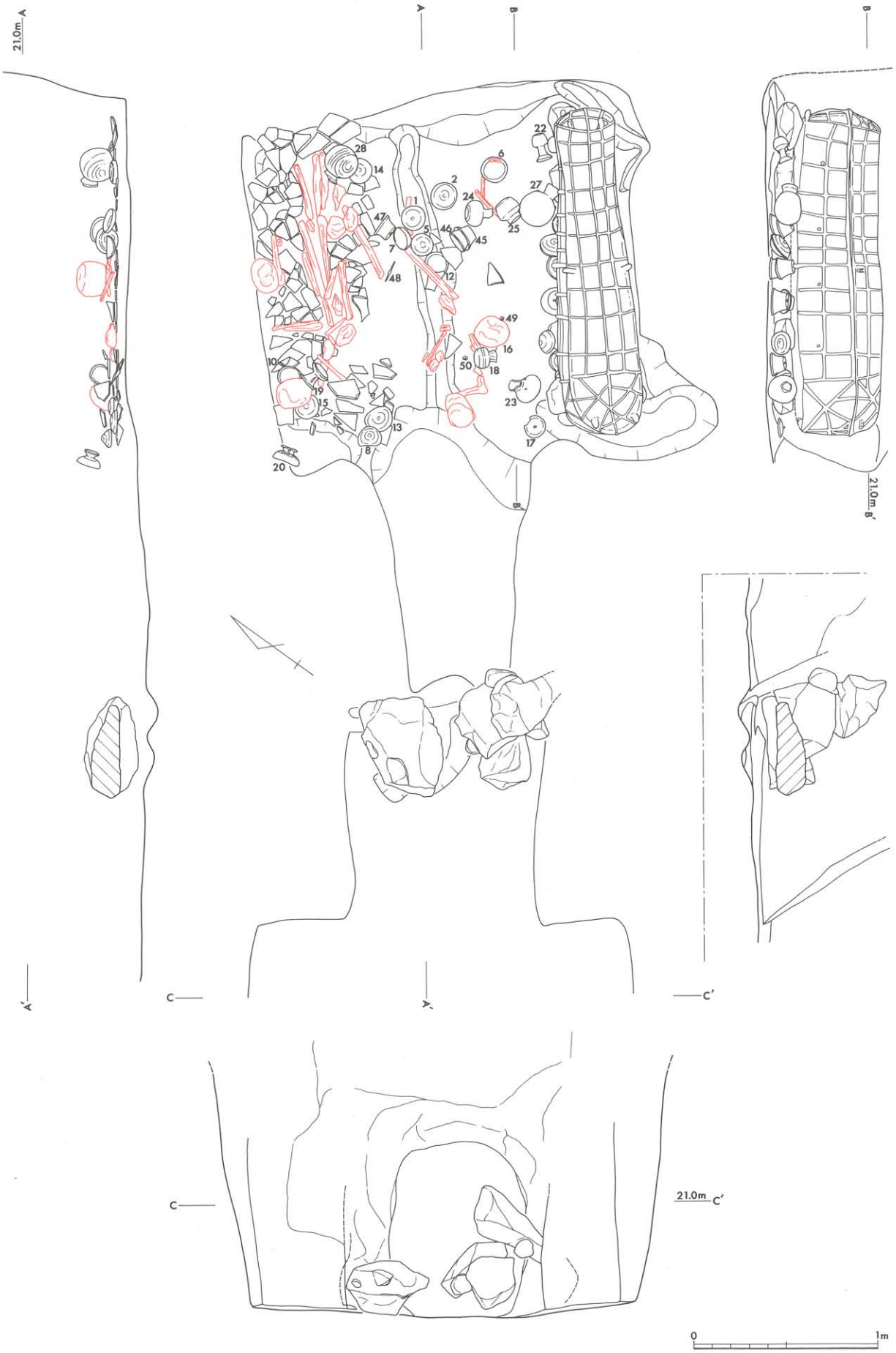
初葬時の閉塞は大きめの割石を使用し、閉塞部床面の浅い溝の部分に不規則に積み上げた状態で検出した。検出時点で南側半分は基底部だけが残存し、上部の石材は2次葬以降の侵入時



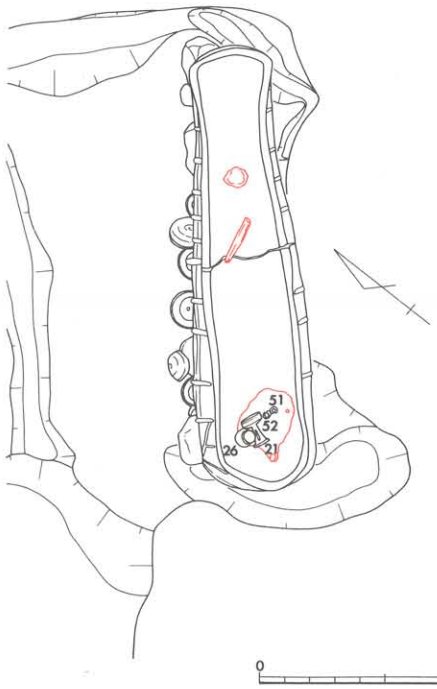
第39図　1号横穴墓実測図(1)（S＝1／60）



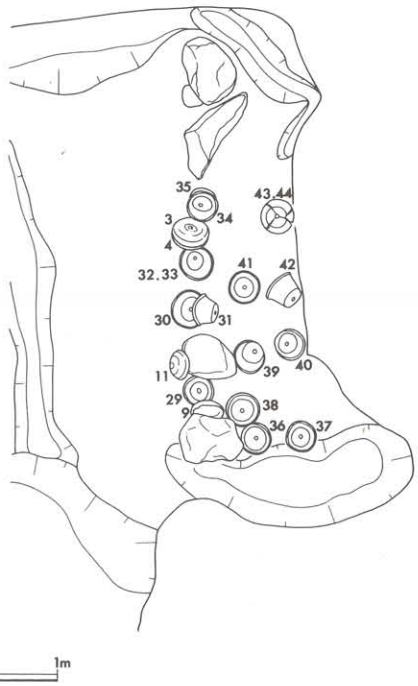
第40図　1号横穴墓実測図(2)（S＝1／60）



第41図　１号横穴墓玄室内遺物出土状況・閉塞石実測図（Ｓ＝１／30）



第42図　1号横穴墓陶棺内遺物出土状況（S＝1／30）



第43図　1号横穴墓陶棺除去後遺物出土状況（S＝1／30）

に除去されたものと推定される。

玄室内遺物出土状況（第41図）　玄室の左側は須恵器床で、床面上で須恵器・人骨を多数検出している。人骨は頭骨が2体分で、10・15は頭骨の下に置かれており土器枕として使用したものと考えられる。8・13も出土状況から枕として使用された可能性が考えられる。中央部でも頭骨周辺から耳環（49・50）を検出しており1体は埋葬されていたものと推定される。玄室右側には須恵質陶棺が頭部を前壁側に向けて安置されていた。

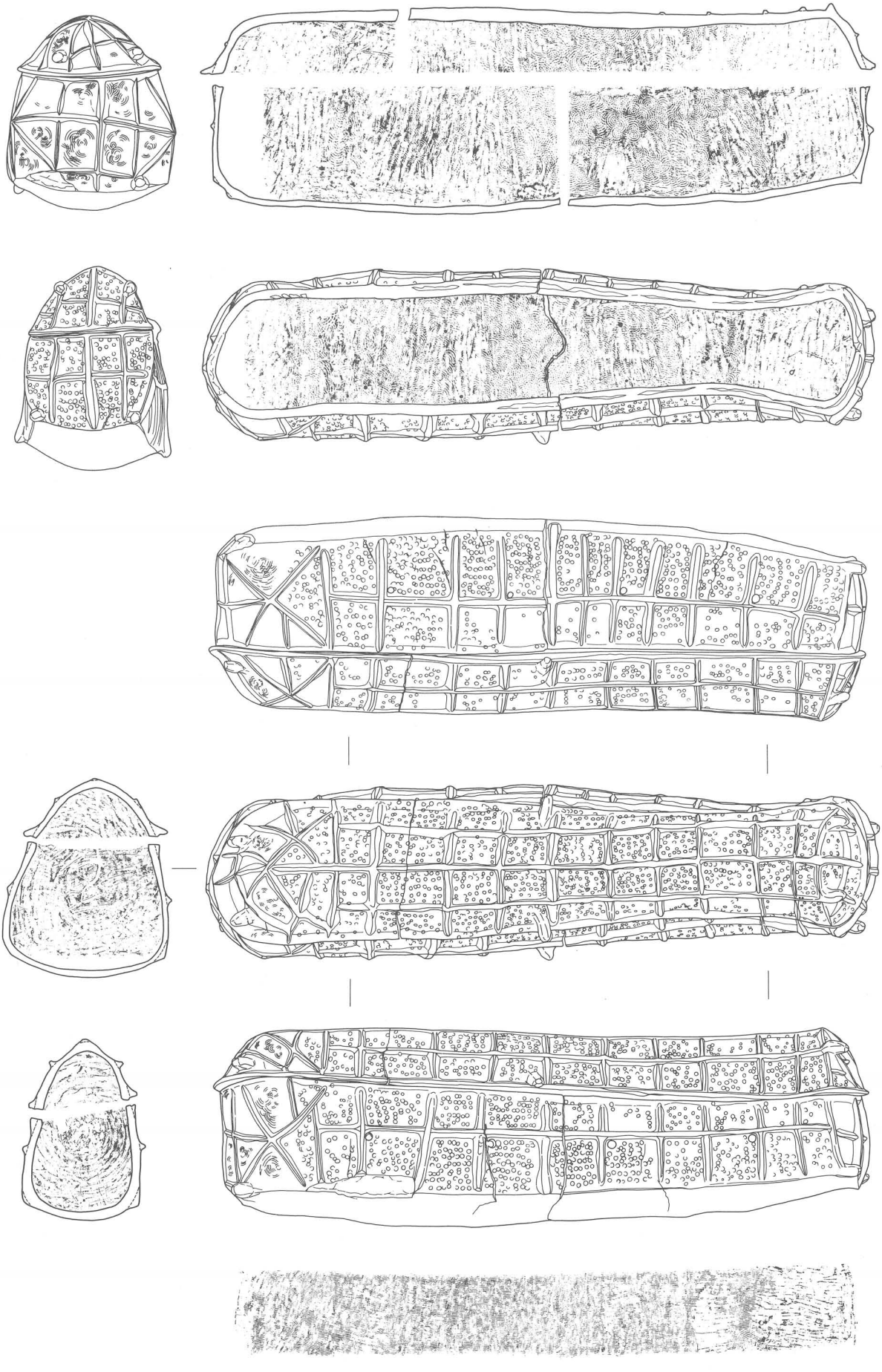
遺物は基本的にほとんど床直上で出土しているが、玄室中央部の1・2・5・6・7・12・45～47はやや浮いた状態で出土しており、45・46・47は本来陶棺の下に置かれていたものと推定される。また、須恵器床上でも20・28がやや浮いた状態で出土している。床面直上の遺物も横転しているものが多く原位置を保っているものは少ないものと考えられる。

出土状況から、遺体は開口方向に頭を向けて埋葬されていることが分かる。

陶棺内遺物出土状況（第42図）　陶棺は蓋を除去すると棺内一杯に土砂が入っており、堆積状況からは自然に流入したものと考えられる。土砂を除去すると頭部で耳環（51・52）とミニチュア直口壷（26）、長脚無蓋高坏（21）を検出した。棺の頭部と中央からは遺存状態のきわめて悪い人骨も出土している。

陶棺除去後遺物出土状況（第43図）　陶棺を除去すると、石と須恵器が整然と並んだ状態で検出された。陶棺自体は脚部を持たないもので、これらは棺台として使用されたものであろう。須恵器は植木鉢状のもので、平面的には縦3列に4個ずつ配置され、玄室右壁側を1列目とすると3列目の頭部と脚部にだけ20～30㎝の扁平な石が置かれていることが特徴的である。43・44、30・31、32・33と34・35は2個ずつ重ね置きしていることも注意される。陶棺底部は横断面U字形を呈し、玄室右壁と高く重ねた3列目で棺が転倒するのを支えたものと推定される。

なお、玄室中央部に同じ植木鉢状の須恵器（45・46・47）が転倒した状態で出土している（第41図）が、本来陶棺の下にあったものが掻き出されたものであろう。3・4は蓋坏のセットで、11・9は坏蓋である。



第44図　1号横穴墓出土陶棺実測図（S＝1／15）

陶棺（第44図）　いわゆる須恵質亀甲形陶棺と呼ばれるものである。玄室右側に頭部を手前側に向けた状態で検出した。蓋は長さ175.0cm、最大幅39.0cm、最小幅28.0cm、高さは高いところで17.5cmを測る。検出した時既に頭端部から52cm付近で半分に割れており、横断面形は逆Ｖ字もしくは逆Ｕ字状を呈す。

身は長さ179.0cm、最大幅45.5cm、最小幅34.5cm、高いところで28.5cmを測る。蓋と同様に中央のところで半分に割れている。横断面形はＵ字形で、底部はまるみを持っているため平坦面に置くと非常に不安定なものである。

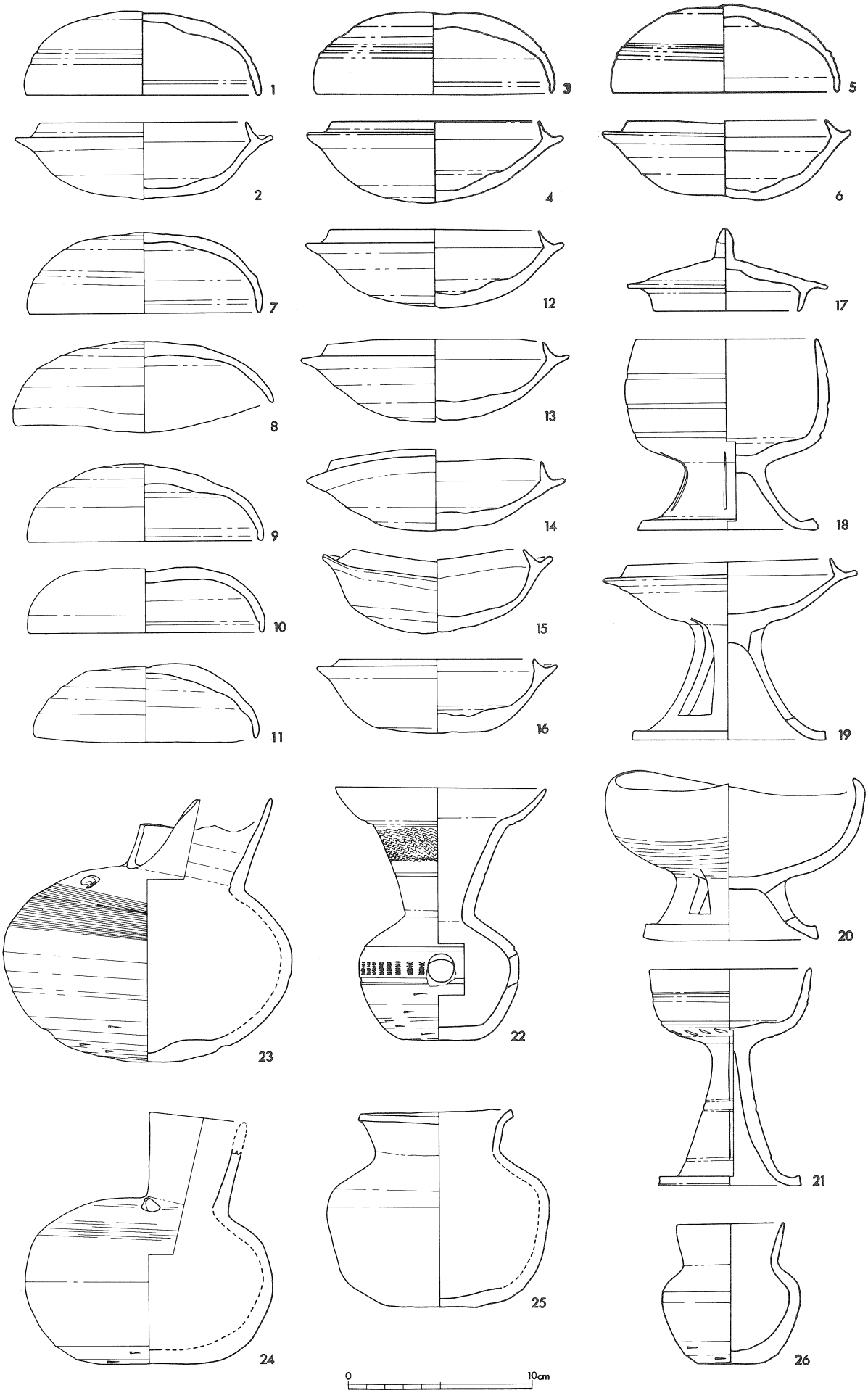
底部を除いて蓋・身ともに縦横にタガ状の突帯を格子状に貼り廻らすが、頭部においては特殊な交差をする。外面には頭部と棺底部を除く全面に直径１cm程度の竹管文を施し、一部に格子タタキメと青海波の当て具痕が認められる。身の両側面には直径2.3cmの円形透し孔を各４つずつ外面から穿ち、底部にも直径0.5～1.0cmと若干小さめの孔が外面から９つ穿たれている。また、蓋・身の中央部、脚部にそれぞれ一対の角状の突起を有す。頭部には剥離して片側しか残存していないが、本来は対になっていたものと推定される。頭部の３つの突起には縄目の圧痕が観察され、焼成前の段階で蓋と身を縛っていたことが考えられる。なお、身の中央部の両突起は突帯を下方に引き延ばして表現したものである。

蓋・身の内面には粘土紐を長軸方向に輪積みした後叩き締め、更にナデを施した痕跡が認められ、脚部小口には粘土盤で封じた痕跡が観察できる。また、蓋と身の合わせ部には本体と横突帯との接合面が観察され、その部位に鋭利な工具で丁寧な削りを施しているのが見受けられる。これらの特徴を整理すると、製作方法を以下のように想定できる。

１．頭部を底側に粘土紐を輪積み整形し、タタキとナデを施しながら円筒棺状に積み上げる。
２．脚部小口を粘土盤で塞いだ後、底部を除く全面に突帯を貼り付け、竹管文を施す。この段階で全体の形を整える。
３．ある程度乾燥した段階で筒状の棺を蓋と身に分割し、切り離し面には丁寧な削りを施す。
４．底部と側面に孔を穿ち、乾き歪を同じくするために頭部突起に縄を掛けて蓋と身を固定する。

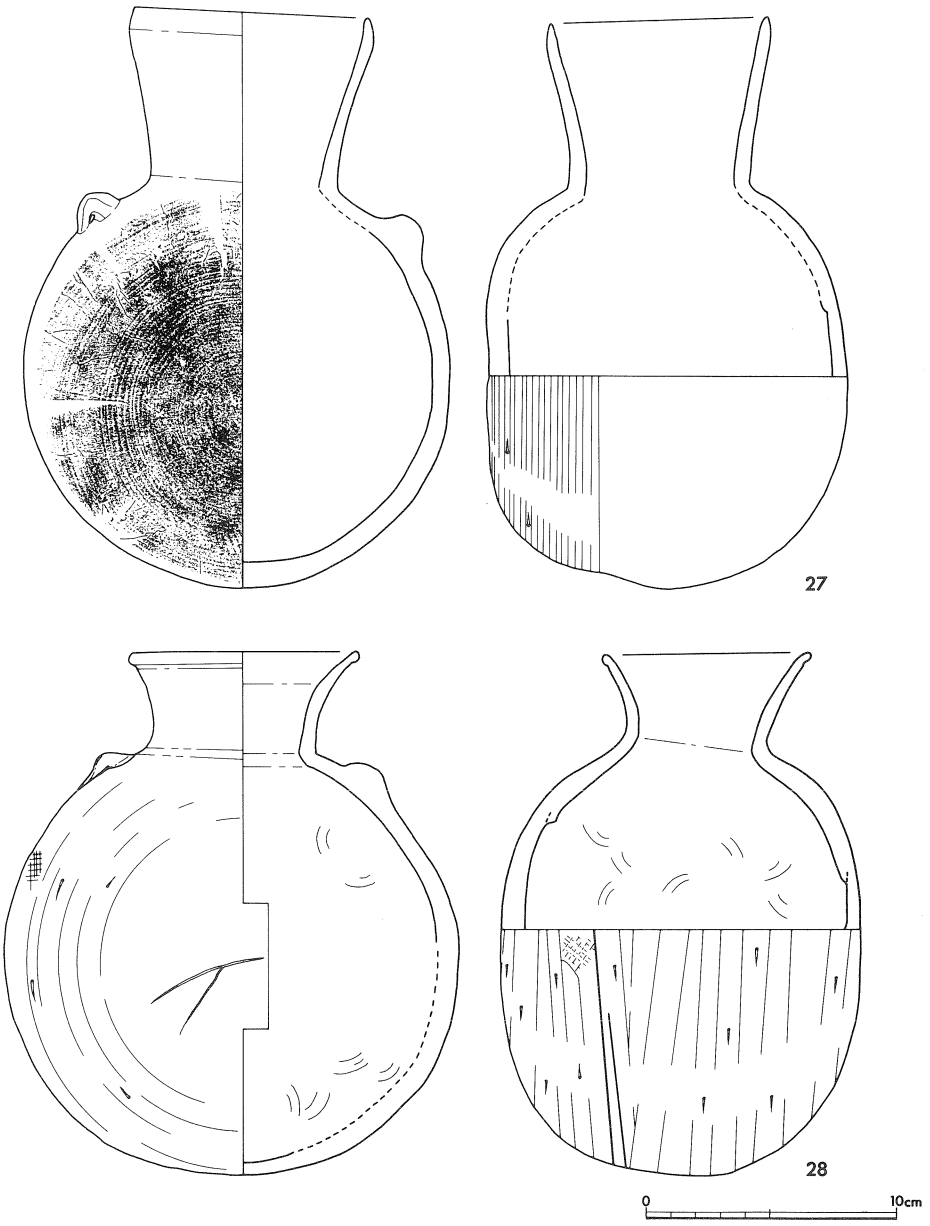
玄室内出土遺物（第45図～48図）

玄室内から出土した遺物は陶棺内出土も含めて計52点で、土器の器種構成は蓋坏（１～16）、脚付椀（18）、椀蓋（17）、有蓋高坏（19）、低脚無蓋高坏（20）、長脚無蓋高坏（21）、瑞（22）、平瓶（23・24）、提瓶（27・28）、直口壷（25・26）、焼台形土器（29～47）などである。１～６は胎土と口径から製作時のセットと考えられる。１は口径12.9cmを測り、天井部外面のヘラ削りは不明瞭で、削りのちナデを施すものか。肩部に２条の沈線で稜をつくる。口縁部内面には浅いながらも１条の沈線を廻らす。２は口径11.3cm、受部径14.2cmを測る。３・４は陶棺の下からセットで出土したものである。３は口径12.9cmを測り天井部外面の調整は１と同様である。肩部に沈線と強い回転ナデにより稜を作るもので、口縁内面には沈線を廻らす。４は口径11.4cm、受部径14.1cmを測る。５は口径12.3cmを測り、天井部外面はヘラ削りのちナデか。肩部に沈線とナデにより稜を廻らす。口縁端部は強いナデによりわずかに段をなす。６は口径10.9cm、受部径13.7cmを測る。７～10は概して口径12.5cmを測る。肩部に稜を作り出すものは７だけで、焼き歪の著しい８を除くと全て口縁部内面に沈線もしくは段を有し、天井部外面にはヘラ切りのちナデを施すのみである。11は口径12.2cmと小型化したもので、天井外面はヘラ切りのち全面に不定方向のナデを施す。12・13は同様



第45図　1号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)（S＝1／3）

の作りのもので、それぞれ口径11.4cm、11.9cmを測る。返りの端部は鋭く納め、底部外面はヘラ切り後ナデを施すのみである。14・15は焼き歪が著しく、15はやや器高が高く底部との境が明瞭なタイプのものである。16の器形は15に類似し、口径10.7cmを測る。17と18はセットで使用されたものと考えられる。17は返りが高く、乳頭状つまみを持つ。



第46図　1号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)（S＝1／3）

天井部のつまみ周辺に回転ヘラ削りを施した後全面ナデる。18は口径10.0cm、器高10.5cm、脚口径10.0cmを測る。胴部には3条の沈線を廻らせ、脚部には切れ目状透しを5方に刻む。脚端部は内傾し、明瞭な面を作る。19は口径11.2cm、器高9.9cm、脚口径10.6cmを測る。三角形2方透しで、脚端部は直立して面を作る。20は歪みが激しいが、口径は概ね14cm内外にはなろうか。器高約9cm、脚口径9.5cmを測る。坏底部にかけてカキ目を施す。脚部には三角形3方透しを穿ち、端部は内傾気味に面をなす。21は陶棺内出土で口径8.9cm、器高11.8cm、脚口径7.8cmを測る。底部にはクシ状工具による連続刺突が観察される。胴部中央に2条、刺突文帯の上下に1状ずつ沈線を廻らす。脚部には切れ目状透しを二段3方に刻み、筒部に沈線3条を施す。端部はやや内湾して立ち上がる。22は口径11.5cm、器高13.8cmを測る。頸部に波状文、胴部にクシ状工具で刺突する。頸部のつけ根に浅い凹線が廻る。23・24は胴部上半にカキ目を施し、ボタン状の把手を2個有す。23は最大幅15.9cmを測り、底部は丸底を呈す。24は最大幅13.6cmを測り、底部は平底を呈す。25は口径8.3cmを測り、口縁部は外反

しながらやや把厚し、内傾する面を作る。底部はヘラ切り後ナデを施すのみである。26は陶棺内出土でミニチュア品である。27は口径9.3cm、器高23.0cmを測り、口縁端部は内傾して甕状に納める。背面に回転ヘラ削り後胴部全面にカキ目を施し、腹面は強いナデでカキ目を消そうとした痕跡が見られる。頸部付近に環状把手を持つ。28は口径9.4cm、器高20.8cmを測り、口縁端部は外反してまるく納める。胴部は叩いた後カキ目を施し、更に全面にヘラ削りを行う。背面にはY状のヘラ記号を持ち、把手は環状だが貫通しないタイプのものである。

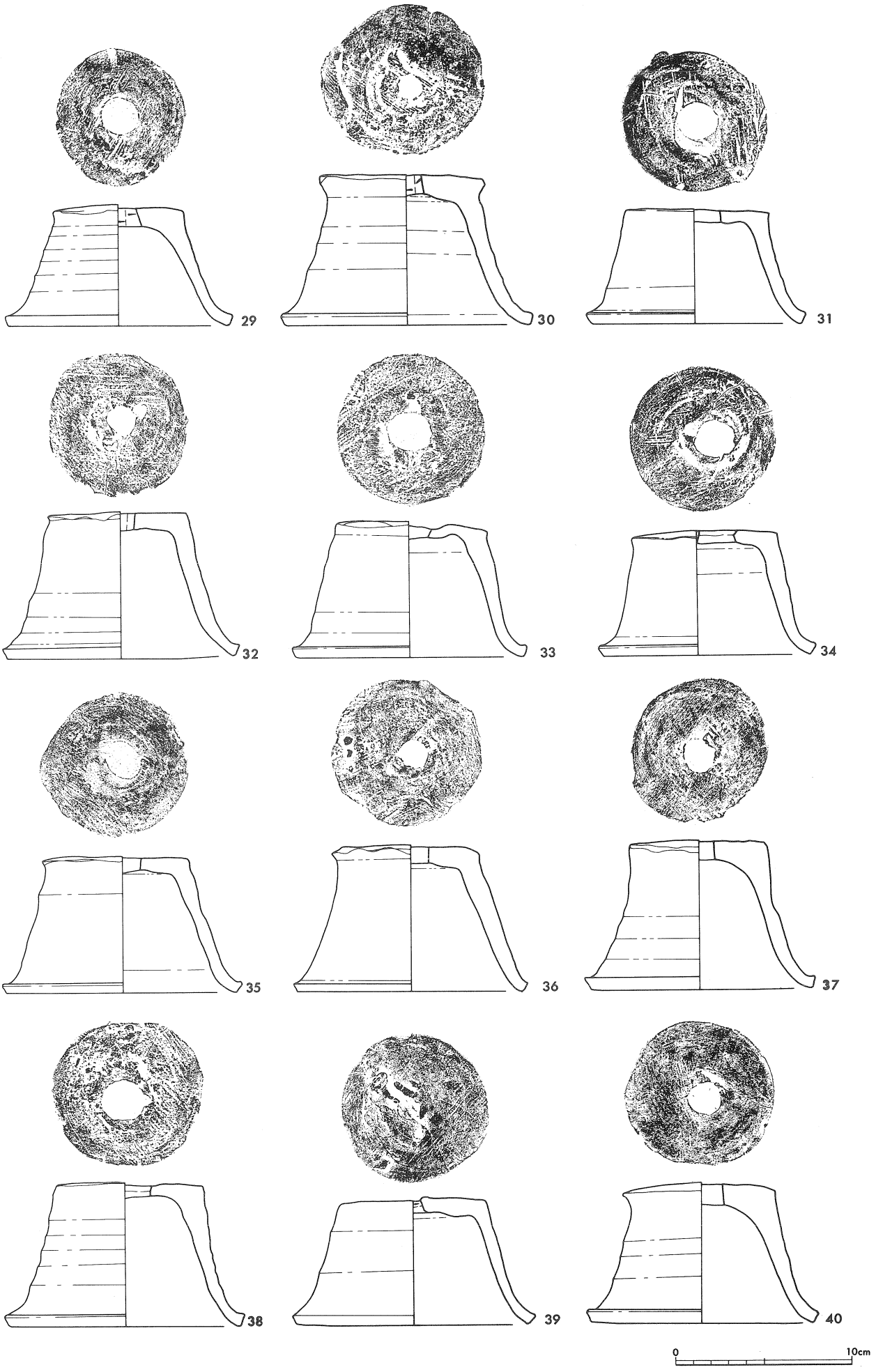
29～47は陶棺台として使用されたもので、植木鉢を逆さにしたような立面截頭円錐形を呈す。一見焼台のようにも見えるもので、ここでは焼台形土器と呼称しておく。天井部の円孔はヘラ状工具によるもので、穿孔方向は様々である。直径1cm前後、1.5～2.0cm、2.5cm前後のものと3つに大別でき工人差が認められる。天井径と口径はばらつきが見られるものの概ね8.0cm、13.0cmを測る。天井部はヘラ切り後ハケ状工具によるナデが見られる。

筆者が知る限りでは、こうした類例は県内では松江市北小原横穴墓出土[1]の1点と安来市高畑窯跡表採品[2]のみである。前者は天井部径10.5cm、口径24.4cm、器高15.4cmを測り、天井部には長方形透し孔がある。胴上部側面には8.0mmの円孔が通い、中央部から下部にかけて凹線が3本施される。報文では器台形土器として紹介されているものである。後者は実見していないが、実測図では1号横穴墓出土の土器とほぼ同規模の植木鉢状のもので、胴部側面に円形透しを開け、凹線を施すものである。但し、前者は大型で調整などにも相違が見られ、後者の場合は時期が古く直接関連づけることは困難である。こうした須恵器がどういう用途で使用されたのかは不明だが、特殊なものであったことは間違いない。

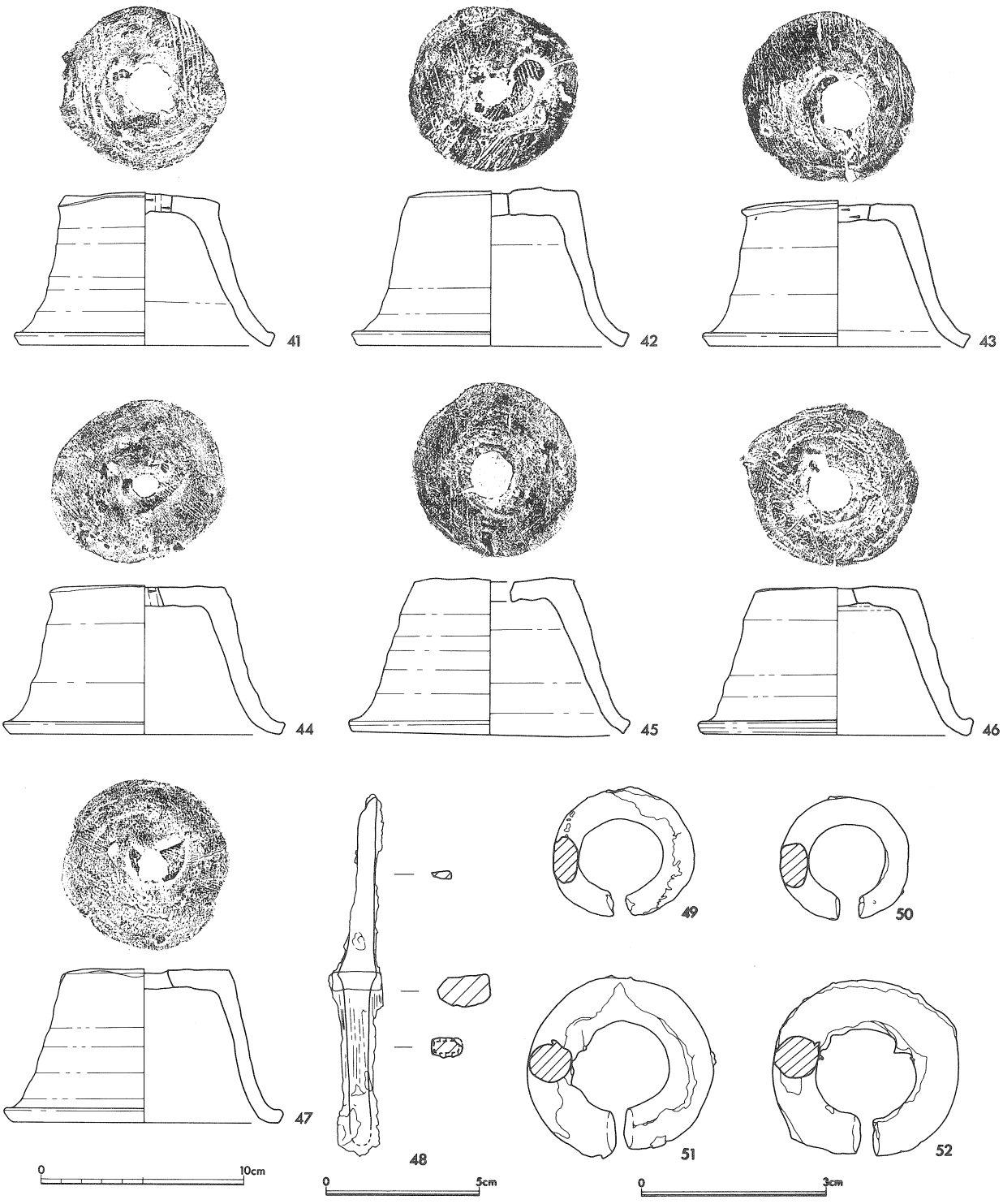
48は刀子で、全長で11.8cmほど残存する。刀身は5.7cmで刃がかなり幅狭になっているが、元幅は1．2cmを測る。両関タイプで、鎺金具が観察される。茎には木質が付着する。49・50は耳環で、陶棺横の頭骨取上げの際に床面で検出したものである。錆化著しい。49は長径2.3cm、短径2.1cmで、50は長径2.1cm、短径2.0cmを測る。51・52も耳環で、陶棺頭部から検出したものである。錆化が著しく49・50に比して大型で、50は径3.0cm、52は長径3.0cm、短径2.8cmを測る。

前庭部出土遺物（第49図）　53は坏蓋で復元口径12.6cm、器高3.9cmを測る。焼成不良でもろい。天井部外面はヘラ削りを施さない。54は坏身で復元口径9.9cm、器高3.9cmを測る。底部内面に赤色顔料が付着する。55は坏身で復元口径11.2cm、器高3.8cmを測り、返りは低い。56は低脚無蓋高坏で、焼成不良でもろく脚部半分を欠損するが台形2方透しを有す。口径15.2cmを測り、坏部は浅く底部外面に回転ヘラ削りを施す。57も低脚無蓋高坏で、口径14.7cm、脚口径11.7cmを測る。焼成不良でもろい。坏部は浅く、脚部に台形2方透しを設けるが、透しは3方を意識した配置になっている。脚端部は内傾して面を作る。58は坏で復元底径7.6cmを測る。底部には回転糸切り痕が認められる。59は皿で口径12.6cmを測る。口縁部内面に切れ目状の浅い沈線が廻る。底部は回転糸切りである。

時期　玄室内出土遺物については、坏蓋は口径12.3～12.9cmを測り天井部に明瞭な削りが認められず、肩部に稜を作るものとないものが見られることなどから大谷編年[3]の出雲4期から5期にかけての所産と考えられる。その他の器種では甕（22）・提瓶（27・28）が4期、平瓶（23・24）が5期と考えられる。



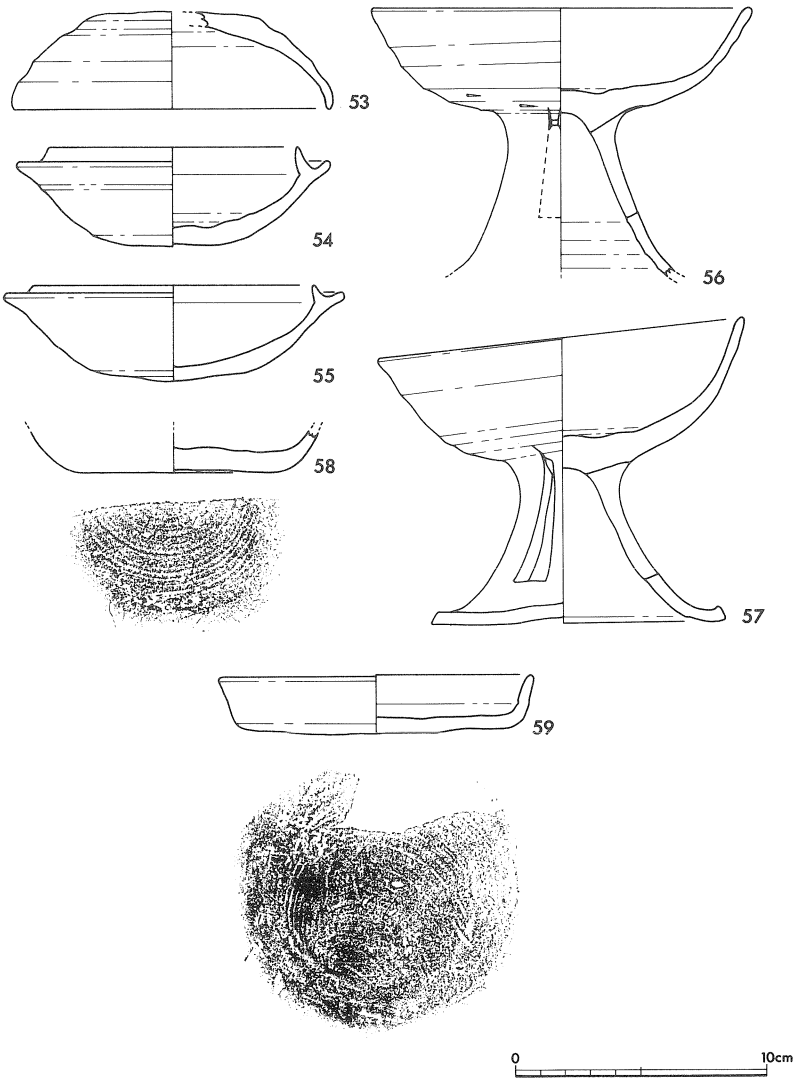
第47図　1号横穴墓玄室内出土遺物実測図(3)（S＝1／3）



第48図　1号横穴墓玄室内出土遺物実測図(4)（S＝1／3、48は1／2、49～52は1／1）

前庭部出土遺物も坏（58）・皿（59）を除けば5期の範疇で捉えることができる。

これらのことから1号横穴墓は出雲4期末段階に埋葬が開始され、5期の段階で墓としての機能を失うまでごく短期間営まれたと推定される。なお、玄室内の埋葬順序は遺物の位置が信頼性を欠くため正確な判断はできないが、陶棺が初葬でないことは玄室を拡張している点で明らかである。



第49図　1号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3）

2号横穴墓（第50図・51図）

1号横穴墓の北側18mに位置し、南向きに開口する。床面の標高は約23mで、上段の横穴墓では最東端となる。既に述べたように、玄室の4m上方には2号横穴墓を主体部とする4号墳が築かれている。

前庭部　奥幅約1.6m、前端幅約0.9m、奥行き約10.5mを測り、平面形は中間辺りから幅が狭くなるが広長なタイプといえる。床面は前端に向かって緩やかに傾斜する。

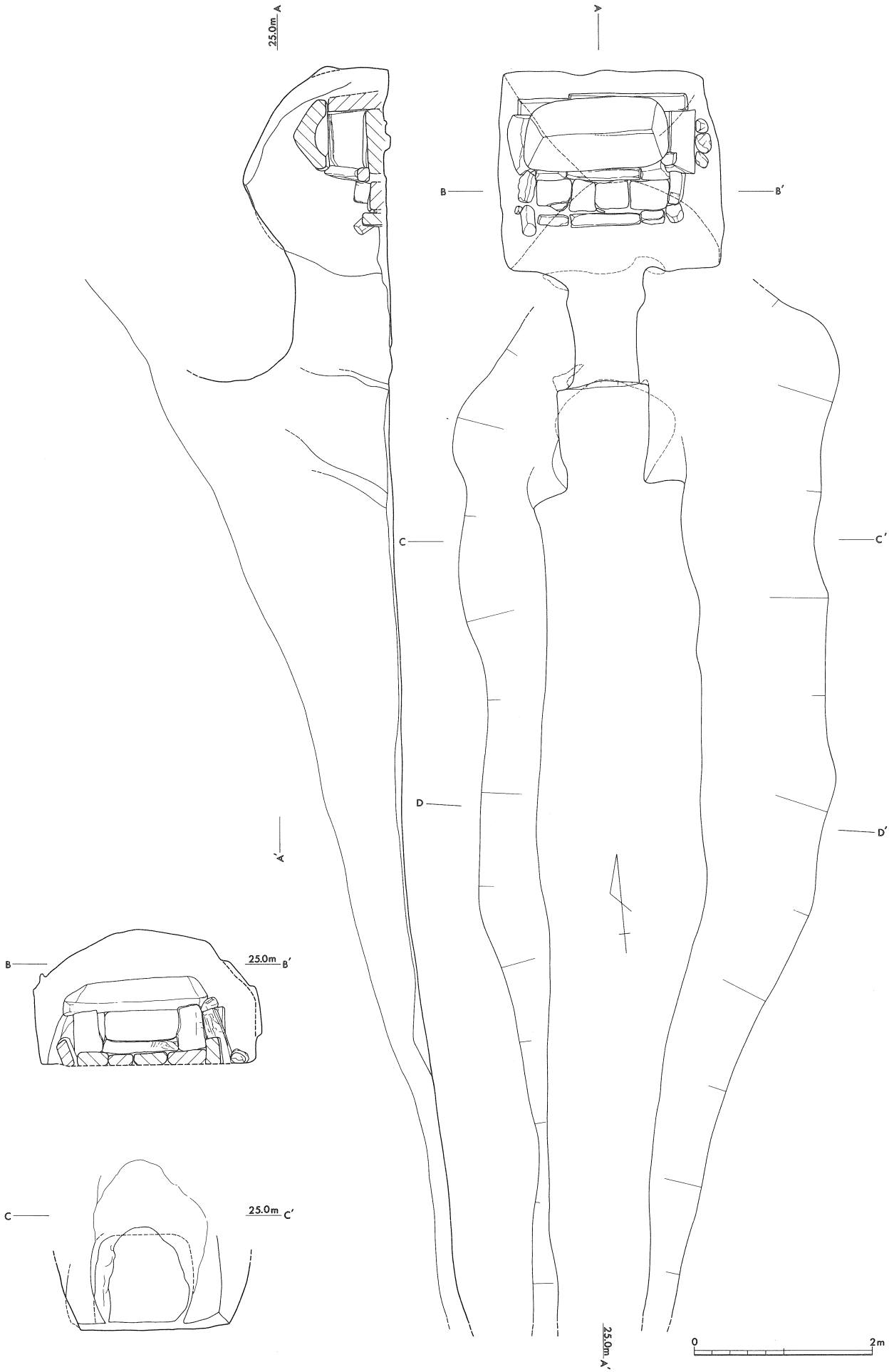
羨道部　平面は奥幅約1.0m、手前幅約0.85m、奥行き約1.1mを測り、わずかに奥側が開く形である。天井部は崩落しているため高さや断面形態は不明である。

玄門部　奥幅約0.8m、手前幅約0.7m、奥行き約1.3mを測り、平面的にはほとんど変化しない。天井部崩落のため高さ、断面形態ともに不明である。

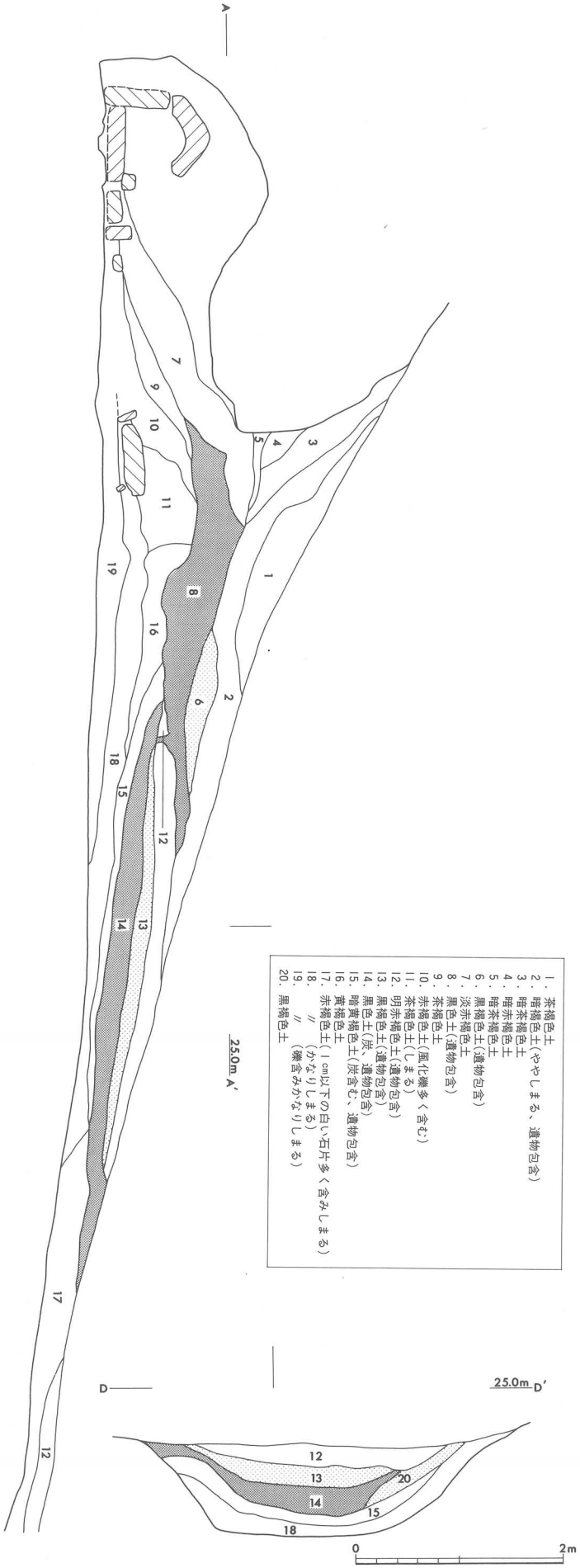
玄室　前庭部と主軸を同じくして作られる。規模は幅が奥壁側で約2.2m、前壁側約2.3m、奥行き約2.2mを測り、正方形プランを呈する。高さは約1.6mを測り、4隅の床面からは界線が立ち上がり、そのまま天井部の棟線とつながる。大棟は幅の無い線刻状のものである。軒線の加工はなく、玄室の形態は平入りのテント形である。壁の所々に獣のものと思われる爪跡が認められる。

堆積状況（第51図）　前庭部の土砂は埋土と考えられる赤褐色系、須恵器片を多量に包含する黒褐色系、茶褐色系の土に大別できる。黒褐色系の土砂は淡いもの、真っ黒なものが1単位で2回形成（6・8層、13・14層）されていることが観察された。こうした土層は、短期間にパックされることで形成されるとすると、それぞれの上面で埋土を施したかまたは掻き出し土の堆積が想定される。

19層は初葬時の埋土である。詳細は後述するが、前庭部遺物出土状況・閉塞状況（第52図）から



第50図　2号横穴墓実測図(1)（S＝1／60）



第51図　2号横穴墓実測図(2)（S＝1／60）

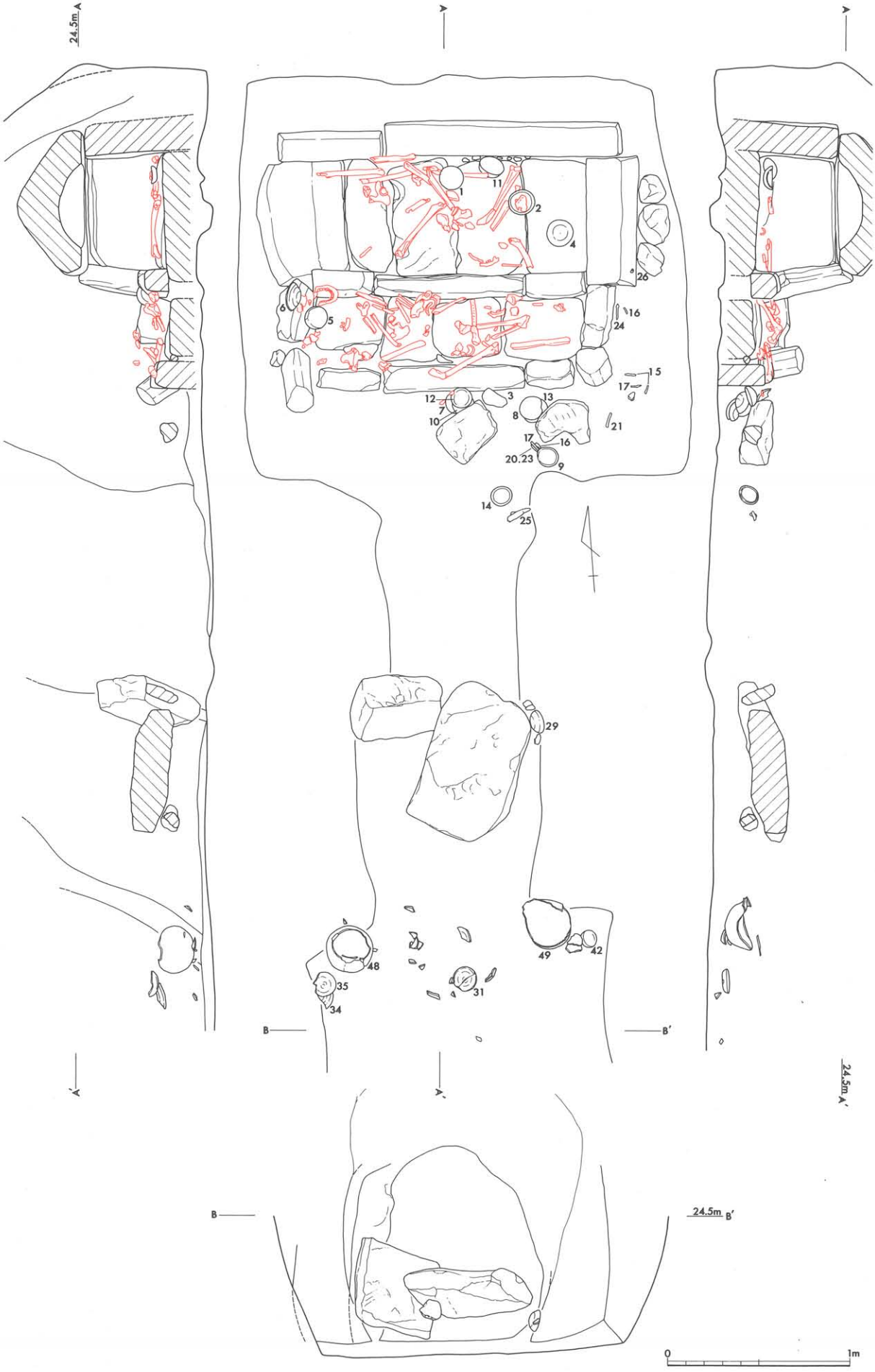
19層上面が2次葬面と推定される。18層は掻き出し土と考えられ、11・16層は埋土であろうか。12層は埋土若しくは掻き出し土と考えられることから、13層上面が3次葬侵入面と推定される。8層が12層を切っているとも考えられるが判然とせず、6・8層上面で再び侵入を行ったと推定される。こうした状況から2号横穴墓では3～4回の埋葬行為が行われたと想定される。

なお、17層はきれいな赤褐色土で、多量に白色の凝灰岩のチップを含んでいた。これは石棺或いは閉塞石の石材片と思われ、現地で仕上げ的な加工をしていたことが考えられる。

閉塞状況（第52図）　閉塞石は凝灰岩製で、板状に加工した切り石を使用している。石の所々に幅3㎝程度のノミ痕が観察された。

閉塞は2枚を並べ立てて行ったものだが、検出時には既に右側の石は倒れて19層上面に乗った状況で出土した。左側の石はほぼ床面直上で原位置を留めていることから初葬時の閉塞と考えられる。前述したように追葬の際に右側の石だけを引き倒して侵入したものと推定される。

遺物出土状況（第52図）　遺物は前庭部奥端部と閉塞部、玄室内からまとまって出土している。前庭部では左右両側に1個体ずつ土師器甕（48・49）が据え置かれ、その周辺から須恵器



第52図　２号横穴墓遺物出土状況・閉塞石実測図（Ｓ＝１／30）

蓋坏（31・34・35）や脚付き椀（42）を検出している。これらの遺物は同一面上にあり、土層との関連で見ると19層上面に位置していることが分かる。このことからこの一括遺物が２次葬に伴うもので、何らかの葬送儀礼を行っていたことを示すものと言えよう。

閉塞部では坏蓋（29）を壁に立てかけた状態で１点検出した。

玄室内からは棺内、敷石上のほか床面からやや浮いた位置で人骨とともに多数検出している。棺内では蓋坏が各２点ずつ見つかっているが、人骨の散乱状況から見ても分かるように原位置を保っているとは言えない状態である。一方、敷石の方は蓋坏１セット（５・６）が下顎骨付近の小口石に立てるように出土しており、土器枕として使用していた痕跡が看て取れる。敷石の手前にはかなり風化した板状の石材が２つあり、その周辺に浮いた状態で蓋坏のほか鉄鏃も出土している。また、石棺の右側小口石付近からは水晶製勾玉を１点だけ検出している。

出土状態は総じて残りが悪く、原位置を留めるものは極めて少ない。これは人骨や遺物が追葬時に動かされことも考えられるが、動物が撹乱したことも要因の１つと思われる。

石棺（第53図）　玄室奥壁に平行して石棺が１基置かれていた。組合式の横口式家形石棺で、前面に敷石と所謂「灯明台石」を付設する。石材は白色の凝灰岩製の切り石を用いている。石棺に使用される凝灰岩は、安来市の「荒島石」が知られているが本石材はそれとは異なった印象を受ける。

石棺本体の構成は奥壁大小２枚、両側壁と蓋石は各１枚ずつで、床石には５枚の石材を用いている。石棺の床石と敷石の間には幅10cmほどの溝状の隙間があり、そこに蓋をする形で仕障石と袖石を設けている。奥壁は大きい方で横幅約130cm、高さ約60cm、厚さ約18cmを測り、両側壁を挟み込むように内傾して立ててあった。玄室奥壁との間には特に石塊を置くといった所作は見られない。

両側壁はほぼ同規模で横幅約70cm、高さ約65cm、厚さ約20cmを測る。上端幅が短く立面形は台形を呈す。内側に幅３cm前後のノミ痕がよく残り抉り込みなどは見られないが、外側のコーナーには面取りを施している。両側壁とも内傾して立てられ、右側壁の外側には小石塊が３個置かれていた。右側は玄室壁との隙間が大きく内側に倒れ込むのを防ぐためと考えられる。

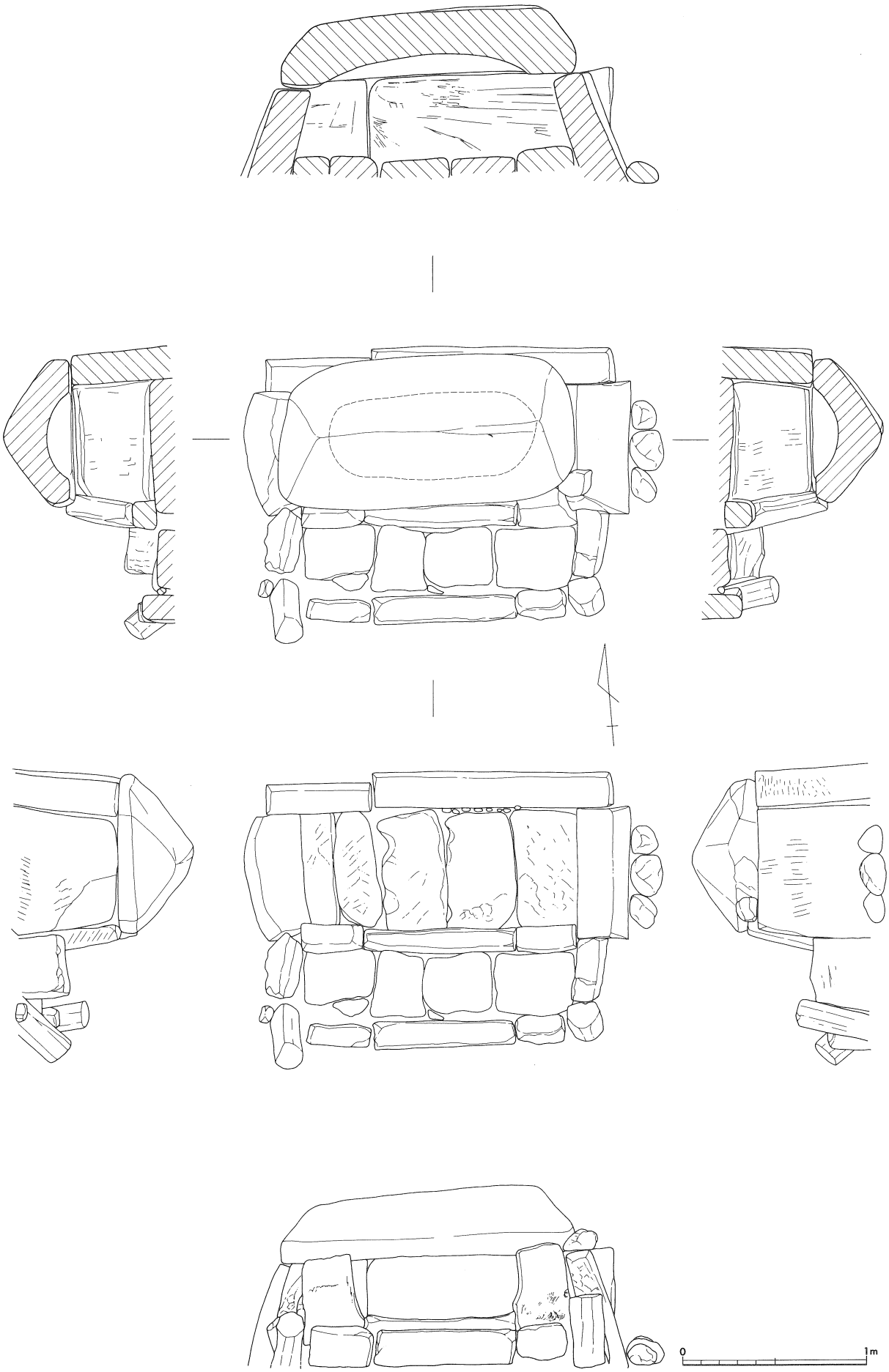
蓋石は長さ約160cm、右側幅約75cm、左側幅約65cm、高さ約30cm前後を測り、平面隅丸長方形を呈す。外面四隅からはだれた棟線が立上り、大棟は右半分だけが幅５cmほどの面を作る。内面には横断・縦断面形弧状の抉り込みが認められる。抉り込みは平面形隅丸長方形をなす。

床石は概して長さ65cm、幅35～40cmを測るが左側の２枚は幅20cmほどしかない。劣化が著しく、隙間が多いが、部分的に意図的に小石を充填した痕跡も認められる。

袖石の立面形はだれたＬ字状に加工され、加工部分に面取りが施される。蓋石との接面である上端辺は内側を斜めに面取りして蓋石を受ける。仕障は角柱状の石材で、上面の長辺には僅かながらも弧状に加工し、角は面取りする。袖石と仕障をあわせて立面で見ると、全体がＵ字形を意識して加工されていることが看取できる。

敷石部の構成は床石を４枚、側壁を各１枚、敷石仕障を３枚の石材で組み、手前の２隅即ち敷石仕障の両側に１対の「灯明台石」を設ける。敷石部は劣化が著しくノミ痕は判然としないが、床石以外の各パーツに面取りが施されているのが観察された。灯明台石は高さ約40cm、径約15cm前後を測り、側面は７～９の面取りを行い多角柱状に加工したものである。上端面には抉り込みはない。

石棺は内法で長さ約154cm、幅約65cmを測る。敷石は内法で長さ約145cm、幅約36cmを測る。



第53図　2号横穴墓出土石棺実測図（S＝1／30）

玄室内出土遺物（第54図）　玄室から出土した土器はすべて蓋坏である。この内、１～10は出土位置の信頼性を欠くものの、胎土や焼成から製作時のセットと考えられるものである。１は石棺内から出土したもので、口径12.9cm、器高4.3cmを測る。天井部外面には粗い回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号が刻まれる（第127図）。肩部には凹線とナデにより稜を作り出す。２も石棺内から出土したもので口径11.8cm、器高3.9cmを測り、底部外面周辺部に粗い回転ヘラ削りを施す。中心部の切り離し痕を板状工具で撫で付けている。３は敷石手前側から浮いた状況で検出したもので、口径12.5cm、器高4.2cmを測る。天井部外面の周辺部に粗い回転ヘラ削りを施す。口縁部が強く屈曲するのが特徴である。４は石棺内から出土したもので口径11.6cm、器高4.0cmを測る。底部外面の周辺部に回転ヘラ削りを施す。返りは緩やかに内傾し、端部が僅かに外反する。５は敷石左側壁の下顎骨付近で検出したもので、口径12.6cm、器高4.1cmを測る。天井部外面は外周ヘラ削りのちナデを施す。肩部は沈線と強いナデにより稜を作り出す。天井部にヘラ記号が認められる（第127図）。６も５と近い位置で出土したものでともに土器枕として使用していたものと考えられる。口径10.7cm、器高3.7cmを測る。底部外面の調整は明瞭でないが、外周ヘラ削り後ナデを施す。７～10、12～14は敷石仕障の手前で出土したものである。７は口径11.7cm、器高4.7cmを測り、肩部は不明瞭で天井部外面は切り離し後の板状工具による擦痕が認められる。８は口径10.5cm、器高3.9cmを測る。切り離しの際の砂粒の動きが確認される。９は口径11.2cm、器高4.5cmを測る。天井部外面はヘラ切り後丁寧なナデを施し、肩部ははっきりしない。10は口径10.0cm、器高4.0cmを測る。返りは低く、端部をまるく納める。11は石棺内で検出したもので口径12.9cm、器高4.6cmを測る。天井外面はヘラ切り後ナデを施すのみである。肩部には僅かながらアクセントが付く。12は口径10.9cm、器高4.1cmを測り、天井部外面はヘラ切り後ナデを施すのみである。肩部は強いナデにより僅かに稜をなす。13は口径10.3cm、器高3.9cmを測る。返りは低く、底部にヘラ削りは認められないがヘラ記号を刻む（第127図）。14は口径10.3cm、器高4.1cmを測る。返りは低く、底部外面もナデを施すのみである。

15～25は鉄器である。15～23は長頸式鏃で、24は刀子、25は直刀の残欠である。15は頸部から茎部の一部が遺存する。残存長12.3cmで、茎には木質が付着し関部は棘状を呈す。頸部の断面形態は方形で、茎は円形を呈す。16は鏃身部の下半から頸部にかけてが残存し、現長11.2cmを測る。平面形態は、鏃身部は片刃式で鏃身関部は撫関である。鏃身部断面形は両切刃造りで、茎断面形は方形を呈す。17は頸部から茎部にかけてが残存する。現存長12.6cmを測る。関部は棘状で、茎には木質が付着する。断面形態は頸部は方形、茎部は円形を呈す。18は鏃身部を欠損し、現長12.1cmを測る。関部は棘状で、茎に木質が残る。断面形態は頸部が方形で、茎部は円形を呈す。19は鏃身部を欠損し、茎も僅かに残すのみである。現長10.5cmを測り、関部は棘状で茎には木質の上から繊維を巻き付けた痕跡が認められる。断面形態は頸部が方形で、茎部は円形を呈す。20は頸部から茎部にかけての9.7cmほどが遺存する。関部は棘状で、茎には木質が残存する。断面形態は頸部が方形で、茎部は円形を呈す。21は鏃身部から頸部にかけて10.3cmほど残り、鏃身部の平面形態は片刃式で鏃身関部は角関である。錆化が著しく鏃身部の断面形は判然としないが、頸部は方形である。22は鏃身部を残すのみである。鏃身部は片刃式で断面形は平片刃造である。23は頸部で現長6.5cmを残す。

24は現存長10.3cmを測る。刀身は3.9cmを残し、刃側が大きく内湾し幅狭になっている。関部は元幅で1.4cmを測る。棟側だけの撫関で、レントゲン写真では鎺金具が観察される。茎には木質が

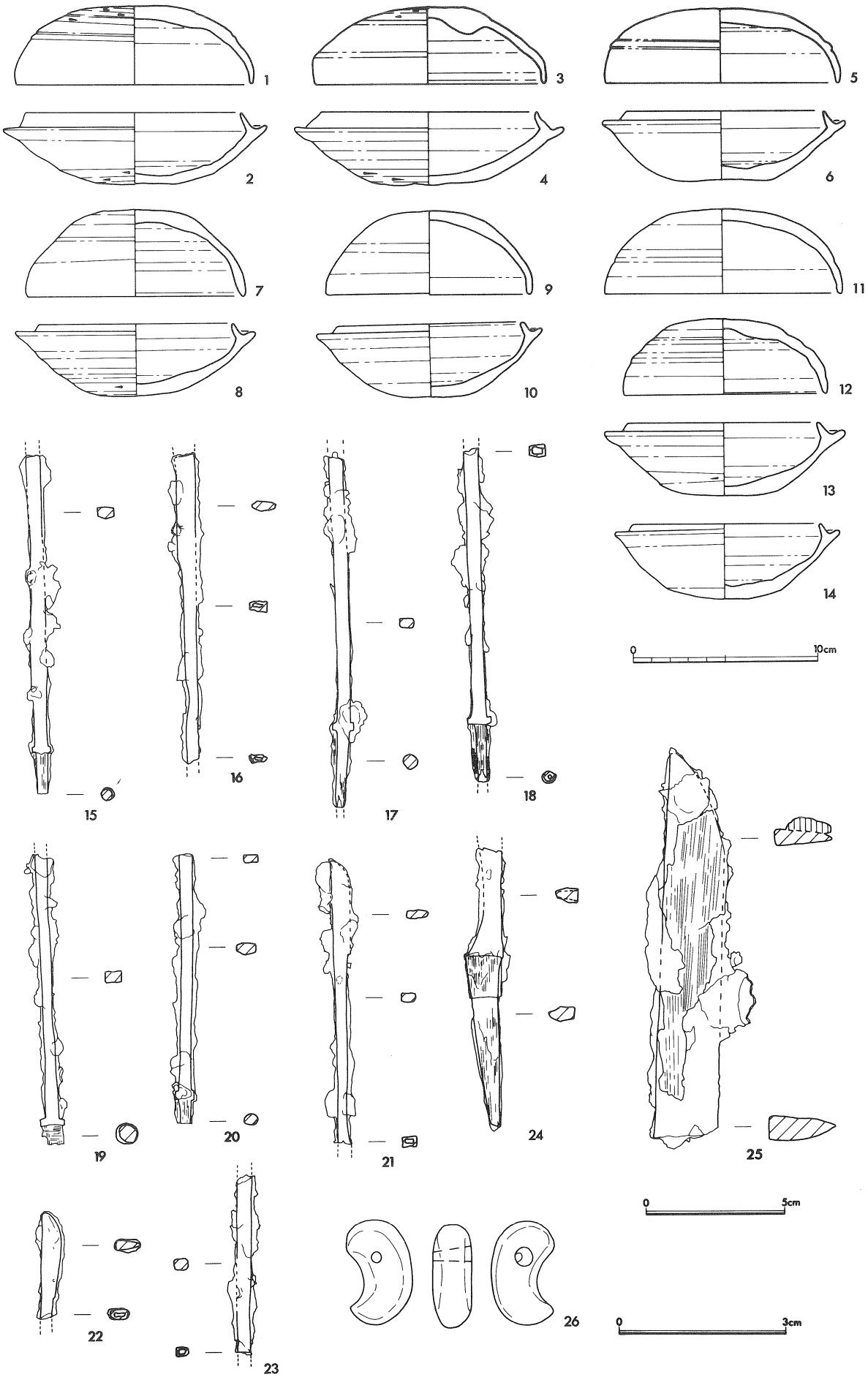
付着する。25は切先から14.5cmを残すのみである。切先はややまるみを持ち端部を鋭く納める。

26は水晶製勾玉で、石棺右側壁付近のやや浮いた位置で１点検出した。長さ1.9cm、最大幅1.1cm、重さ1.86ｇを測る。片面から穿孔し、研磨面はあまり見られない。

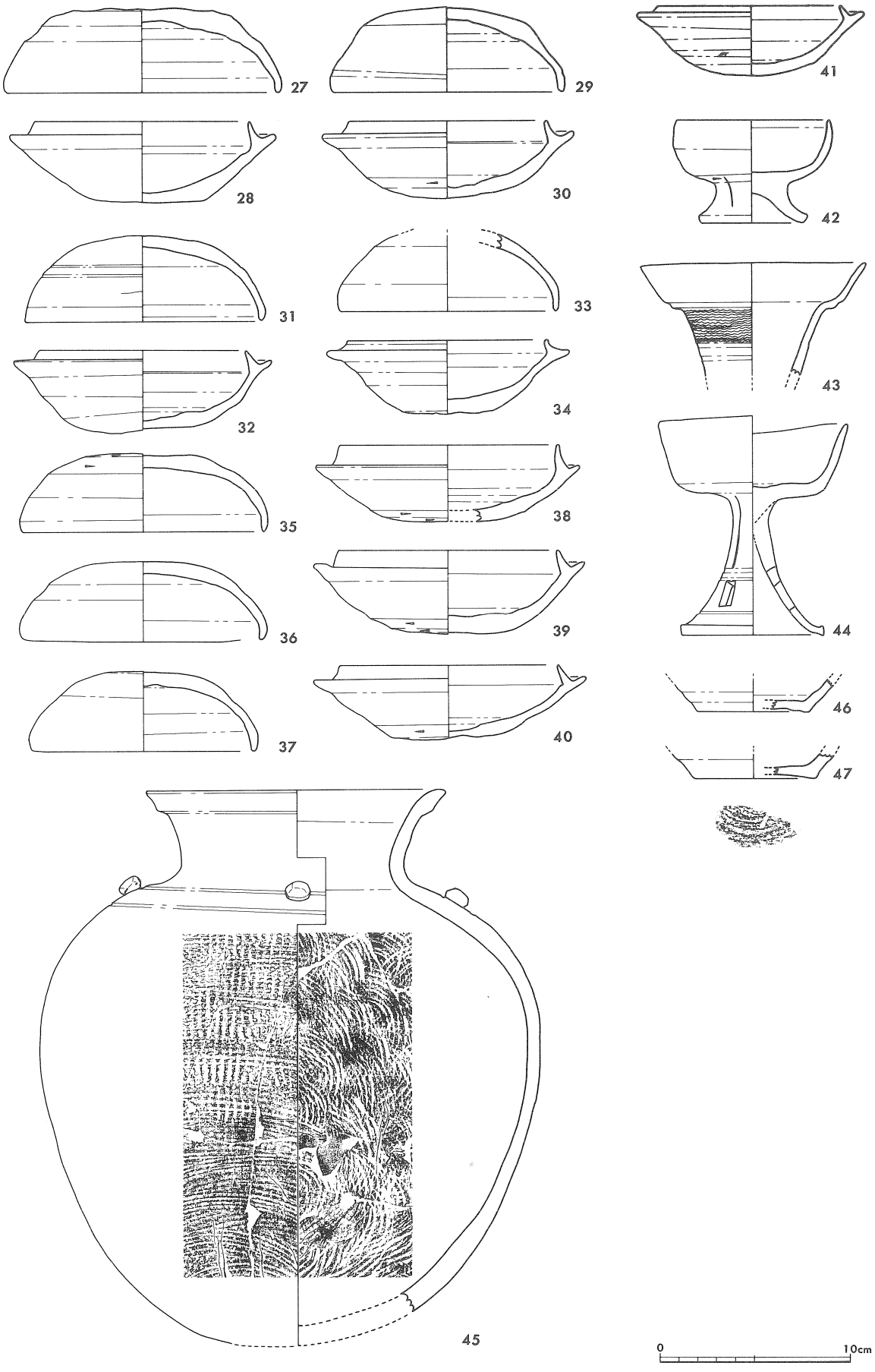
前庭部出土遺物（第55図・56図）　19層上面で31・34・35・42・48・49を検出したほか前庭部各層で須恵器片及び土師器片を採取している。器種は蓋坏のほかに脚付き椀（42）、鼈（43）、長脚無蓋高坏（44）、壷（45）、土師器皿（46・47）、甕（48・49）がある。27～34は胎土や焼成から製作時のセットと考えられる。27は復元口径14.3cm、器高4.4cmを測る。焼成不良で風化が著しい。天井部外面はヘラ削りを施さない。28は口径11.3cm、器高4.3cmを測り、焼成不良である。29は口径12.1cm、器高4.5cmを測り、焼成不良である。天井部外面はヘラ切り後ナデを施し、口縁部に不明瞭な凹線が１条廻る。30は口径10.4cm、器高4.1cmを測り、焼成不良である。底部外面外周に砂粒の動きが観察されるが、ヘラ切りの際のものか。31は口径12.4cm、器高4.5cmを測り、焼成不良である。天井部外面は削らず、肩部に浅い沈線とナデでアクセントを作る。32は口径10.8cm、器高4.4cmを測り、焼成不良である。33は復元口径11.8cmを測り、焼成不良である。肩部は不明瞭で口縁部がまるく内湾気味になる。34は復元口径10.5cm、器高3.9cmを測り、焼成不良である。返りは低く、端部は直立して納める。底部外面はヘラ切り後板状工具でナデる。35は口径12.6cm、器高4.1cmを測る。天井部外面の中心部から粗い回転ヘラ削りを施す。36は口径12.6cm、器高4.2cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ナデを施す。37は口径11.6cm、器高4.2cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ナデを施す。口縁部は僅かに肥厚し端部をまるく納める。38は復元口径11.5cm、器高4.0cmを測り、外面に緑色の自然釉が付着する。返りはやや高く、底部外面の周辺に回転ヘラ削りを施す。39は口径11.5cm、器高4.4cmを測る。底部外面の周辺に回転ヘラ削りを施す。40は口径11.5cm、器高3.9cmを測る。底部外面は外周に回転ヘラ削りを施す。41は口径9.7cm、器高3.7cmを測り小型化したものである。42は口径8.1cm、器高5.4cm、脚口径5.4cmを測る。脚部には切れ目状透しが２方に刻まれる。坏底部外面にヘラ削りを施し、脚端部は外傾してややまるく納める。43は鼈の口縁から頸部の破片で、口径11.9cmを測る。頸部には波状文が施され、その上下に浅い沈線を廻らす。44は口径約10cm、器高約11.5cm、脚口径7.5cmを測る。脚筒部中央に浅い２条の沈線が廻り、その上下に２段２方に亘って透しを設ける。上段は切れ目状、下段は方形である。脚端部は直立ないしは外傾気味に立上り明瞭な面をなす。45は口径15.7cm、胴部最大径26.2cm、器高29.1cmを測る。口頸部は内外面ともに回転ナデを施す。頸部つけ根外面に沈線が２条廻り、ボタン状の把手を計４個設ける。胴部外面は平行タタキの後、カキ目を施す。四耳壷とでも言うべきものか。46・47は土師器皿で底部付近を残すのみである。底部は回転糸切り痕が辛うじて認められる。

48・49は土師器甕で、前庭部の奥端部で検出した。48は復元口径21.8cm、胴部最大径24.8cm、器高20.8cmを測り、胴部が張り出すタイプである。。淡黄褐色を呈し焼成は良好だが、風化が著しい。口縁部の内外面にヨコナデ、頸部以下の内面にタテ・ヨコ方向にヘラ削りを施す。49は復元口径24.0cm、胴部最大径25.0cm、器高23.5cmを測り、あまり胴部が張り出さないタイプである。黄褐色を呈し、外面の一部に煤が付着する。焼成は良好である。調整は外面にタテ・ヨコ方向のハケ目、内面は頸部以下にヘラ削りを施す。

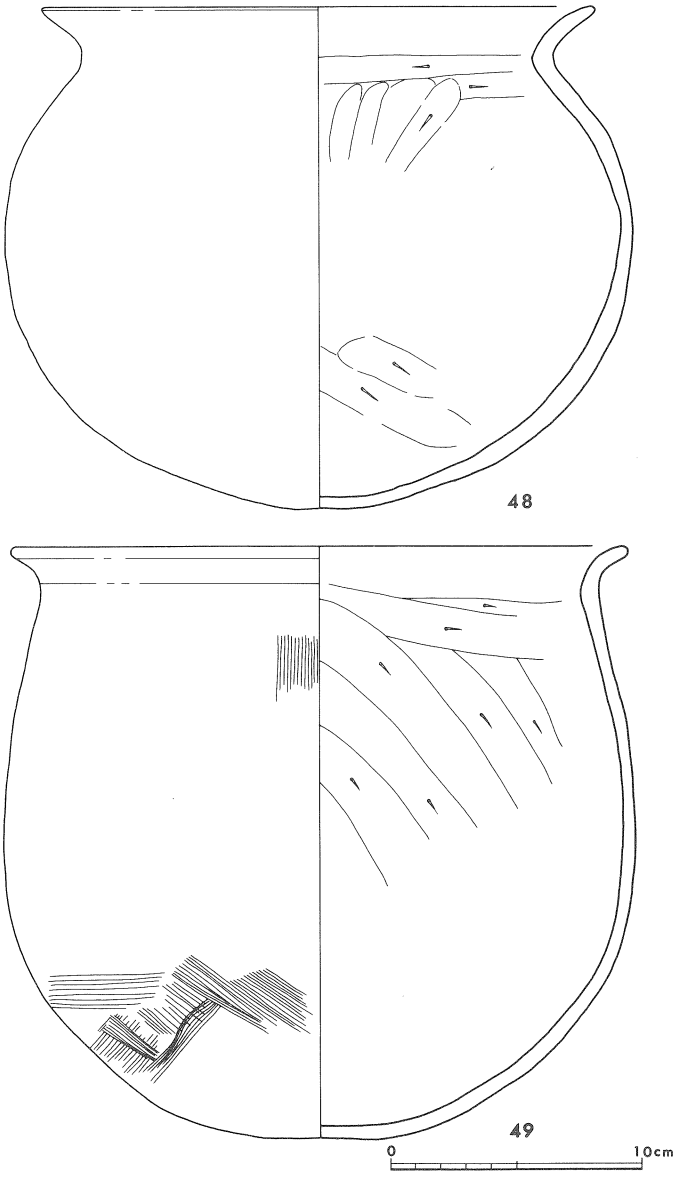
時期　玄室内出土遺物については、石棺内出土の１～４が蓋・身ともにやや古く大谷編年の出雲４期に相当する。敷石上で検出した５・６はヘラ削りの後ナデを施すもので４期でも棺内遺物とは



第54図　2号横穴墓玄室内出土遺物実測図（S＝1／3、15～25は1／2、26は1／1）



第55図　2号横穴墓前庭部出土遺物実測図(1)（S＝1／3）



第56図　2号横穴墓前庭部出土遺物実測図(2)（S＝1／3）

時期差を感じる。浮いて出土した一群は、蓋の口径が10.9～11.7cmと小型化したもので5期に該当する。前庭部については38～40が4期で、37・41が5期と見られる。そのほかは4～5期への過渡的な特徴を持つ。これらのことから、2号横穴墓は大谷編年の4期に始まり5期まで追葬を繰り返していたものと推定される。

3号横穴墓（第57図）

2号横穴墓の西側5.6mのところに位置し、南向きに開口する。床面の標高約24m付近で、2号横穴墓と1単位を形成していると考えられる。

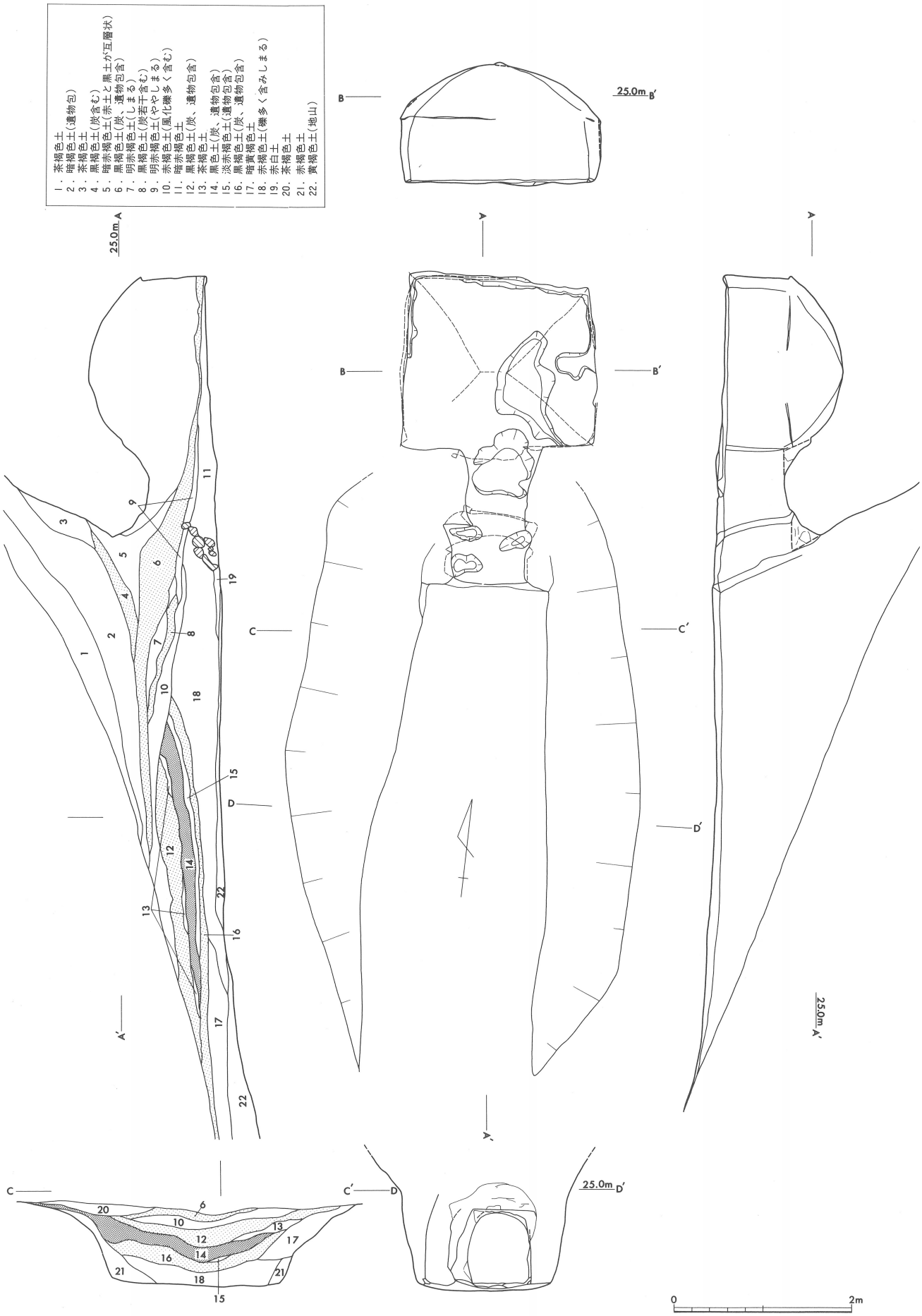
前庭部　奥幅1.36m、前端幅1.96m、奥行き約5.7mを測り、平面形態は前方に向かって広くなるタイプである。上段の横穴墓の中では奥行の短い部類といえる。床面は前端部に向かって僅かに傾斜する。

羨道部　平面は奥幅約1.0m、手前幅約0.83m、奥行き約0.65mを測り、わずかに奥側が開く形である。天井部は崩落しているため断面形態は不明だが、高さは復元すると0.85mはあろうか。床面には閉塞部と左側壁の手前側に計3つの窪みが認められる。

玄門部　奥幅約0.9m、手前幅約0.6m、奥行き約0.85mを測り、平面的には奥側がやや幅広になる。高さは0.75mで、天井形は丸い。床面には玄室にかけて深さ4cmほどの大きな窪みがある。

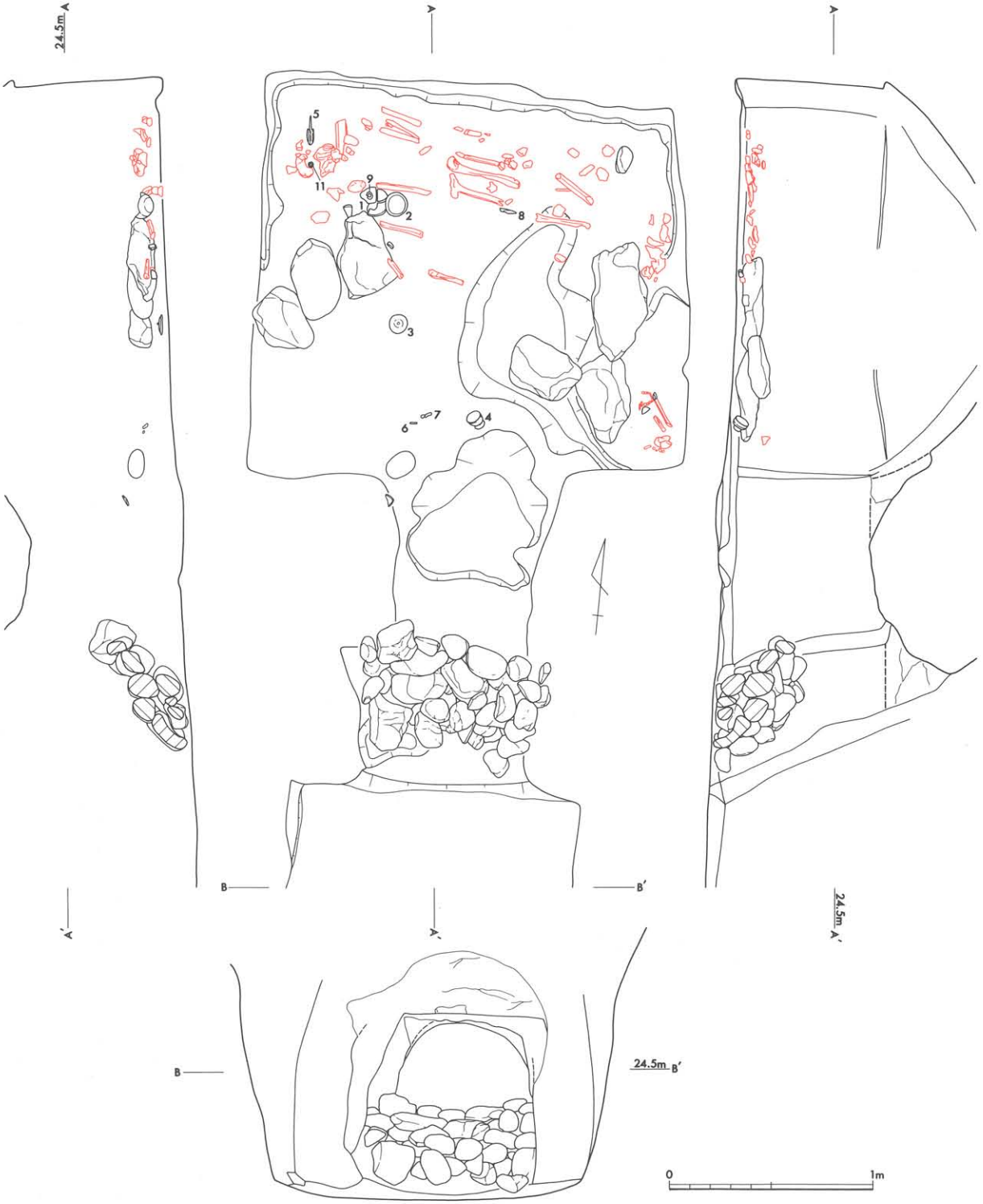
玄室　前庭部とほぼ主軸を同じくして作られる。規模は幅が奥壁側で約2.0m、袖側約2.15m、奥行き約1.95mを測り、ほぼ正方形プランを呈する。高さは約1.32mを測り、4隅の床面からは界線が立ち上がる。遺存状態は良くないものの、天井部と4壁との境には軒線が廻り、大棟は幅の無い線刻状のものである。玄室の形態は平入りのテント系家形である。床面には幅約5cm、深さ約3cmほどの溝が廻り、奥壁に平行する屍床を意識したと思われる。また、右袖壁から中央にかけて浅い窪みが認められる。

堆積状況　18層は初葬時の埋土と考えられる。埋土を施した後は、須恵器片を多く包含する黒色土、黒褐色土が堆積している。10層下面がそれらを切っていることから、これが2次葬面と考えられる。2次葬面は閉塞部まで確認され、閉塞石もちょうどこの面までしか遺存していない。10層は



第57図　3号横穴墓実測図（S＝1／60）

2次葬の際の掻き出し土若しくは埋土と考えられる。6層下面が最終侵入面と考えられ、7・9層はしまっていた。この時の埋土らしき層は確認していないが、玄室内に堆積した土砂が少ないことから木蓋などで何らかの閉塞をしていた可能性も考えられる。10層上面も侵入面と考えることは可能だが、8・9層の性格が理解し難い。

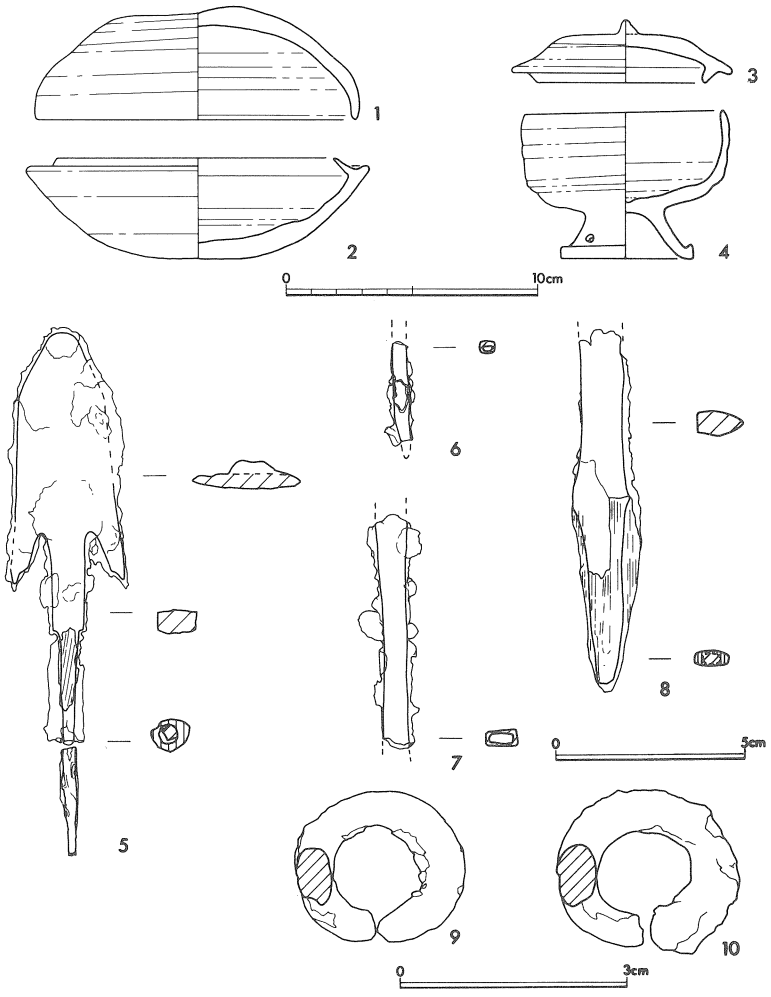


第58図　3号横穴墓遺物出土状況・閉塞石実測図（S＝1／30）

閉塞状況（第58図）　閉塞は10～30cmほどの円礫を玄室に向かって持ち送り気味に積み上げて行っている。本来は玄門天井部の高さまであったと思われるが、検出時には下半分が残存するのみであった。円礫は地山に多く含まれているもので、非常に軟らかく放置するとすぐに風化してしまうが、検出時にはそうした状況は観察されなかった。

玄室内遺物出土状況（第58図）　玄室内からは人骨のほか須恵器４点、鉄器４点、耳環１対が出土している。また、棺台に使用したと考えられる板上の割石が左右の壁寄りにそれぞれ３個ずつ出土している。やや動いている感もあるが、本来は石材の配置から奥壁に平行して棺を安置していたと推定される。人骨は２か所で検出しており、やはり玄室奥壁に平行安置したものと右袖付近に集骨状に残っている一群がある。さて、蓋（１）と身（２）はセットになると考えられ、蓋は伏せ、身は正位の状態で奥壁側人骨付近で検出している。蓋の上には耳環（９）が乗った状態で見つかっており、これと対になる10は頭骨と思われる骨に紛れて出土した。その付近で鉄鏃（５）が、中央付近で刀子（８）が見つかっている。これらはいずれもほぼ床面上で検出しているが、原位置を留めているものは少ないと思われる。蓋（３）と脚付き椀（４）はセットと考えられ、やや離れた位置の床面上で検出した。４は横転しており、動いた形跡が認められる。鉄器（６・７）は11層上面で検出している。

玄室内出土遺物（第59図）　１は坏蓋で口径12.7cm、器高4.2cmを測る。天井部外面は切り離し後に外周ヘラ削りのちナデを施すものか。肩部は不明瞭である。２は坏身で口径11.0cm、受部径13.6cm、器高3.9cmを測る。返りは強く内傾し、端部を鋭く納める。底部外面は切り離し後ナデを施すのみである。３は蓋で口径6.6cm、器高2.5cmを測る。乳頭状のつまみを有し、天井部外面は回転ヘラ削りの後ナデを施す。脚付き椀（４）の蓋と考えられる。４は口径7.9cm、脚口径5.2cm、器高5.8cmを測る。脚部には３方に円形透しが設けられる。口縁部はわずかに内湾してまるく納め、椀底部外面は回転ヘラ削りを施す。脚端部は直立

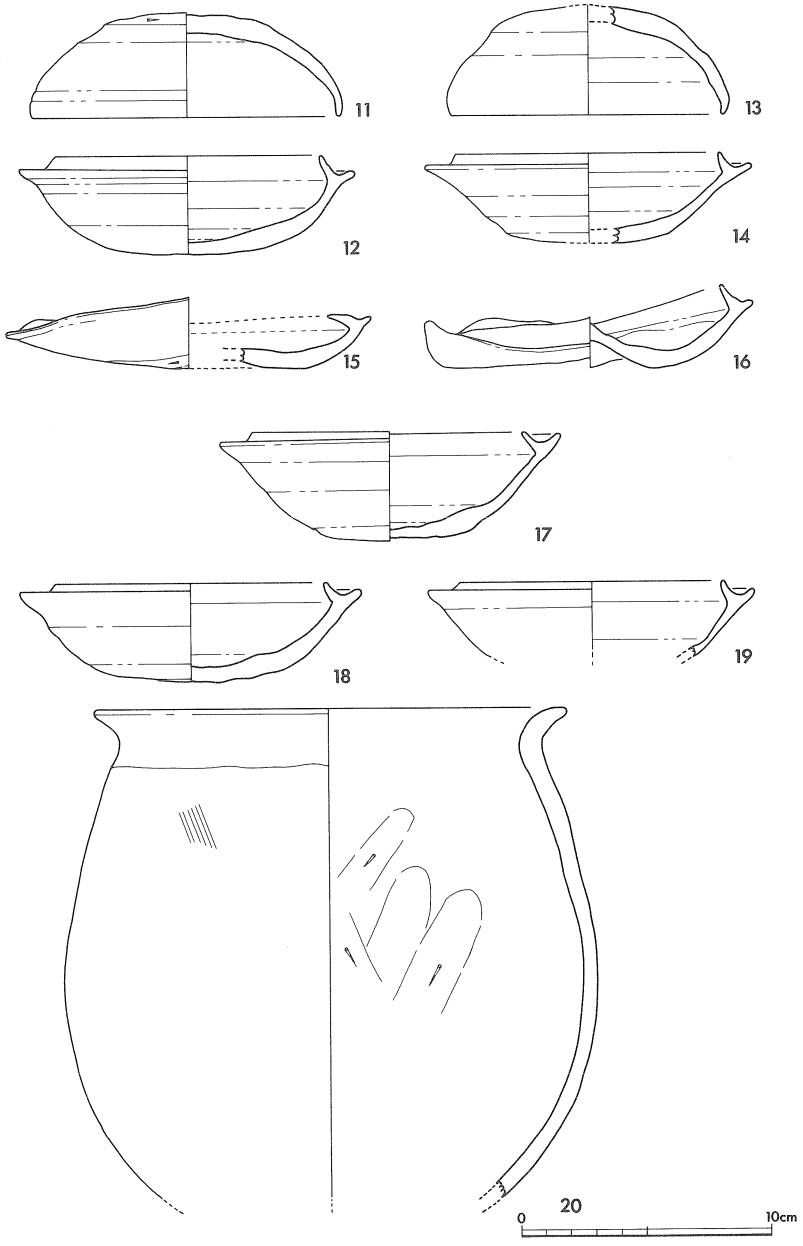


第59図　３号横穴墓玄室内出土遺物実測図
（S＝１／３、５～８は１／２、9,10は１／１）

して明瞭な面をなす。

5は短頸の腸挟三角形鏃で、茎端部を欠失しているが完形に近いものである。現長13.7cm、鏃身部長6.9cm、頸部長2.6cm、茎長5.8cmを測る。鏃身先端部はまるく、逆刺部分は深く段状の二重逆刺となる。6は鉄釘であろうか。長さ約2.6cmを残すのみである。7は長頸式鏃の一部と思われ、6.2cmを残す。8は刀子で9.6cmほどが残存し、刃側はやや内湾する。元幅約1.5cmを測り、関は撫関で茎には木質が付着する。9は耳環で長径2.2cm、短径1.9cmを測る。10は長径2.4cm、短径2.1cmを測る。ともに錆化が著しく、表面の残りは悪い。

前庭部出土遺物（第60図）　前庭部からは蓋坏のほか土師器甕が1点出土している。11は坏蓋で復元口径12.2cm、器高4.2cmを測る。天井部外面はヘラ切り後外周に回転ヘラ削りを施す。肩部は不明瞭で、口縁部には沈線とナデによりアクセントをつける。12は坏身で口径10.7cm、受部径13.4cm、器高3.9cmを測る。返りは低く、底部外面はヘラ切りのち板状工具によるナデを施す。13は坏蓋で復元口径10.8cm、器高4.4cmを測り、全体的にまるい作りである。天井部外面はヘラ切り後ナデを施す。口縁部は内湾するタイプである。14は坏身で復元口径10.5cm、受部径13.0cm、器高6.5cmを測る。返りは低く、底部外面もヘラ切り後ナデを施すのみである。15・16は坏身で焼歪みが特に著しく、同じ窯のものと考えられる。ともに底部外面にはヘラ切り後回転ヘラ削りが施される。17は坏身で口径10.8cm、受部径13.6cm、器高4.3cmを測る。返りは低く、底部外面もヘラ切り後ナデを施すのみである。18・19も坏身で同様の作りである。20は土師器甕で口径約18.6cm、胴部最



第60図　3号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3）

大径約21.2cmを測り、胴部の張り出さないタイプである。淡黄褐色を呈し、焼成は良好だが風化が目立つ。口縁部内外面ともにヨコナデ、頸部以下の外面の一部に縦方向のハケ目が認められる。内面にはヘラ削りを施す。

時期　玄室出土蓋坏は、口径は大きいが形態的には大谷編年の出雲５期的特徴を持つものである。一方、前庭部出土遺物は、天井部・底部に回転ヘラ削りを施す４期のものと、13・14・17～19といった５期に相当するものが見られる。３号横穴墓は４期末段階または５期への過渡期に築造されたものと考えられる。.

４号横穴墓（第61図）

３号横穴墓の西側約８ｍのところに位置し、南向きに開口する。床面の標高約24m付近で、前庭部堀り形との比高差は約５ｍを測る。

前庭部　前端部付近では北東に向かうが、半ばから北側にカーブして３号穴玄室を避けるように開口部に至る。奥端幅2.0m、前端幅1.7m、前端部から奥端までの直線距離約11.6mを測り、幅の変化は顕著でないが、本横穴墓群中で最も長大な前庭部である。床面は僅かに前端部よりに傾斜するものの、ほとんど水平に近いと言える。

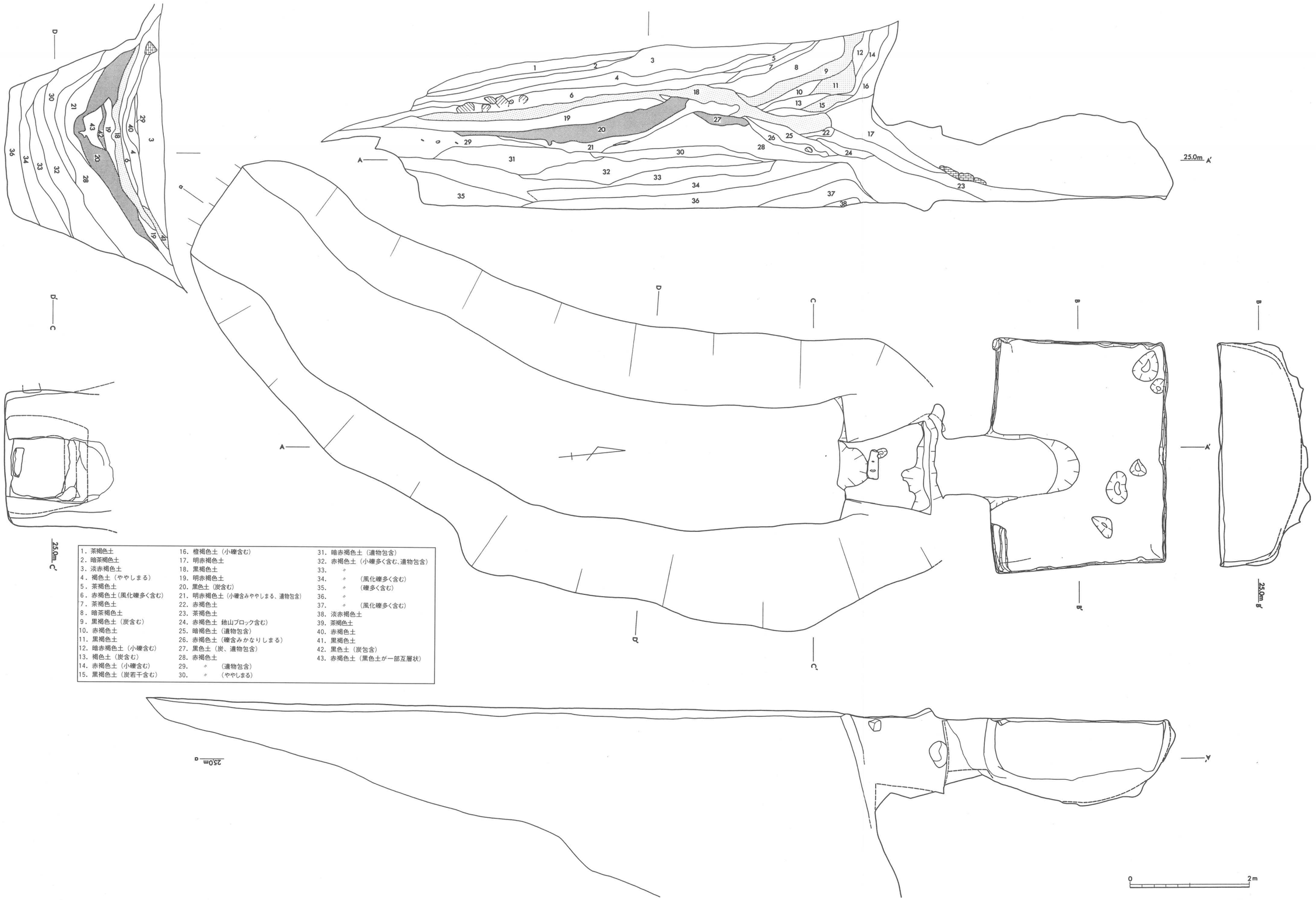
羨道部　平面は奥幅約1.6m内外、手前幅約0.95m、奥行き約1.45mを測り、奥側が鉢形に開くタイプである。天井部は崩落しているため高さ・断面形態は不明である。床面は羨門付近がやや窪んでいるほか、閉塞部に玄門と段差を作ることで深さ約16cmの溝を設ける。

玄門部　奥幅約1.1m、手前幅約0.95m、奥行き約0.8mを測り、幅はほとんど変化しない。天井部は崩落しているため断面形態は不明であるが、高さは復元すると80cm内外にはなろうか。

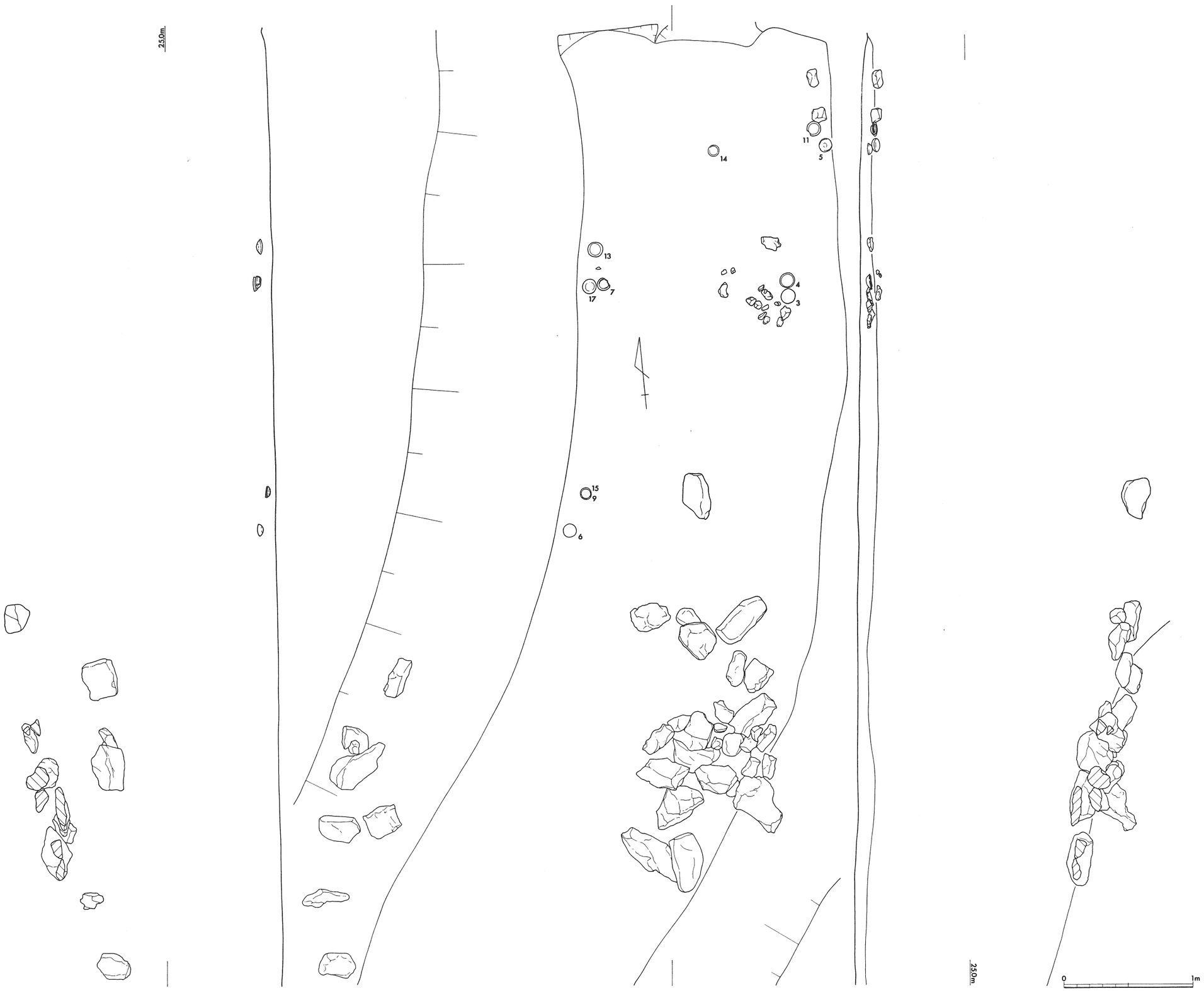
玄室　規模は幅が奥壁側で約3.65m、袖側約3.95m、奥行き約2.95mを測り、横長台形プランを呈する。高さは約1.35mを測り、玄室の平面規模に比して高さが異様に低い印象を受ける。左奥隅では認められなかったが、本来は４隅の床面から界線が立ち上がっていたものと推定される。天井部と４壁との境部は崩落しており明瞭な軒線は認められないが、右袖付近の界線が横にはしる気配を見せているので、玄室形態はドーム系家形であった可能性が考えられる。床面壁際には幅約５cm、深さ約３～５cmほどの溝が廻り、右袖部で壁に平行して幅６～10cm、長さ約80cmの隆帯を作り出す。

玄室入り口周辺の天井部には幅約14cmの円刃状のノミ痕が良く残り、入り口方向に向けて加工している様子が窺えた。

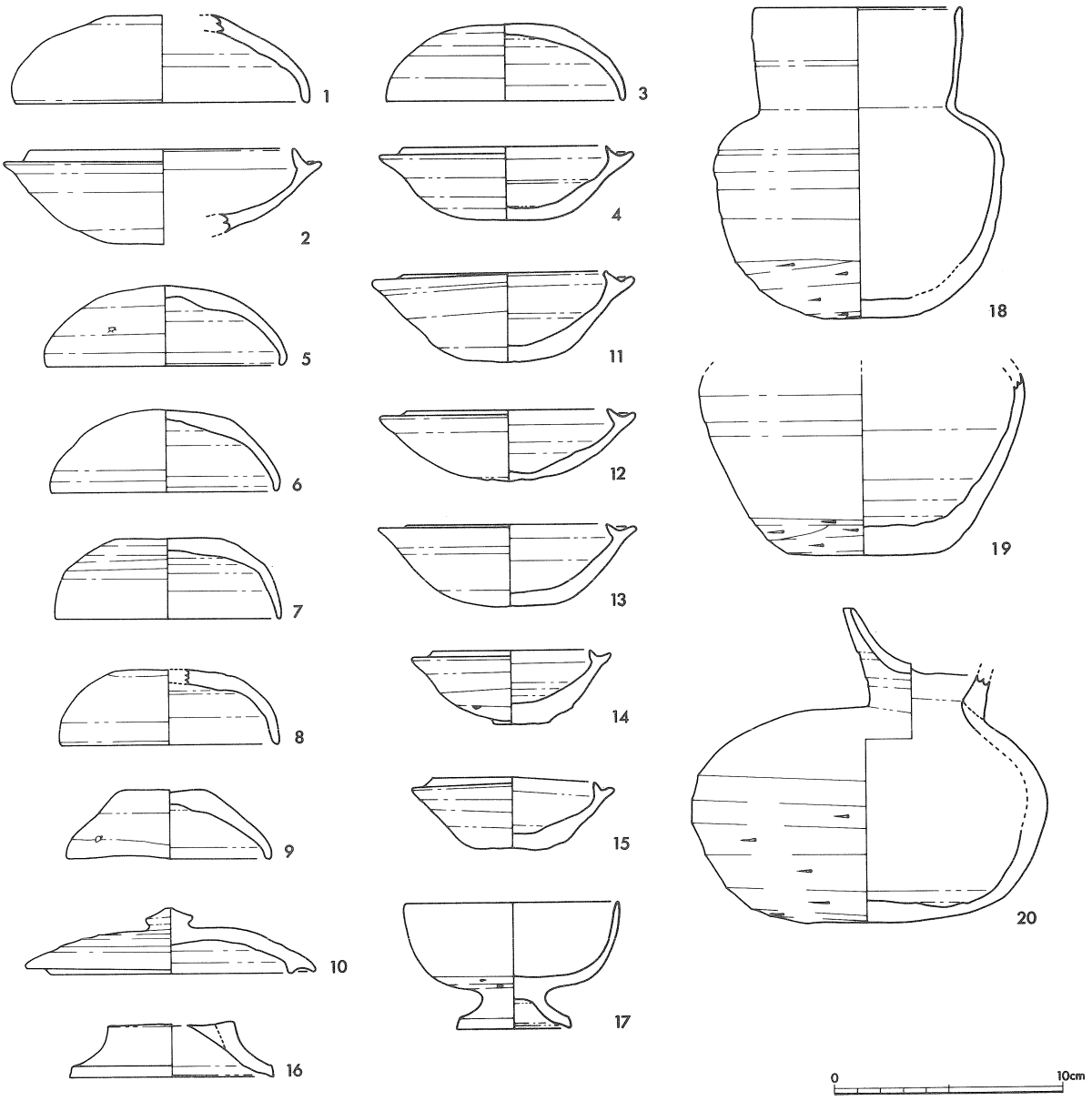
堆積状況　前庭部の土砂について、32～34・36～38層は初葬時の埋土と考えられる。28・30層下面が初葬時の埋土を切っていることからこれが２次葬面と推定される。28層は２次葬時の埋土であろう。羨道部床面には凝灰岩製の割石閉塞石が１個残っており、初葬時の閉塞に用いられたものと考えられる。本来羨道奥端まで積み上げてあったと推定され、２次葬時に大部分が除去されたと考えられるが、閉塞石はその後も追葬が行われる度に再利用されたと思われ最終侵入面と見られる６層下面まで移動している。縦断ラインの奥側が中心からそれていることもあり、２次葬後の追葬面は判然としないが、横断土層図からは43層と19層の下面がそれぞれ黒色土を切っており、溝状に掘り込んで侵入している様子が見て取れる。このことから19・43層は追葬時の掻き出し土若しくは埋土と推定される。黒色土の27層も切られていることから21層下面も侵入面の可能性があり、初葬を含めると４号横穴墓においては少なくとも６回の侵入行為を想定することができよう。



第61図　4号横穴墓実測図（S＝1／60）



第62図　4号横穴墓前庭部遺物出土状況（S＝1／30）



第63図　4号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3）

前庭部遺物出土状況（第62図）　前庭部からは床面直上で須恵器11点が小礫とともに検出されたほか、前述したように6層下面から閉塞石が多数出土している。閉塞石は全て凝灰岩の割石材で、平面的には前庭部西側の一群と、東側の群とに別れて出土している。立面で比較して見ると、東側の石群は6層下面に位置するが、西側の石群は50cmほど低いレベルから出土しており、これらが時期を異にして置かれたものであることが推定される。

床面から出土している小礫は凝灰岩で、前庭奥側の東寄りで検出している。須恵器は大きく5か所に分布し、小礫付近では坏（4・11）と倒立状態の蓋（3・5）を検出している。14の坏身は伏せた状態で、9・15は重ねた状態で出土している。

前庭部出土遺物（第63図）　3～7・9・11・13～15・17は床面で検出したもので、その他は堆積土中から取り上げたものである。1は坏蓋で復元口径12.8cm、器高3.9cmを測る。天井部外面はヘラ切り後丁寧なナデを施す。肩部は不明瞭で口縁部は内湾して端部をまるく納める。2は坏身で

復元口径11.6cm、器高4.2cmを測る。返りは低く、底部外面はヘラ切り後ナデを施す。3は坏蓋で口径10.4cm、器高約3.4cmを測る。天井部外面はナデを施すのみである。4は口径8.9cm、器高3.2cmを測る。返りは低く、端部を鋭く納め、底部外面はナデを施す。3・4は製作時のセットと考えられる。5～10は坏蓋である。5は口径10.3cm、器高3.5cmを測る。天井部外面にはヘラ切り後軽くナデを施し、「×」状のヘラ記号を持つ（第127図）。口縁部は内湾してまるく納める。6は口径9.9cm、器高3.6cmを測る。天井部外面にはヘラ切り後不定方向のナデを施し、「×」状のヘラ記号を刻む（第127図）。口縁部は僅かに内湾してまるく納める。7は口径9.9cm、器高3.5cmを測る。天井部外面は外周に回転ヘラ削りが施される。肩部は明瞭で、口縁部は直線的な作りである。8は復元口径9.5cm、器高3.3cmを測る。ややまるい作りで、天井部外面にはヘラ切り後に不定方向のナデを施すのみである。9は口径8.9cm、器高3.0cmを測る。天井部には明瞭な面を作り、外面はヘラ切り後未調整である。口縁部は僅かに内湾してまるく納め、内面にはヘラ記号を有す（第127図）。10は擬宝珠状つまみの付く坏蓋で1層から出土したものである。口径10.6cm、器高2.9cm、つまみ径2.0cmを測る。天井部外面はつまみ周辺に回転ヘラ削り後ナデを施す。

11～15は坏身である。11は口径8.8cm、器高3.8cmを測る。返りは低く、口縁部外面にヘラ記号を有す（第127図）。底部外面はヘラ切り後未調整である。12は口径8.8cm、器高3.1cmを測りやや浅い作りである。返りは低く、底部外面はヘラ切り後板状工具による擦痕が認められる。13は口径8.7cm、器高3.6cmを測る。底部外面にはヘラ切り後ナデを施す。14は口径6.9cm、器高3.2cmを測り、他の坏身に比して更に小型化したものである。内面にはヘラ記号を有し（第127図）、底部外面はヘラ切り後未調整である。15は口径7.1cm、器高約3.2cmを測り、14と同様の作りのものである。内面にヘラ記号を有す（第127図）。16は脚部のみを残し脚口径8.9cmを測る。天井部には接合時に粘土を貼付けた痕跡が認められる。脚端部は直立し面をなす。17は脚付き椀で口径9.3cm、脚口径5.0cm、器高5.5cmを測る。椀底部には回転ヘラ削りを施し、脚端部は内傾して面を作る。18は直口壷で口径9.1cm、器高13.6cmを測る。19は長頸壷の胴部と考えられ、胴部最大径14.2cmを測る。20は平瓶で器高13.7cm、胴部最大径15.5cmを測る。把手は持たず、口縁部は筒状に直立する単純なタイプで2条の浅い沈線を廻らす。

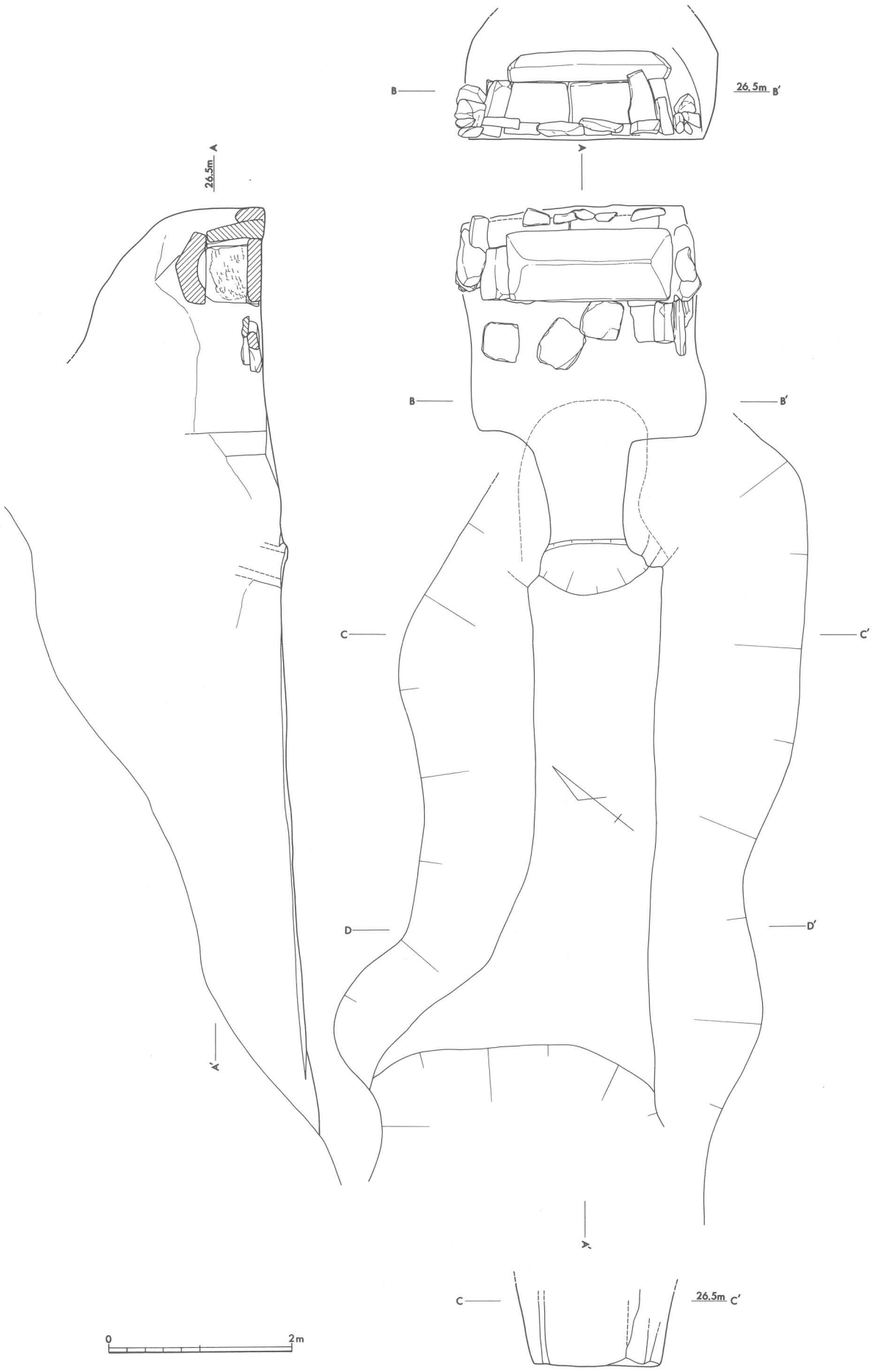
時期　玄室内遺物はなく、時期については前庭部出土遺物から判断せざるを得ない。床直上で検出した蓋坏は9・14・15がより小型化したものではあるが、時期としては大谷編年の出雲6A期の頃と考えられる。これらはかなり広い範囲且つ床直上で出土していることから初葬時の一括遺物と考えられる。1・2は出雲5期に相当するが、初葬時期を6A期とすると流れ込みに拠るか、共伴するものと考えるのが自然であろう。10は1層出土のため混入遺物か横穴墓を再利用した際のものである可能性が高い。こうした状況から、4号横穴墓は出雲6A期に築造されたと言える。

5号横穴墓（第64図・65図）

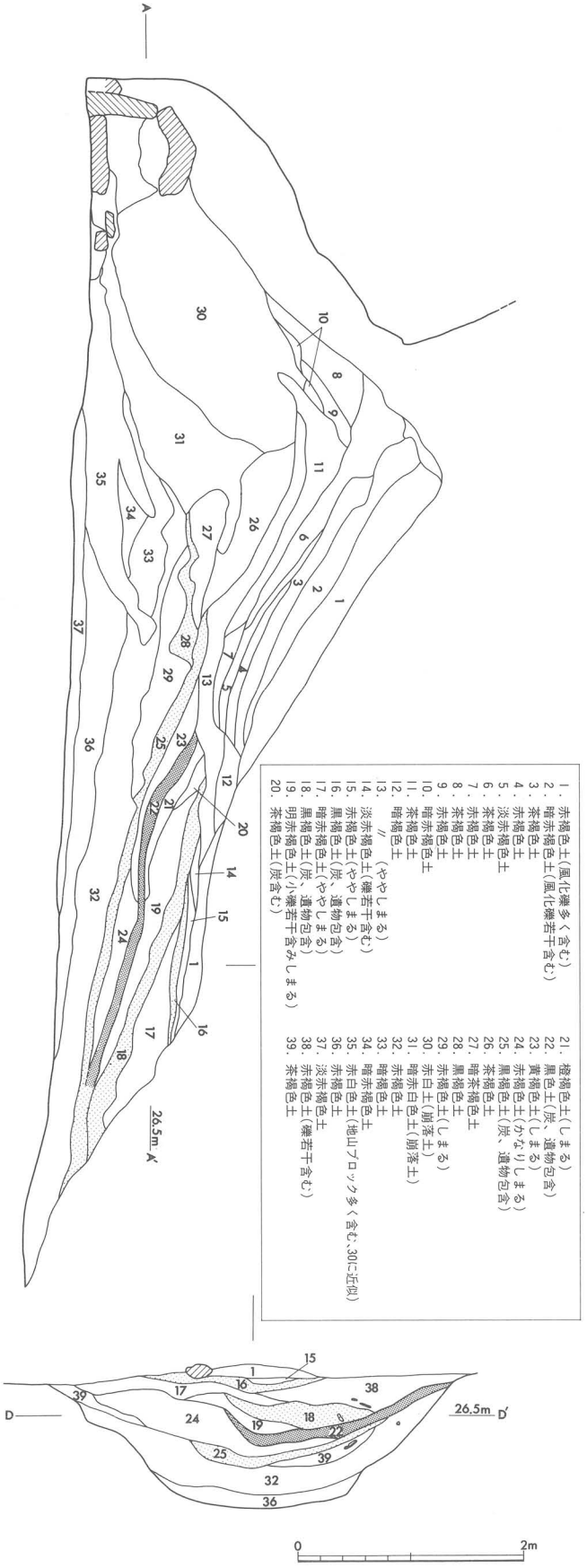
4号横穴墓の北西側約6m付近に位置し、南西方向に開口する。床面の標高約25.5mで、4号横穴墓と1単位を形成していると考えられる。

前庭部　奥端幅1.46m、前端幅3.04m、奥行き約5.1mを測り、前端部付近で幅が北西側に大きく広がる、広短な平面形を呈す。床面は緩やかに前端部よりに傾斜する。

玄門部　平面は奥幅約1.1m、手前幅約0.8m、奥行き1.05mを測り、奥側が僅かに開いているが、



第64図　5号横穴墓実測図(1)（S＝1／60）



第65図　5号横穴墓実測図(2)（S＝1／60）

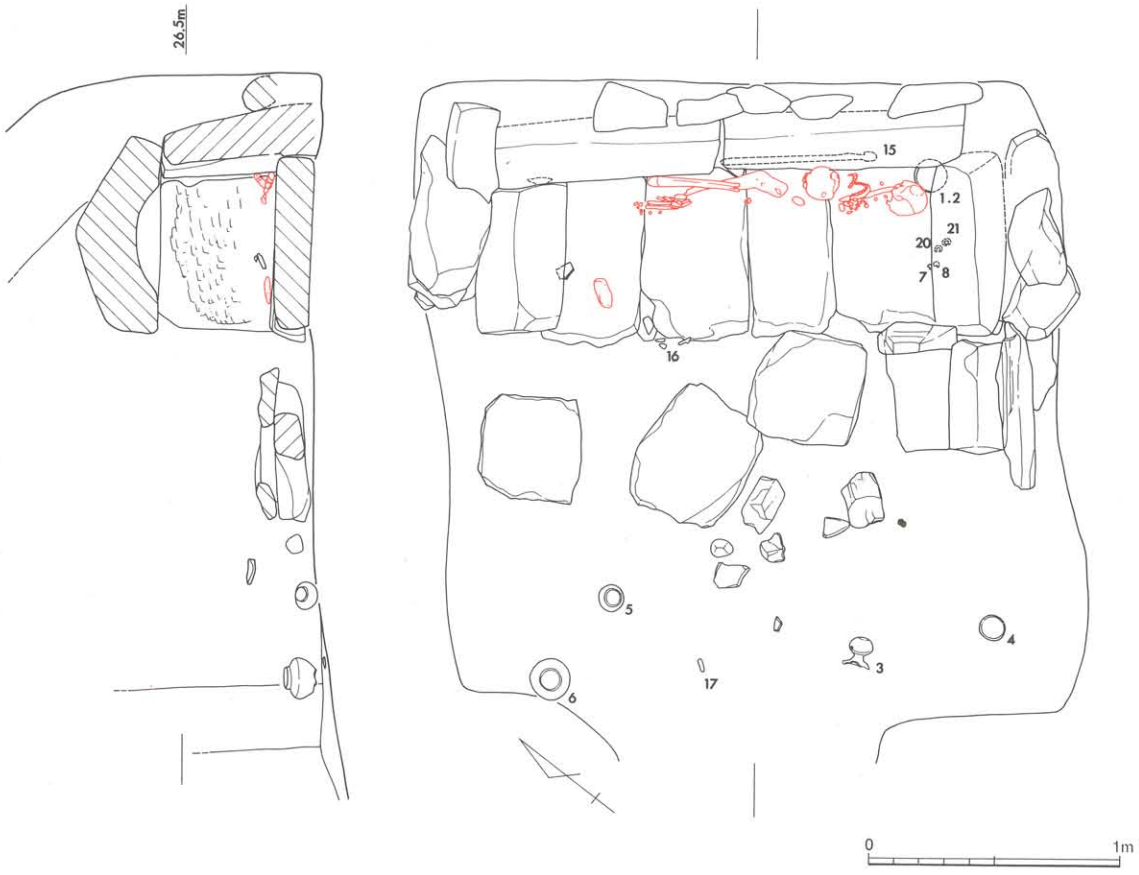
壁がかなり風化して剥落しているため本来の形態を留めていない。天井部は完全に崩落しているため高さ・断面形態は不明である。閉塞部の抉込みは浅く界線が辛うじて残り、床面には奥行き60㎝、深さ8㎝ほどの窪み状の加工が認められる。

玄室　規模は幅が奥壁側で約2.4m、袖側約2.4m、奥行き約2.5mを測り、正方形プランを呈する。玄室は風化、剥落が進んでおり遺存状態は極めて悪い。天井部は半分が完全に崩落し、高さや形態は不明である。4壁を区切る界線は左袖隅に認められるだけで、軒線の有無も明らかでないため、玄室の形態は不明である。

堆積状況（第65図）　32・36・37層は初葬時の埋土と考えられる。35層は地山ブロックを多く含む層で、玄室から玄門部にかけての天井崩落土と考えられ、崩落以前にこの下面で一度侵入している可能性が考えられる。29層は2次葬時の埋め土であろうか。28層は腐植土で、31層は天井崩落土の風化したものと考えている。28層上面から31層下面にかけてが3回目の侵入面になろうか。18層～25層までは甕片を多く包含する層で、13層下面によって切られている状況が認められることから4回目の侵入が考えられる。

なお、12・13層上面が或いは侵入面と考えられるほか、19～21層も埋土と考えることが可能である。こうした状況から5号横穴墓については少なくとも4～6回の侵入行為があったと想定することができよう。

玄室内遺物出土状況（第66図）　玄室内からは石棺1基のほか須恵器が5点、土師器1点、金属器、玉類が出土している。石棺の手前側には敷石の部材がかなり動いた状態で出土している。棺外遺物



第66図　5号横穴墓玄室内遺物出土状況（S＝1／30）

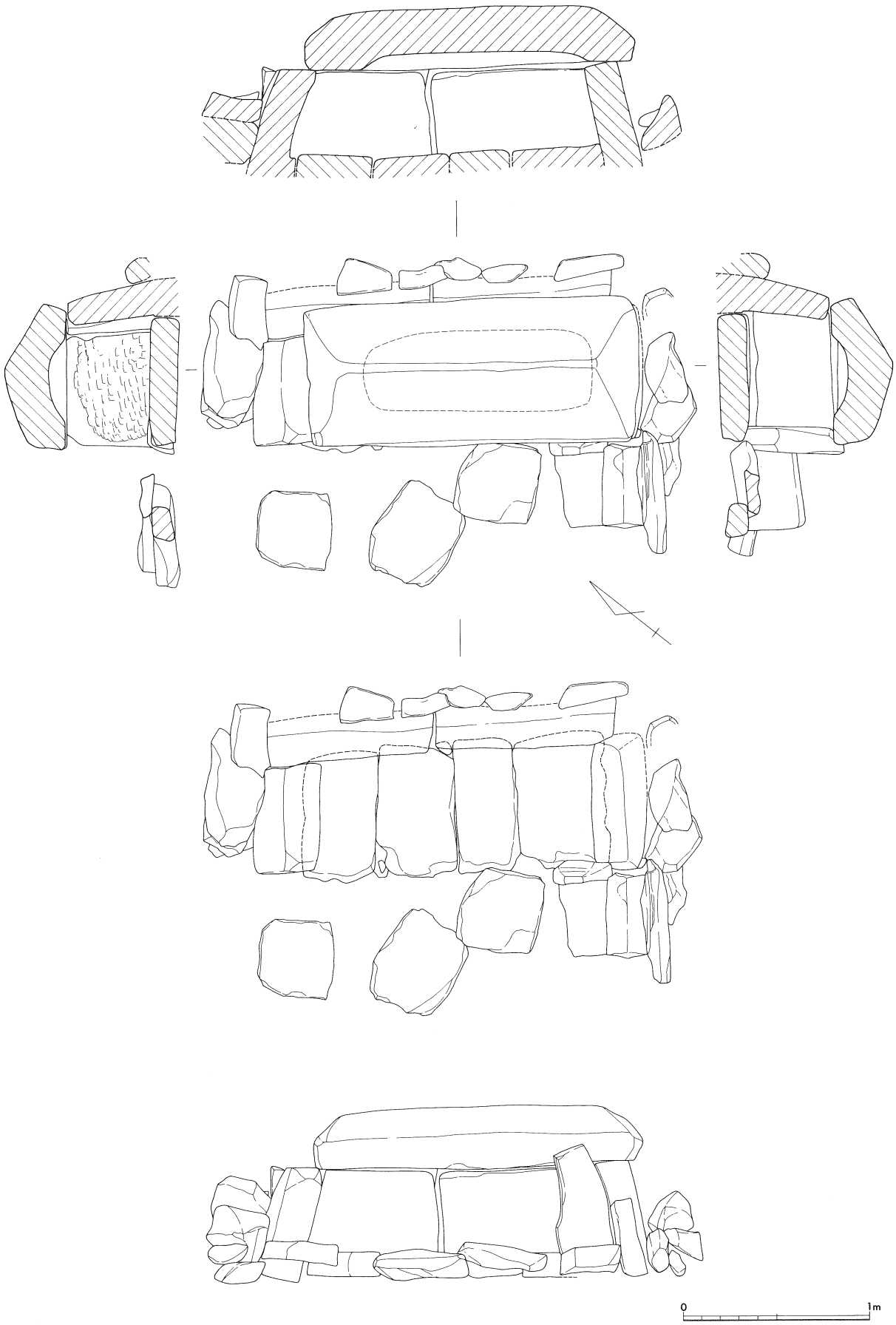
については、土師器坏（4）と短頸壷（5・6）はほぼ床面直上から正位で出土し、鏃（3）は床面で横転した状態で検出している。敷石の散乱状況から考えて、これらの遺物が原位置であるかどうかは疑わしい。その他に刀子（17）が35層上面から出土している。

石棺右側壁手前側からは耳環（20・21）と勾玉（7・8）が一対ずつ、近接した位置から出土している。石棺の奥壁側からは坏蓋（1・2）が上向きに重ねた状態で出土しており、そのすぐ脇から頭骨を検出した。更にその左側からも頭骨が見つかっており、棺内には最低2体が埋葬されていたことが分かる。人骨はいずれも奥側に寄せた状態で、坏蓋も本来は枕として使用していた可能性が考えられる。石棺奥壁際には直刀1振りが切先を左側壁側に向けた状態で置かれていた。

その他に玄室のふるい土中からガラス小玉が出土している。

石棺（第67図）　組合式の横口式家形石棺で、玄室奥壁に平行して置かれていた。石棺の手前側には敷石を設ける。石材は凝灰岩製の切石を用い、2号横穴墓出土家形石棺（以下2号石棺と表現する）と同様の石材を使用していると考えられる。(4)

石棺本体は奥壁2枚、両側壁と蓋石はそれぞれ1枚ずつで、床石には4枚の石材を使用している。床石と敷石の継ぎ目部分に右袖石だけが遺存する。奥壁の横幅は90cm内外、高さ約60cm、厚さ約20cmを測り、両側壁を挟み込むように内傾して立ててあった。奥壁の内面は断面形が僅かにL字状に抉り込まれている。玄室奥壁との隙間には長さ30～40cmほどの柱状の石材を詰め込み、石棺奥壁が内側に倒れ込むのを防いだものと考えられる。



第67図　5号横穴墓出土石棺実測図（S＝1／30）

両側壁の規模は概ね幅60cm、高さ60cm、厚さ20cm前後を測り、左側壁の内面には幅約３cmのノミ痕が多数観察される。奥壁と同様に粗雑ながらも抉り込んで断面Ｌ字状に加工する手法は２号棺には見られない特徴である。両側壁とも内傾して立て、左右の玄室側壁との隙間には長さ30～60cm程の大小の割石凝灰岩を重ね置きにしている。奥壁裏込めと同様の効果を持たせるものであろう。

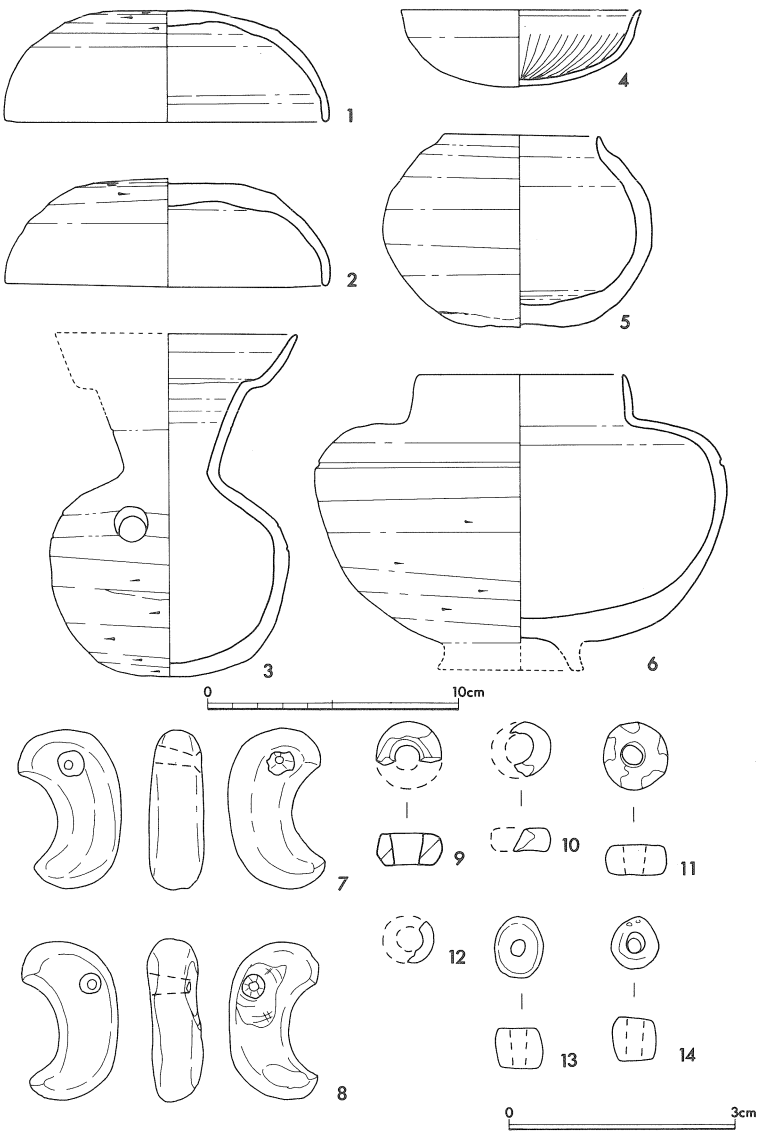
蓋石は長さ約175cm、右側幅約80cm、左側幅約70cm、高さ約35cmを測り、平面長方形を呈す。外面４隅からは棟線が立ち上り、大棟は幅４～５cmほどの不明瞭な平坦面を作り出す。棟線は左側小口だけが分銅形を呈す。内面には横断・縦断面形弧状で深さ10cmほどの浅い抉り込みが認められる。抉り込みは平面形隅丸長方形をなす。

床石は概ね長さ70cm、幅cm35～50cmを測り、風化が著しい。

袖石の立面形はだれたＬ字状を呈し、抉りの部分には面取りが施される。蓋石の受け部は２号石棺と異なり、袖石上端部をＬ字状に加工する切り組みを行う。検出時には既に左袖石と仕障は失われていたが、本来は２号棺と同様のタイプであったと推定される。

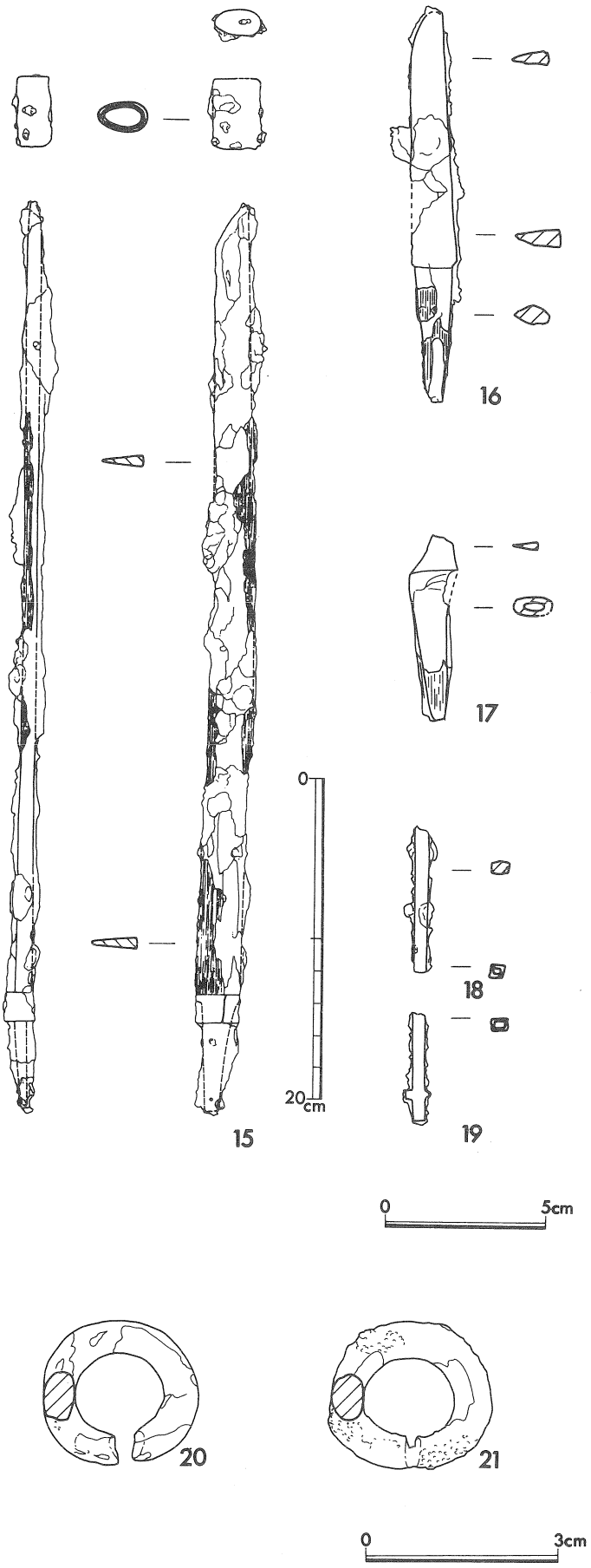
敷石は右端の１石が原位置であるほかは全て動いたもので、計４石が残存する。各石材の幅から復元すると同規模の石材がもう１枚あったと推定される。これらの手前には大小の石材が４つ出土しており（第66図）、うち長さ21cmほどの柱状の石材も含まれていた。これらは、加工状態から灯明台石よりはむしろ石棺仕障若しくは敷石仕障の残骸である可能性が高い。

石棺は内法で長さ約160cm、幅約70cmを測る。敷石も復元するとそれくらいの規模にはなろうか。２号棺と比較すると同規模で、形態も類似するものだが、遺存状態は悪いものの加工そのものは２号棺より整った印象を受ける。



第68図　５号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３、７～14は１／１）

玄室内出土遺物（第68図・69図）　１は坏蓋で口径12.8cm、器高4.4cmを測



第69図　5号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)
(15はS＝1／4、16～19は1／2、20,21は1／1)

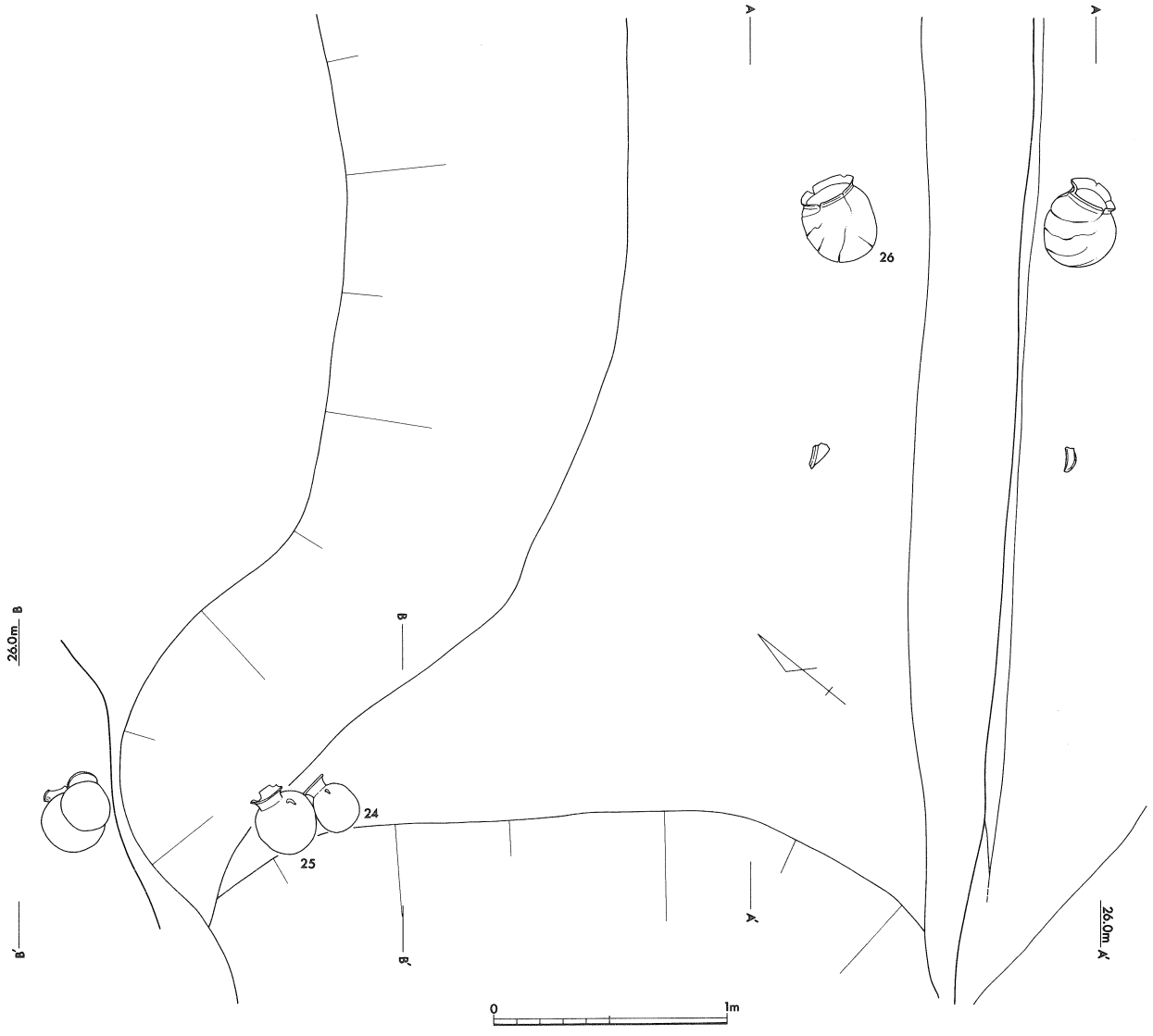
る。天井部外面はヘラ切り後回転ヘラ削りを施す。肩部には稜を作らず、口縁部内面には強いナデでやや段を作りまるく納める。2は坏蓋で口径12.8cm、器高4.3cmを測る。形態的には1と同様の作りだが、口縁部には段を作らない。3は瑞で、復元口径約9.6cmにはなろうか、器高は13.6cmを測る。頸部に沈線1条、体部の円孔の上下に浅い沈線を1条ずつ廻らす。口径に対して体部の張りが大きいタイプで、頸部に波状文は施さない。4は土師器坏で口径9.5cm、器高3.1cmを測る。焼成は良好だが、風化が著しく外面の調整は不明である。底部はまるく、口縁部は僅かに外反しながらまるく納め、内面には放射状の暗文を施す。胎土は精良で畿内と考えられる。5は短頸壷で口径6.1cm、器高7.6cmを測る。口頸部は短く外反気味に立上り、底部外面はヘラ切り後に丁寧なナデを施すのみである。6も短頸壷で口径8.1cm、胴部最大径約16.4cmを測る。口縁部は内湾気味に直立し、端部を鋭く納める。胴部下半は回転ヘラ削りを施し、最も張り出した肩部には沈線を1条廻らす。底部には高台を設けるがほとんどを欠失する。

7・8は水晶製勾玉である。7は平面形コの字形を呈し、穿孔は両側から行い、研磨面も数箇所に認められる。長さは2.1cm、重さ2.29gを測る。8も形態的

には７と同様のもので、長さ2.1cm、重さ2.04ｇを測る。穿孔は主に片面から行い、反対側には剥離面が認められる。９～14はガラス小玉でいずれもふるい土中から検出したものである。、13・14以外はいずれも劣化が著しいが、13・14は濃いコバルトブルーを呈す。13は径6.5～8.0㎜、長さ約５㎜、孔径2.0㎜、重さ0.39ｇを測る。14は径6.0㎜、長さ5.0㎜、孔径2.0㎜、重さ0.33ｇを測る。

15は全長56.8cm、元幅cm2.7の直刀で、長さ4.4cm、幅3.0cmの鞘尻金具とともに出土したものである。刀身長50cm、茎長6.8cmを測り、Ｘ線写真で鎺金具が観察される。関は不均等な両関で、茎は背側が緩やかに細くなるタイプである。茎尻には目釘穴が一つ確認される。刀身部に木質が多数付着し、鞘に納まっていた状況が窺える。16・17は刀子で、16はふるい土中から出土したものである。16は全長約12.2cm、元幅1.4cmを測る。両関で、茎部には木質が付着する。17は茎と刀身の一部を残すのみで、元幅1.5cm、茎長4.7cmを測る。刀身の刃側は著しく内湾して幅狭くなり、茎には木質が付着する。18・19は長頸鏃の頸部と茎部で、関は棘状を呈す。20・21は耳環でともに錆化が著しいが、21は金環である。20は長径2.4cm、短径2.25cm、21は長径2.5cm、短径2.3cmを測る。

前庭部遺物出土状況（第70図）　前庭前端部から須恵器２点、中央部から土師器１点を検出して

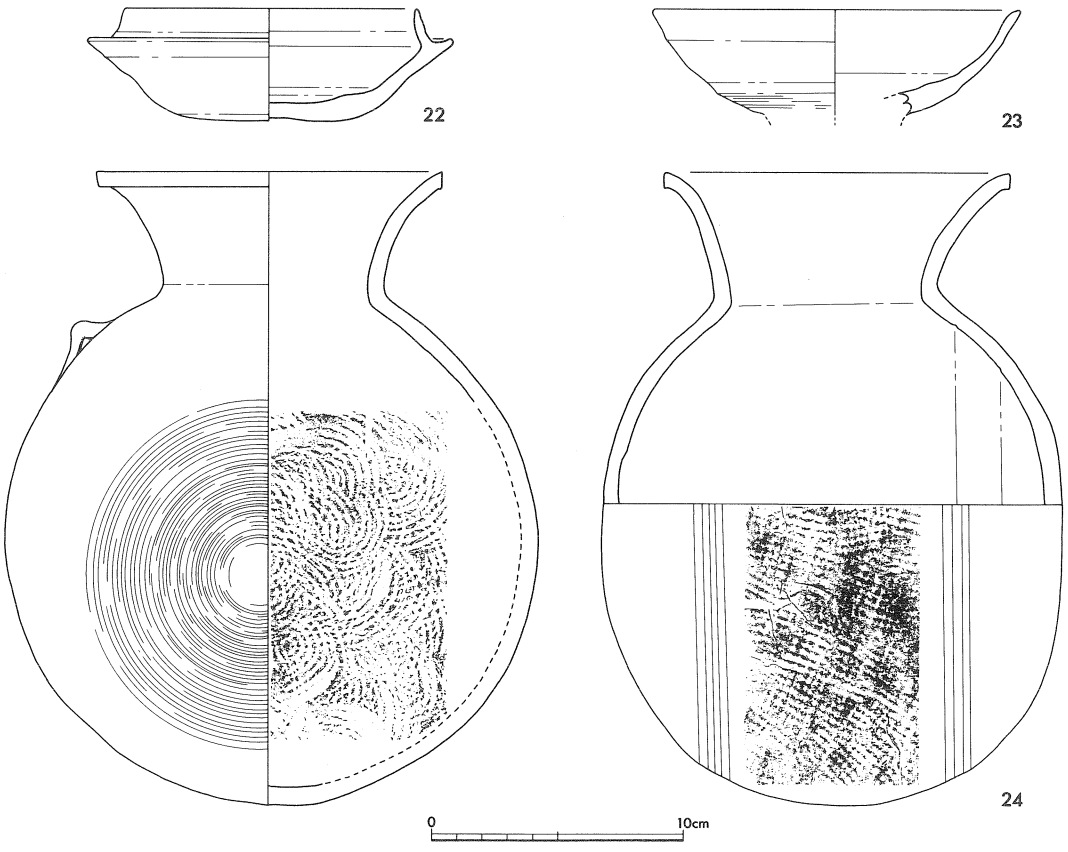


第70図　５号横穴墓前庭部遺物出土状況（Ｓ＝１／30）

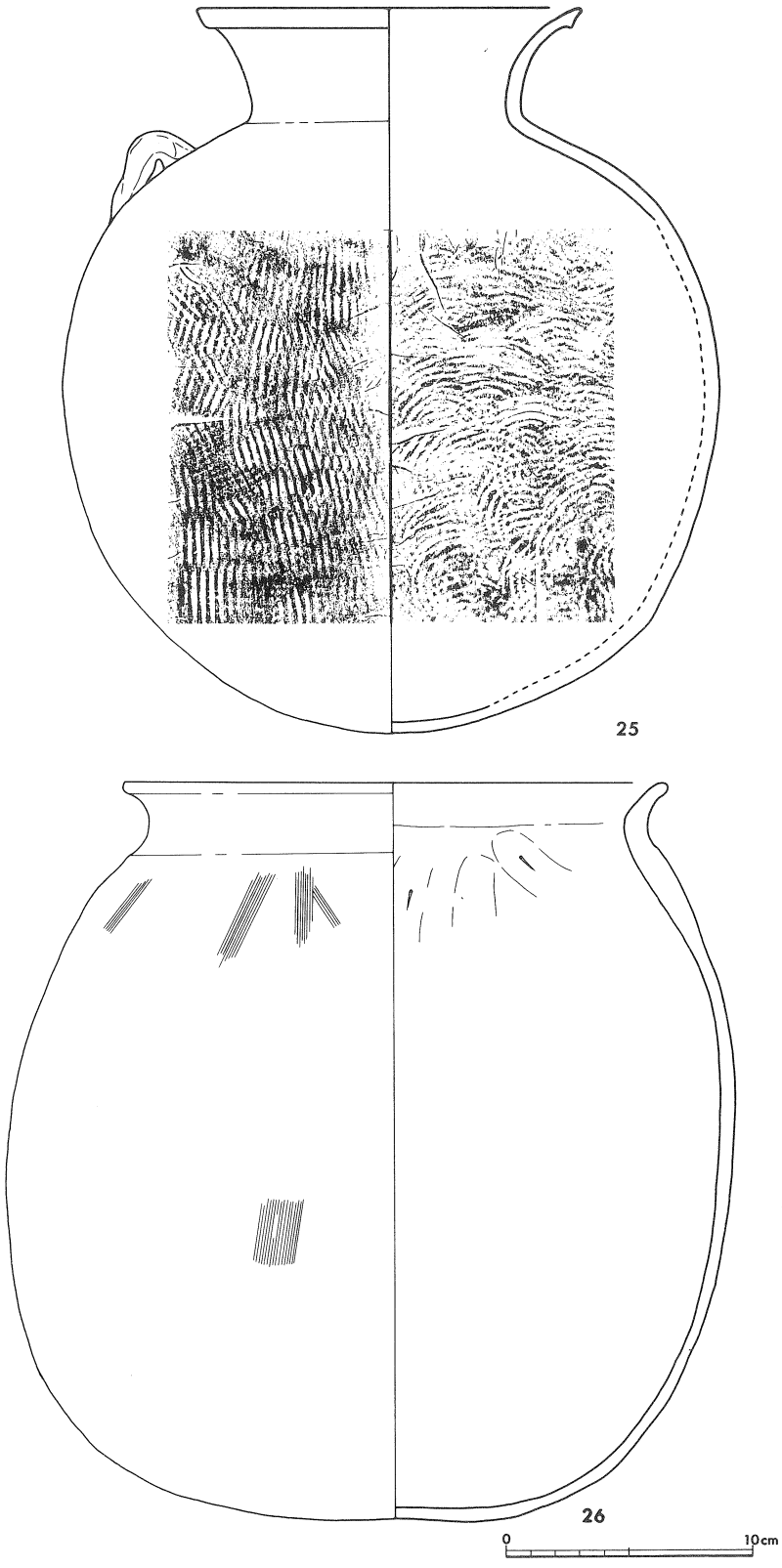
いる。24・25は北西側に広がった前端部の床面で、並列して横転した状態で出土している。どの段階で置かれたものかは不明である。26は床面から若干浮いた37層上面に位置し、初葬段階の遺物と考えられる。

前庭部出土遺物（第71図・72図）　22・23は堆積土中から取り上げたものである。22は坏身で口径11.6cm、器高4.5cmを測り、焼成不良でもろい。返りはやや高く、端部を鋭く納める。底部外面はヘラ切り後の調整は風化が著しく判然としない。23は高坏の坏部で、復元口径14.6cmを測る。口縁端部は僅かに外反してまるく納める。坏底部外面にはカキ目を施した痕跡が認められる。24は提瓶で口径13.8cm、器高25.1cm、胴部最大径21.1cmを測る。二重口縁の端部は明瞭な面を作り、胴部は背面、腹面ともに膨らみ、貫通した環状把手が付く。胴部腹面にはタタキの後カキ目を施す。25の器形は壺であるが、貫通した環状把手が付くもので機能的には提瓶とも言えるものである。口径15.6cm、器高29.6cm、胴部最大径26.5cmを測る。二重口縁部の端部は薄く外方へ伸びる。胴部外面には平行タタキを施し、内面には青海波文の当て具痕が観察される。底部はまるく、直立しえない。26は土師器甕で、口径21.6cm、器高29.9cm、胴部最大径29.4cmを測る。胴部外面には縦方向のハケ目、頸部内面にはヘラ削りが観察される。

時期　石棺内出土の坏蓋は２点とも天井部外面に明瞭な回転ヘラ削りを施すもので、大谷編年の出雲４期の範疇で捉えられるものであるが、棺外出土の坏は畿内編年の飛鳥Ⅰ期かⅡ期に併行し、瓶は出雲５～６期に属すものと考えられる。一方、前庭部出土の坏身や提瓶は出雲４期の特徴を持つものと言えよう。以上のことから５号横穴墓は出雲４期には築造され、６Ａ期の段階まで使用さ



第71図　５号横穴墓前庭部出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３）



第72図　5号横穴墓前庭部出土遺物実測図(2)（S＝1／3）

れた可能性がある。

6号横穴墓（第73図）

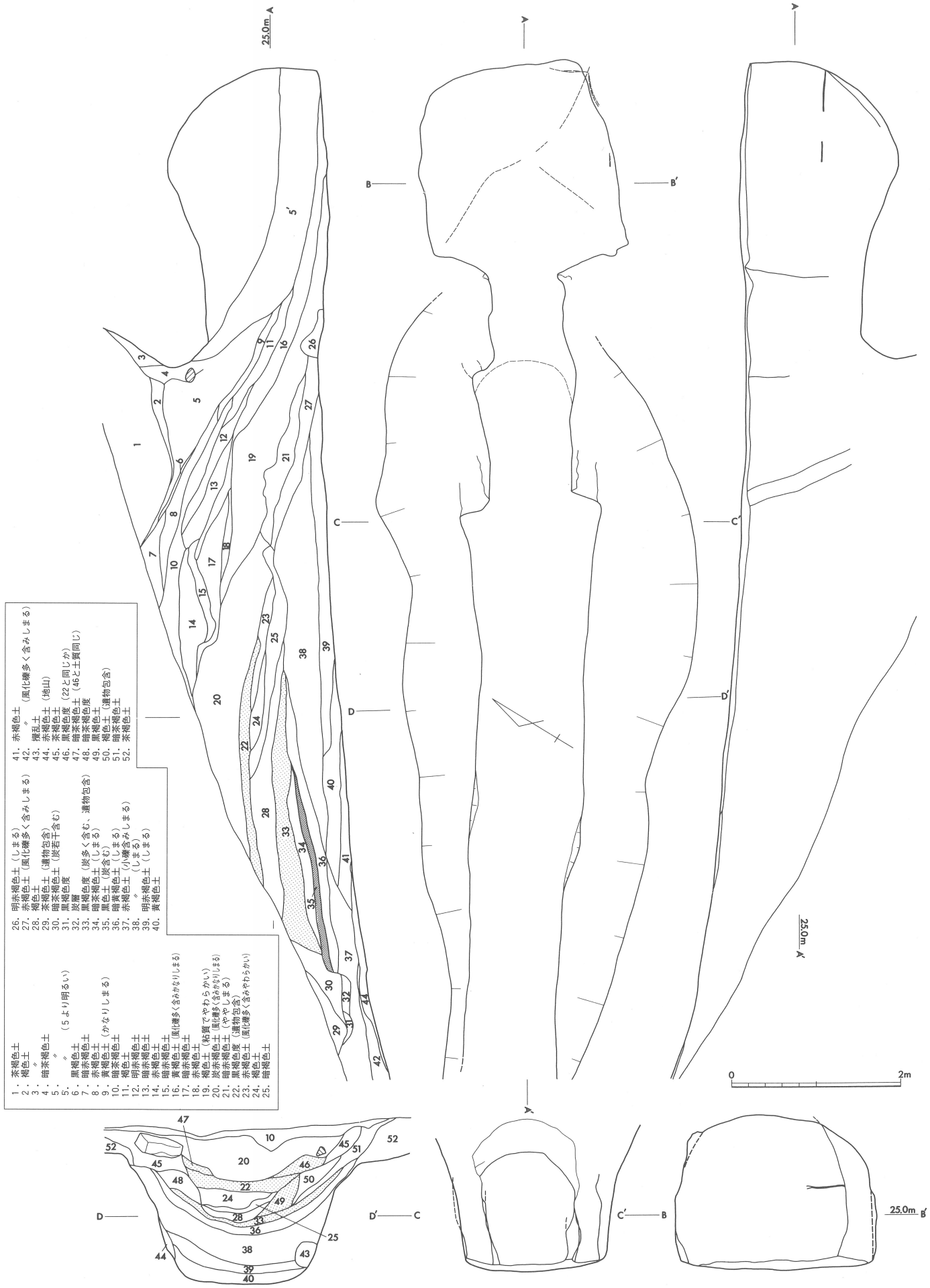
5号横穴墓の北西側約8m付近に位置し、南西方向に開口する。床面の標高は約24mで、5号横穴墓よりもレベルが低く、やや離れた位置に構築されている。

前庭部　奥幅1.65m、前端幅1.1m、奥行き7.2mを測る。平面形態は前方に向かって細くなり、横穴墓群中では広長なタイプと言える。床面は前端部に向かって緩やかに傾斜する。

羨道部　奥幅約1.2m、手前幅約0.96m、奥行き約1.5mを測る。平面形は奥側に向かって開くが、閉塞部は右側がだれて不均等な形態を呈す。天井部は完全に崩落しているため高さや形態は不明である。閉塞部床面には特に加工を施した形跡は認められない。

玄門部　奥幅約0.81m、手前幅約0.87m、奥行き約1mを測り、平面的にはほとんど幅に変化のない形態である。天井部は崩落しているため高さや形態は不明である。

玄室　幅は奥壁側で1.72m、袖側で2.3m、奥



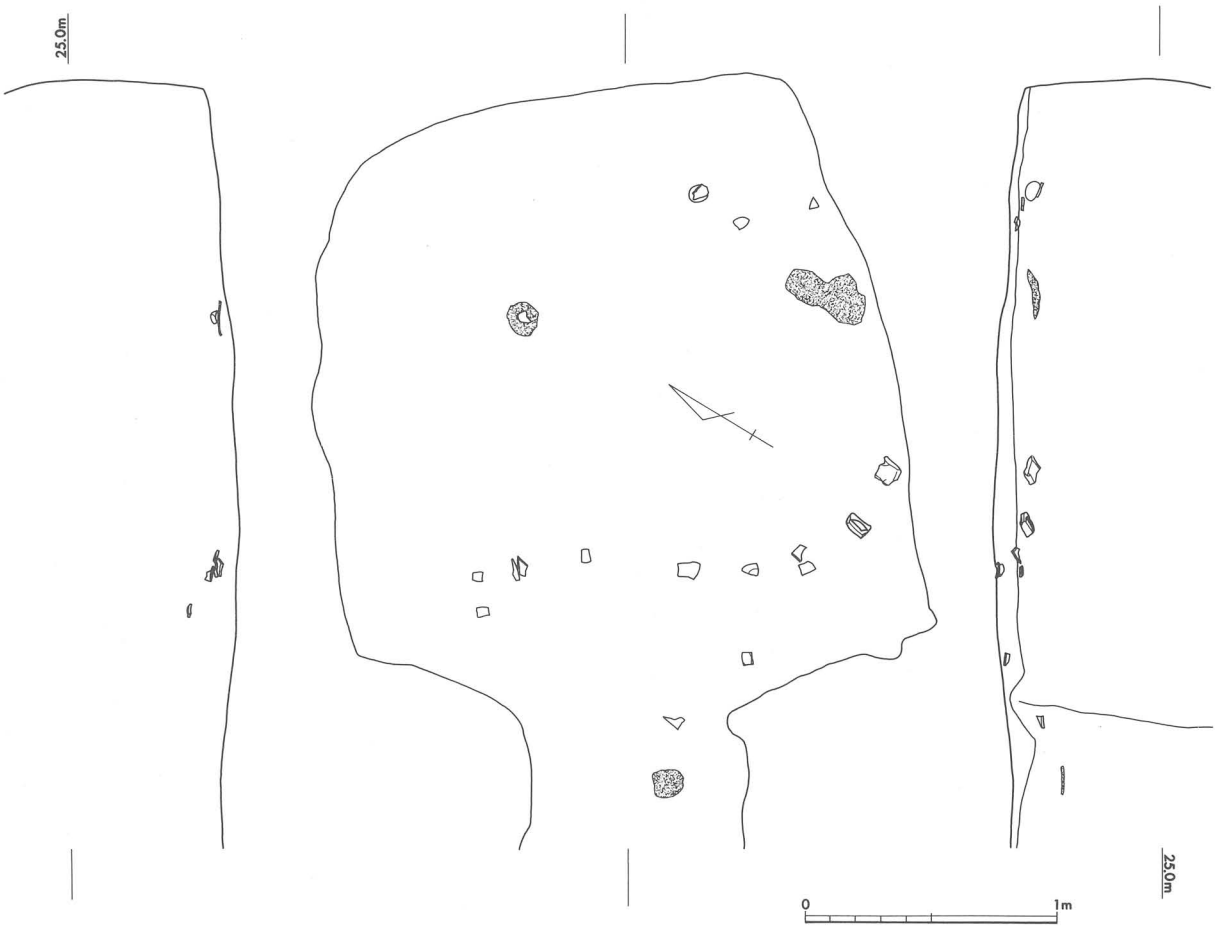
第73図　6号横穴墓実測図（S＝1／60）

行き約2.5mを測る。奥壁側の２隅は壁の剥落が著しく、原形を留めないが平面的には袖側が幅広の台形プランを呈す。高さは約1.85mを測り、４隅から立ち上がる界線は認められないものの、軒線と棟線が観察される。玄室の形態は平入りのテント系家形と考えられる。

堆積状況　38～41層は初葬時の埋土と考えられる。36・37層は自然堆積によるものであろうか。35層は黒色土で、切り合いから34層は掻き出し土若しくは２次葬時の埋土と考えられる。横断土層から28層下面も侵入面と考えられる。23～25・28層は掻き出し土であろうか。同様に縦断・横断土層の切り合いから20層下面も侵入面と推定され、風化礫を多く含んだ20層は崩落土を掻き出したものと考えられる。横断土層図でも分かるが、前庭部の高いレベルからは閉塞に用いられたと考えられる石材が多数出土しており（第75図）、これらは奥側の１石を除いてすべて20層下面に位置していることからこの段階で閉塞石を除去していることが考えられる。また、20層上面も侵入時にカットされた可能性が考えられる。奥側の大きめの石材はこの際に除去されたものである可能性が高いと思われる。堆積状況からはその後の明確な侵入面は確認できていない。

こうした状況から６号横穴墓では初葬も含めて少なくとも５回の侵入行為があったものと想定される。

なお、前端付近では炭が多量に入った深さ10cmほどの円形土坑を検出しているが（31・32層下面、図版26）、性格や時期については明らかでない。

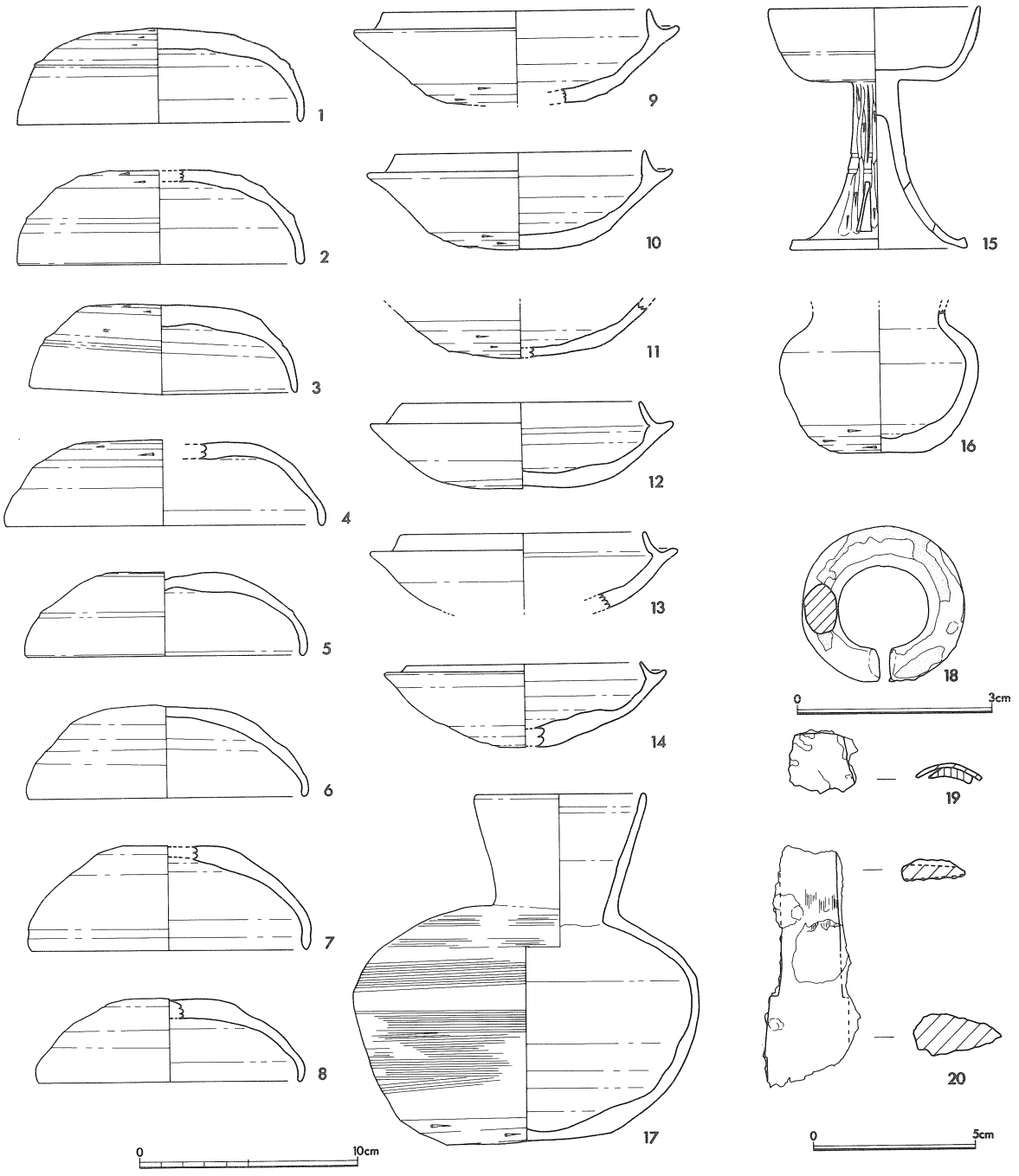


第74図　６号横穴墓玄室内遺物出土状況（S＝１／30）

第75図　6号横穴墓前庭部遺物出土状況（S＝1／30）

玄室内遺物出土状況（第74図）　玄室内からは流れ込みと考えられる甕片と、繊維状の物質が検出された。甕片は概ね16・19層の上面に位置し、散乱の状況から見て須恵器床の残骸とは考えられない。他方、繊維状の物体は遺存状態が悪く、植物の腐植したものである可能性も考えられる。

前庭部遺物出土状況（第75図）　前庭部からは、堆積土中から取り上げられた遺物のほか、前述した閉塞石が出土している。石材は白色の割石凝灰岩で、前庭部上場の両側に並べたように出土し、大きめの石材は



第76図　6号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3、18は1／1、19,20は1／2）

やや離れた高いレベルにある。これらと同一面と考えられる位置からは須恵器が出土しており、坏蓋（1・3・6）は石の下に潜り込ませたような状態である。

前庭部出土遺物（第76図）　1～8は坏蓋で、9～14は坏身である。1は口径13.1cm、器高4.3cmを測る。天井部外面はヘラ切り後回転ヘラ削りを施すが、中心部は板状工具によるナデが観察される。肩部には沈線と強い回転ナデで稜を作り出す。口縁部内面には強いナデで僅かにアクセントを付ける。2は復元口径13.0cm、器高4.3cmを測る。天井部外面は粗い回転ヘラ削りを施し、肩部に浅い沈線を1条廻らして稜を作り出す。3は口径12.3cm、器高4.2cmを測る。天井部外面には中心付近より回転ヘラ削りを施し、「×」状のヘラ記号を有す（第127図）。肩部には沈線と強いナデ

で稜を作る。4は歪みの著しい破片で正確な口径は不明である。天井部外面には回転ヘラ削りを施し、肩部は不明瞭である。口縁部は肥厚して、端部は内湾してまるく納める。5は口径12.7cm、器高4.1cmを測る。天井部外面はヘラ切り後外周に回転ヘラ削りを施す。肩部には強い回転ナデで僅かに稜を作り出す。6は口径12.7cm、器高4.3cmを測り、焼成不良である。天井部にはヘラ切り後丁寧なナデを施す。口縁部は僅かに内湾してまるく納める。7は復元口径12.6cm、器高4.8cmを測る。天井部外面にはヘラ切り後板状工具による擦痕が認められる。肩部は不明瞭で、口縁部には浅い凹線が1条廻り、端部は内湾気味に鋭く納める。8は復元口径12.1cm、器高3.8cmを測り、焼成不良である。天井部外面はヘラ切り後ナデを施すのみである。口縁部は僅かに内湾して端部をまるく納める。

9は復元口径12.3cm、受部径14.8cmを測り、底部外面には回転ヘラ削りが認められる。10は口径11.6cm、器高4.5cmを測る。底部外面にはヘラ切り後回転ヘラ削りを施す。11は底部付近を残すのみである。外面には回転ヘラ削りを施し、中心部には板状工具による擦痕が認められる。12は口径11.1cm、器高3.9cmを測る。底部外面にはヘラ削りを施すが、中心部にはヘラ起こし痕が観察される。13は復元口径11.2cmを測り、底部を欠失する。14は復元口径10.8cm、器高3.8cmを測る。返りは低く、底部外面もナデを施すのみである。

15は長脚無蓋高坏で口径9.8cm、器高11.1cm、脚口径8.2cmを測る。坏部に浅い沈線を1条廻らし、底部外面には回転ヘラ削りの後、中心部に向かって放射状にヘラ削りを施す。脚部は、筒部外面に幅2～4㎜の縦方向の粗いヘラ削りを施す。中央に2条の浅い沈線が廻り、上下に2段に亘って3方透しを設けるが、上段は切れ目状を呈す。脚端部は内傾して明瞭な面をなす。16は小型の直口壷で、底部外面に丁寧な回転ヘラ削りを施す。17は平瓶で7.8cm、器高15.9cm、胴部最大径15.9cmを測る。口頸部は直線的で、端部をまるく納める。胴部にはカキ目を施すが、把手は持たないタイプである。

18は金環で、径約2.5cmを測り全体的に緑青が認められる。19は鎹と考えられ、金環と近い位置から出土したものである。断面形は弧状で、内面には木質が残存する。20は直刀の残欠で、現長7.3cmを測る。肉眼観察でも関が確認されるが、天地ははっきりしない。

時期　時期判断は前庭部出土遺物に頼らざるを得ない。坏蓋については口径や調整から、1～3が大谷編年の出雲4期、5～8が出雲5期に相当すると考えられる。一方、坏身についても9～12が出雲4期、14が5期と考えられる。高坏15は形態的には4～5期に見られるものである。

これらから6号横穴墓は出雲4期には構築され、5期までは確実に墓として使用されていたものと推定される。

7号横穴墓（第77図）

6号横穴墓の北西約6mの付近に位置し、南西方向に開口する。床面の標高は約23.5～25mで、6号横穴墓と1単位を形成しているものと考えられる。

前庭部　奥幅約1.7m、前端幅約1.2m、奥行き9.3mを測る。平面形態は奥側が不均等に拡張し、前方に向かって僅かに細くなり、横穴墓群中では広長なタイプと言える。床面は前端部に向かって傾斜する。

玄門部　奥幅約1.1m、手前幅0.84m、奥行き約1.4mを測る。奥側の玄室との境界付近が不明瞭

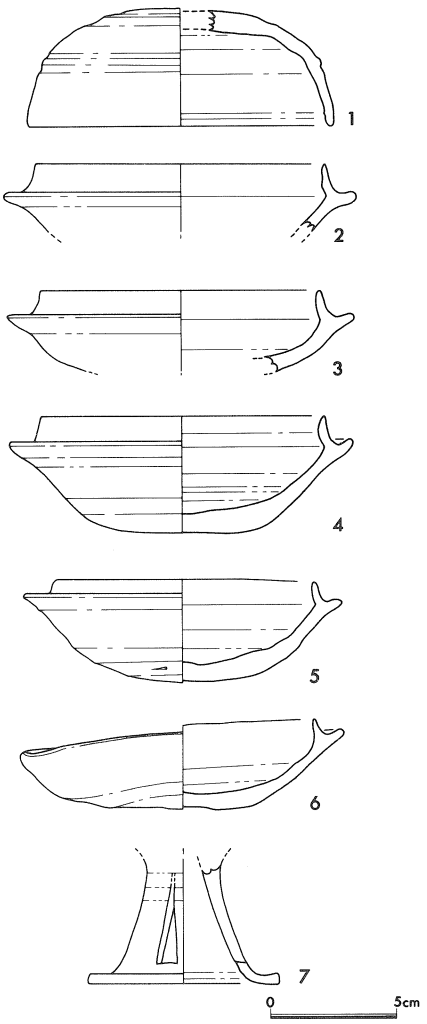
1．茶褐色土
2．暗茶褐色土
3．暗赤褐色土
4．黒褐色土
5．赤白色土（風化礫多く含む、遺物包含）
6．淡赤褐色土（風化礫多く含む）
7．黒色土
8．赤褐色土（しまる）
9．〃　（礫多く含みややしまる、遺物包含）
10．黒色土
11．暗褐色土（遺物包含）
12．赤褐色土（小礫多く含む）
13．〃　（しまる）
14．〃　（小礫多く含む）
15．淡褐色土
16．〃　（風化礫多く含む）
17．赤褐色土（地山）
18．淡赤褐色土（やわらかい）
19．黒色土
20．暗赤褐色土
21．淡赤褐色土
22．暗赤褐色土
23．暗赤褐色土
24．淡赤褐色土
25．茶褐色土
26．赤褐色土
27．褐色土
28．暗褐色土
29．赤褐色土（地山）

第77図　7号横穴墓実測図（S＝1／60）

で、平面的には奥側がだらだらと開く形態である。閉塞部は左側が2段に抉り込まれ、やはり不均等な形態を呈す。床面は深さ5～10cmほどの掘り込み面の中に、閉塞石の抜き取り痕と見られる窪みが観察された。天井部は完全に崩落しているため高さや形態は不明である。

玄室　幅は奥壁側で約2.5m、袖側で2.54m、奥行き約2.6mを測る。左袖から左壁の遺存状態は良くないものの正方形プランを呈している。天井部右半分は原形を留め棟線・大棟の一部が残存し、高さは約1.6mを測る。左袖部を除く3隅には界線が認められ、奥壁と右袖には軒線が観察される。玄室の形態は平入りのテント系家形と言えよう。左壁付近の床面には幅5cmほどの溝が廻る。

堆積状況　当初、玄室まで土層観察のためにベルトを設定していたが、記録化前に大雨のために前庭部奥から玄門部分にかけてが倒壊してしまい、この部分についての土層観察ができなかった。13・14・16層は初葬時の埋土と考えられる。12層も埋土の可能性はあるが、横断土層からは寧ろ流入による堆積と考えた方が自然であろう。10層は炭を多く含む腐植土で、切り合いから9層下面で侵入を受けていることが推定される。9層は須恵器片を包含することから掻き出し土と考えられる。8層は比較的しまり、2次葬時の埋土と考えられよう。同様に6・7層の切り合いから3回目の侵入が6層下面に想定される。4層は玄門まで達せず、空白部分で3層下面に切られている可能性が強い。平面図からも分かるように、玄門部中ほどの3層下面からは2個の閉塞石が検出されている。これらは出土状況から初葬時のものでなく、最終閉塞を示すものと推定される。閉塞には割石凝灰岩を使用している。なお、横断土層に見られる24～28層は深さ60cmに亘って堆積したもので、最下部は幅5cmほどしかなく追葬による掘削面とは考え難く、性格は不明である。

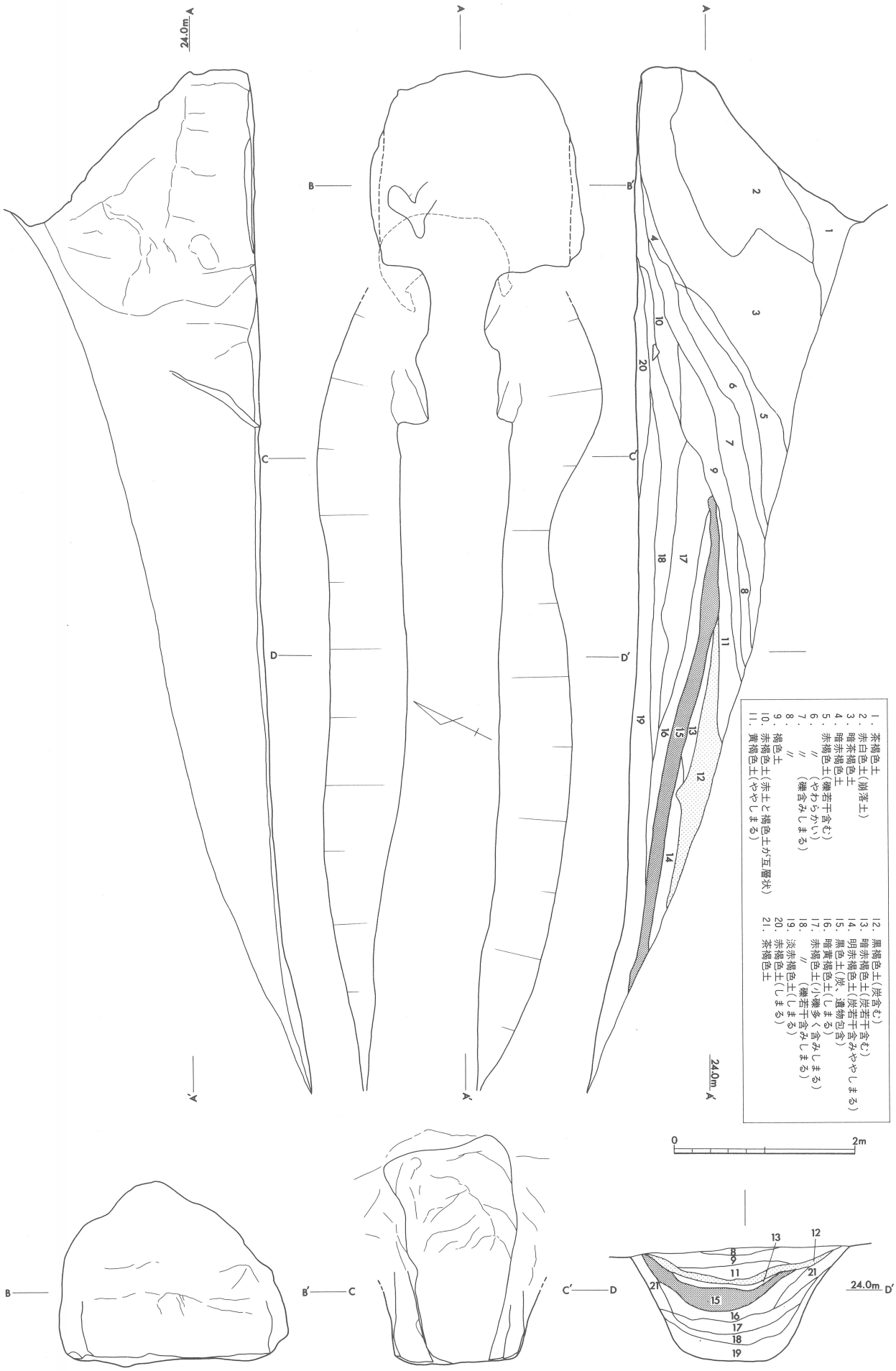


第78図　7号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3）

7号横穴墓では少なくとも4回の埋葬が為されたと推定される。

前庭部出土遺物（第78図）　玄室内出土遺物は無いが、前庭部堆積土からは須恵器甕片以外に若干の須恵器片を検出している。1は坏蓋で復元口径12.0cm、器高4.7cmを測る。天井部外面はヘラ切り後粗雑な回転ヘラ削りを施す。肩部には沈線と強いナデにより稜を作り出す。口縁部内面には端部に近い位置に浅い沈線を廻らす。2～6は坏身である。2～4は同様の作りで、口径は11.0cm前後を測る。4は床面直上で採取したもので、底部外面にヘラ切り後ナデを施すのみである。5は口径10.3cm、器高4.0cmを測り、小型化したものである。返りは低く、底部外面の外周に回転ヘラ削りを施す。中心部には板状工具による擦痕が観察される。6は焼歪が著しく口径は不明である。返りが低く、底部外面にはナデを施すのみである。7は高坏の脚部で、脚口径7.6cmを測る。三角形の3方透しを有す。脚端部はややまるみを持つが直立して面を作る。

時期　出土遺物は乏しいが、前庭部出土蓋坏の特徴から



第79図　8号横穴墓実測図（S＝1／60）

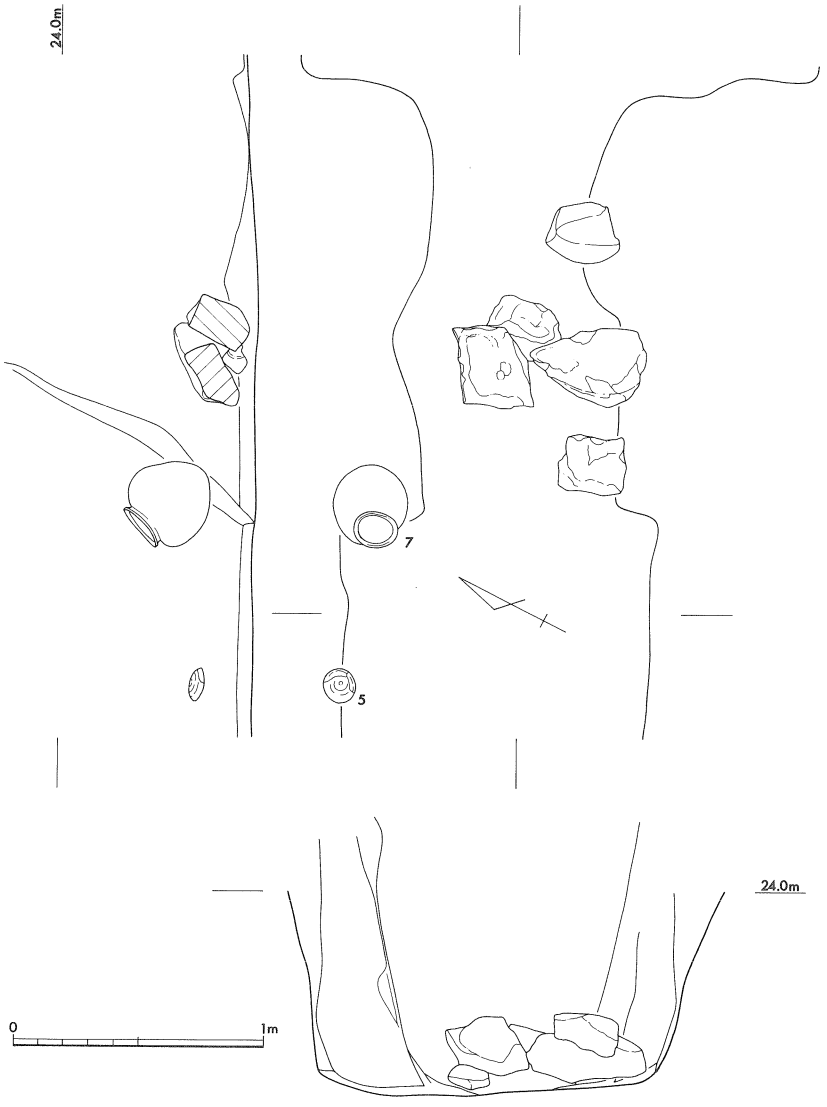
大谷編年の出雲４期末頃から５期にかけての時期に築造されたものと考えられよう。

８号横穴墓（第79図）

７号横穴墓の北西側約６ｍ付近に位置し、南西方向に開口する。床面の標高は22.5～23.5mで、６・７号横穴墓よりもやや低いレベルから構築しているが、これらは１群を形成していると考えられる。

前庭部　奥幅約1.2m、前端幅約1.2m、奥行き7.6mを測る。奥端部は左右不均等に広がり、全体を通して幅の変化はほとんど見られない。平面的には、横穴墓群中では広長なタイプと言え、床面は前端部に向かって緩やかに傾斜する。

羨道部　現況で奥幅0.92m、手前幅0.75m、奥行き約0.7mを測る。平面的には奥側に向かって開くが、風化が著しく奥端部と玄門部との境が不明瞭で、本来の形態は判然としない。天井部は完全に崩落しているため高さや形態は不明である。閉塞部床面には特に加工を施した形跡は認められない。

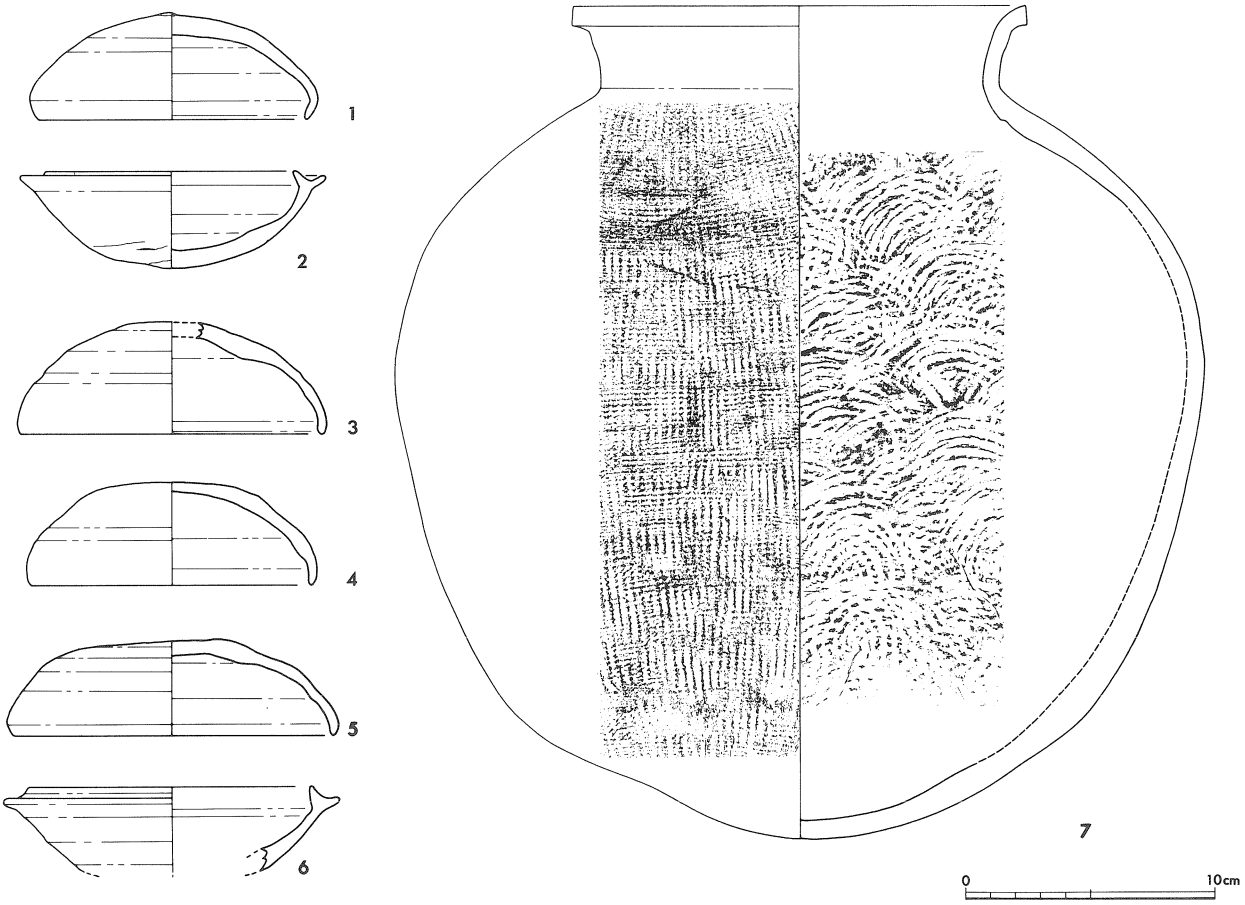


第80図　８号横穴墓前庭部遺物出土状況・閉塞石実測図（Ｓ＝１／３）

玄門部　羨道部と同様に壁の剥落が著しく、奥幅約0.85m、手前幅約0.6m、奥行き約0.7mを測るが、本来の形態や規模は不明である。天井部も完全に崩落しているため高さや形態は不明である。

玄室　幅は奥壁側で約1.5m、袖側で2.05m、奥行き約2.2mを測る。４壁とも風化による剥落が著しく、原形を留めないが平面的には袖側が幅広の台形プランを呈す。玄室形態は不明である。

堆積状況　17～19層はしまった赤褐色土で初葬時の



第81図　8号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3）

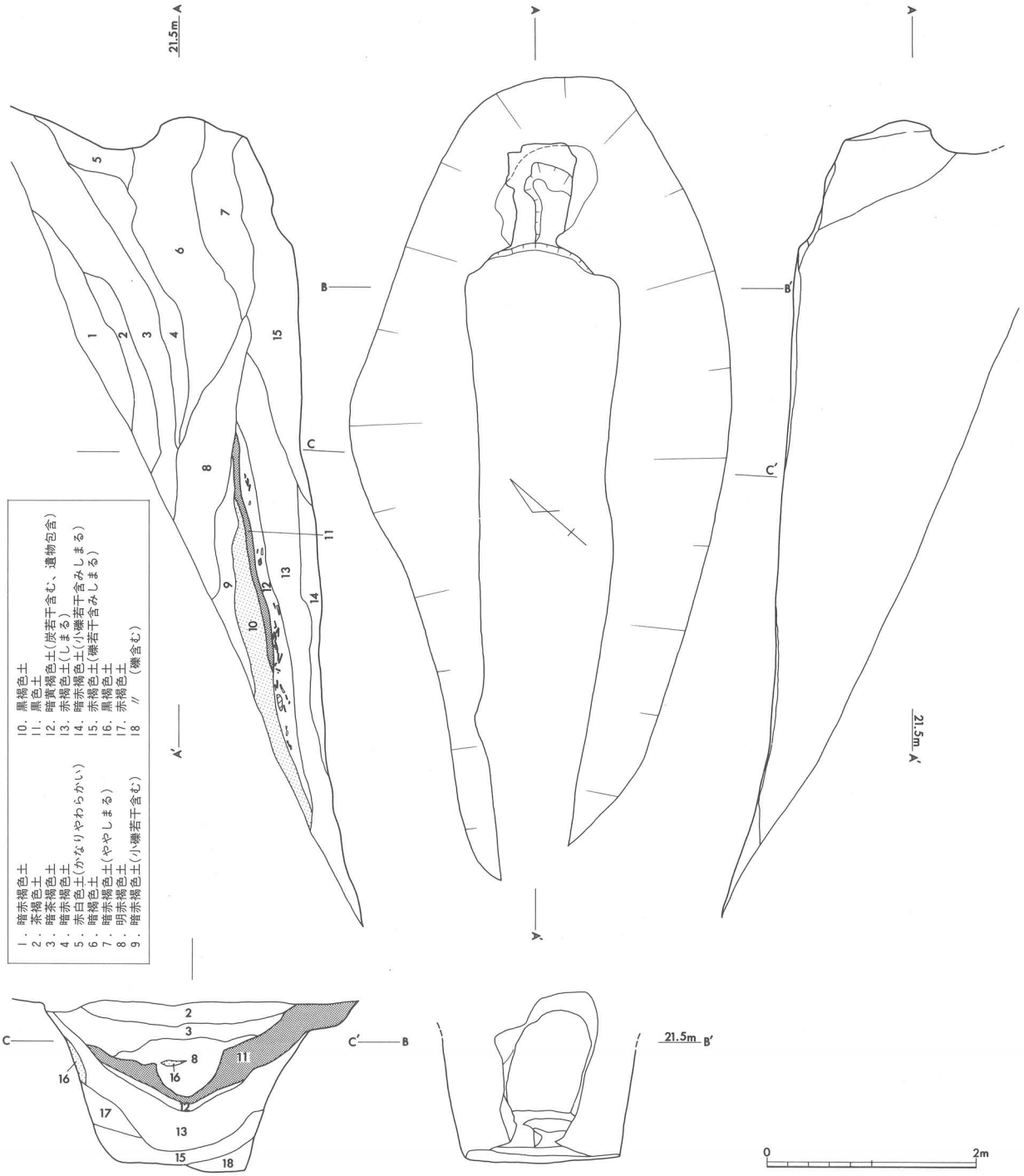
埋土と考えられる。15層は炭を多く包含した腐植土で、その上には若干の炭化物を含む12～14層が堆積している。これらとの切り合いから、9～11層下面は侵入面と推定される。羨道部で検出した閉塞石（第80図）が10層下面までしか残存してない状況もこの事の傍証となろう。堆積状況からはこれ以降の明確な侵入面（もしくは追葬面）は観察されない。2層はきれいな赤褐色系の土砂で、風化礫を多く含むことから天井部の崩落土と考えられる。

前庭部遺物出土状況（第80図）　出土した遺物のうち、原位置を留めていると考えられるのは須恵器2点と閉塞石のみである。5・7はともに19層上面レベルで出土しており、一見追葬時に据え置かれたかの様であるが、或いは初葬で埋土を施す際に供献された可能性も考えられる。閉塞石は割石の凝灰岩を用い、前後の2石は浮いた状態で検出している。侵入時に動いたものであろうか。

前庭部出土遺物（第81図）　1・3～5は坏蓋で、2・6は坏身である。1は口径10.8cm、器高4.2cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ナデを施し、ヘラ記号を有す（第127図）。肩部は不明瞭で、口縁部は強く内湾して端部をまるく納める。2は口径9.9cm、器高3.8cmを測る。返りは低く、底部外面にはナデを施すのみだが、ヘラ記号を有す（第127図）。3は復元口径12.0cm、器高4.5cmを測る。天井部外面はナデを施すのみで、ヘラ記号を有す（第127図）。4は復元口径11.2cm、器高4.1cmを測る。天井部外面はナデを施し、肩部にはナデで僅かにアクセントを付ける。口縁部内面は回転ナデにより段を作る。5は口径12.8cm、器高3.8cmを測る。天井部外面にはナデを施すが、ヘラ起こし痕が認められ、ヘラ記号を有す（第127図）。口縁部は僅かに内湾してまるく納める。6は復

元口径11.3cmを測る。７は壷で口径18.0cm、器高33.2cm、胴部最大径32.1cmを測る。胴部外面には平行タタキを施した後にカキ目を施す。

時期　前庭部出土遺物は、５を除くと口径が総じて11～12cmほどで、調整にも回転ヘラ削りが認められない。これだけの遺物で判断するのは危険ではあるが、遅くとも大谷編年の出雲５期には築造されていたものと考えられよう。



第82図　９号横穴墓実測図（Ｓ＝１／60）

9号横穴墓（第82図）

本遺構は、玄室を持たず墓としては未完成のものであるため、「墓」と表現するのは適切でないと思われるが、便宜上ここでは9号横穴墓と呼称する。

8号横穴墓の西側約14m付近に位置し、南西方向に開口する。床面の標高は19.5～20mで、距離・標高ともに6～8号横穴墓の一群とは異なった位置に構築されている。

前庭部　奥端幅1.46m、前端幅6.6m、奥行き6.0mを測る。平面形態は前方に向かって細くなるタイプである。未完成と言うこともあり、奥端部のコーナーは不明瞭である。地山が軟質であるため加工痕等は認められなかった。床面は前端部に向かって緩やかに傾斜する。

羨道部・玄門部　掘削途中で、羨道か玄門かの区別はできない。現況で奥幅0.45m、手前幅0.43m、奥行き約0.95m、高さ約1mを測る。平面的には右側が比較的整っており、前方から中ほどにかけては幅の変化は認められず、奥側で両側にやや拡張し、更に奥へ掘り進んだ形跡が観察される。床面は前庭部より一段高くなり、奥端部に向かって高く傾斜している。また、平面形の整った右側半分に深さ10cmほどの窪みが観察され、床面を段階的に低くしながら輪郭も整形していく工程が見て取れる。

堆積状況　埋葬を行っていないため、14・15層の性格は明らかでないが、どちらも地山に含まれる礫を含んでいることから、掘削土の可能性が考えられる。12層は甕片を包含する暗黄褐色土で、その上には炭化物を包含した腐植土、10・11層が堆積していた。切り合いから、7～9層下面において侵入を試みた形跡が認められ、8・9層は掻き出し土であろうか。墓は未完成であるため、追葬面の可能性は無く、盗掘か全く別の目的による侵入の可能性がある。1～7層は自然堆積に拠るものと考えられる。

時期　須恵器甕片以外の出土遺物が無いため、掘削時期は不明である。

10号横穴墓（第83図）

9号横穴墓の西約7mの付近に位置し、南西方向に開口する。平面的には9号横穴墓と1単位を形成しているものと考えられるが、床面の標高は約17～18mで、比高差は2m余りである。

前庭部　奥幅約1.6m、前端幅約2.1m、奥行き7.8mを測る。平面形態は前方に向かって僅かに幅広になるタイプで、横穴墓群中では長大なタイプと言える。床面は前端部に向かって傾斜する。

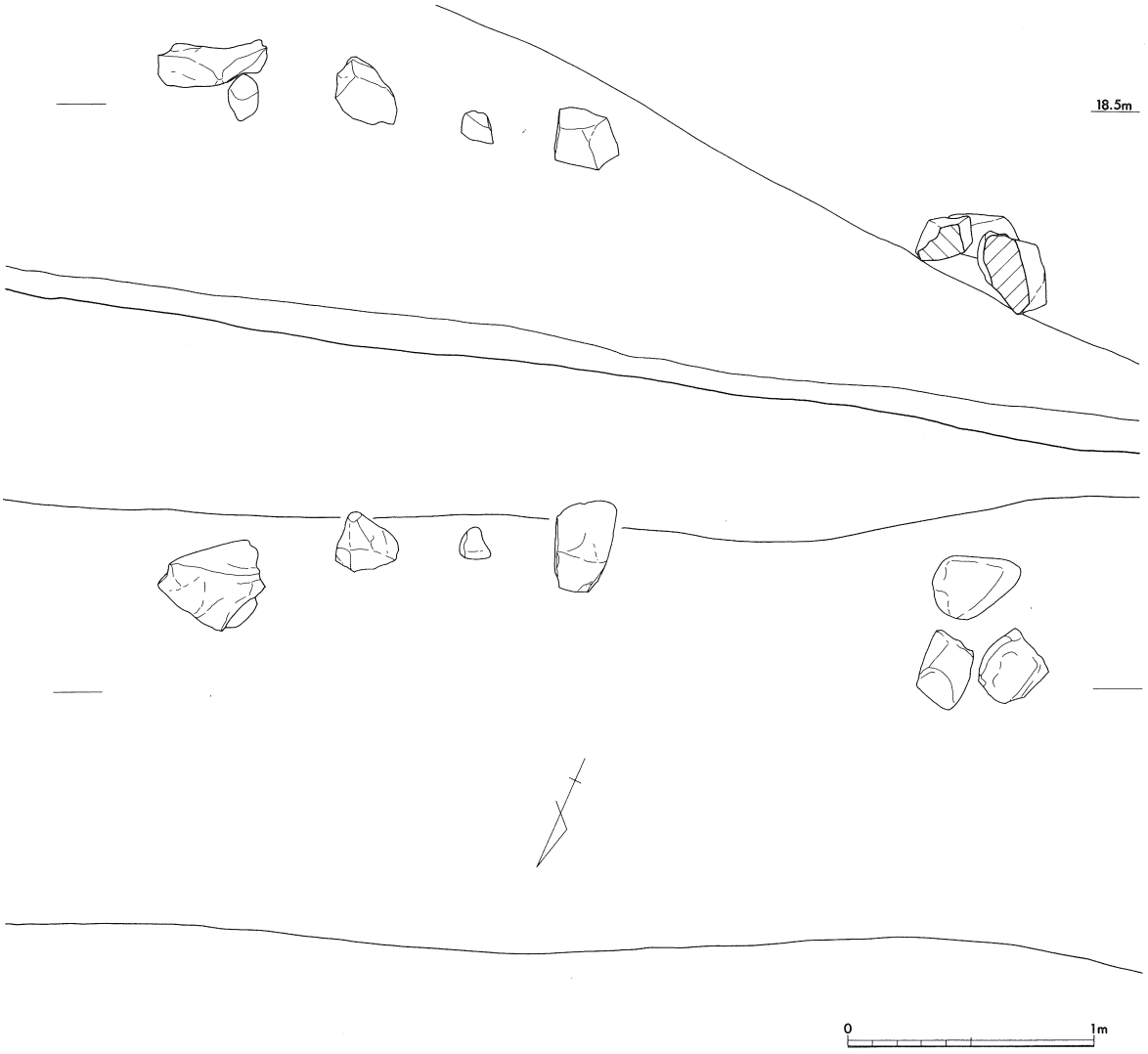
羨道部　奥幅0.95m、手前幅約0.9m、奥行き約0.6mを測る。平面的には幅の変化の無い形態を呈す。天井部は完全に崩落しているため高さや形態は不明である。閉塞部床面には特に加工を施した形跡は認められない。

玄門部　奥幅0.7m、手前幅0.65m、奥行き約0.7mを測る。天井部は完全に崩落しているため高さや形態は不明である。

玄室　現況で幅は奥壁側で1.95m、袖側で約2.2m、奥行き約2.2mを測る。4壁の遺存状態は悪いが、袖側がやや幅広の台形プランを呈している。奥壁側の天井部に棟線の一部が残存するが、崩落のため高さは不明である。残りは悪いが4隅の床面からは界線が立上る。剥落のため、軒線の有無は不明である。玄室の形態は平入りのテント形かテント系家形であったと考えられる。床面には特に加工した痕跡は認められない。

堆積状況　14・15層は初葬時の埋土と考えられる。9層は炭化物を包含する腐植土で、その上に

第83図　10号横穴墓実測図（S＝1／60）

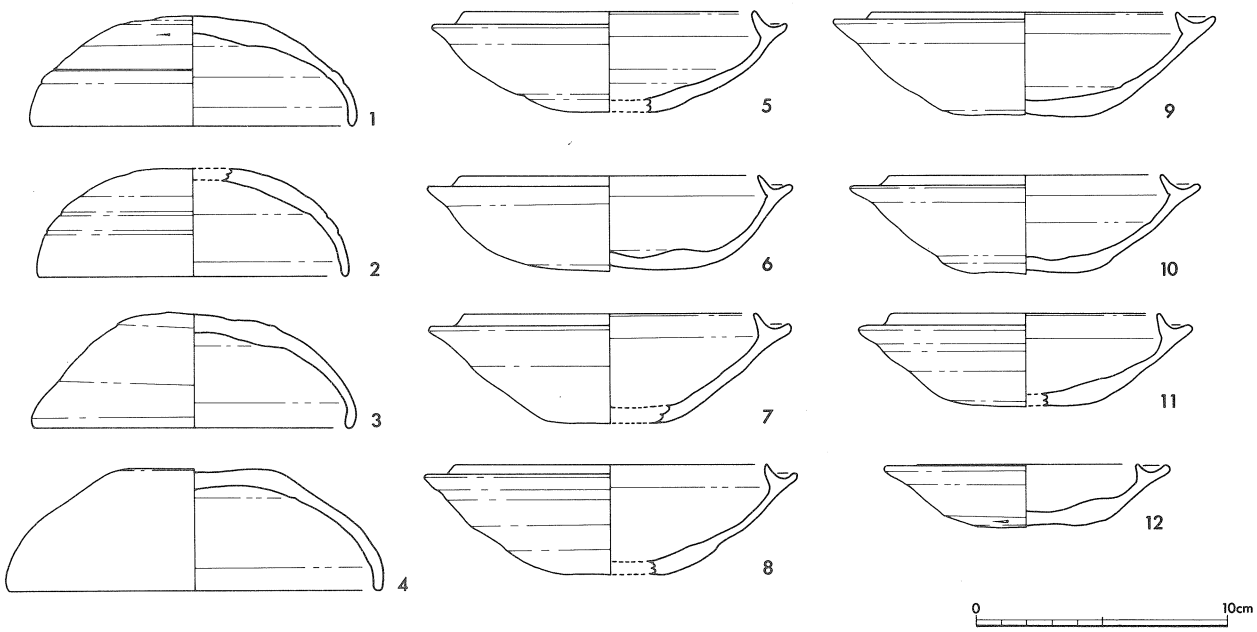


第84図　10号横穴墓前庭部閉塞石出土状況（S＝1／30）

赤褐色土８層が堆積している。縦断土層の切り合いからは７層下面が侵入面のように見えるが、横断土層では９層を切っている状況が見て取れ、８層下面から７層下面にかけてが侵入面と考えられる。この面は前庭奥端部床面付近まで確認することが出来る。後述するが、前庭部からは閉塞石が出土しており、これらはレベル的には９層上面から７層にかけての位置にあり、侵入時に動かされたものと推定される。７・８層は掻き出し土であろうか。５・６層は比較的きれいな土砂で、天井部の崩落土と考えられる。

閉塞石出土状況（第84図）　前庭部の中間から前端部にかけての浮いた位置から閉塞石が並んだ状態で出土している。石材は30cm内外の割石凝灰岩を使用している。調査の都合上、図化は出来なかったが、前庭部の左側からも同じレベルで数点ほど検出している。初葬時の閉塞石と考えられ、除去後に放置した状況と言えよう。

前庭部出土遺物（第85図）　前庭部から検出した甕片以外の遺物のうち、図化し得たのは蓋（１～４）と坏（５～12）だけである。１は口径12.7cm、器高4.4cmを測る。天井部外面はヘラ切り後、外周に回転ヘラ削りを施す。肩部には浅い沈線を２条廻らし稜を作り出す。口縁部は僅かに内湾気味



第85図　10号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3）

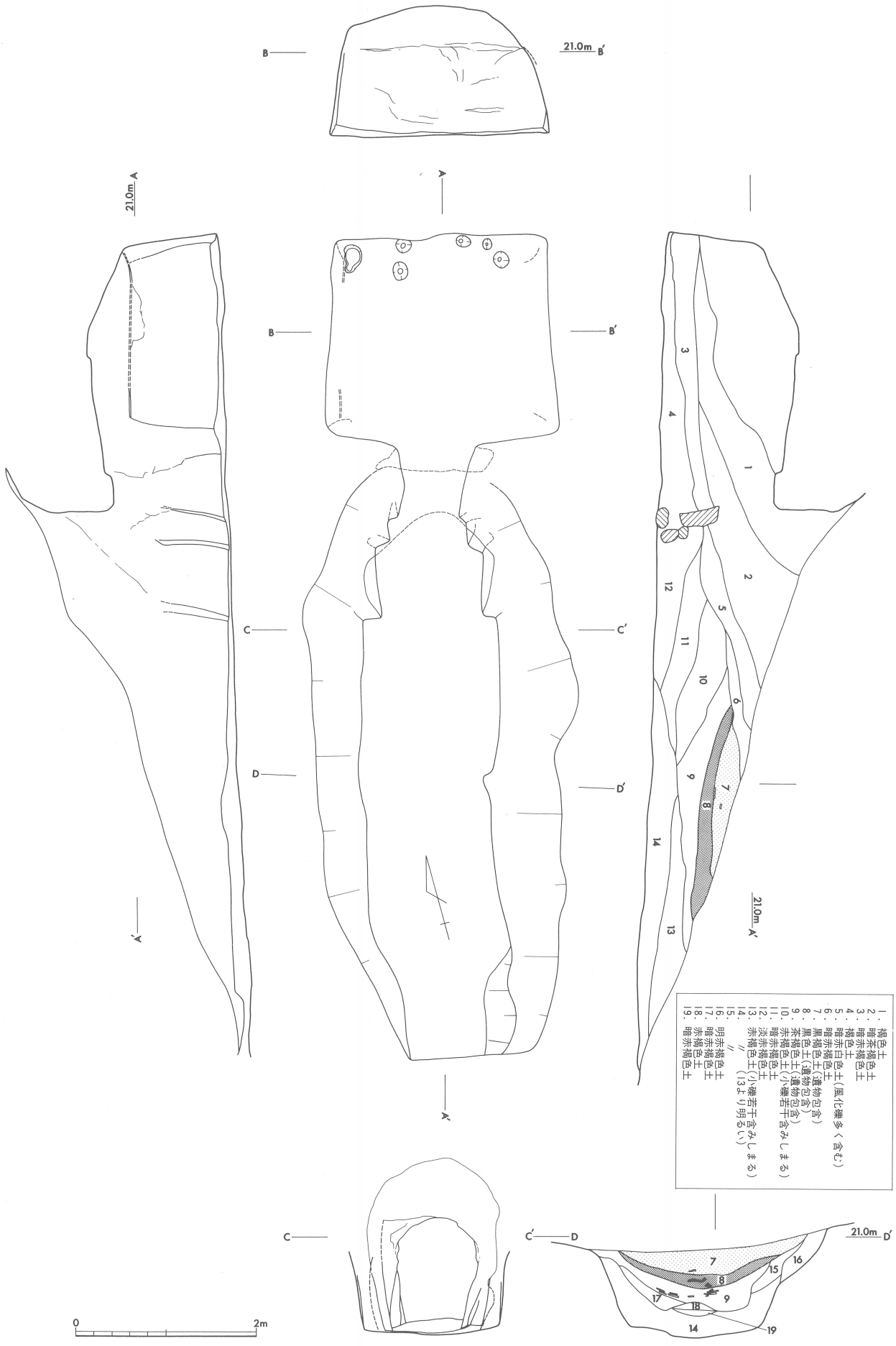
にまるく納める。2は復元口径12.1cm、器高4.3cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ナデを施すのみである。肩部には沈線を2条廻らし、口縁部内面には強い回転ナデにより浅い段を作る。3は口径12.5cm、器高4.6cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ナデを施し、板状工具による擦痕も認められる。肩部は不明瞭で、口縁部は内湾する。4は復元口径14.6cmを測るが本来の大きさでない。焼成不良で、風化が著しいため外面の調整は判然としない。口縁部は僅かに内湾する。5は復元口径11.5cm、器高4.0cmを測る。返りは低く、底部外面はヘラ切り後ナデを施すのみである。6は口径11.9cm、器高3.8cmを測る。底部がまるみを持つものの、5と同様の作りである。7は復元口径11.6cm、器高4.4cmを測る。底部を欠損するが5と同様の作りであろう。8は復元口径12.4cm、器高4.4cmを測り、底部を欠失する。返りは低く、端部を鋭く納める。9は口径12.2cm、器高4.2cmを測り、焼成不良である。10は復元口径10.9cm、器高3.9cmを測り、底部外面にはナデを施すのみである。11は復元口径10.7cm、器高4.7cmを測る。12は口径8.8cm、器高2.5cmを測り、小型化したものである。底部外面には外周に回転ヘラ削りが認められ、中心部はナデを施す。返りは受部とほぼ同じ高さまでしか立ち上がらない。

時期　前庭部出土の蓋については、1が出雲4期まで遡る可能性があるが、あとは出雲5期の範疇で捉えられるものである。身は12が出雲6期で、あとは5期に相当すると考えられる。こうした状況から、10号横穴墓は大谷編年の遅くとも出雲5期の段階には築造されていたと思われるが、上限と下限は定かでない。

11号横穴墓（第86図）

1号横穴墓の西側約19m付近に位置し、上方には3・4号横穴墓が築かれる。南向きに開口し、床面の標高は約20mで、下段の中でも1・9・12・13号横穴墓と同じレベルに構築されている。

前庭部　奥幅1.46m、前端幅1.0m、奥行き4.9mを測る。平面形態は前方に向かってやや細くな



第86図　11号横穴墓実測図（S＝1／60）

る。床面は前端部に向かって緩やかに傾斜するが、ほとんど差は無い。

羨道部　奥幅1.15m、手前幅1.1m、奥行き約0.75mを測る。平面的にはほとんど幅に変化の無いものである。天井部は完全に崩落しているため高さや形態は不明である。閉塞部床面には特に加工を施した形跡は認められない。

玄門部　奥幅約0.9m、手前幅約0.66m、奥行き約0.75mを測り、奥側が開く形態をする。天井部は崩落しているため、本来の高さや形態は不明である。

玄室　幅は奥壁側で約2.3m、袖側で約2.5m、奥行き約2.3mを測り、奥壁と右壁は剥落が著しい。平面的にはほぼ正方形プランを呈す。天井部は崩落し、ほとんど原形を留めないため高さは不明である。右袖部を除く3隅の床面からは界線が立上り、棟線へと続く。左壁には僅かながら軒線が観察され、玄室の形態はテント系家形であったと推定される。

堆積状況　13・14層は初葬時の埋土と考えられる。切り合いから、これらの上面が侵入面と推定される。侵入面は羨道部まで到達していない。閉塞状況（第87図）についての詳細は後述するが、閉塞は2回行われた形跡があり、この侵入は追葬に拠るものと推定される。10～12層は2次葬時の埋土である可能性が高い。9層は甕片を多量に包含した土砂で、7・8層も遺物を包含した腐植土である。切り合いから5・6層下面で再度侵入を受けている状況が窺える。5層は風化礫を多く含むことから、崩落土を掻き出したものであろうか。土層観察の結果、11号横穴墓においては、埋葬を含めて最低3回の侵入を受けていると考えられる。

閉塞状況（第87図）　閉塞部にはめ込んだ状態で閉塞石を検出した。閉塞には地山に多く含まれた自然礫と、板状の切り石凝灰岩1枚を使用している。礫は20cm内外で、閉塞部の右側に2列ないしは3列に積み上げた状態であった。一方、切り石凝灰岩は幅約60cm、高さ約80cm、厚さ約20cmを測り、小礫や土の上に立った状態で出土している。下から出土した礫は閉塞に用いられたものと同様の石材であることから、初葬時に礫積みで閉塞し、追葬時に除去した部位に切り石で再閉塞したものと推定される。礫が切り石の手前にかぶっている箇所も見受けられるが、これは追葬時にすきまを埋めるために再利用したものと考えられる。閉塞状況を立面で見ると、礫積みの上方に不自然な空白部が認められ、土層と重ね見ると5層下面のレベルに相当することが分かる。このことから、最終侵入時にこの部分が破壊されたとことが推測される。

玄室内遺物出土状況（第87図）　玄室内からは須恵器11点、鉄器2点のほか人骨、棺台として用いた石材等を検出している。棺台は玄室右壁と左壁に縦方向に配置され、玄室中央部には幅約1.2mに亘って須恵器床が敷かれている。左側棺台の石材は、袖近くの石以外は動いており、特に奥壁側の石はかなり浮いた位置で出土している。本来は左奥隅の窪みに収まっていた可能性もある。

人骨は右側棺台付近からは検出していないが、左側棺台付近と、須恵器床上から検出している。棺台側では頭骨が石の上に乗った状態で出土している。須恵器床からは2体が並列し、須恵器甕の口頸部を枕にした状態で検出している。人骨はいずれも袖側に頭を向けて埋葬されているのが特徴的である。

検出した須恵器は坏蓋2点、坏身7点、蓋脚付き椀（10）、平瓶（11）である。1・2と3・4はセットと考えられ、1・2はともに伏せた状態でやや離れた位置から出土している。5～9は坏身で、すべて伏せた状態で須恵器床の左側人骨周辺から出土している。6は枕の甕片下で検出した。

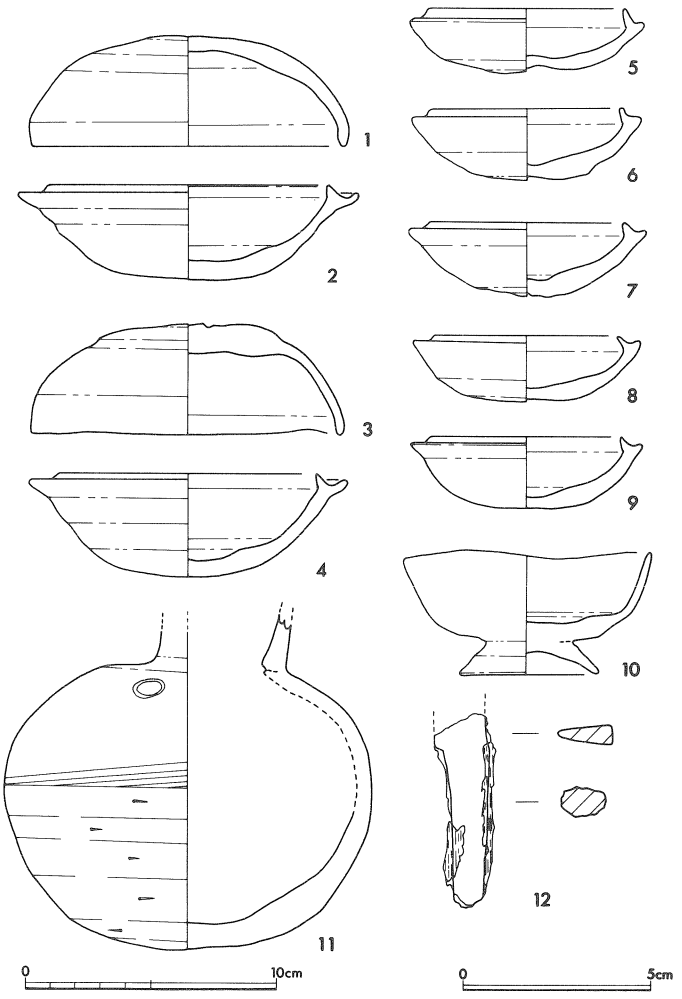
13の直刀は右側壁に沿って置かれていたもので、切先を奥壁側に向けて、浮き上がった状態で出

第87図　11号横穴墓玄室内遺物出土状況・閉塞石実測図（S＝1／30）

土している。

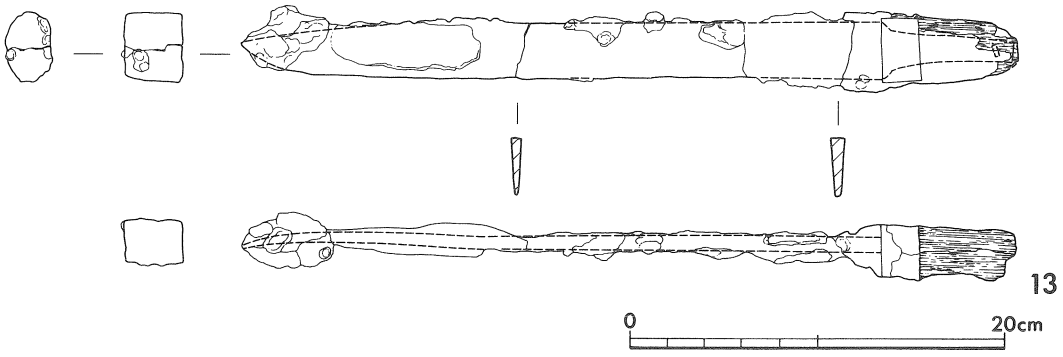
玄室内出土遺物（第88図・89図）　1は坏蓋で口径12.4cm、器高4.4cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ナデを施すのみである。肩部は不明瞭でまるく、口縁部は僅かに内湾する。2は1とセッ

トになる坏身で、口径11.2cm、器高3.8cmを測る。返りは低く、底部外面はナデを施すのみである。3は坏蓋で口径12.3cm、器高4.4cmを測り、焼歪と割れが生じている。天井部外面はヘラ切り後未調整であるが、「×」状のヘラ記号を有す（第127図）。肩部は不明瞭で、口縁部はまるく単純に納める。4は3とセットになる坏身で、口径10.3cm、器高4.1cmを測り、外面に自然釉が付着する。返りは低く、底部外面はヘラ切り後ナデを施すのみだが、3と同様に「×」状のヘラ記号を有す（第127図）。5～9は坏身である。5は口径7.8cm、器高2.6cmを測る。小型化したもので、外面には緑色の自然釉が付着する。底部外面はヘラ切り後未調整である。底部内面には板状工具によるナデが観察される。6は口径7.7cm、器高2.9cmを測り、外面には自然釉が付着している。受部の突出はほとんど無い。底部外面のヘラ切り後の調整は、釉付着のため判然としない。内面は全面に回転ナデを施す。7は口径7.8cm、器高3.0cmを測り、外面に僅かに自然釉が付着する。底部外面はヘラ切り後未調整で、内面は全面に回転ナデを施す。8は口径7.4cm、器高2.7cmを測り、外面には自然釉が付着する。返りは内湾して低く立ち上がる。底部外面にはヘラ切り後、板状工具による擦痕が認められる。9は口径7.6cm、器高2.9cmを測り、外面には緑色の自然釉が付着する。底部外面はヘラ切り後未調整である。5～9はすべて自然釉が付着し、形態も似ていることから同じ窯で焼成された可能性が高い。10は脚付き椀で、椀部に歪みが見られるが口径約10cm、器高5.0cm、脚口径5.6cmを測る。脚部は直線的に「ハ」状に開き、端部は単純にまるく納める。11は口縁部を欠損する平瓶で、胴部最大径14.6cmを測る。把手は持たないが、径1.2cmほどの竹管文を2箇所に施す。胴部下半にはカキ目を施した後、丁寧な回転ヘラ削りを施し底部をまるく仕上げる。

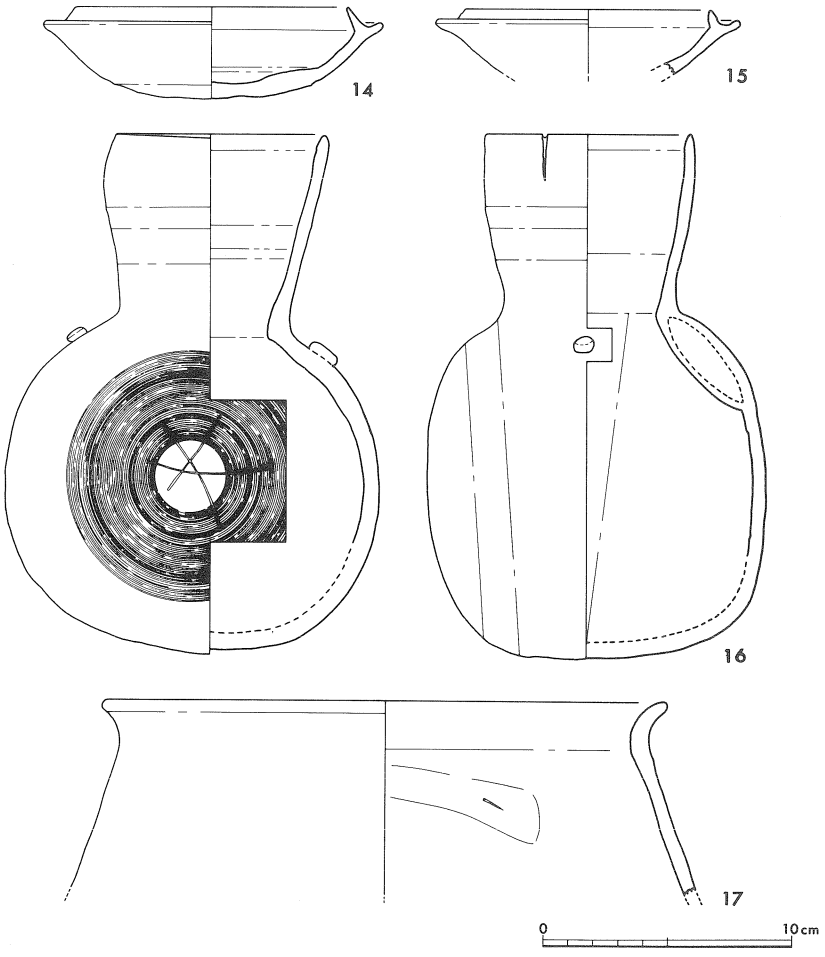


第88図　11号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)（S＝1／3、12は1／2）

12は刀子で茎部約5cmほどが残存する。元幅1.4cmを測り、刃側に僅かに関が観察される。13は全長41.4cm、元幅3.1cmの直刀で、長さ3.1cm、幅3.6cmの鞘尻金具とともに出土したものである。刀身長34.0cm、茎長6.8cmを測り、X線写真で鎺金具が観察される。関は均等な両関で、茎は両側が緩やかに細くなるタイプである。茎尻には長方形の目釘穴が観察される。柄、刀身部には木質が付着し、鞘尻金具も出土していることから鞘に納



第89図　11号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)（S＝1／4）



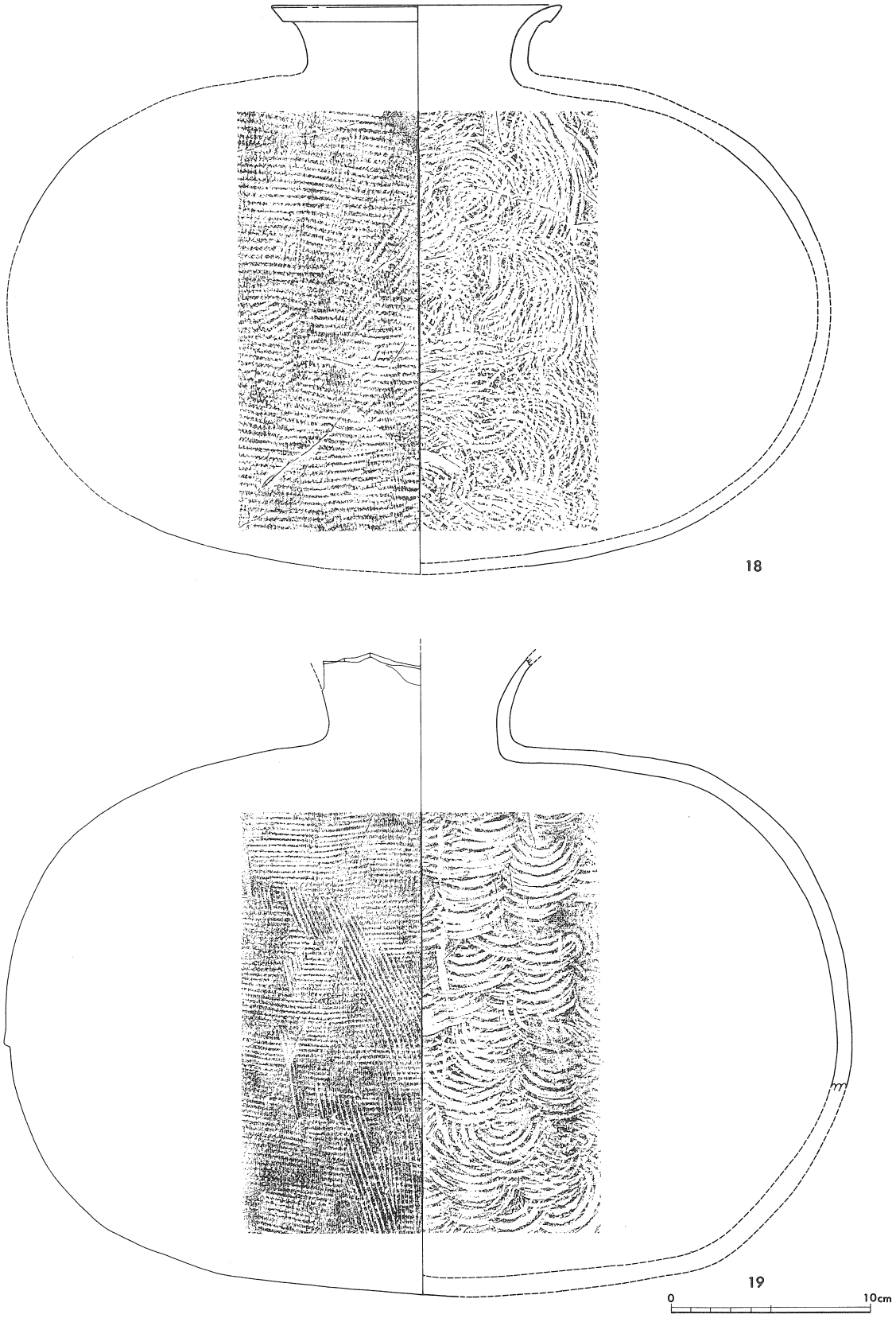
第90図　11号横穴墓前庭部出土遺物実測図(1)（S＝1／3）

まっていた状況が窺える。

前庭部出土遺物（第90図・91図）　前庭部からは甕片のほかに坏身（14・15）、提　瓶（16）、横　瓶（18・19）、土師器甕を検出している。14は口径10.9cm、器 高3.6cmを測る。底部外面はヘラ切り後ナデを施すのみだが、ヘラ記号を有す（第127図）。15は復元口径9.8cmを測り、底部を欠失する。16は口径8.2cm、器 高20.7cmを測る。口頸部は僅かに内湾しながら立上り、端部を単純にまるく納める。頸部付け根にボタン状の把手を2個貼り付け、背面は回転ヘラ削りを、腹面には目の細かいカキ目の後に回転ナデを施す。腹面にはヘラ記号が観察される（第127図）。17は焼成不良で淡黄褐色を呈し、復元口径22.4cmを測る。頸部以下にはヘラ削りを施す。18は口径14.5cmを測り、底部を欠失するが復元すると器高約29cmにはなろうか。口縁部は二重口縁で、胴部外面には平行タタキを施した後にカキ目を施し、内面には青海波文の当て具痕が観察される。19は口縁部を欠損し、胴部は18と同様の作りである。

時期　玄室内出土蓋坏の1～4と、5～9には明らかに時期差が認められ、前者は大谷編年の出

雲５期、後者は出雲６期に該当する。これらの土器型式と出土状況から、埋葬順序は右側棺台→左側棺台→須恵器床と推定されるが、初葬時に伴うと思われる遺物を検出していないため上限が４期



第91図　11号横穴墓前庭部出土遺物実測図(2)（Ｓ＝１／３）

まで遡るかどうかは明らかでない。

前庭部出土遺物については、14・15が５期、16は４～５期に見られるタイプである。こうした状況から、11号横穴墓は出雲５期には構築され６期まで追葬が繰り返されたものと考えられる。

12号横穴墓（第92図）

11号横穴墓の西側約５m付近に位置し、11号横穴墓と１単位を形成する。上方には４号横穴墓が築かれる。南向きに開口し、床面の標高は19.5～20mである。

墓道　奥幅1.6m、前端幅0.8m、奥行き5.7mを測る。平面形態は奥端部で大きく開き、不整形による凸凹はあるものの、基本的には前端部に至るまで大きな変化は無い。床面は前端部に向かって緩やかに傾斜する。上段の横穴墓と比較すると、平均して幅が狭く前庭より寧ろ墓道と言うべき印象を受ける。

玄門部　奥幅約1.0m、手前幅約0.7m、奥行き0.95mを測る。墓道との境の抉りは、羨道部とするには奥行きが無く、検出時に閉塞石が全面を被っていたことからここでは閉塞部と表現しておく。閉塞部は幅1.05m、奥行き0.45mを測る。玄門部の平面形態は、奥側が開くタイプで、天井部は完全に崩落しているため、本来の高さや形態は不明である。

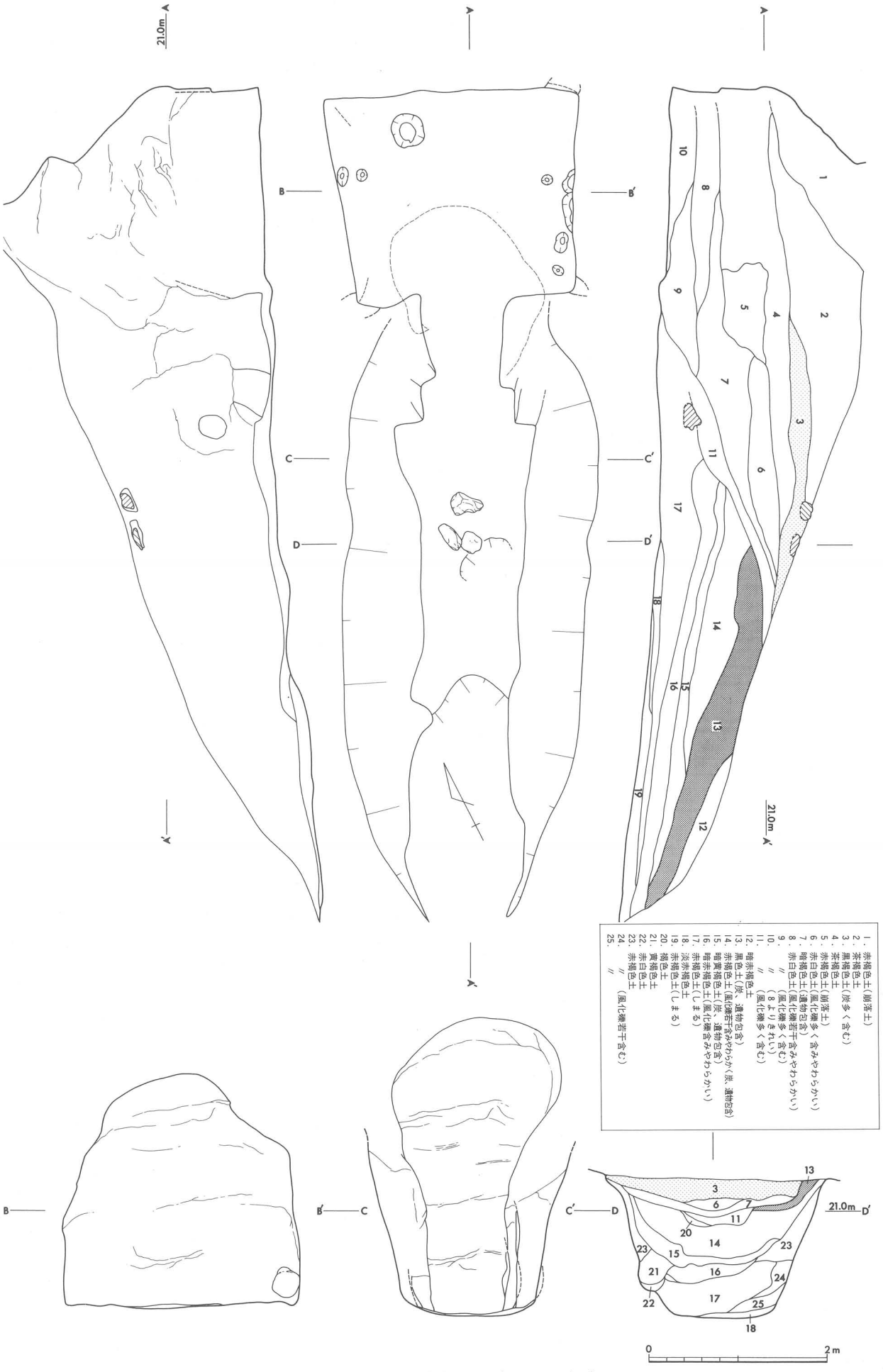
玄室　幅は奥壁側で約2.8m、袖側で約2.4m、奥行き約2.3mを測る。４壁とも剥落が著しく遺存状態は極めて悪い。平面的には奥側が幅広の台形プランを呈す。天井部はほとんど崩落し、原形を留めていないため高さは不明だが、左壁で僅かに棟線が観察される。軒線の有無は不明で、玄室の形態はテント形かテント系家形であったと推定される。

堆積状況　縦断土層からは分かりにくいが、横断土層で17層下面は18・24・25層を切っており、これらは初葬時の埋土若しくは掘削土と考えられる。16・17層は２次葬時の埋土であろう。横断土層の21層は、動物による撹乱溝に堆積したもので、15層堆積以前に16層がある期間表層となっていたことの傍証と言える。13～15層は遺物包含層で、13層は腐植土である。縦断・横断土層から分かるように、切り合いから11層下面は侵入面と考えられ、閉塞部まで確認することが出来る。閉塞状況の項に詳細は譲るとして、この侵入時に閉塞石が除去されていることが観察された。11層は掻き出し土と考えられる。５・６・８～10層は風化礫を多く含んだきれいな土砂で、玄門部から玄室にかけての天井崩落土と推定される。３層は炭化物を含む腐植土で、床面から約1.5mのレベルから割石の凝灰岩を検出している。３層はほとんど水平に堆積しており、特に玄室に向けて切り込んだ痕跡が無いため、閉塞石であったか否かは不明である。

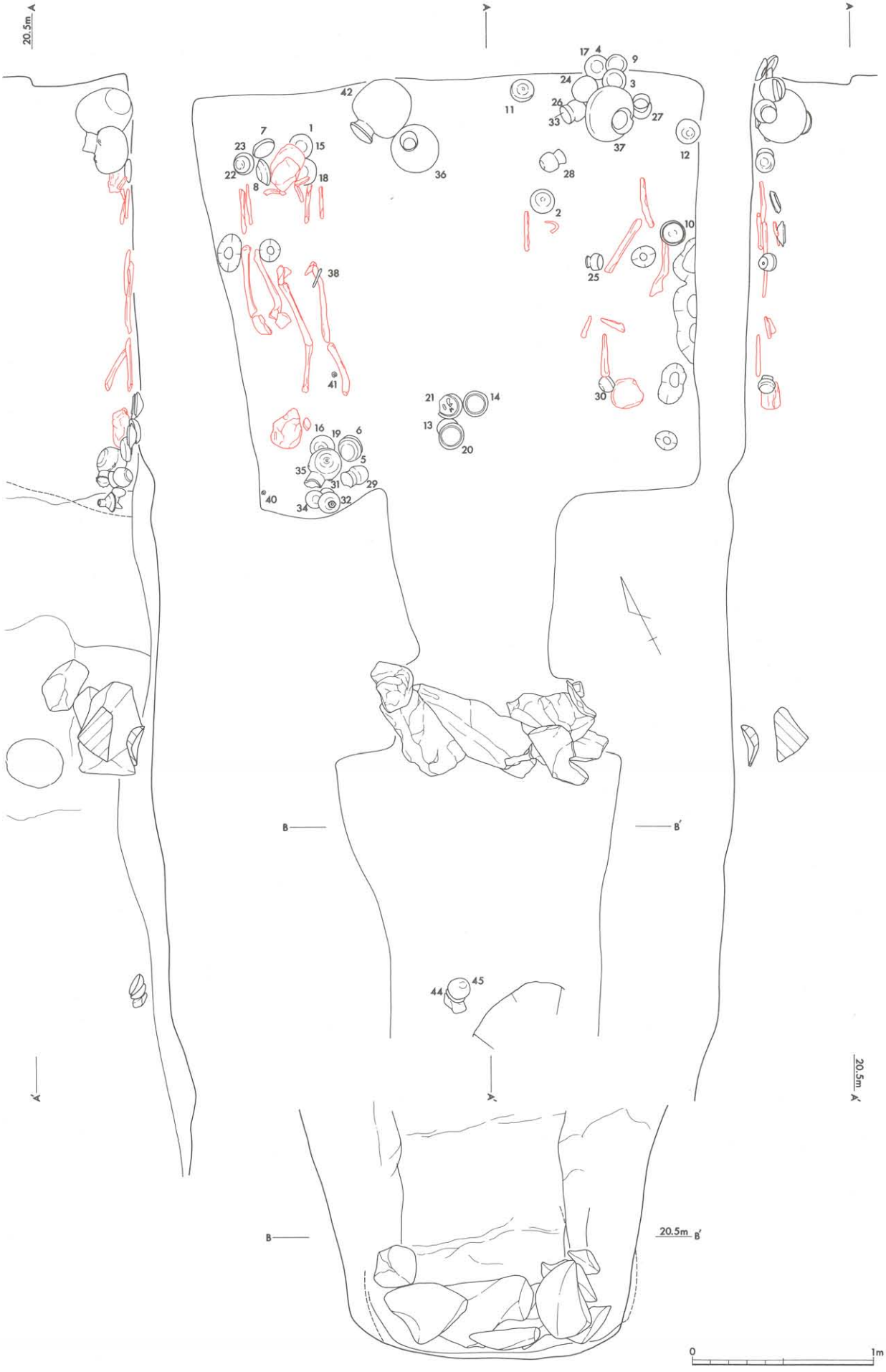
土層観察の結果、初葬も含めると最低３回の侵入が行われたと言える。

閉塞状況（第93図）　堆積状況の項で触れたが、18層上面が追葬面と考えられるため、この閉塞は２次葬時の所産である可能性が高いと思われる。閉塞には割石の凝灰岩を用いており、床面から閉塞部にはめ込む様に積んだ状態で検出した。基底部に大きめの石を使用し、上部には小振りなものを乗せていたようだが、検出時点で中央部には基底部の石材しか残存していなかった。上面のレベルは縦断土層の11層下面に位置し、上積みされていた石材のほとんどはこの時点で除去されたと考えるのが自然であろう。

遺物出土状況（第93図）　堆積土中から取り上げたもの以外に、墓道では18層上面から坏蓋（44・45）を検出している。遺物は小礫の上に半分乗った状態で、２枚重ねて出土しており、掻き出した



第92図　12号横穴墓実測図（S＝1／60）



第93図　12号横穴墓遺物出土状況・閉塞石実測図（S＝1／30）

ものとは考え難い。

玄室内からは人骨と共に須恵器38点、耳環１セット、鉄器等を検出している。人骨は一見して玄室右壁側に１体と左壁側に２体認められ、それぞれ壁に平行して埋葬されていた。右壁の１体は頭骨を袖側に、左壁側の２体は頭部を互い違いに安置されている。須恵器はこれらの人骨周辺に集中して置かれた３群と、玄室中央部に置かれた２群の計五つのまとまりを呈している。

右奥の群のうち、蓋17は坏身４の下から、高坏33は横転した直口壷26の中から検出している。左奥の群では、蓋22が短頸壷23に被せた状態で出土し、坏蓋１と15は重ね伏せた状態で18と共に頭骨の下から検出している。枕として用いた可能性が強い。左袖の群では、蓋坏５・６と16・19がセットで出土している。玄室中央の２群（13・14・20・21・36・42）は、互いに離れた位置ではあるが出土遺物の中では新しい様相のもので、原位置であれば玄室中央での埋葬も想定される。

玄室内出土遺物（第94図～96図）　玄室出土須恵器の器種構成は蓋坏（１～21）、壷蓋（17）、短頸壷（23・24）、脚付き椀（25）、直口壷（26～30）、𤭯（31・32）、長脚無蓋高坏（33・34）、提瓶（35）、平瓶（36）、壷（37・42）等である。

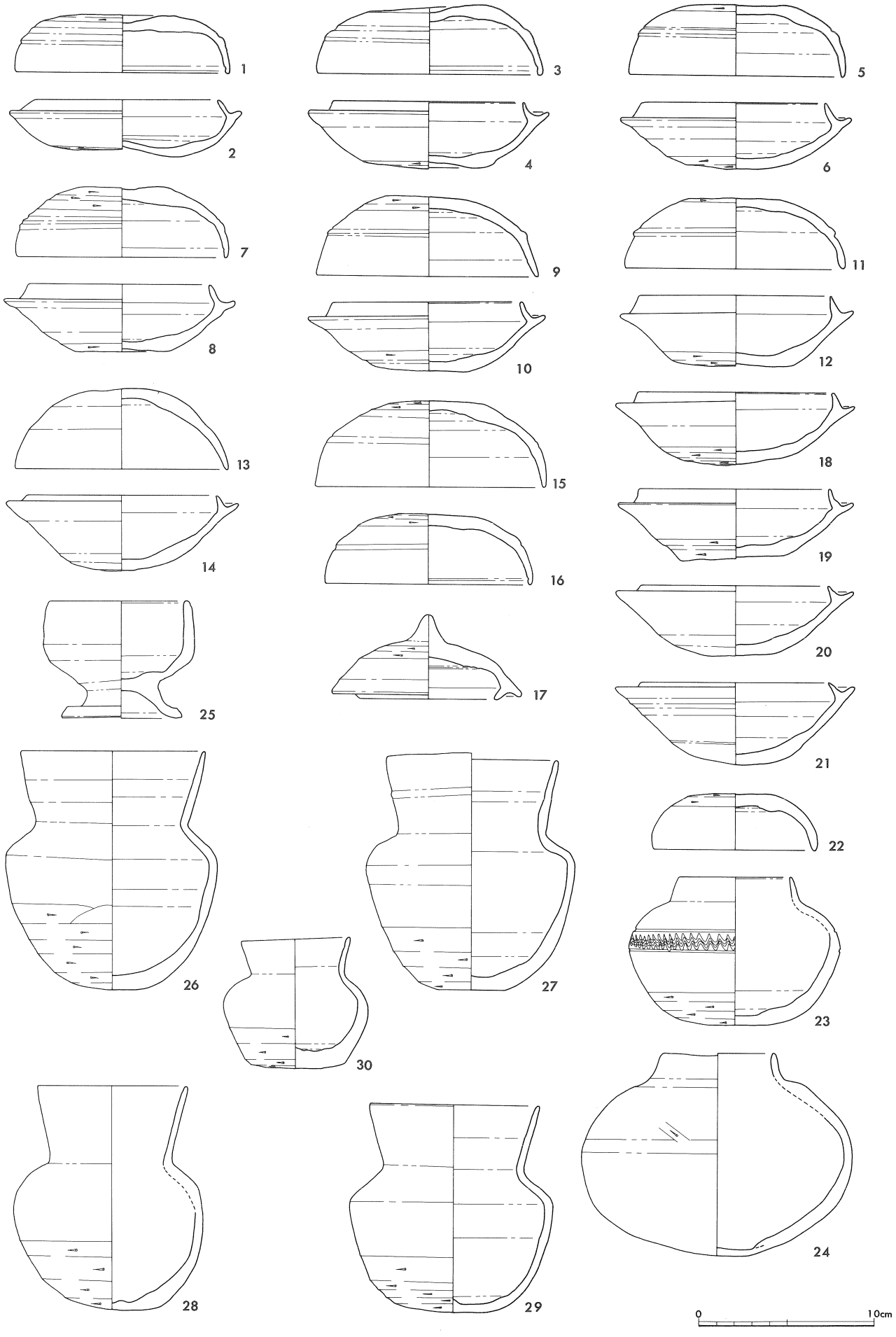
１は口径12.2cm、器高3.1cmを測る。天井部外面にはヘラ切り後に回転ヘラ削りを施し、ヘラ起こしの際に陥没した部分には強いナデを施す。肩部には沈線と回転ナデにより稜を作り出す。口縁部内面の端部近くには沈線を１条廻らす。２は口径10.5cm、器高3.3cmを測る。返りは内湾気味に立上り、底部外面には回転ヘラ削りを施す。１と同様に、陥没部にはナデを施す。３は口径12.６cm、器高3.8cmを測る。天井部外面には中心から回転ヘラ削りを施し、一部に板状工具による擦痕も観察出来る。肩部は沈線２条を廻らして稜を作り出す。口縁部内面の端部近くに沈線を廻らす。４は口径10.9cm、器高3.8cmを測る。返りは外反して低く立上り、底部外面の周辺部には回転ヘラ削りを施すが、ヘラ起こし痕も認められる。５は口径12.2cm、器高4.1cmを測る。天井部外面には回転ヘラ削りを施し、肩部には沈線と回転ナデにより稜を作り出す。６は口径10.5cm、器高3.8cmを測り、底部外面は中心から回転ヘラ削りを施す。７は口径12.0cm、器高3.9cmを測り、天井部外面は中心部から回転ヘラ削りを施す。肩部には沈線２条と回転ナデにより稜を作り出し、口縁内面の端部付近に僅かに段をなす。８は口径10.3cm、器高3.8cmを測る。底部外面には粗雑な回転ヘラ削りを施す。９は口径12.5cm、器高4.6cmを測る。天井部外面には中心付近から雑な回転ヘラ削りを施し、肩部には沈線と回転ナデにより稜を作り出す。口縁部は直線的に外に開くもので、他の蓋とは異なった形態を呈す。10は口径10.7cm、器高4.0cmを測り、底部外面に回転ヘラ削りを施す。11は口径12.4cm、器高4.0cmを測る。天井部外面の周辺に回転ヘラ削りを施し、肩部には沈線と回転ナデにより稜を作り出す。口縁部はやや肥厚し、端部をまるく納める。12は口径10.9cm、器高4.1cmを測るもので、底部外面には回転ヘラ削りを施すが、中心部にはヘラ起こし痕が認められる。13は口径12.0cm、器高4.6cmを測り、焼成不良である。天井部外面にはヘラ切り後ナデを施すのみである。肩部は不明瞭でまるい作りのものである。14は口径10.8cm、器高4.3cmを測り、焼成不良である。返りは低く、底部外面もヘラ切り後ナデを施すのみである。15は口径13.0cm、器高4.9cmを測る。天井部外面は中心から回転ヘラ削りを施す。肩部は浅い沈線を１～２条廻らしアクセントを付ける。16は口径11.6cm、器高4.0cmを測り、天井部外面には回転ヘラ削りが認められる。肩部は沈線を１条廻らして稜を作る。口縁部内面の端部近くに沈線を１条廻らし、段状に仕上げる。17は口径7.7cm、器高4.8cmを測る。乳頭状つまみを持つもので、天井部外面には回転ヘラ削りを施す。18

は口径11.1cm、器高4.2cmを測る。底部外面は中心部より回転ヘラ削りを施す。19は口径10.8cm、器高4.0cmを測る。底部外面の周辺部に回転ヘラ削りを施す。20は口径10.7cm、器高4.1cmを測る。返りは低く、底部もヘラ切り後にナデを施すのみである。21は口径10.7cm、器高4.7cmを測り焼成不良である。作りは20と同様のものである。1～14は胎土や焼成から製作時のセットと考えられるが、出土時のセットとは必ずしも同じではない。

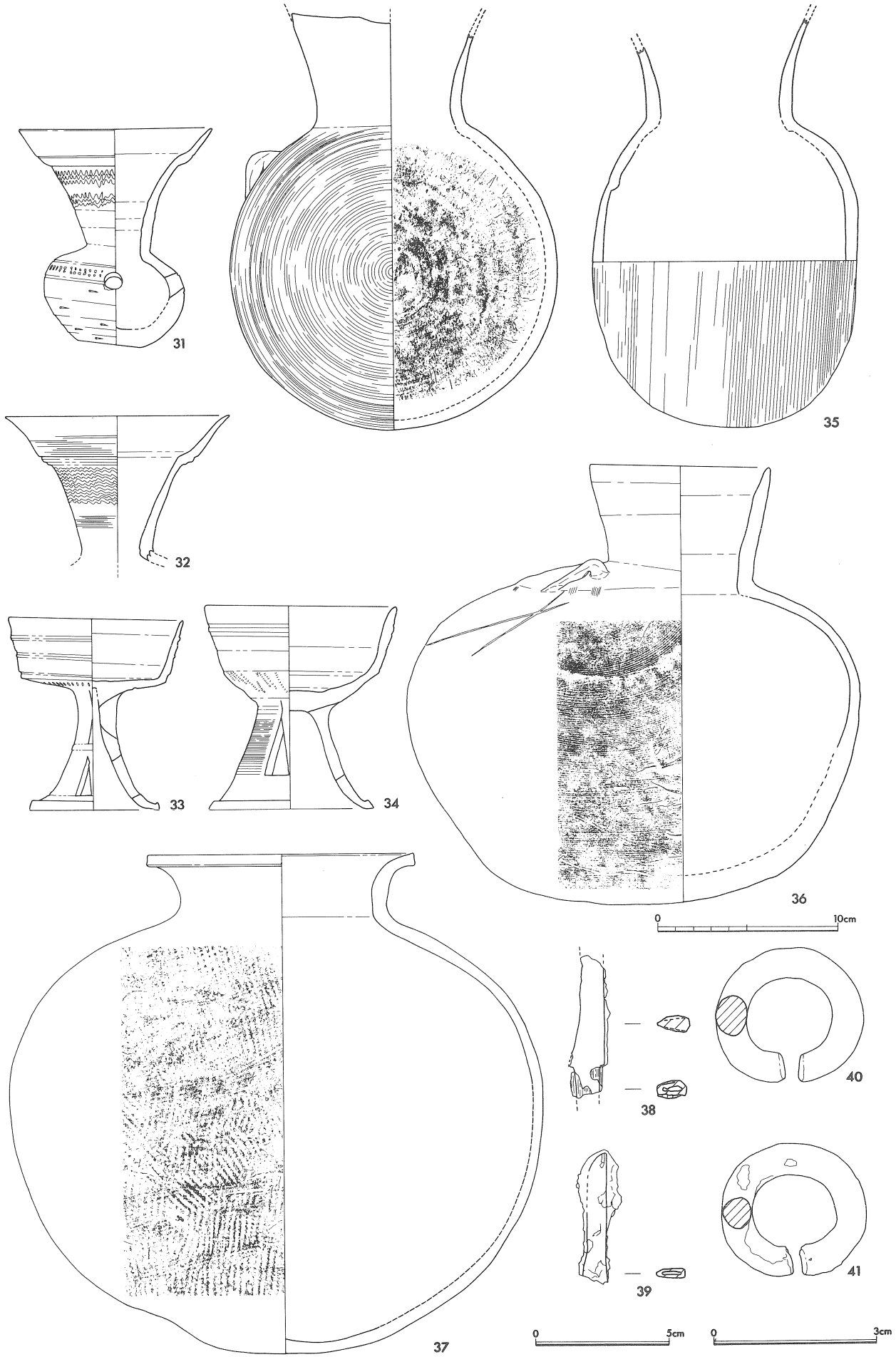
22は23とセットで検出したもので、口径9.1cm、器高3.2cmを測る。天井部外面には回転ヘラ削りを施し、中心部にはヘラ起こし痕が残る。底部内面は未調整である。23は口径6.3cm、器高8.4cm、胴部最大径12.0cmを測り、口縁を除く外面上部に自然釉が付着する。胴部には波状文が施され、その上下に沈線を廻らす。底部内面には赤色顔料が認められる。24は口径6.3cm、器高11.5cm、胴部最大径15.4cmを測り、外面には緑色の自然釉が付着する。胴部には板状工具の痕が認められ、口縁から底部にかけて回転ナデを施す。25は口径7.8cm、器高6.6cm、脚口径6.8cmを測る。透しは無く、脚端部は内傾して面をなす。26は口径10.4cm、器高13.6cm、胴部最大径12.0cmを測り、胴下半以下に回転ヘラ削りを施す。27は口径9.8cm、器高13.4cm、胴部最大径12.0cmを測り、肩の張りは大きい。28は口径8.5cm、器高12.7cm、胴部最大径10.8cmとやや小振りで、肩部にまるみを持つものである。29は口径9.6cm、器高11.8cm、胴部最大径11.6cmを測る。30は口径6.1cm、器高7.4cm、胴部最大径8.2cmを測るミニチュアの直口壷である。

31は口径10.7cm、器高12.0cmを測る。頸部に波状文を施し、胴部にはクシ状工具で刺突する。沈線は口縁部に1条、胴部の円孔の上下に1条ずつ廻り、頸部には認められない。32は口頸部のみ残す。口径12.5cmで、口頸部にはカキ目が観察され、頸部には波状文が施される。33は口径9.7cm、器高10.6cm、脚口径7.2cmを測る。坏部に3条の沈線を廻らして稜を作り、底部外面には刺突文を施す。脚筒部には上段が切れ目状、下段が三角形の3方透しを設ける。脚端部はまるみを持つものの、内傾して面をなす。34は口径10.6cm、器高11.3cm、脚口径9.2cmを測るもので、体部は椀状を呈すがここでは長脚無蓋高坏としておく。口縁は外傾して端部をまるく納め、外面には沈線を廻らす。底部にはクシ状工具による刺突文が観察される。脚部に三角形2方透しを設けるが、3方に開けようとした痕跡が残る。筒部にはカキ目を施し、端部は内傾して明瞭な面を作る。35は口縁部を欠損し、頸部付け根には、辛うじて貫通する環状把手を一対設ける。背面から腹面にかけてカキ目を施した後、腹面には回転ナデを施す。腹面の一部には回転ヘラ削りも認められる。36は口径10.0cm、器高24.4cm、胴部最大径25.3cmを測り、頸部付け根に貫通した環状把手を一対貼り付ける。粘土盤の継目には板状工具による擦痕が残る。胴部外面はタタキの後にカキ目を施し、「×」状のヘラ記号を有す。内面には青海波文の当て具痕が観察される。37は口径14.8cm、器高27.8cm、胴部最大径29.8cmを測る。胴部外面は平行タタキの後にカキ目を施し、内面は青海波文の当て具痕をナデ消した痕跡がある。42は口径16.1cm、器高32.3cm、胴部最大径31.2cmを測る。胴部外面は平行タタキの後にカキ目を施し、内面には青海波文の当て具痕が観察される。

38は現存長5.1cm、元幅1.4cmを測る刀子で、刀身と茎の一部が残存する。刀身部の刃側は内湾して幅狭になる。両関で、茎には木質が付着する。39は玄室内ふるい土中から検出したもので、刀子と思われる。残存長5.0cmを測り、刀身のほとんどが幅狭になっている。38と同一個体の可能性が考えられる。40・41は耳環で、錆化が著しい。40は左袖隅付近で出土したもので、長径2.7cm、短径2.5cmを測る。41は40からやや離れた位置から出土した金環で、40とセットとなるものであろう。



第94図　12号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)（S＝1／3）

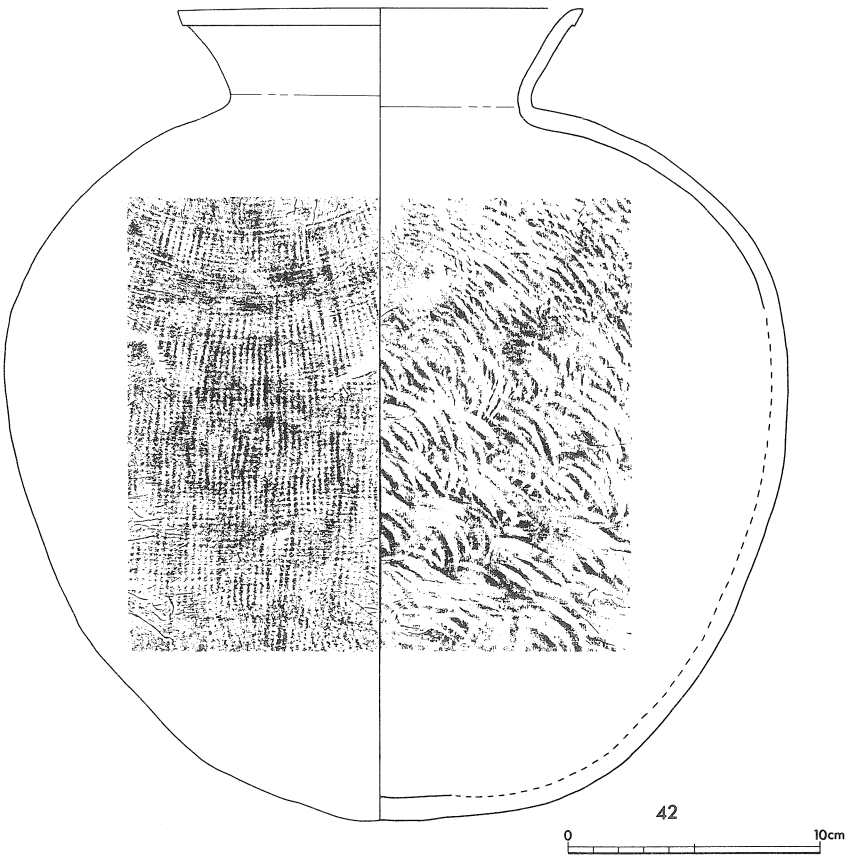


第95図　12号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)（S＝1／3、38,39は1／2、40,41は1／1）

長径2.7cm、短径2.5cmを測る。

墓道出土遺物（第97図）　前庭部からは18層上面で検出した蓋（44・45）以外に、堆積土中から坏身（43）、蓋（46）、脚付き椀（47）、瑞（48）、平瓶もしくは長頸壷（49）、横瓶（50）が出土している。43は復元口径12.3cmを測る。44は口径13.2cm、器高4.7cmを測り、焼成不良である。天井部外面はヘラ切り後にナデを施し、一部にヘラ起こし痕が残る。肩部は不明瞭で、口縁部は内湾気味で端部をまるく納める。45は口径12.2cm、器高4.4cmを測り、天井部外面にはヘラ切り後にナデを施すのみである。46は口径6.7cm、器高3.0cmを測り、乳頭状つまみを有す。天井部外面には自然釉が付着し、つまみ周辺には回転ヘラ削りが観察される。脚付き椀の蓋であろうか。47は口径9.0cm、器高6.1cm、脚口径4.5cmを測り、椀底部外面には回転ヘラ削りを施す。脚部は透しを持たず、端部は外傾して明瞭な面を作る。48は口径7.0cm、器高9.7cmを測り、口縁の立ち上りは弱い。頸部に1条の沈線を施すが、波状文は省略する。胴部は口径よりも張り出し、円孔周辺には沈線や刺突文は認められない。49は口径5.7cm、器高13.2cm、胴部最大径11.6cmを測り、口頸部が胴部の片方に寄っていることから平瓶と思われる。外面には自然釉が付着する。把手は付かず、頸部付け根から胴上半部にかけてはカキ目を施す。胴下半から底部にかけては不定方向のヘラ削りを施す。50は口縁部を欠失する。胴部外面は平行タタキの後にカキ目を施し、内面には青海波文の当て具痕が認められる。

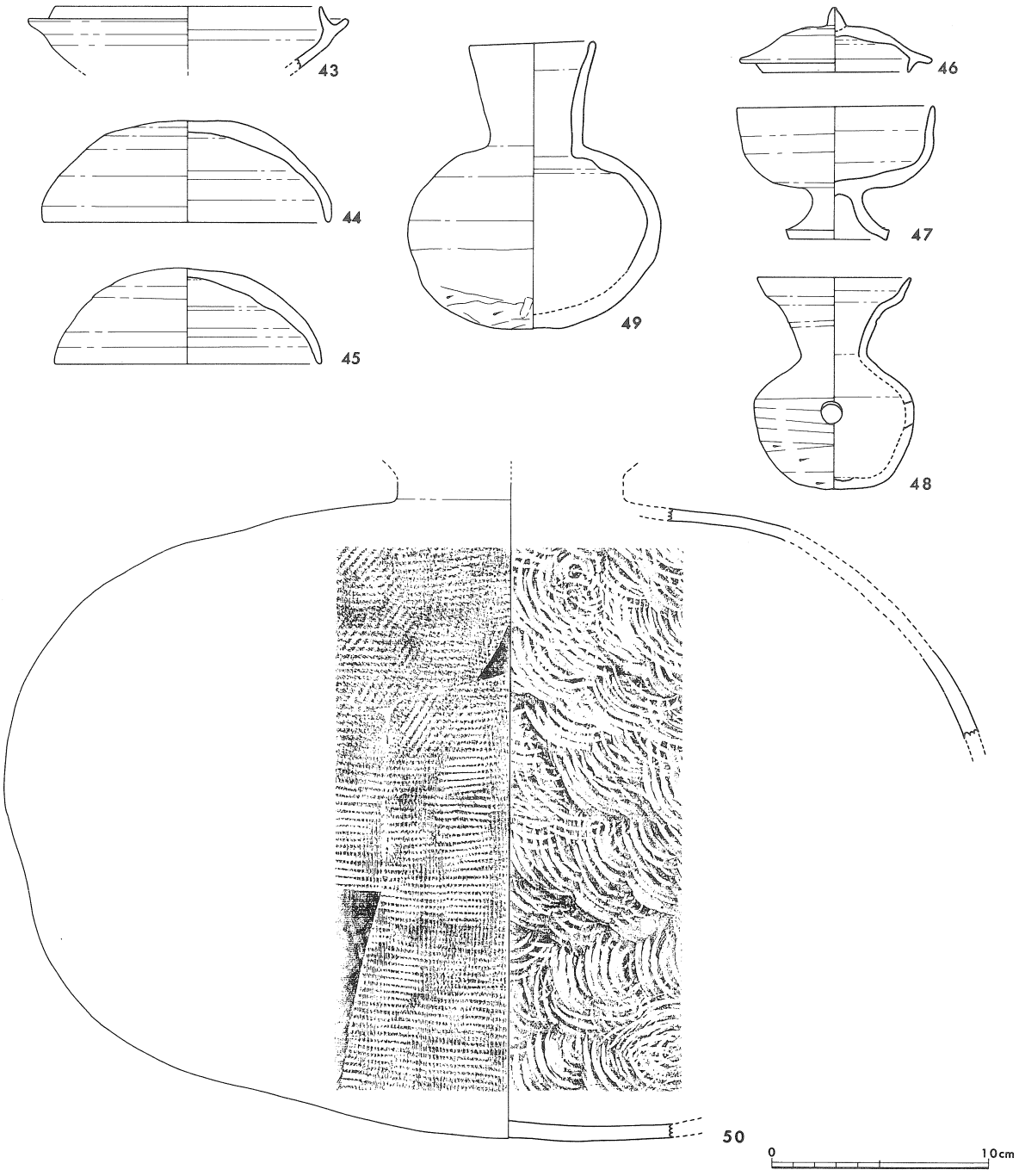
時期　玄室出土蓋坏を出土位置別にみると、左右の壁側で集中して検出した3群の、1～12・15・16・18・19は大きな時期差が認められず、大谷編年の出雲4期でも比較的古相のものであるのに対し、玄室中央で出土した13・14・20・21は明らかに後出のもので、5期に属すと言えよう。ほかの器種についても、瑞31・32、高坏33、提瓶35等はいずれも4期の様相を呈し、平瓶36は5期のものであることから時期差が見出せる。



第96図　2号横穴墓玄室内出土遺物実測図(3)（S＝1／3）

墓道出土遺物をみると、坏蓋44・45、瑞48、平瓶49は5期に相当する。

こうした状況から、12号横穴墓では出雲4期に初葬が為され、5期の段階で



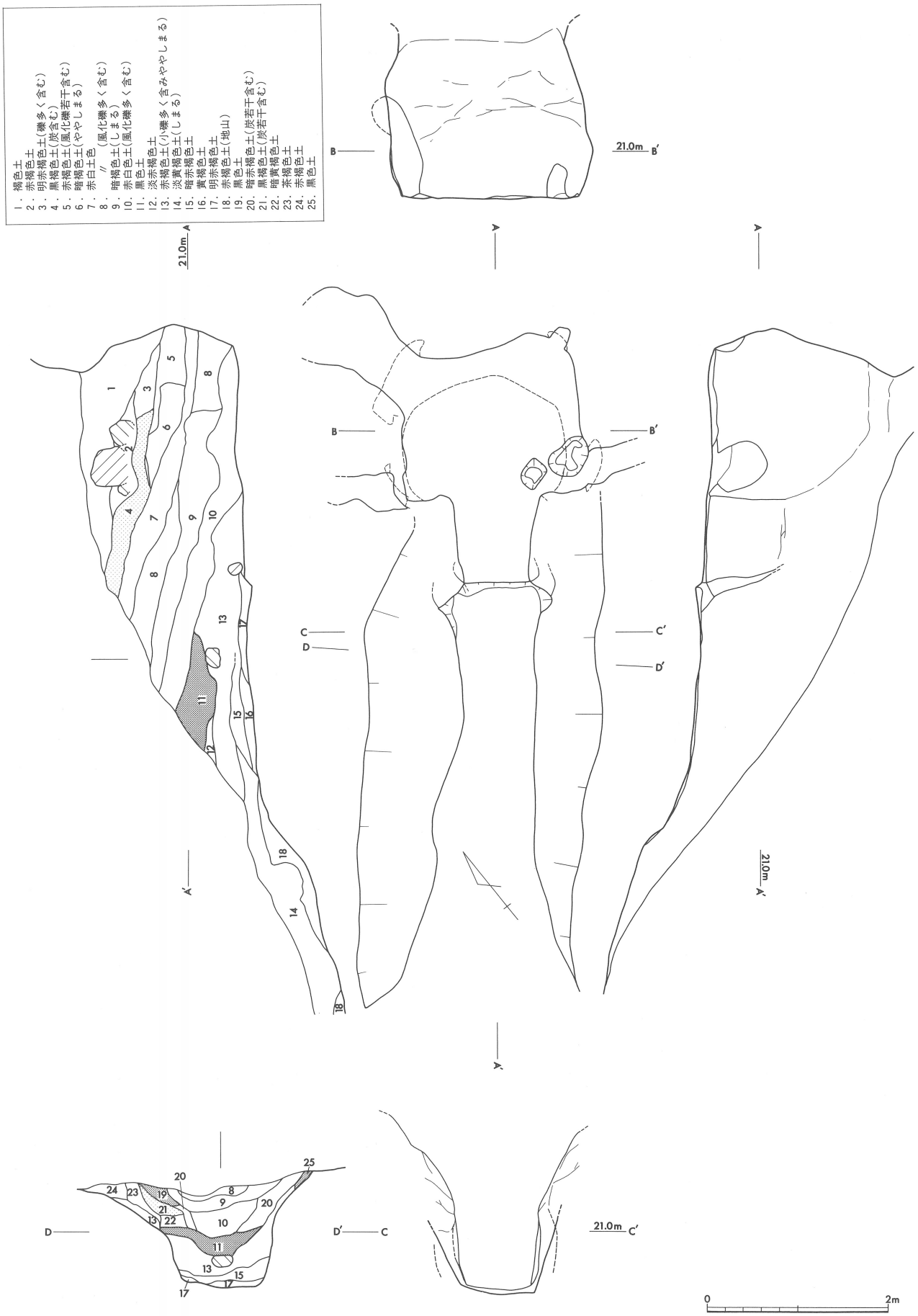
第97図　12号横穴墓墓道出土遺物実測図（S＝1／3）

最終埋葬が行われたと考えられる。なお、遺物の出土状況からは、少なくとも4回の埋葬が行われたと推定されるが、埋葬順序については玄室中央部の最終埋葬以外は明らかでない。

13号横穴墓（第98図）

12号横穴墓の北西側7.6m付近にほぼ南向きに開口し、床面の標高約19.5～20.5mである。単独かあるいは11・12号横穴墓と単位をなすと考えられる。

墓道　奥幅0.9m、前端幅2.3m、奥行き4.5mを測る。平面形態は奥側からなだらかに幅を広げ、前端付近で大きく開く。床面は前端部に向かって緩やかに傾斜し、幅が大きく広がるところで急激

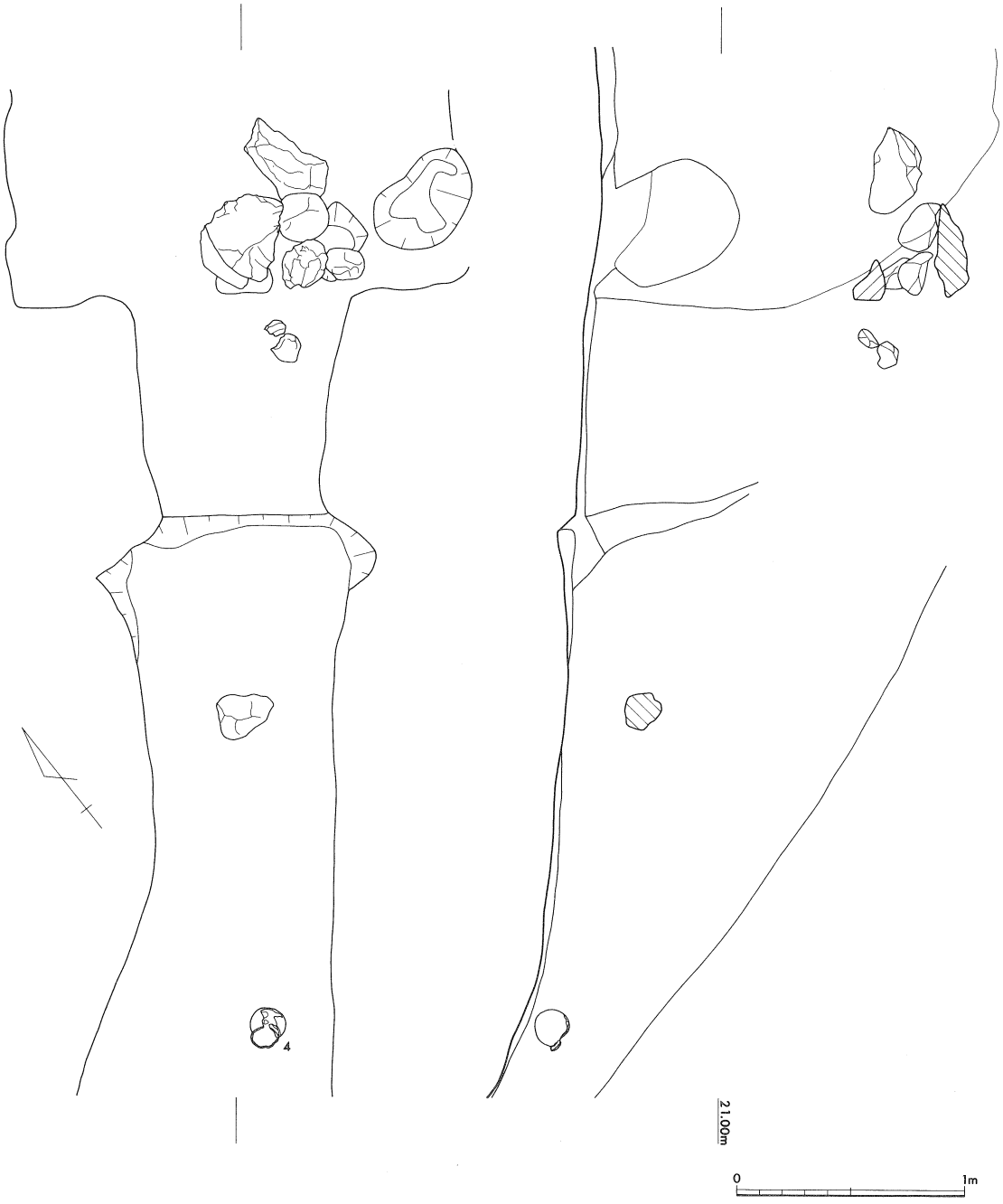


第98図　13号横穴墓実測図（S＝1／60）

に下降する。

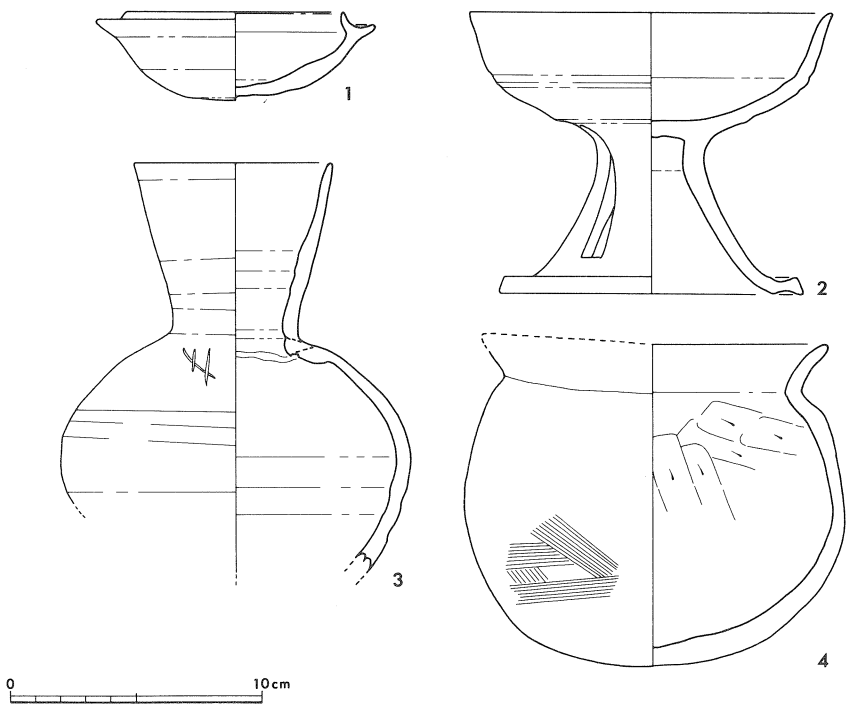
玄門部　左右の壁は剥落しており、現況で奥幅1.0m、手前幅0.7m、奥行き0.95mを測るが、本来の規模は不明である。天井部は完全に崩落し、高さや形態は不明である。

玄室　4隅に小横穴が掘り込まれており、玄室の正確な規模は不明だが、復元すると幅は奥壁側で1.8m、袖側で2.0m、奥行き1.5m程度の規模にはなろう。4壁、天井部は剥落・崩落が著しく原形を留めないため玄室形態は不明である。平面的には横長の長方形プランを呈す。右奥の横穴は幅20cm、高さ35cmを測り、奥行き20cmほどで行き止まりとなる。右袖の横穴は幅35cm、高さ50cmを測るが、奥行きについては崩落の危険性があったため50cmほどのところまでしか確認していない。左奥の横穴は人が這って行けるほどの規模で幅60cm、高さ1.1mを測り、奥行き1.3m以上を測る。



第99図　13号横穴墓遺物出土状況（S＝1／30）

左袖の横穴は幅50cm、奥行きは60cm以上を測る。小横穴からの出土遺物は無く、また加工痕や獣の爪痕なども確認していないため、これらの性格については不明である。



第100図　13号横穴墓玄室内・墓道出土遺物実測図（S＝1／3）

堆積状況　縦断・横断土層から15～17層は初葬時の埋土と考えられる。墓道奥端部の床面に辛うじて初葬時の閉塞石が遺存しているが、13層下面によって切られており、侵入を受けたものと推定される。13層は埋土か掻き出し土と考えられ、上面から閉塞石とみられる石材を検出している。11層下面も侵入面の可能性が考えられる。11層は腐植土で、切り合いから10層下面において再び侵入を受けている様子が窺える。腐植土4層の上面からは20～30cmほどの石材を検出している（第99図）。

堆積状況からは少なくとも3回の侵入を受けたものと推定される。

遺物出土状況（第99図）　墓道のほぼ床面から、土師器1点を前端部側に傾いた状態で検出している。4層上面で出土した石材は割石の凝灰岩で、平面的には玄室内部の中央に位置する。土砂の堆積状況からこの時既に天井部は崩落していたと推定され、これらの性格は明らかでない。

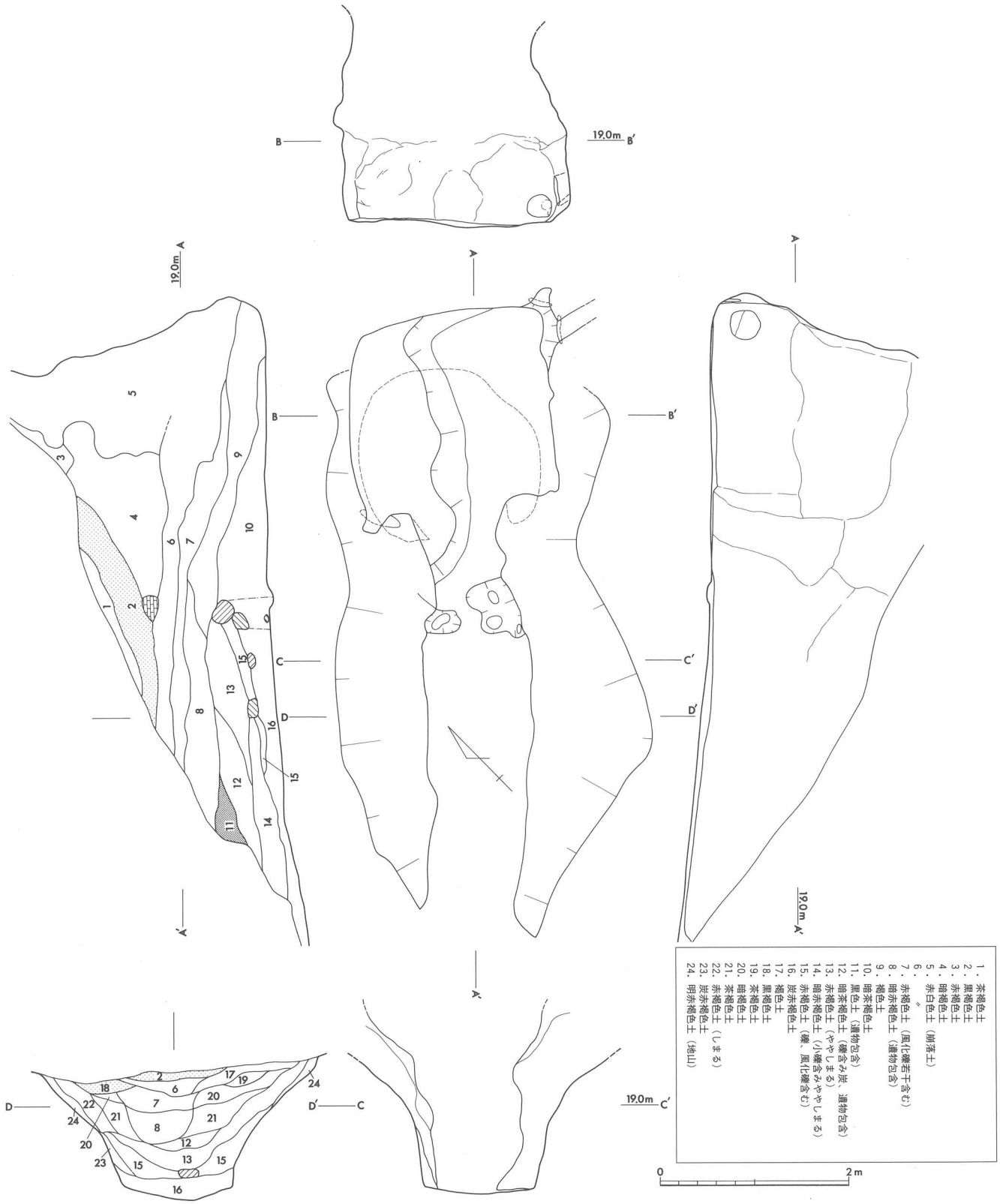
出土遺物（第100図）　1は2層から出土した、口径8.7cm、器高3.5cmを測る小型の坏身である。返りは低く、底部外面には強いナデを施すのみである。2は玄室床面出土の低脚無蓋高坏で、復元口径14.4cm、器高11.2cm、脚口径12.0cmを測る。口縁端部は僅かに外反し、坏部には2～3条の沈線が廻る。脚筒部には三角形2方透しを設け、脚端部は内傾して面を作る。3は墓道堆積土中から取り上げた長頸壷で、口径7.8cm、胴部最大径13.9cmを測る。頸部付け根にヘラ記号を有す（第127図）。4は墓道床面出土の土師器甕で、口径約13.5cm、器高13.0cm、胴部最大径15.1cmを測る。胴部外面にはハケ目、頸部以下の内面にはヘラ削りを施す。

時期　出土遺物は乏しいが、玄室内出土高坏は大谷編年の出雲4期に属す。一方、墓道出土遺物は量的にも少ないため流れ込みの危険性も考えられるが、出雲6期に相当すると考えられる。

13号横穴墓は出雲4期には築造され、6期の段階まで使用された可能性が考えられる。

14号横穴墓（第101図）

13号横穴墓の西側７ｍ付近に南西方向に開口し、床面の標高約18ｍである。約８ｍ上方には５号横穴墓が開口する。



第101図　14号横穴墓実測図（Ｓ＝１／60）

墓道　奥幅1.05m、前端幅0.9m、奥行き約3.0mを測る。平面的には奥側が僅かに幅広だが、玄門部との境界が不明瞭で、前端までほとんど幅の変化の無い形態である。床面は前端部に向かって僅かに傾斜する。

玄門部　両壁が剥落していることもあり、不整形で正確な規模は不明である。現況で奥幅1.0m、手前幅0.8m、奥行き約1.1mを測る。天井部は完全に崩落し、高さや形態は不明である。墓道奥端部からの床面にかけて深さ５cmほどの浅い閉塞石抜取り痕が認められる。

玄室　右奥と左袖の隅に小横穴が掘り込まれており、玄室の正確な規模は不明だが、復元すると幅は奥壁側で約1.9m、袖側で約2.0m、奥行き約2.0m程度の規模にはなろう。４壁、天井部は剥落・崩落が著しく原形を留めないため玄室形態は不明である。現況では正方形プランを呈している。小横穴は概して幅20cm、高さ20～30cm程度のもので、壁に掘削痕が認められないため性格等については明らかでない。床面は風化が著しく、玄室左側から玄門部にかけてが若干高くなっているが、本来の形態か否かは不明である。

堆積状況　16層は閉塞部まで確認でき、初葬時の埋土と考えられる。閉塞石は９層下面まで残存するが、16層上面に閉塞石が動いている状況から、この面で侵入を受けた可能性が考えられる。13層は埋土であろうか。切り合いから８層下面も侵入面と推定される。

堆積状況の観察の結果、14号横穴墓では初葬を含めると最低３回の侵入を行っていると推定される。

遺物出土状況（第102図）　墓道からは16層上面で蓋坏１セットを検出している。墓道の左壁際に蓋を被せた状態で置かれていた。

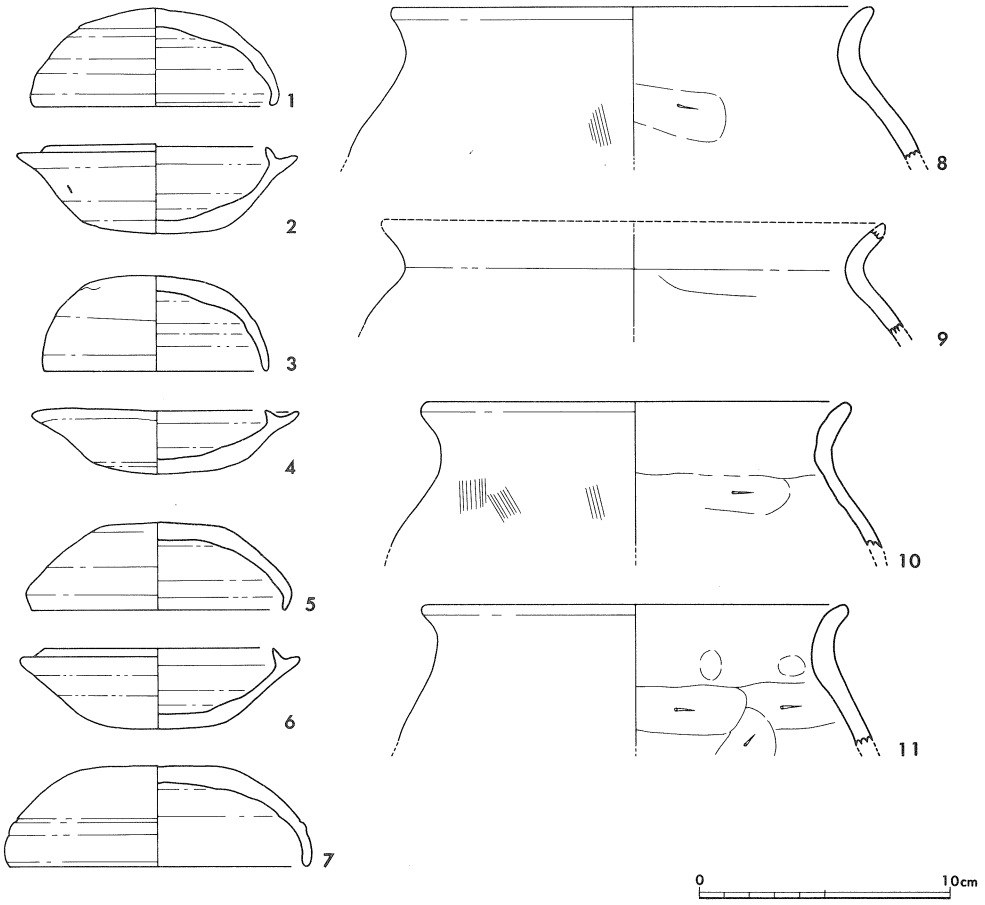
玄室からは蓋坏２セットを検出している。いずれも玄室右奥付近に集中しており、蓋１・３は逆さまに、身２・４は伏せた状態で出土している。右壁付近からは、遺存状態が悪いものの人骨も検出しており、壁に平行して埋葬された状況が窺える。

閉塞には割石の凝灰岩を使用している。墓道奥端部の床面から高さ約0.6m、奥行き約１mにわたって乱積みにした状態で検出しているが、基底部には大きめの石材を配置している。土層の観察から初葬時の閉塞と推定される。

出土遺物（第103図）　１は口径9.5cm、器高3.9cmを測り、天井部外面はヘラ切り後ナデを施す。肩部は不明瞭で、口縁端部は内湾してまるく納める。２は口径8.7cm、器高3.6cmを測り、底部外面はヘラ切り後にナデを施す。３は口径8.8cm、器高3.8cmを測り、天井部外面はヘラ切り後未調整である。４は口径8.1cm、器高2.6cmを測り、底部外面にはヘラ切り後外周に回転ヘラ削りの痕跡が認められるが、あるいはヘラ切り時の擦痕である可能性もある。３と４は器種が逆になる可能性も考えられる。５は口径10.1cm、器高3.5cmを測る。天井部外面はヘラ切り後ナデを施し、内面には赤色顔料が付着する。口縁端部は内側に強く屈曲する。６は口径9.1cm、器高3.2cmを測り、底部外面はナデを施す。７は墓道14層中から検出したもので、口径11.8cm、器高4.0cmを測る。天井部外面はヘラ切り後、外周に回転ヘラ削りを施す。口縁部は内湾し、肩部には沈線と回転ナデにより稜を作る。　８～11は墓道出土の土師器甕で、復元口径が16.5～18.8cmを測る。

時期　玄室内出土、墓道16層上面出土の蓋坏はいずれも大谷編年の出雲６期に属すもので、墓道蓋７は４期末～５期段階のものと考えられる。

第102図　14号横穴墓遺物出土状況・閉塞石実測図（S＝1／30）



第103図　14号横穴墓玄室内・墓道出土遺物実測図（S＝1／3）

15号横穴墓（第104図）

14号横穴墓の北西側5m付近に南西方向に開口し、床面の標高約17mである。14号横穴墓と1単位を形成する。

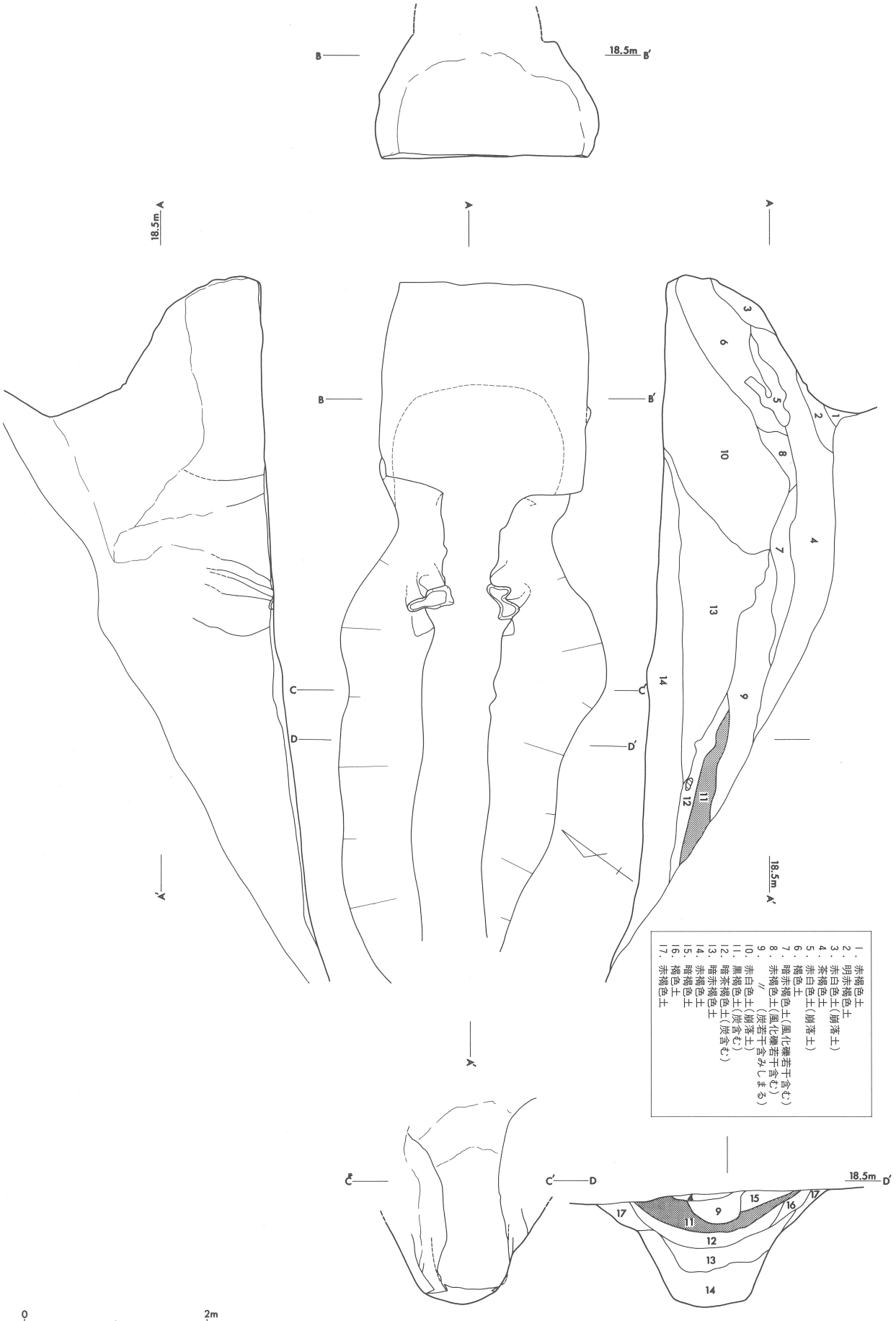
墓道　奥幅1.05m、前端幅約0.4m、奥行き約3.6mを測る。平面的には奥端部が開くものの、前端部までは平均して幅0.8mを測り、大きな変化は無い。床面は前端部に向かって僅かに傾斜する。

玄門部　現況で奥幅約0.8m、手前幅0.5m、奥行き約1.0mを測る。前庭部との境界を抉り込んで閉塞部を設け、床面には閉塞石の抜取り痕が認められる。天井部は完全に崩落し、高さや形態は不明である。

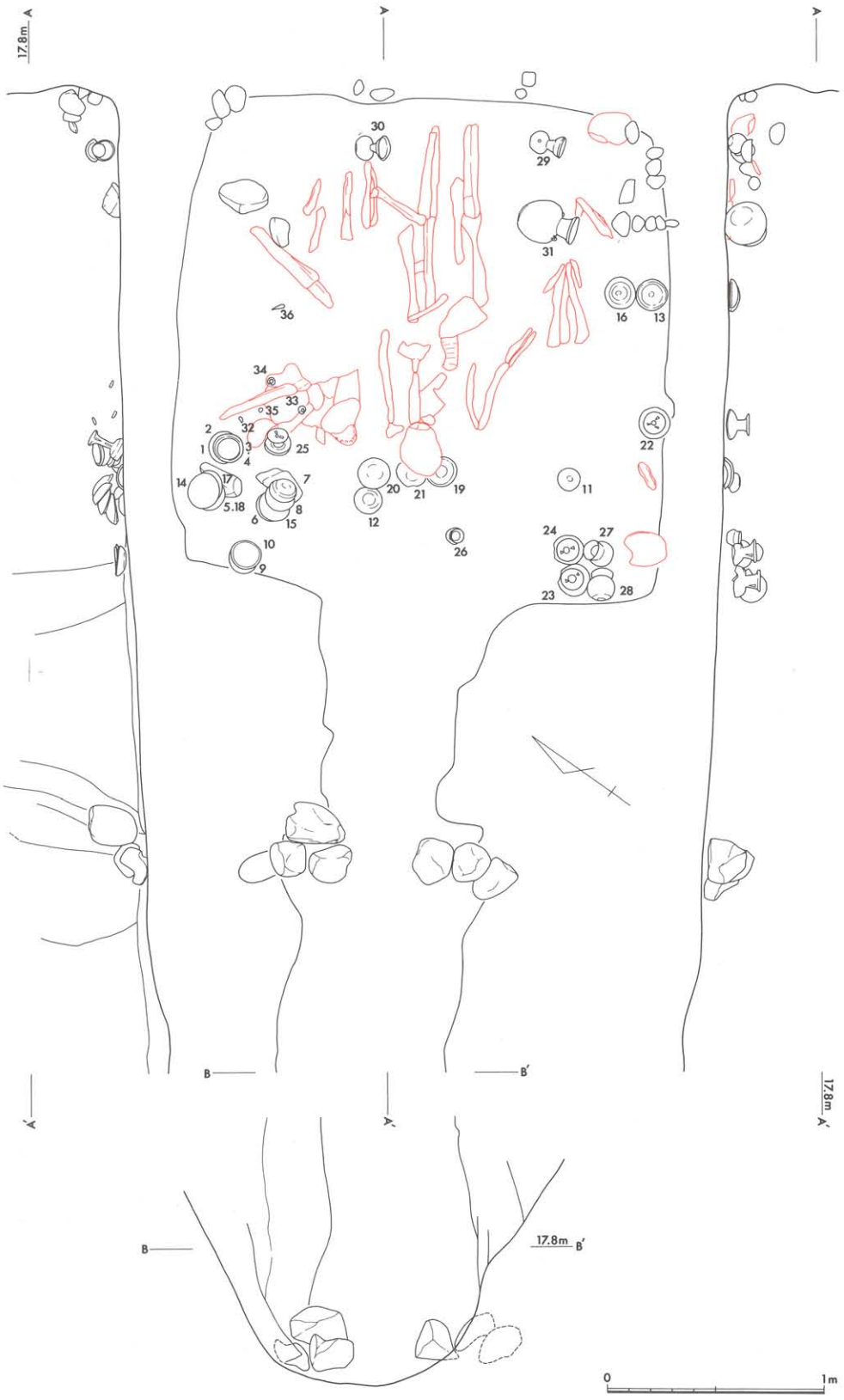
玄室　幅は奥壁側で2.0m、袖側で約2.15m、奥行き約2.3mを測る。4壁、天井部は剥落・崩落が著しいが、4壁を区画する界線が床面から立ち上がる。棟線・軒線の有無は不明で、玄室形態は不明である。平面的にはやや縦長だが、ほぼ正方形プランと言えよう。

堆積状況　14層は墓道から玄室内にかけて堆積した赤褐色の土砂で、埋土と考えるには不自然な堆積状況を呈しており、閉塞部付近では更に細分できた可能性もある。13層も一括して捉えたが、本来は細分が可能な層と考えられる。横断土層からは14層を切って堆積している状況が見て取れる。11層は炭化物を多量に含んだ腐植土で、9層との切り合いから、11層上面が侵入面であることが推定される。9層は掻き出し土か埋土であろうか。3・5・10層は天井部の崩落土である。

土層観察の結果、最低3回の侵入を受けたものと推定される。



第104図　15号横穴墓実測図（S＝1／60）



第105図　15号横穴墓玄室内遺物出土状況・閉塞石実測図（S＝1／30）

閉塞状況（第105図）　玄門閉塞部に20cm前後の礫を積み上げていたと思われるが、検出時には両側の床面に基底部が僅かに残存するのみであった。石材は地山に含まれるものと同様の自然礫で

ある。

玄室内遺物出土状況（第105図）　玄室内からは人骨と共に須恵器31点、金属器４点、勾玉１点を検出している。人骨は土圧と腐敗によって粘土状に変化し、極めて遺存状態が悪い。玄室中央に頭を玄門側に向けた状態で１体検出し、更に両壁に沿って人骨が散在して出土している。出土状況から、側壁に平行して縦方向に埋葬していたと考えられる。

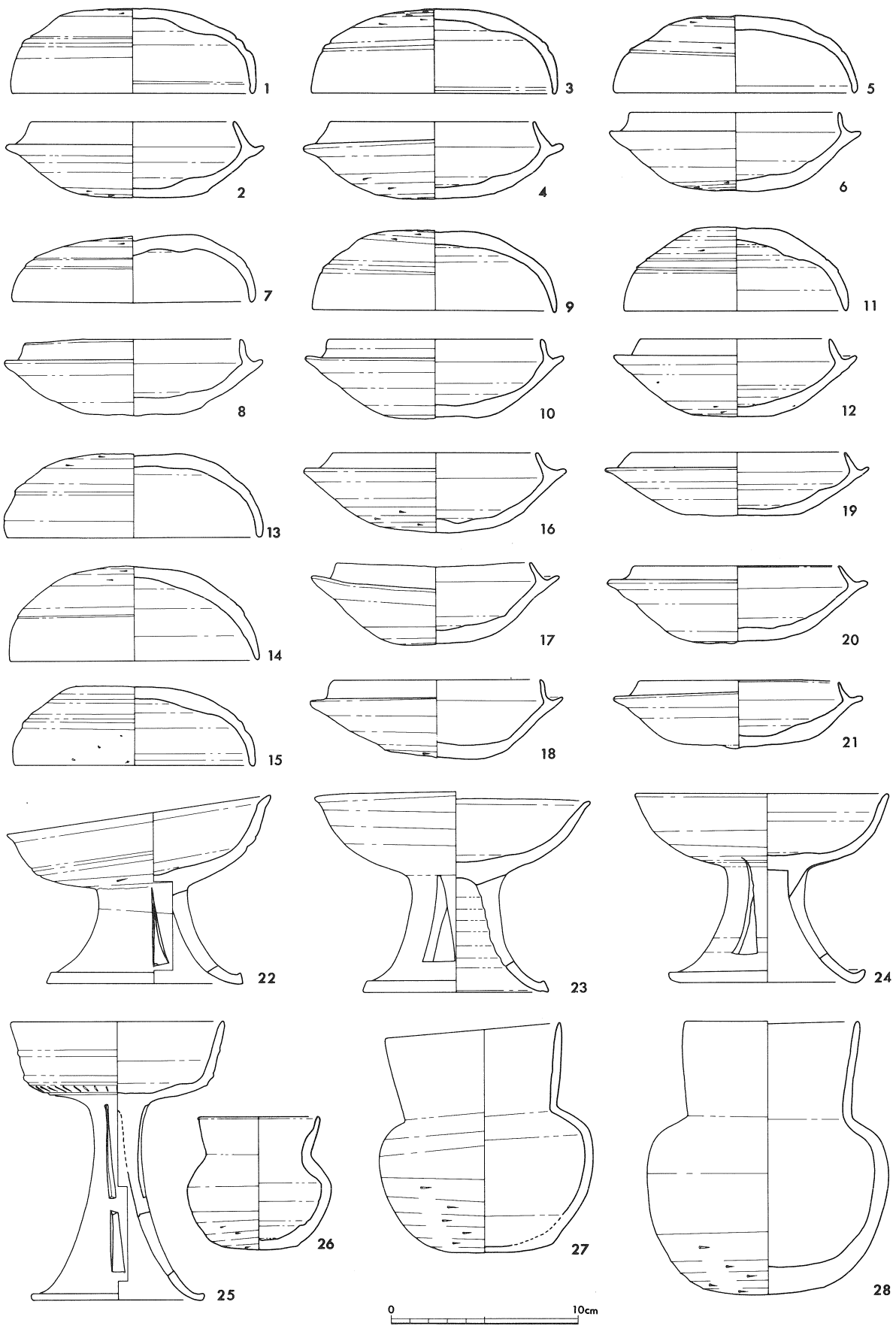
須恵器は大きく分けて５箇所からまとまって出土している。右袖の一群では22～24が、右奥の一群では13・16がそれぞれ伏せた状態で出土している。玄室入り口付近の12・19～21は全て伏せた状態で、19・21は枕として用いている。左袖付近からは最も集中して遺物を検出しており、特に蓋坏が２～４枚重ねになっている点が特徴的である。なお、11・16の下からは歯牙を検出している。

玄室内出土遺物（第106図・107図）　出土した器種の構成は蓋坏（１～21）、低脚無蓋高坏（22～24）、長脚無蓋高坏（25）、直口壷（26～28）、瓶（29・30）、壷（31）である。１～12は胎土、焼成等から製作時のセットと考えられる。１・３は口径12.8cm、器高4.0cm前後を測る。天井部外面に回転ヘラ削りを施し、肩部には２条の沈線で稜を作り出す。口縁内面には沈線を廻らし段状に仕上げる。２・４は口径10.8cm、器高4.0cm前後で、底部外面に回転ヘラ削りを施す。１～４はいずれも淡茶褐色を呈し、玄室出土蓋坏の中では古相のものである。５は口径12.7cm、器高4.1cmを測り、天井部外面には回転ヘラ削りを施す。肩部には沈線１条を廻らす。６は口径11.1cm、器高4.1cmを測り、底部外面には回転ヘラ削りを施す。７は口径12.7cm、器高3.6cmを測り、天井外面には回転ヘラ削りを施す。肩部には沈線を２条廻らす。８は口径11.5cm、器高4.0cmを測り、底部外面の外周に回転ヘラ削りを施し、中心部にはヘラ起こし痕が認められる。９は口径12.9cm、器高4.2cmを測り、天井部外面には回転ヘラ削りを施す。肩部に２条の沈線を廻らして稜を作る。10は口径11.4cm、器高4.2cmを測り、底部外周にヘラ削りを施す。

11は口径11.8cm、器高3.4cmで玄室出土の蓋ではやや小型のものである。天井部外面に回転ヘラ削り、肩部には沈線２条を廻らして稜を作る。12は口径10.1cm、器高4.2cmを測り、底部外面には回転ヘラ削りを施す。13～15は口径12.7～13.4cm、器高4.0～4.5cmを測る。いずれも天井部外面に回転ヘラ削りを施し、肩部に沈線と回転ナデにより稜を作る。13は焼成不良で、15の口縁部内面には強い回転ナデによる段が認められる。16～18は口径10.3～11.0cm、器高4.2cm前後を測る。底部外面には回転ヘラ削りを施す。19～21は口径10.6～11.4cm、器高3.3～4.1cmを測り、底部外面はヘラ切り後にナデを施すのみである。

22は口径cm14.2、脚口径10.3cmを測る。口縁端部は強く外反し、底部との境には沈線を２条廻らして稜を作る。底部に回転ヘラ削りを施し、脚筒部には三角形３方透しを設ける。23は口径14.5cm、器高10.6cm、脚口径9.9cmを測り、口縁端部は外反する。筒部に三角形２方透しを有す。24は口径13.4cm、器高10.0cm、脚口径9.4cmを測り、坏底部外面に回転ヘラ削りを施す。三角形２方透しを有し、脚端部は外傾してまるく納める。25は口径11.2cm、器高14.7cm、脚口径9.0cmを測る。坏部に２条の稜を作り出し、底部外面には刺突文と２条の沈線が認められる。脚筒部には上段半貫通の３方透しを設ける。脚端部は僅かに外傾してまるく納める。26は口径6.4cm、器高7.1cmのミニチュアで、口縁部は強い回転ナデで段を作る。

29は口径11.8cm、器高14.4cm、胴部最大径9.6cmを測り、頸部には波状文を施す。胴部には円孔の上にクシ状工具による刺突文を施し、上下に沈線を廻らす。30は口径10.8cm、器高13.6cm、胴部



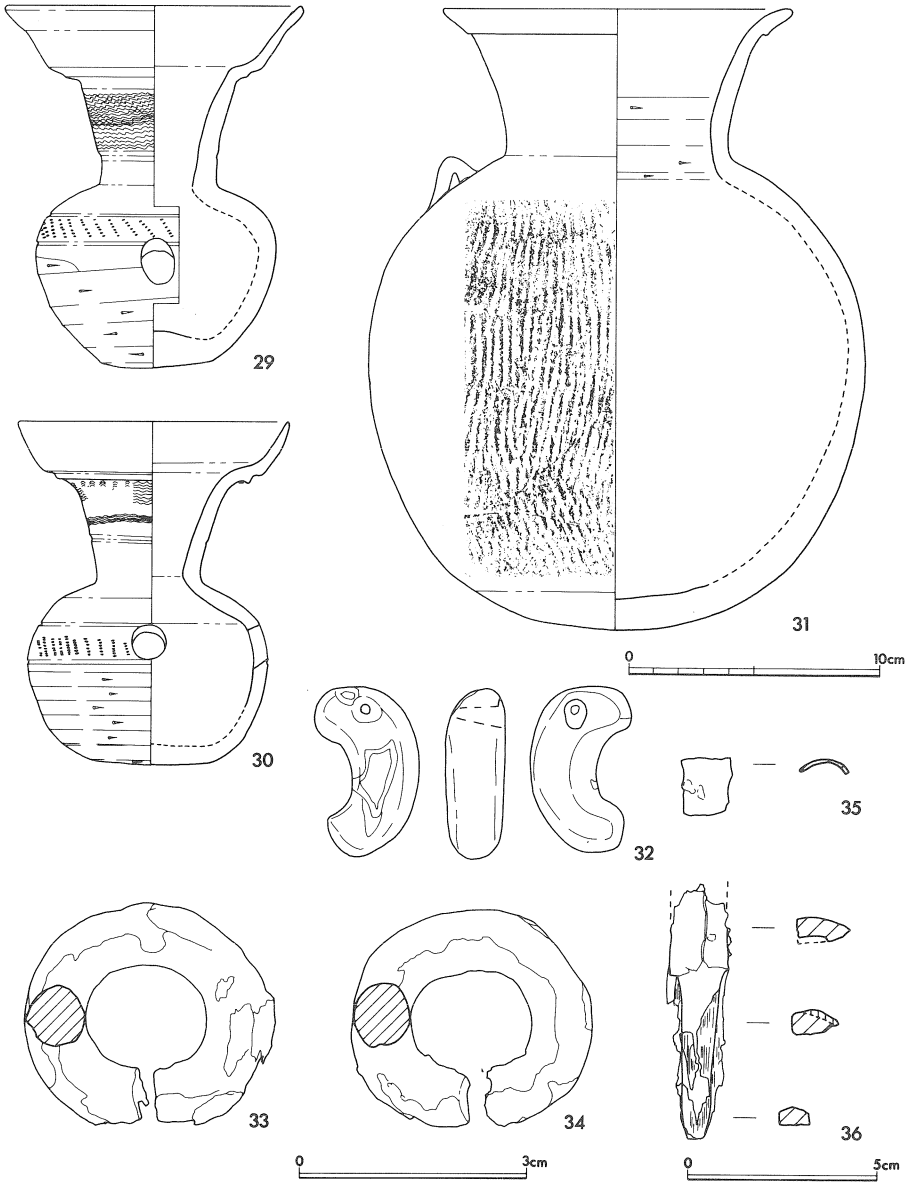
第106図　15号横穴墓玄室内出土遺物実測図(1)（S＝1／3）

最大径9.6cmを測り、胴部が張り出すタイプである。頸部には波状文を施し、上下に沈線を廻らす。胴部円孔の上下に沈線を廻らし、クシ状工具による刺突を施す。31は口径14.0cm、器高24.6cm、胴部最大径19.8cmを測り、頸部付け根に環状把手を一対設ける。頸部内面にはヘラ削りを施し、胴部外面には平行タタキ、内面には青海波文の当て具痕が観察される。

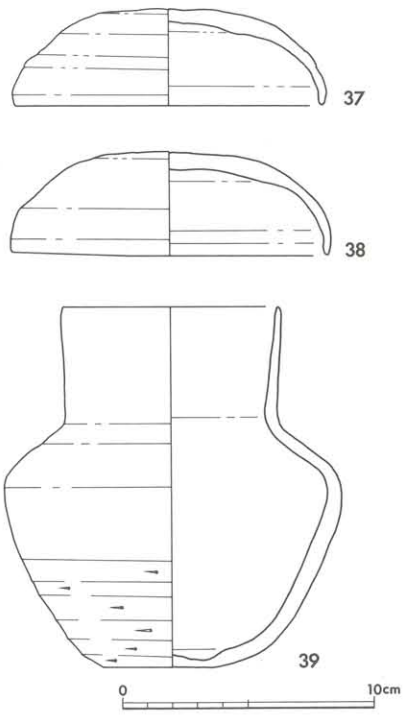
32は瑪瑙製勾玉で、穿孔は片側から行う。片面には岩脈が観察される。

33・34は耳環で、錆化が著しい。34は金環である。35は鎹の一部と考えられ、36は刀子である。元幅1.5cm、茎長4.5cmを測る。関は両関で、刃側は緩やかに湾曲する。

墓道出土遺物（第108図）　37は口径12.3cm、器高3.9cmを測る坏蓋で、天井部外面にはヘラ切り後にナデを施すのみである。肩部に２条の浅い沈線を廻らして僅かに稜を作る。口縁部は僅かに内湾してまるく納める。38は坏蓋で口径12.6cm、器高4.1cmを測り、天井部外面はヘラ切り後ナデを施し、ヘラ記号を有す（第127図）。口縁部は僅かに内湾して内面にアクセントが付く。39は直口壷で口径8.6cm、器高14.3cm、胴部最大径13.5cmを測る。



第107図　15号横穴墓玄室内出土遺物実測図(2)（S＝1／3、32～34は1／1、35,36は1／2）



第108図　15号横穴墓前庭部出土遺物実測図（S＝1／3）

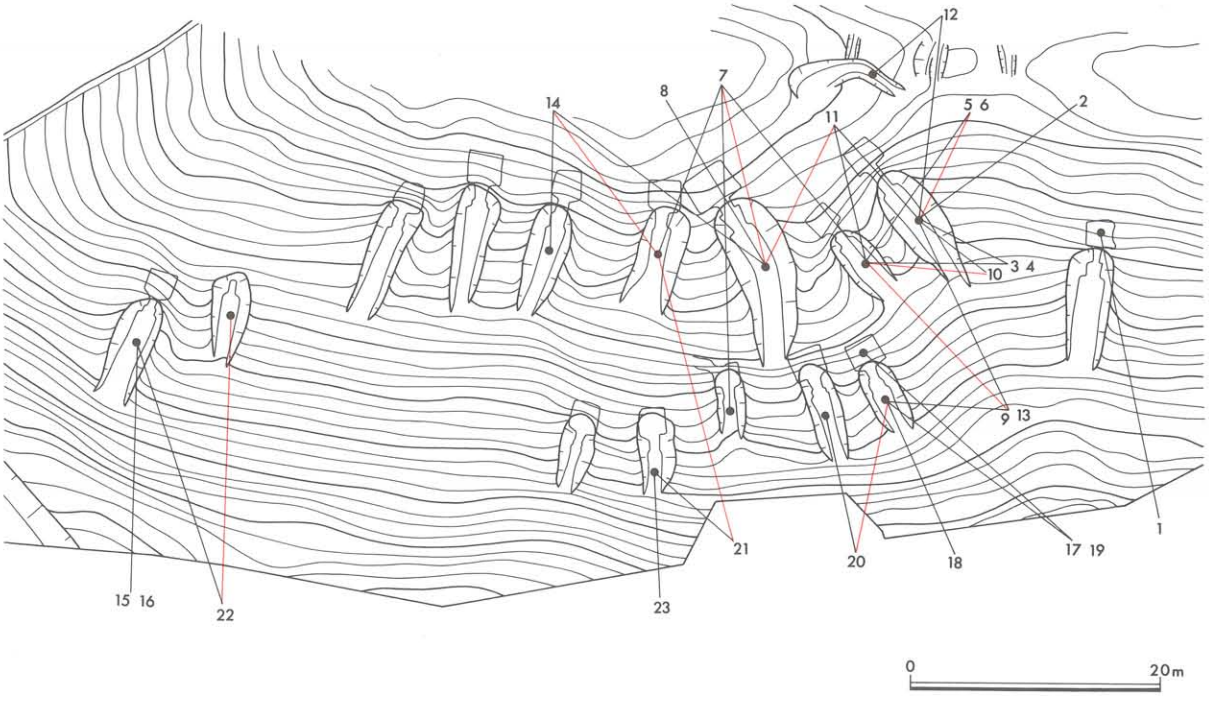
時期　玄室出土の蓋坏は19～21が大谷編年の出雲5期、残りについては新古があるものの、全て4期の範疇で捉えられるものである。蓋坏以外の器種については、高坏22～25が4期、碗は29が4期、30が5期に相当すると考えられる。一方、墓道出土の蓋はいずれも5期の所産と考えられる。なお、5期の坏は玄室中央で枕に用いていることから、最終埋葬は中央で行われたものと推定される。

15号横穴墓は出雲4期の古い段階に築造され、5期まで追葬が行われたものと思われる。

（2）横穴墓出土の甕・横瓶（第109図～126図）

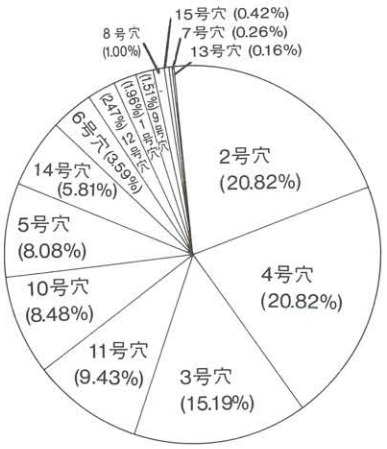
横穴墓の前庭部・墓道からは多量の甕片等が出土している。これらの内の幾つかは、近接するほかの横穴墓出土のそれらと接合する例が多く認められた（第109図、赤線は接合破片数が多いものを示す）。破砕して須恵器床として用いた、玄室出土のものも含めて、図化し得た甕（大甕）・横瓶についてはここで一括して概要を述べることとする。

破片は全ての横穴墓の前庭部・墓道から検出しているが、出土数には各横穴墓によってかなりのバラツキが認められ（第2表）、出土総数の半分以上が2～4号横穴墓に集中している点で注目される。



第109図　甕・横瓶接合関係図（S＝1／600）

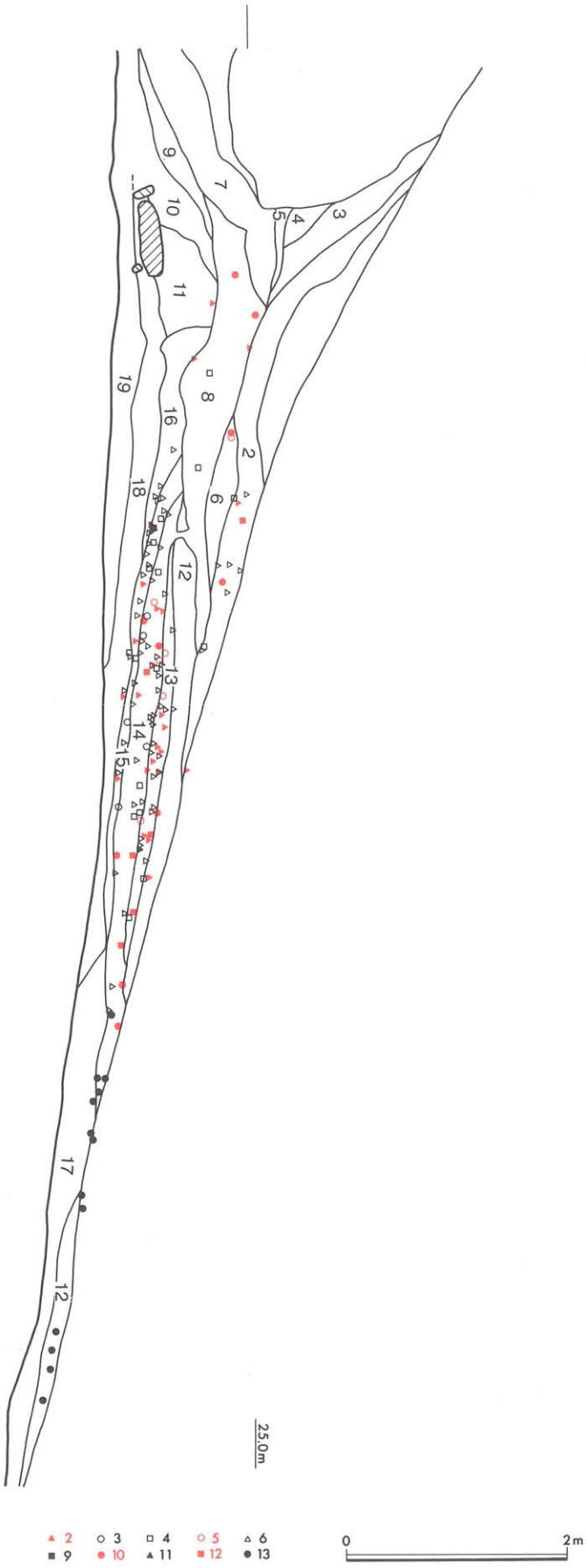
第２表　横穴墓別甕出土数



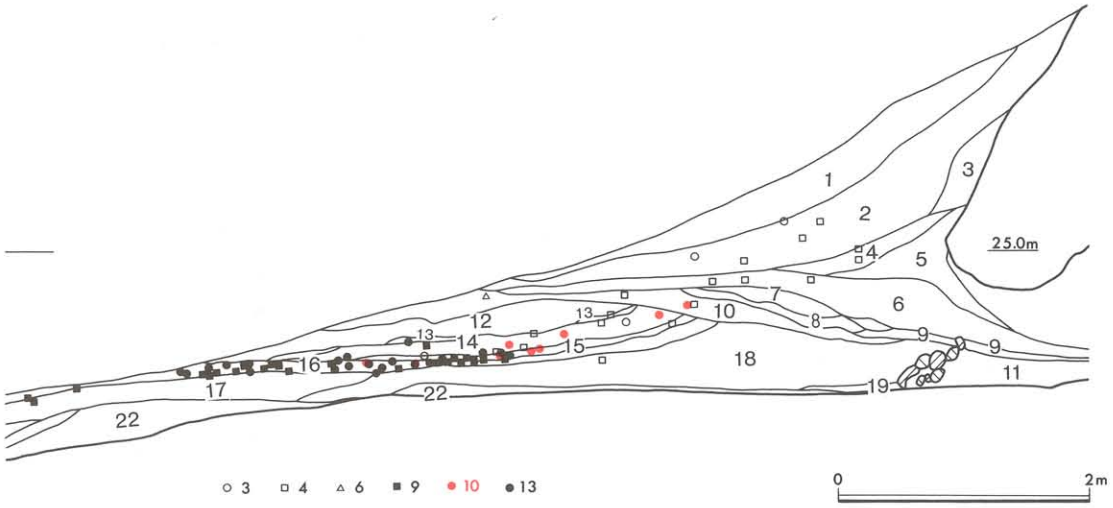
２号横穴墓（第110図）　縦断ラインから幅50cm間の分布を示すもので、10個体分の接合資料が15層下面から13層までに集中して出土している。19層上面が２次葬面、13層上面が３次葬面と考えられ、この間に儀礼行為によって散布されたものと考えることが出来る。羨道付近に疎らに見られる甕片は、３次葬時の掘り返しによって撹乱されたものと推定される。

３号横穴墓（第111図）　縦断ラインから幅50cm間の分布を示すもので、６個体分の接合資料が16層下面から13層下面にかけて集中して出土している。18層が初葬時の埋土、10層下面が２次葬面と推定されることから、この間に儀礼行為によって散布されたと考えられる。２層から10層までに見られる甕３、甕４の破片は２次葬時の掘り返しによって撹乱されたものである可能性が高い。

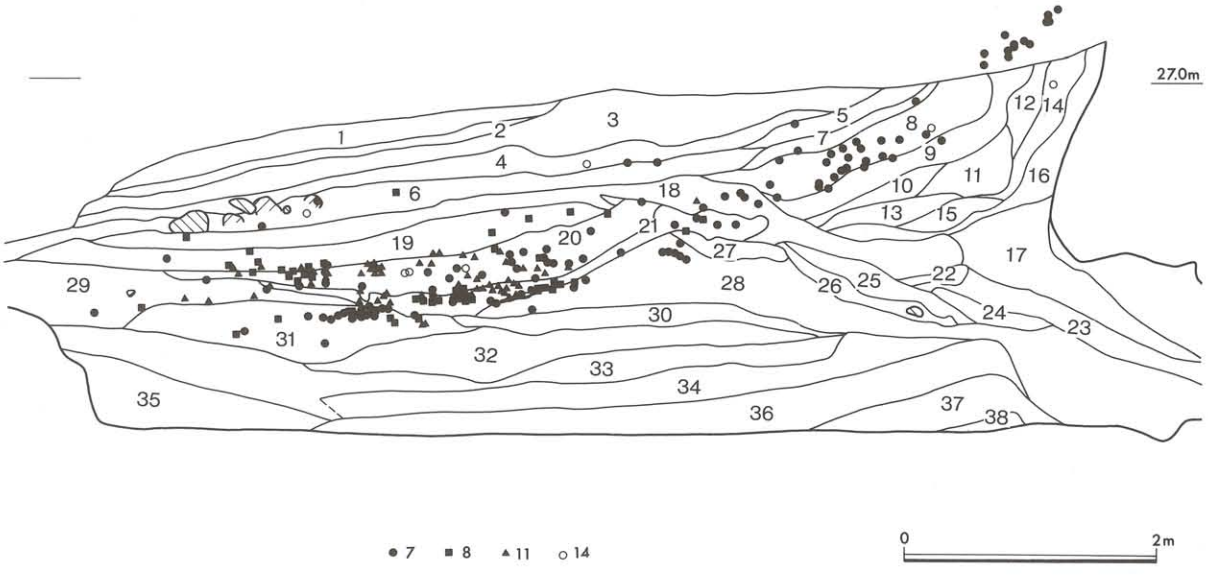
４号横穴墓（第112図）　縦断ラインから幅80cm間の分布を示すもので、４個体分の接合資料が19層～21層、28



第110図　２号横穴墓甕片分布状況（Ｓ＝１／60）

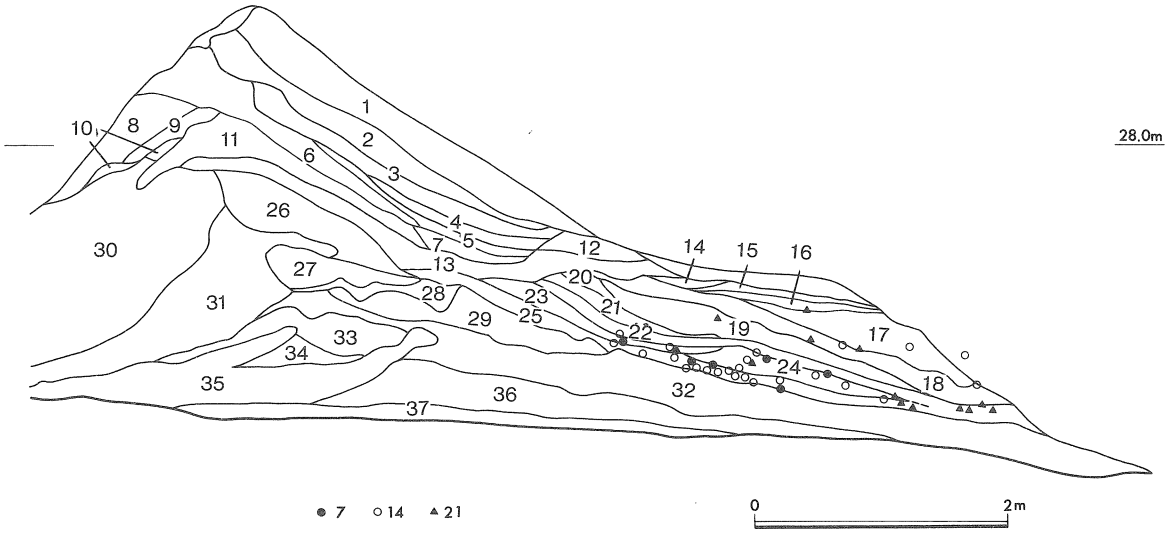


第111図　3号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）



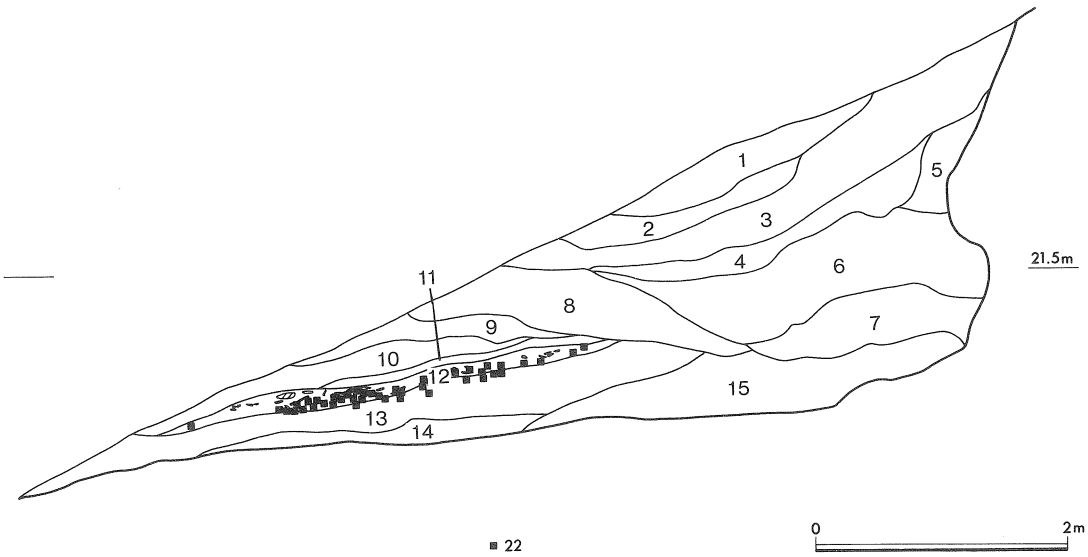
第112図　4号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）

層～31層にかけて集中して出土している。28層は2次葬時の埋土と考えられ、堆積状況の項で述べたとおり、20層を切って入った侵入面が確認されていることから、甕片の大半は2次葬以降に堆積し、次の侵入を受けてからはほとんど見られない。8・18層に甕7が多く分布しているが、侵入時の撹乱と言うよりも寧ろ、侵入の影響を受けていない部分と考えられ、土層と一致しない状況となったと思われる。



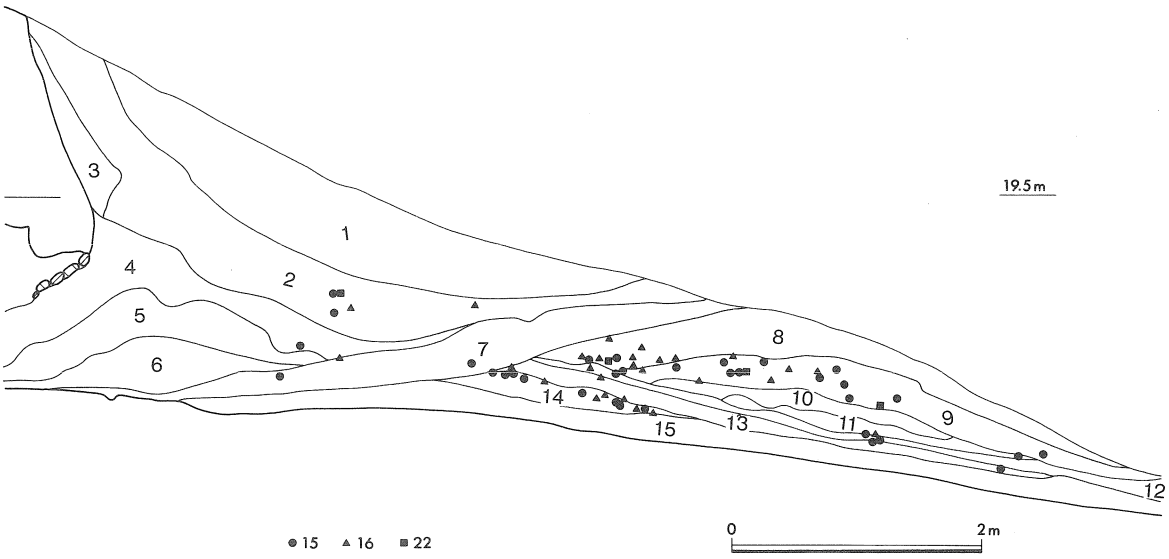
第113図　5号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）

5号横穴墓（第113図）　縦断ラインから幅50cm間の分布を示したもので、3個体分の接合資料が22層～25層にかけて集中して出土している。この遺物包含層は13層下面によって切られており、堆積状況の項で述べたように、13層下面は少なくとも4回目の侵入面と考えられることから、出土甕のほとんどは3回目の侵入以後に散布されたものと推定される。16層から19層にかけての甕片は散乱した状態で、侵入時の掘り返しによるものと考えられる。



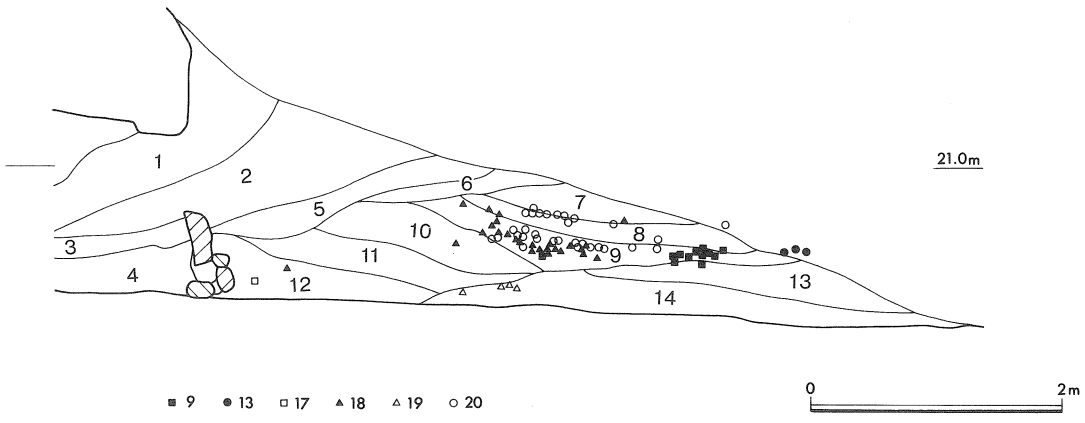
第114図　9号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）

9号横穴墓（第114図）　縦断ラインから幅50cm間の分布を示したものである。9号横穴墓は整形途中の未完成墓であるにもかかわらず、甕1個体分の接合資料を12層から集中して検出している。9層下面によって切られているが、これが追葬面でないことは明らかで、墓として機能する以前に何らかの儀礼的行為がなされたとも考えられる。



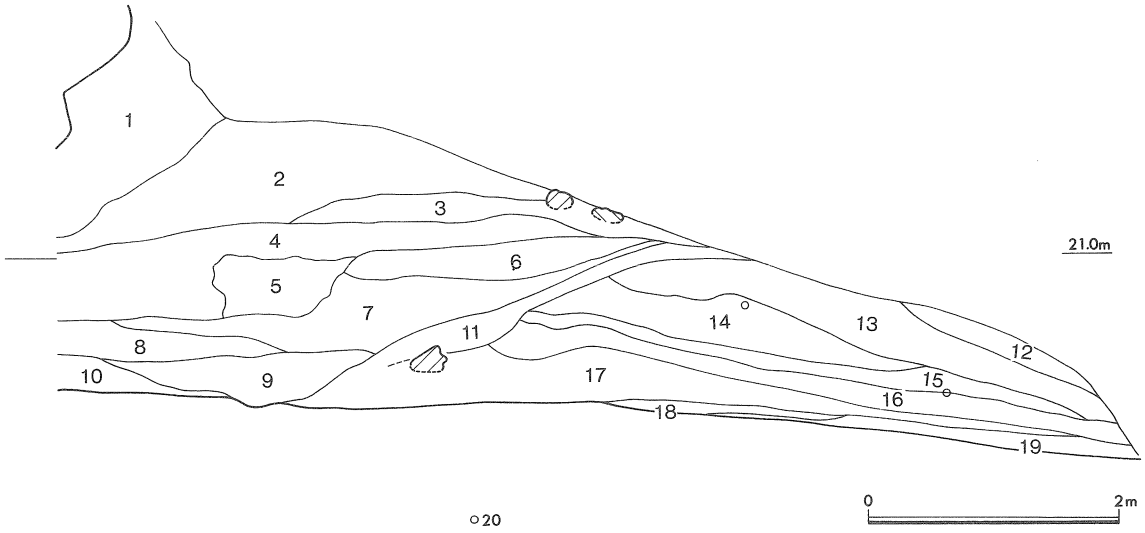
第115図　10号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）

10号横穴墓（第115図）　縦断ラインから幅50cmの分布を示すもので、3個体分の接合資料が9層～15層にかけて集中して出土している。14層・15層は初葬時の埋土と考えられ、甕15・16はその後散布されたものと推定される。8層下面から7層下面にかけてが侵入面と推定されるが、甕片は9層から出土しており、9層下面での侵入も考え得る。前庭部の奥側に見られる甕片は侵入時に撹乱を受けたものか、流れ込みによるものと考えられる。

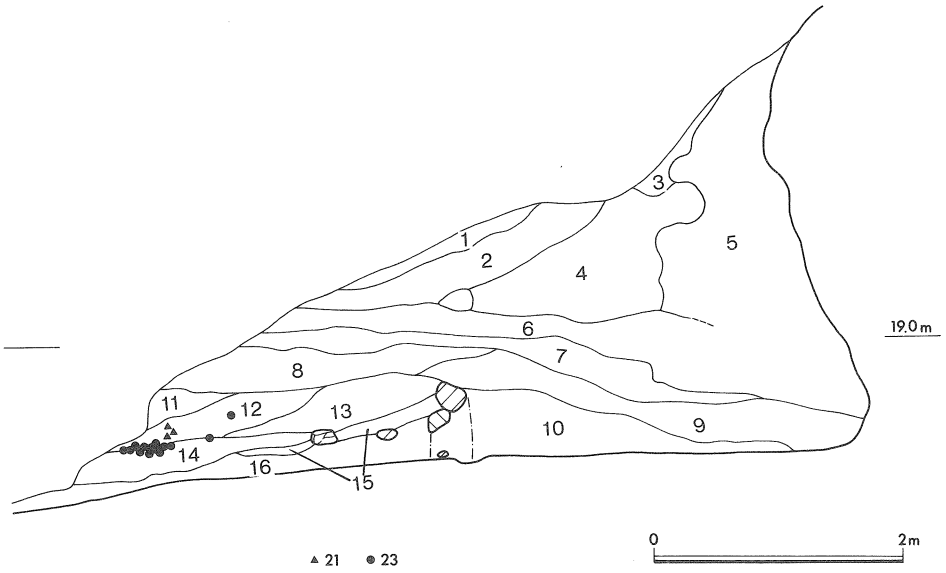


第116図　11号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）

11号横穴墓（第116図）　縦断ラインから幅50cmの分布を示すもので、6個体分の接合資料が8層上面、9層、14層上面から集中して出土している。13層・14層は初葬時の埋土で14層上面の甕19と12層の甕17は須恵器床に用いられた甕と接合する。甕20は2層にわたって、甕13、14と18はそれぞれ個体別にまとまって出土している。分布の状況から甕13・9・18・20は2次葬と3次葬の間に散布されたものと推定される。



第117図　12号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）



第118図　14号横穴墓甕片分布状況（S＝1／60）

12号横穴墓（第117図）　縦断ラインから幅50cmの分布状況を示すもので、1個体分が14層と16層の上面から出土している。

14号横穴墓（第118図）　縦断ラインから幅50cmの幅の分布状況を示したもので、2個体分の接合資料が14層上面から12層にかけて出土している。16層上面と8層下面で侵入を受けていると推定されることから、甕21・23はその間に散布若しくは堆積したものと思われる。

出土甕・横瓶（第119図）

1は1号横穴墓玄室内の須恵器床に用いられた大甕である。口頸部及び底部は欠失し、胴部最大径72cmを測る。暗灰色を呈し、一部自然釉が付着する。

2は2号横穴墓前庭部出土の甕で、復元口径16.2cm、胴部最大径42.5cmを測り、灰色を呈す。外面は平行タタキの後にカキ目を施す。

3は2・3号横穴墓前庭部出土の横瓶で、復元口径13.1cmを測り、暗灰色を呈す。

4は2・3号横穴墓前庭部出土の大甕で、復元口径35.3cm、胴部最大径66cmを測り、灰色を呈す。口頸部外面に沈線と波状文を3段に施し、内面の一部にカキ目が認められる。

5は2・3号横穴墓前庭部出土の大甕で、復元口径45.2cmを測り、灰褐色を呈す。口頸部外面に沈線と波状文を3段に施す。

6は2・3号横穴墓前庭部出土の大甕で、復元口径27.2cm、胴部最大径46cmを測り、灰色を呈す。口頸部外面に沈線と波状文を2段に施す。

7は3～5・13号横穴墓前庭部出土の大甕で、焼歪が著しく口径は不明である。暗灰色を呈し、口頸部に沈線と波状文を3段に施す。

8は4号横穴墓前庭部出土の大甕で、口径37.2cm、胴部最大径65.4cmを測り、暗灰色を呈す。口頸部外面には沈線と波状文を3段に施す。

9は2・3・11号横穴墓前庭部出土の甕で、口径23.2cm、器高57.3cm、胴部最大径51.2cmを測り、灰色を呈す。外面の一部に自然釉が付着し、焼歪が見られる。胴部外面は平行タタキの後にカキ目を施し、底部外面には3箇所焼台の痕が観察される。

10は2・3号横穴墓前庭部出土の甕で、復元口径17.0cm、胴部最大径38.4cmを測り、灰色を呈す。胴部外面には平行タタキの後にカキ目を施す。

11は2～4号横穴墓前庭部出土の大甕で、復元口径41.6cm、胴部最大径68.6cmを測り、灰白色を呈す。口頸部外面には沈線と波状文を3段に施す。

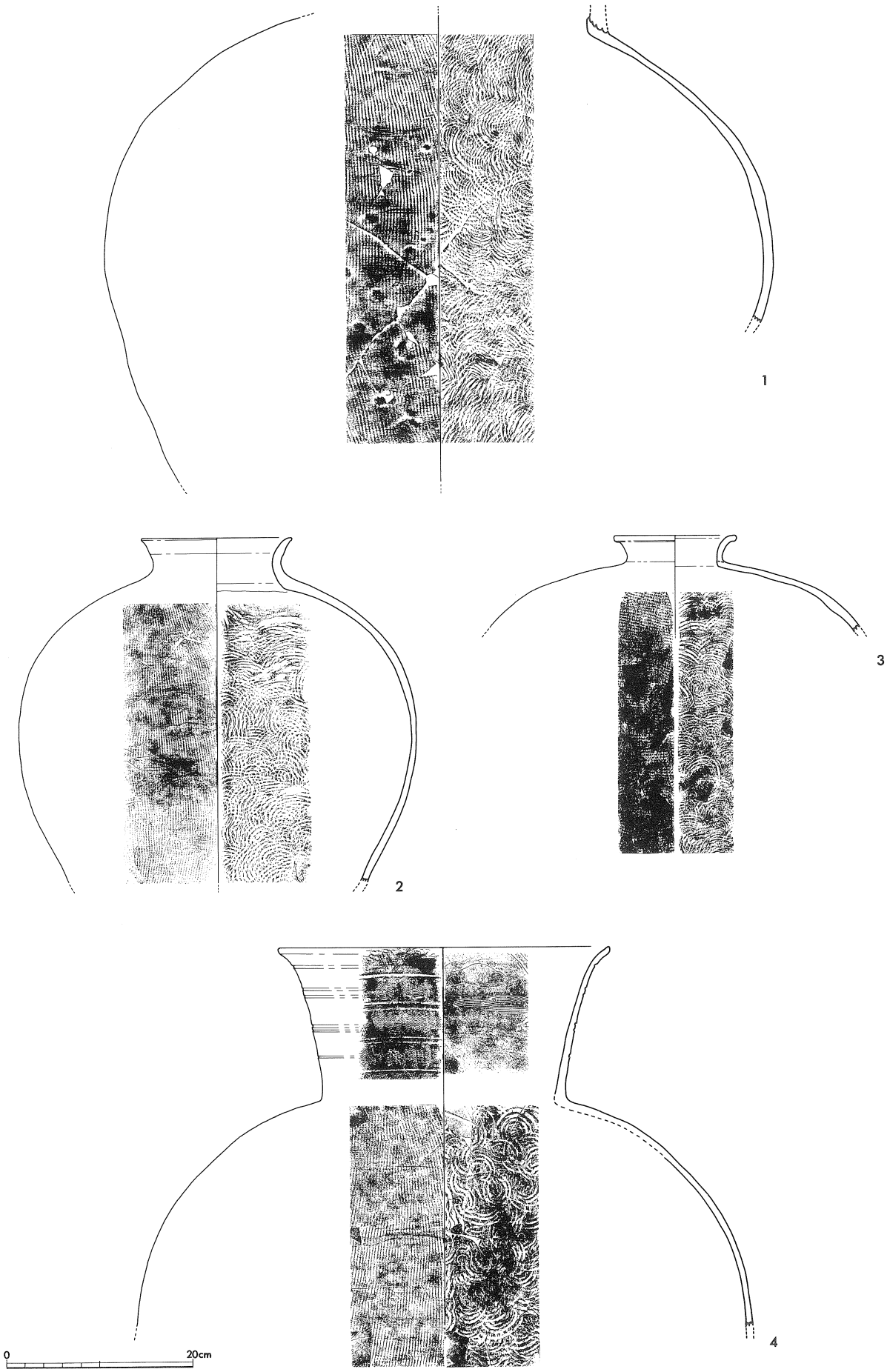
12は2号横穴墓前庭部・4号墳溝出土の大甕で、復元口径35.8cmを測り、暗灰色を呈す。口頸部外面には沈線と波状文を3段に施し、内面の一部にはカキ目が認められる。

13は2・3・11号横穴墓前庭部出土の大甕で、口径45cm、胴部最大径65.4cmを測り、焼成不良で灰色を呈す。口頸部外面には沈線と波状文を3段に施し、頸部付け根にはカキ目が認められる。胴部内面には青海波文の当て具痕のほか、カキ目も観察される。

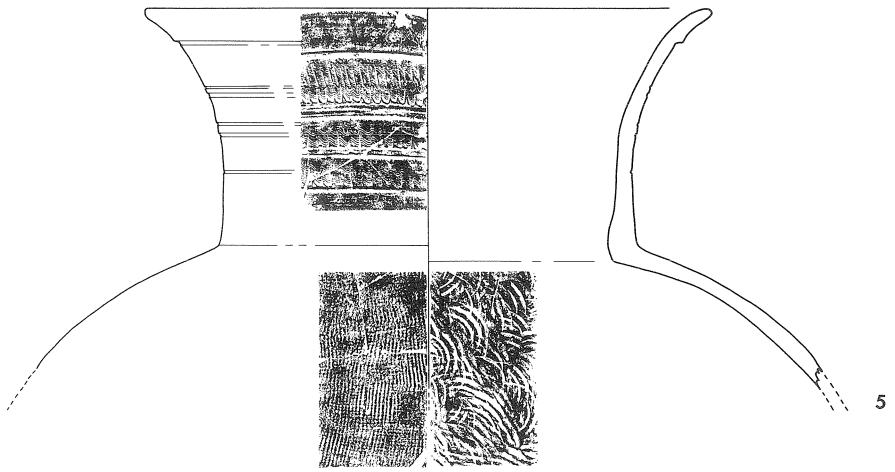
14は4～6号横穴墓出土の甕であるが、V区1号窯出土の甕片（第142図）とも接合することが判明した。窯は横穴墓より新しい時期に構築されたのは明らかで、後世に何らかの理由で持ち運ばれたものと推定される。窯出土の破片には火だすき等は観察されず、焼台として使用された可能性は低いと考えられる。口径20.2cm、胴部最大径47cmを測り、灰色を呈す。胴部外面には平行タタキの後にカキ目を施す。

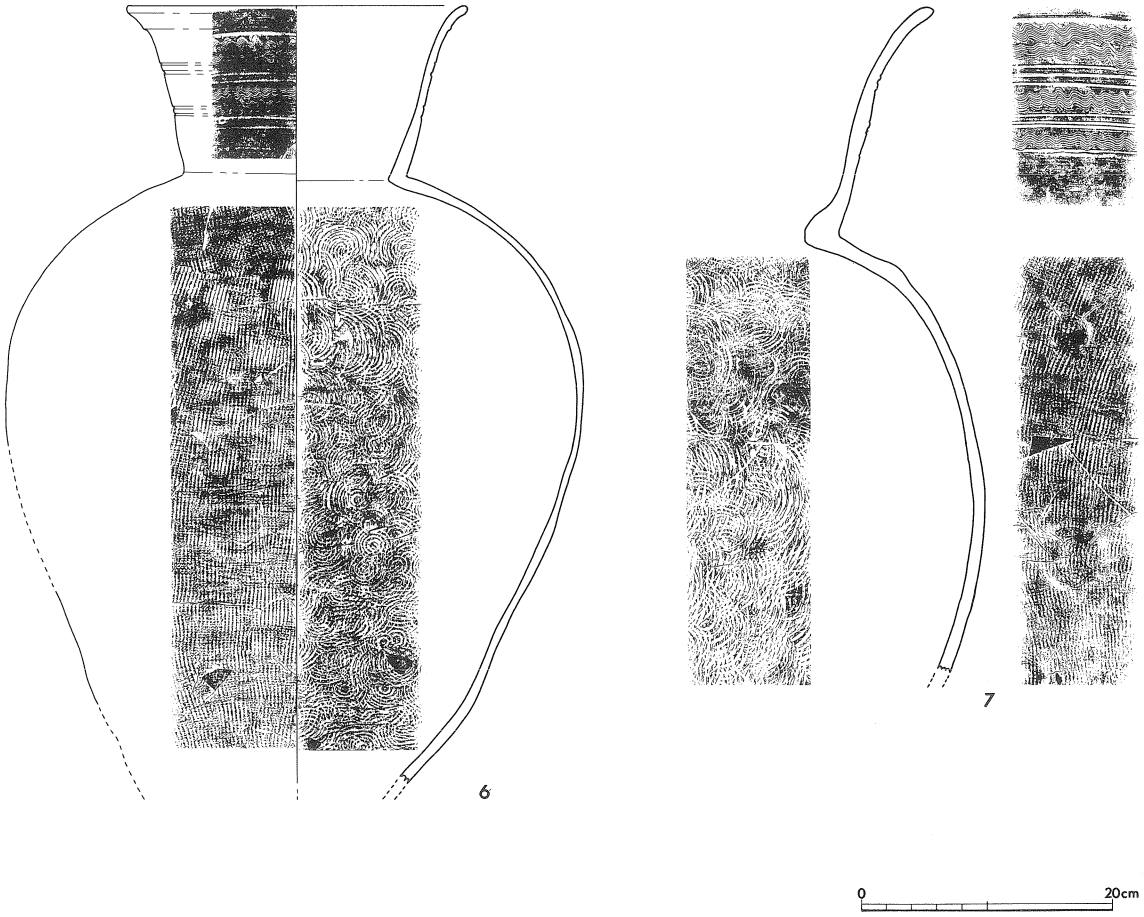
15・16は10号横穴墓前庭部出土の甕で、15は口径19.6cm、胴部最大径48.2cmを測り、黒灰色を呈す。16は口径23.6cm、胴部最大径50.0cmを測り、灰色を呈す。いずれも胴部外面には平行タタキの後にカキ目を施し、内面に15はナデ、16はカキ目を施す。

17は11号横穴墓須恵器床と前庭部出土の甕で、口径19.5cm、器高55.4cm、胴部最大径44.4cmを測り、暗灰色を呈す。胴部外面には平行タタキの後カキ目を施す。底部に焼台と思われる須恵器片が

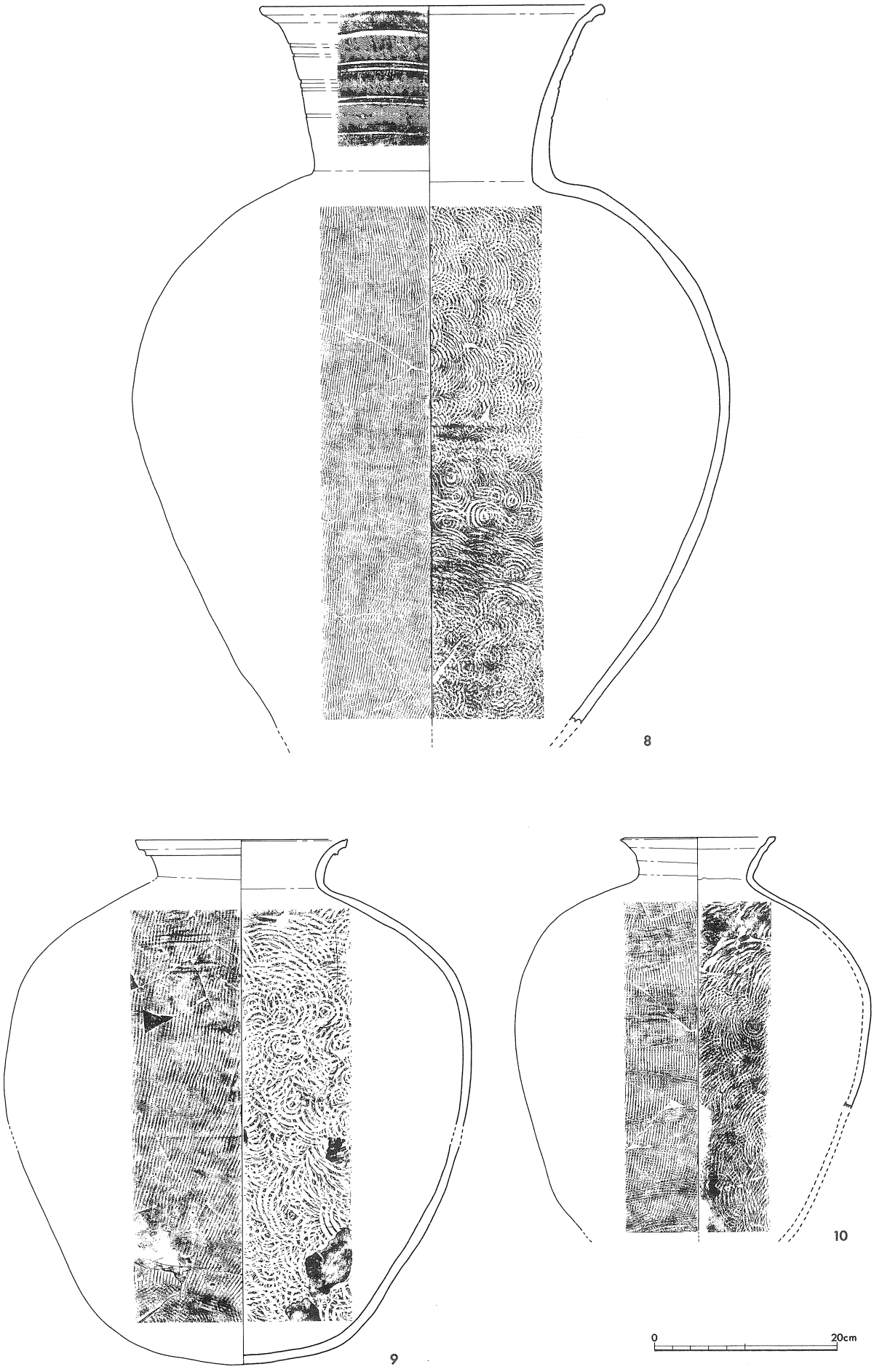


第119図　横穴墓出土甕・横瓶実測図(1)（S＝1／6）

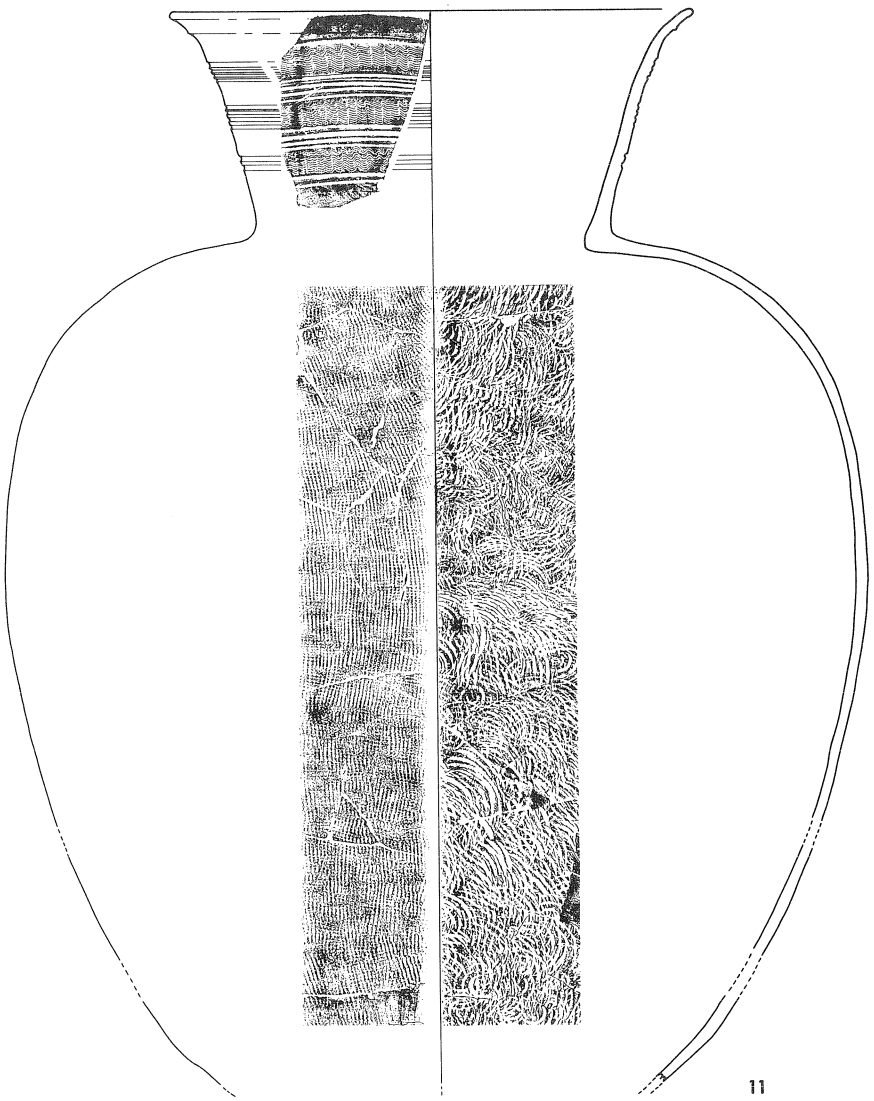


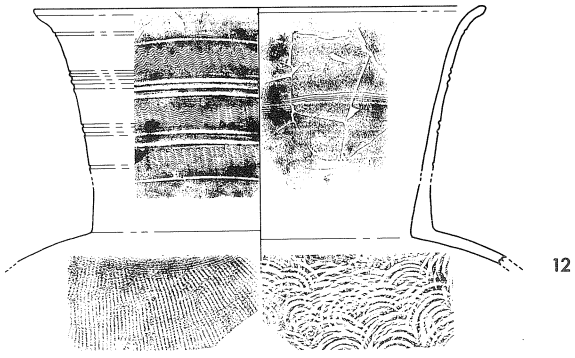


第120図　横穴墓出土甕実測図(2)（S＝1／6）

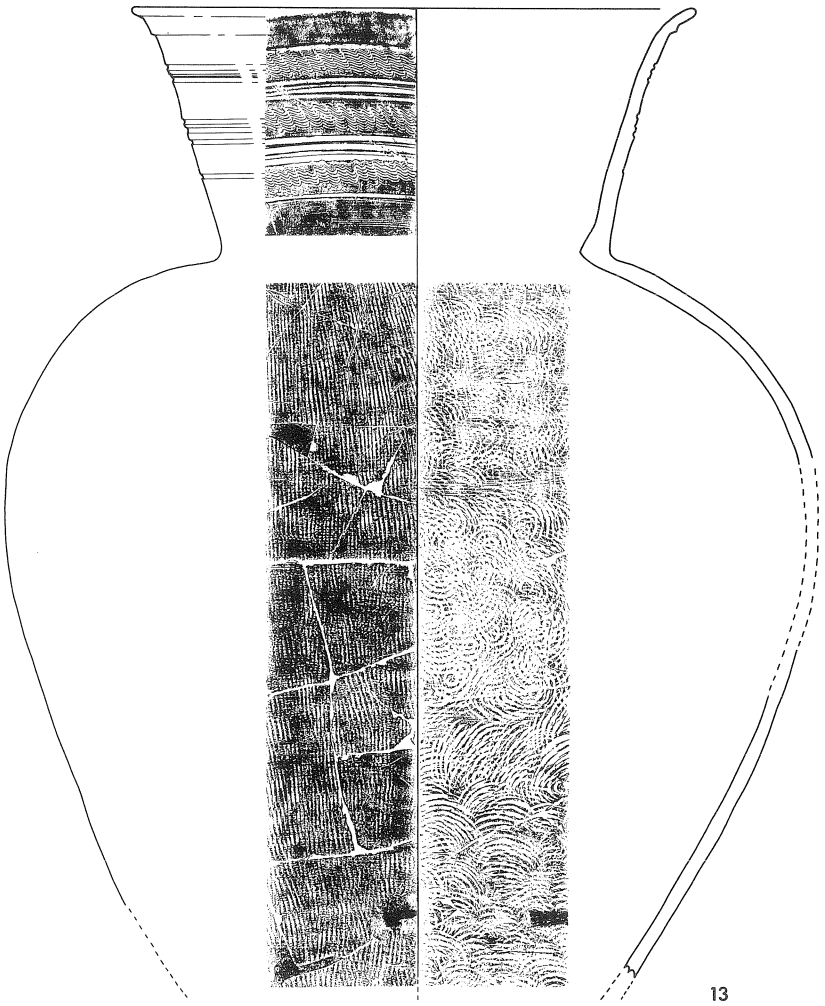


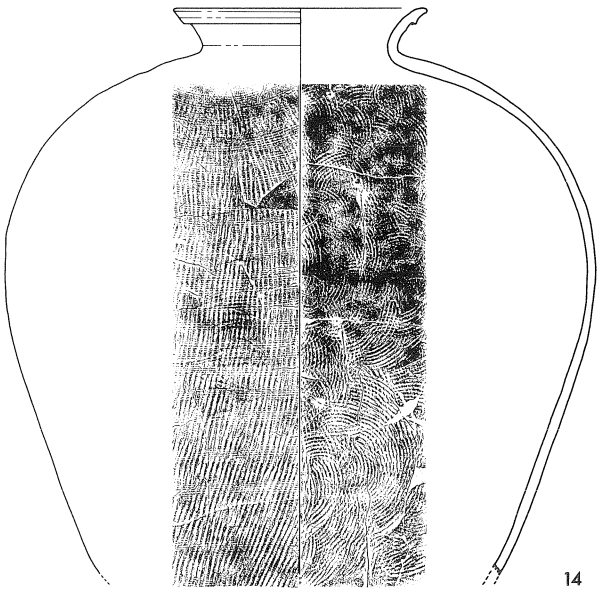
第121図　横穴墓出土甕実測図(3)（S＝1／6）

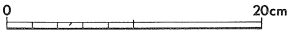




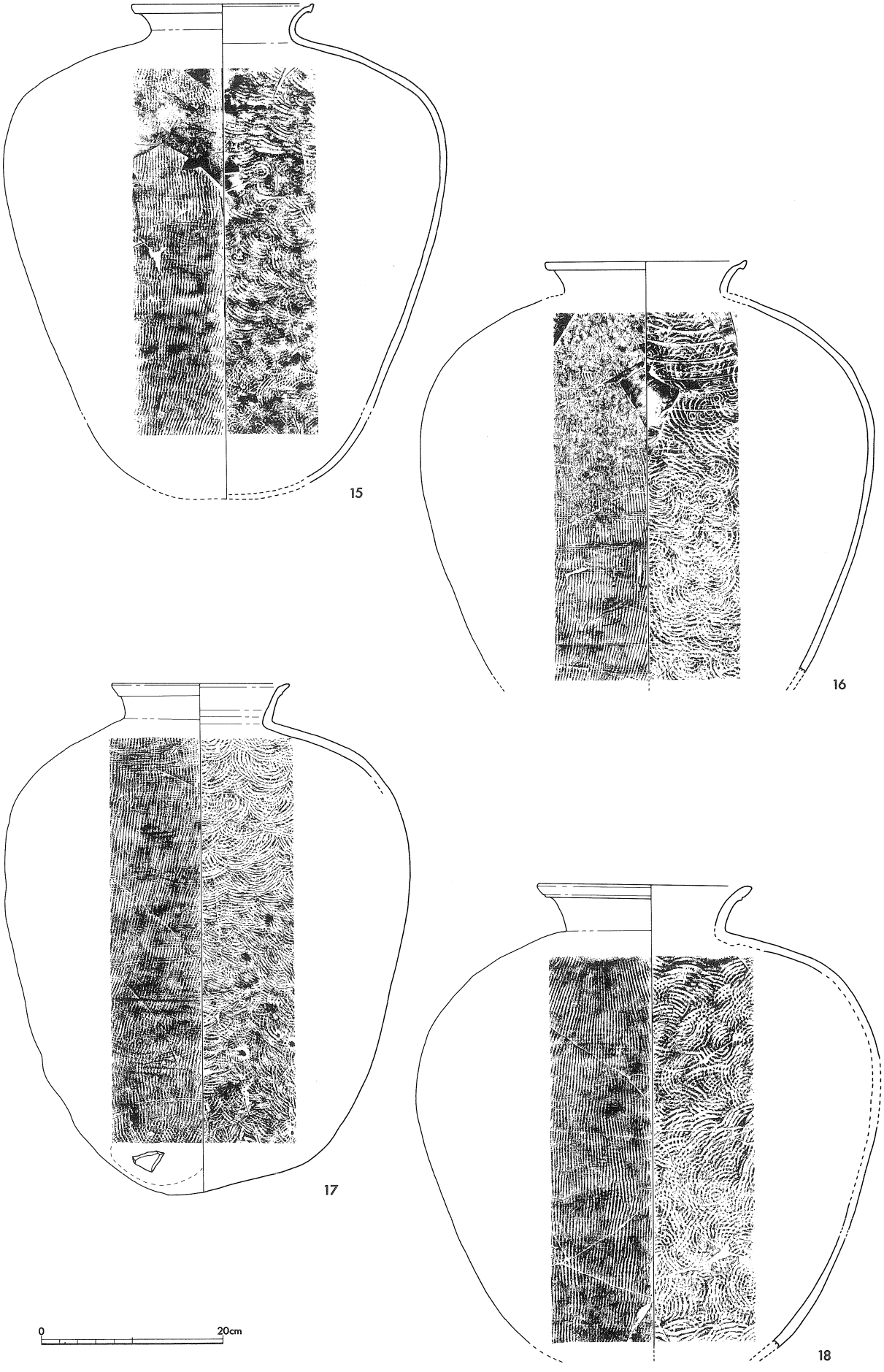
第122図　横穴墓出土甕実測図(4)（S＝1／6）



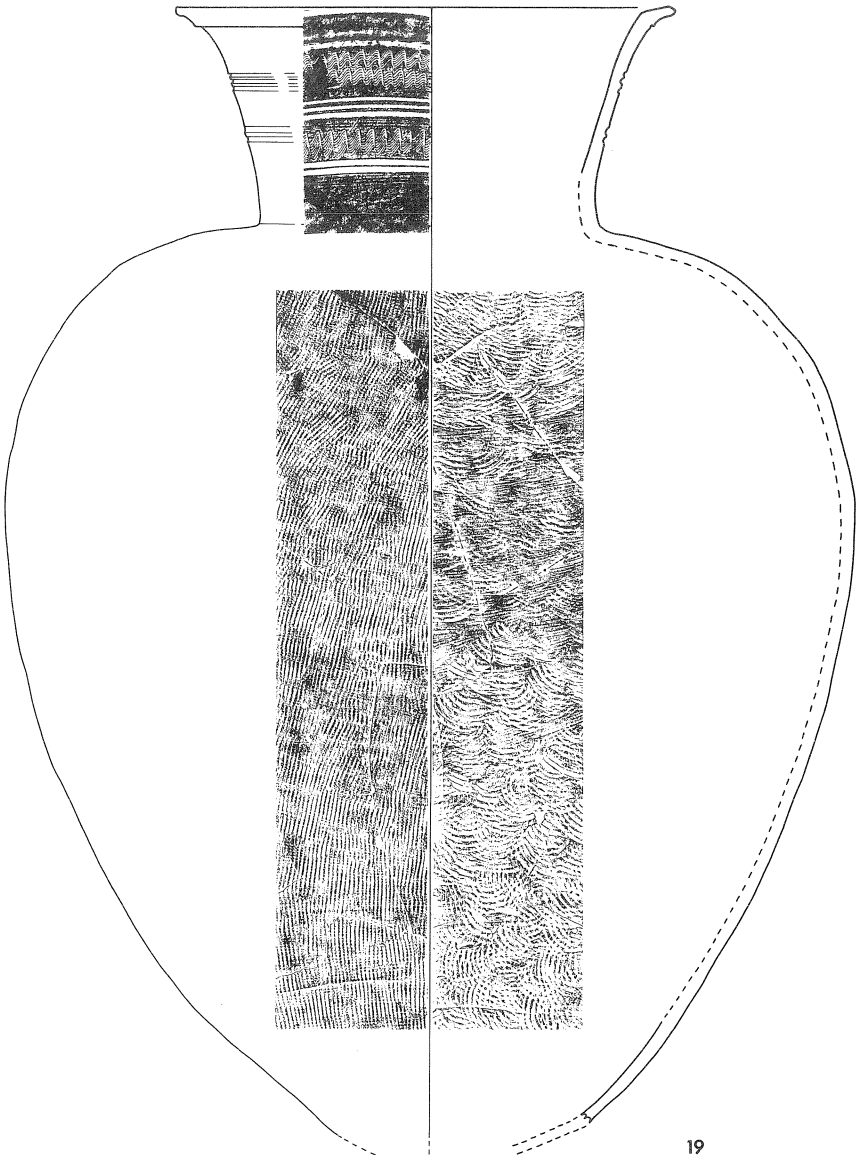


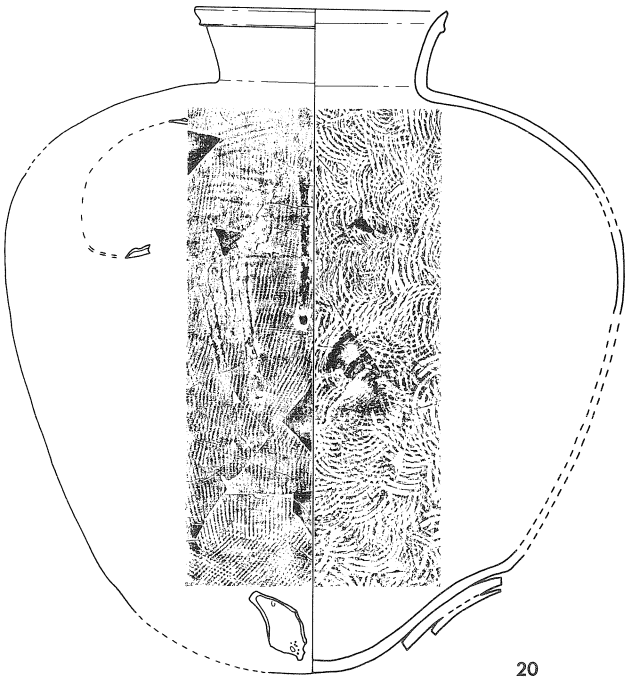


第123図　横穴墓出土甕実測図(5)（S＝1／6）

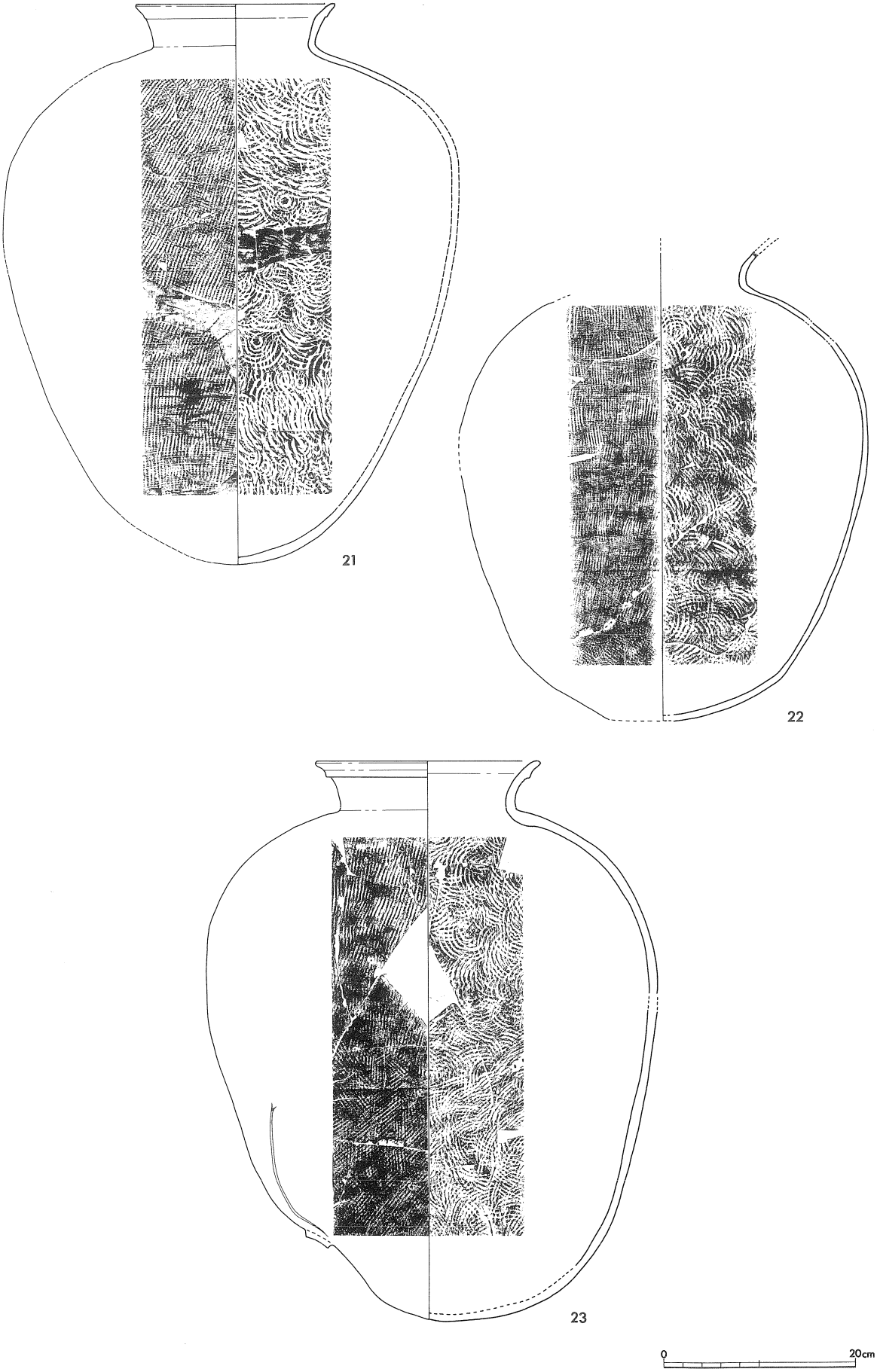


第124図　横穴墓出土甕実測図(6)（S＝1／6）





第125図　横穴墓出土甕実測図(7)（S＝1／6）



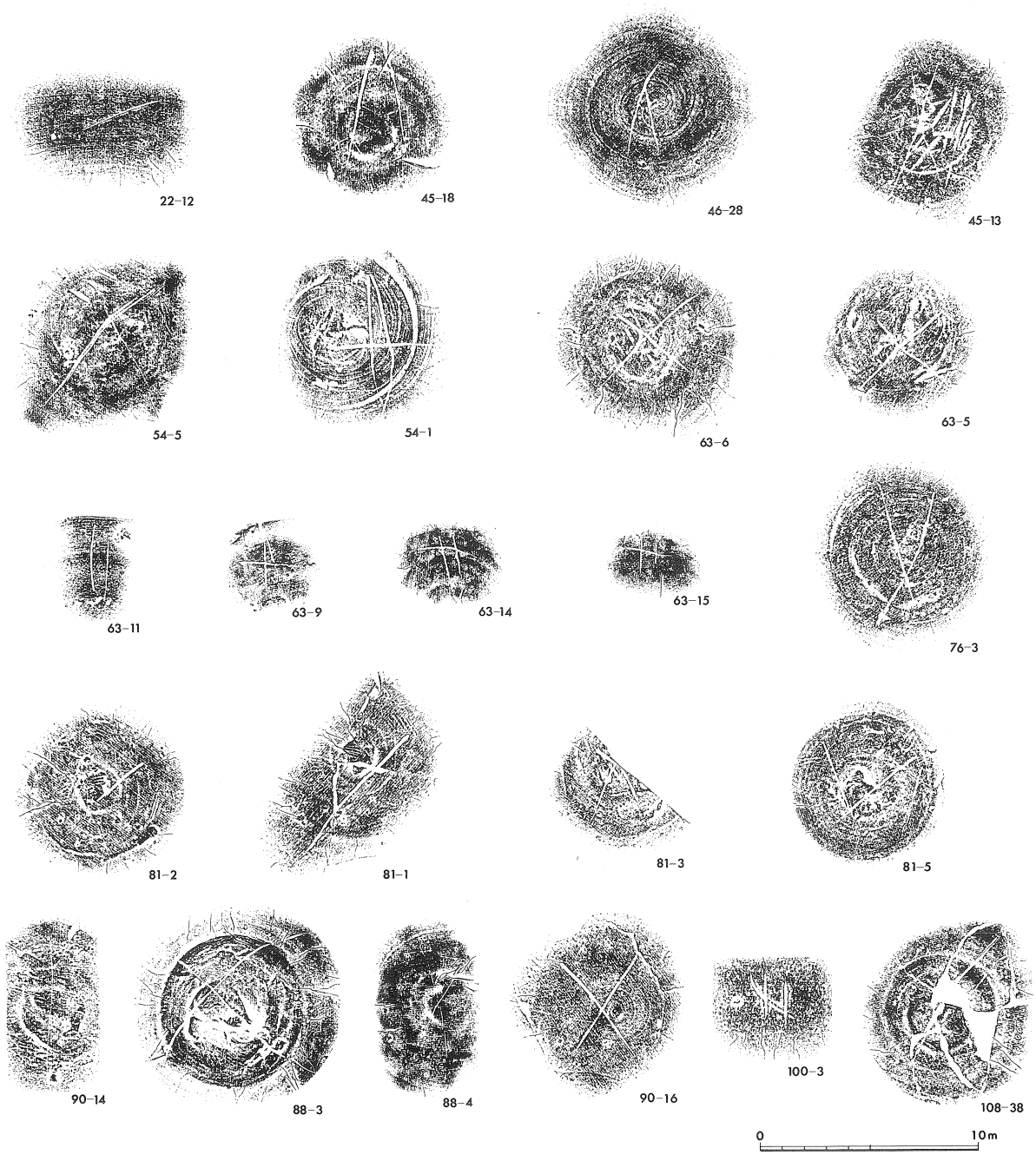
第126図　横穴墓出土甕実測図(8)（S＝1／6）

付着する。

18は11号横穴墓出土の甕で、復元口径23.5cm、胴部最大径51cmを測る。焼成不良で灰白色を呈す。胴部外面には平行タタキの後にカキ目を、内面にはナデを施す。

19は11号横穴墓須恵器床と前庭部出土の大甕で、復元口径39.4cm、胴部最大径67.8cmを測り、暗灰色を呈す。口頸部外面には沈線と波状文を２段に施し、胴部内面には当て具痕の他にカキ目が認められる。

20は11・12号横穴墓出土の甕で、口径20.0cm、器高52.8cm、胴部最大径49.6cmを測り、灰褐色を呈す。胴部外面は平行タタキの後にカキ目を、内面にはナデを施す。底部には焼台と思われる須恵器片が付着している他、肩部にも同様の痕跡が認められる。

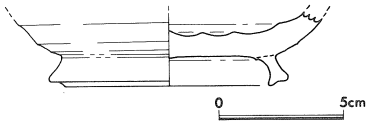


第127図　Ⅲ・Ⅳ区出土須恵器ヘラ記号拓本（Ｓ＝１／３）

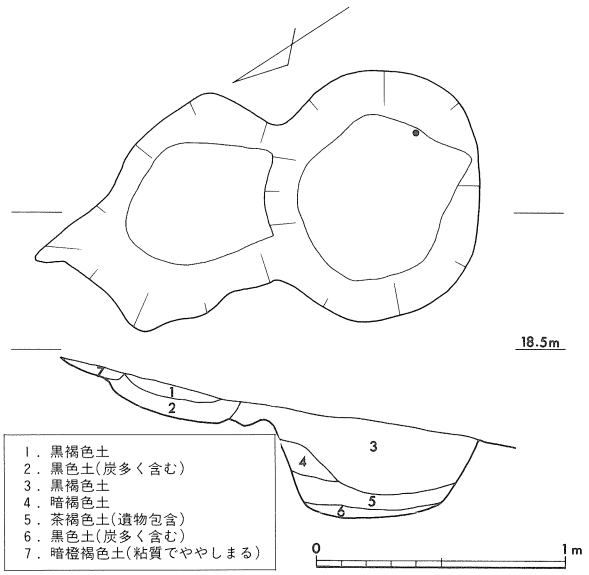
21は5·14号横穴墓出土の甕で、復元口径21.1cm、器高59.3cm、胴部最大径48cmを測り、灰色を呈す。胴部外面には平行タタキの後にカキ目を施す。

22は9·10号横穴墓出土の甕で、口縁部を欠失し、胴部最大径43.2cmを測る。灰褐色を呈し、胴部外面には平行タタキの後にカキ目を、内面にはナデを施す。

23は14号横穴墓出土の甕で、復元口径23.4cm、器高58.8cm、胴部最大径48.0cmを測り、灰色を呈す。胴部外面には平行タタキの後にカキ目、内面にはナデを施す。底部付近には焼歪と焼台が付着する。



第129図　ＳＫ02出土遺物実測図
（Ｓ＝１／３）



第128図　ＳＫ02実測図（Ｓ＝１／30）

（３）ＳＫ02（第128図）

１号横穴墓の南側15m付近に位置する焼土坑で、平面規模は長軸約1.5m、端軸約1.0mの瓢箪形を呈し、深さは検出面から39cmを測る。２段掘りで、時期を異にした２つの床面には炭が堆積し、周囲が僅かに焼けた状態であった。

土坑内の５層から混入と思われる須恵器を１点検出している。

出土遺物（第129図）　壁際の５層から取り上げた高台付坏で、底部外面には回転ヘラ削りを施す。高台は内傾して貼付け、端部に面を作る。７世紀中葉～末のものと考えられる。

（４）Ⅳ区　遺構に伴わない遺物（第130図）

１は11号穴付近の下方斜面で採取した有蓋高坏で脚部を欠失する。口径12.0cm、受部径15.1cmを測り、辛うじて筒部に方形の３方透しが観察される。

２は11号穴付近の下方斜面で採取した短頸壷か平瓶の口頸部で、口径8.6cmを測る。

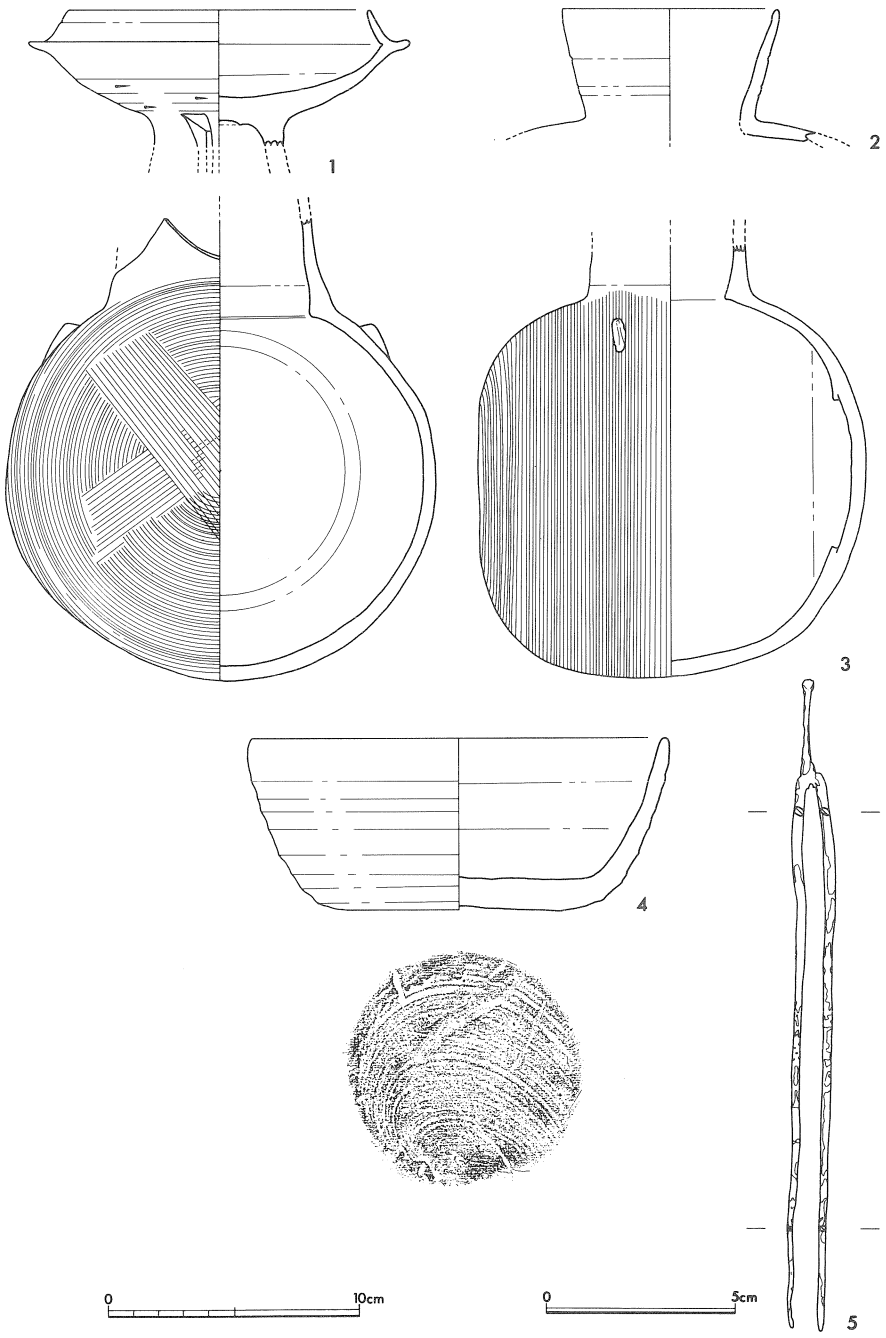
３は提瓶で、口縁部を欠損する。背面は比較的しっかりした平坦面を作り、カキ目を同心円状に施した後に、更に「×」状に施す。肩部には退化した環状把手を一対貼り付ける。

４は11号穴付近の下方斜面で採取した椀である。口径16.6cm、器高6.8cm、底径約9.0cmを測る。口縁部はややまるみを持ちながら内湾して立ち上り、底部外面には回転糸切り痕、内面には静止ナデが認められる。

５は８号穴前庭部付近の表土直下から出土した銅製の笄で、表面には緑青が認められる。

註

（１）島根県教育委員会「松江北小原横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅴ、1974
（２）田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981
（３）大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11、1994
（４）柴田喜太郎氏の御好意により、５号穴出土石棺の石材試料を粉砕して泥質分を除去後、散布剥片にして鉱物組成を検討して頂いた。その結果、石材には石英と少量の斜長石が含まれるのみで、重鉱物等の他の鉱物は含まれておらず細粒結晶質凝灰岩であるとの回答を得た。



第130図　Ⅳ区遺構に伴わない遺物実測図（S＝1／3、5は1／2）

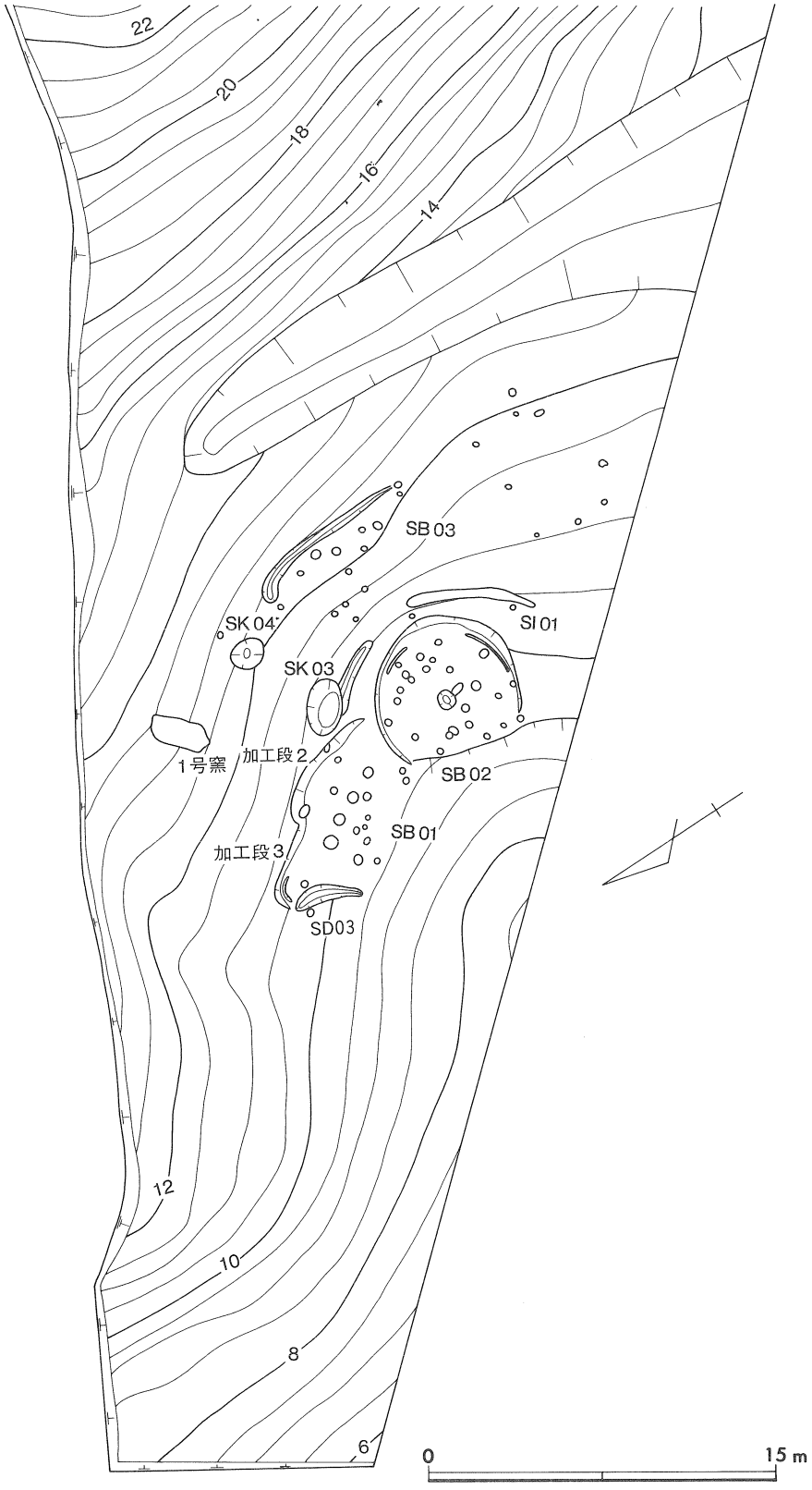
4節　Ⅴ区の調査

（第131図）

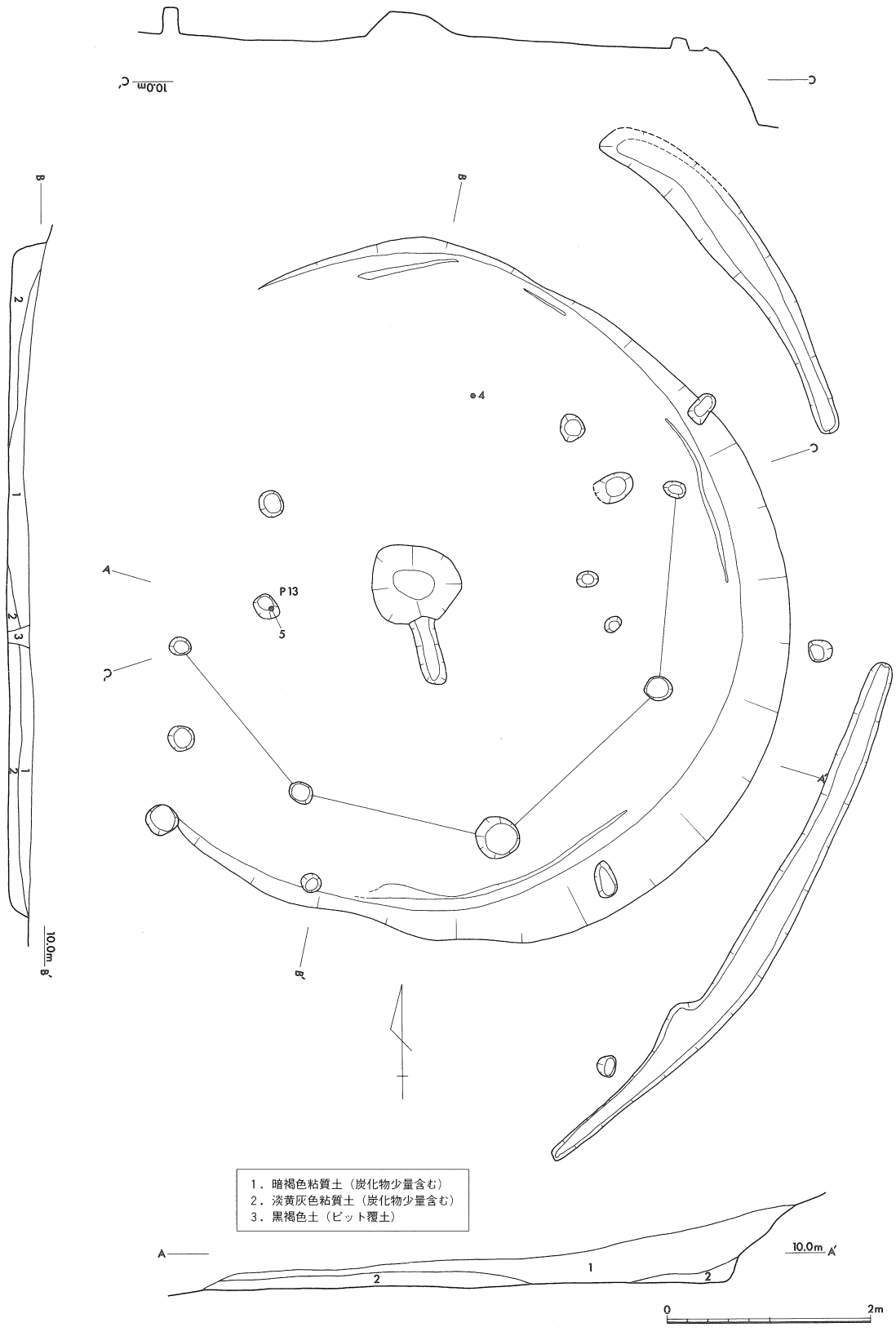
調査区は当遺跡の北西側、丘陵の裾部に位置している。周囲の地形は標高が6～14mの緩斜面で、北東側の調査区際の表土直下から生焼けの甕や瓦が検出されたため窖窯の存在が明らかとなった。表土除去後に精査したところ、その他の遺構として、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑等が検出された。遺構は20m四方程度の範囲から集中して検出された。

Ⅴ区は前年度のⅠ区の調査時に弥生土器（第5図）を出土した上方に位置し、そうした時期の住居の存在が予想されていた。

調査区東側の標高14m付近に、長さ28m、幅4m、深さ2m前後の大きな溝があるが、性格、時期ともに不明で、後世の掘削によるものと思われる。



第131図　Ⅴ区調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1／300）

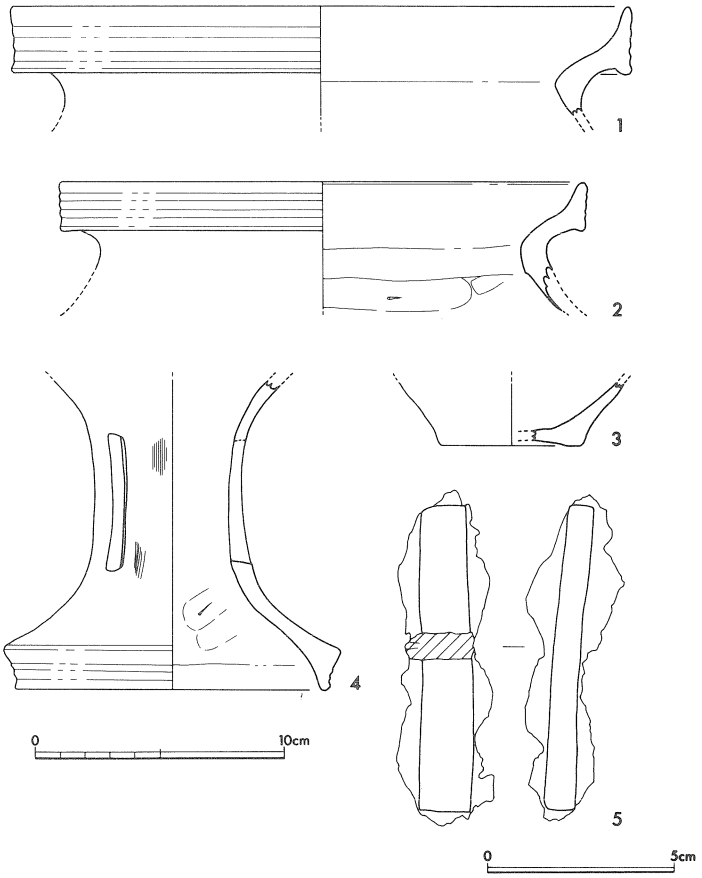


第132図　ＳＩ01実測図（Ｓ＝１／60）

ＳＩ01（第132図）

Ｖ区の南にある竪穴建物跡である。床面の標高は8.4ｍを測る。北西側は掘削を受け残りは悪いが、南東側は検出面からの深さ約60㎝を測り、遺存状態は比較的良い。検出された竪穴は径約５ｍ

の円形プランで、床面には主柱穴と思われるピットが５つ残っている。欠落部分を復元すると、７本柱の竪穴建物跡であったと思われる。また、壁に沿って５つの柱穴が見られ、中央ピットとそれに続く舌状の溝がある。中央ピットは径80cm、深さ20cmを測る。また、壁に沿って周溝がとぎれとぎれに、幅10cm程で残る。竪穴の東外側には溝が２本残り、本来は竪穴建物跡に付設するものと考えられるが、どの程度まで廻っていたかは不明である。規模は現状で、北東側が最大幅50cm、長さ3.70m、南東側が最大幅40cm、長さ６mを測る。検出した床面には炭化物を少量含む1.5cm～２cmの粘質土の部分があった。出土遺物から弥生時代後期前葉の建物跡であると考えられる。



第133図　ＳＩ01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３、５は１／２）

ＳＩ01出土遺物（第133図）

１は復元口径24.6cmを測る甕である。表面は風化が激しいためよく分からないが、口縁部の外面には４～５条の凹線が施される。内面も風化のため判然としないが、ヨコナデを施す。色調は橙褐色を呈す。

２は弥生土器の甕で、１と同じく口縁部外面に３～４条の凹線が認められる。内面は頸部以下に横方向のヘラ削りが見られる。色調は淡橙褐色を呈す。

３は内外面とも風化が著しく調整は不明であるが、底径約６cmの甕あるいは壷の底部で、色調は淡黄褐色を呈す。

４は建物床面で検出した弥生土器の器台で脚口径11.8cm、筒部径６cmを測り、口縁部は欠損している。筒部中央には幅５cmのほぼ長方形の３方向透し孔があり、縦ハケメがかろうじて残る。脚口縁部外面には３条の凹線が廻り、内面にはヘラ削りの痕がわずかに残る。色調は外面が赤茶褐色、内面は橙褐色を呈す。

５は錆化が著しく遺存状態は良くないが、長さ8.1cm、幅1.3cm、厚さ約８mmの反りぎみの鉄器で、用途は不明である。また、遺構に伴うものか否かも明らかでない。

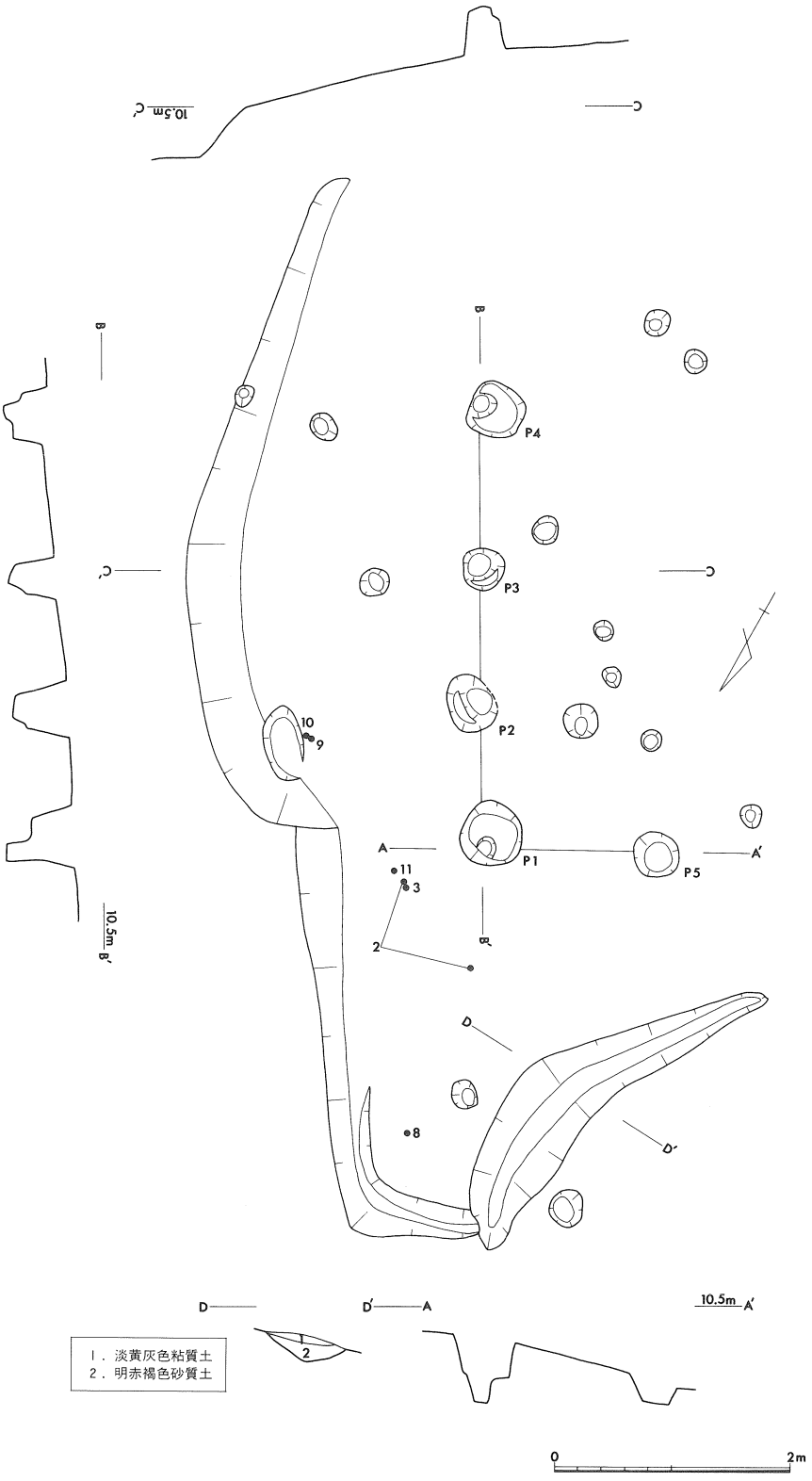
ＳＢ01・ＳＤ03・加工段２・加工段３（第134図）

ＳＩ01に隣接し、床面標高10.1ｍに位置する建物跡で、３間×１間以上の柱穴配列を持つ。斜面を40cm程度削って平坦面を作り出し、斜面に平行して建てられている。Ｐ１～Ｐ４の柱穴の間隔は1.2～1.3を測り、柱穴は径36～52cm、深さは40cm～60cmを測る。Ｐ１とＰ４は径14cmの柱痕が残る。さらに、Ｐ５は1.5ｍの間隔でＰ１～Ｐ４と直交する。柱穴の底面レベルは、５穴ともほぼ揃っている。加工段２は、壁が不自然な曲がり方をしていることを考えると、ＳＢ01に付随せず、加工段３が伴う可能性が高い。

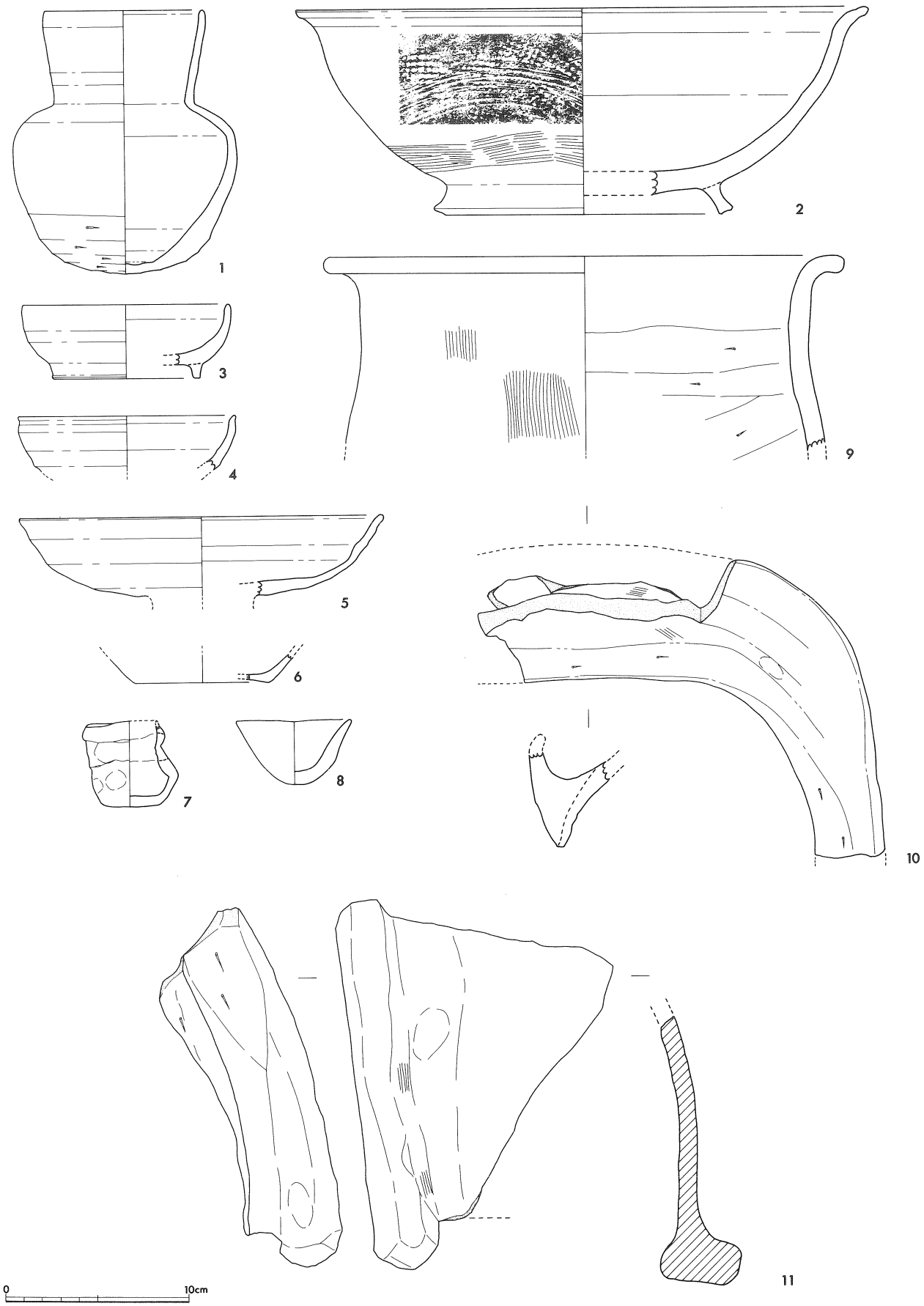
ＳＤ03はＳＢ01と近接した、北から西の方へ「へ」の字状に曲がる長さ3.3ｍの短い溝である。幅20cm～70cm、深さは最深部で23cmを測る。中には、上層に淡黄灰色粘質土、下層に明赤褐色砂質土が堆積していた。溝の中からの遺物は検出していない。

加工段３はＳＢ01の北端から北西に直線的に3.4ｍ伸び、ほぼ直角に西側へ曲がる。コーナー付近は溝状になっていてＳＤ03と切り合う。

これらの切り合い関係は新しい方から



第134図　ＳＢ01、ＳＤ03、加工段２、加工段３実測図（Ｓ＝１／60）



第135図　ＳＢ01出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

加工段２⇒加工段３、ＳＤ03⇒加工段３と考えられるが、加工段２とＳＤ03の先後関係は不明である。

周辺から小さなピットが多数検出されているが、どの遺構に伴うものかは特定できない。

建物の時期は出土遺物から古墳時代後期以降であろうと思われる。

ＳＢ01出土遺物（第135図）

１は直口壷で、口径8.5cm、胴部最大径12.2cm、器高14.3cmを測る。高さ５cmの口縁が僅かに開き気味に立ち上がり、端部はわずかに内湾する。胴下半～底部にかけて回転ヘラ削りを施す。内面底部のみナデ、その他は回転ナデである。

２は須恵器の鉢もしくは椀である。復元口径が31cmにもなる大型のもので、器高は11.4cm、器厚は８mm～１cm程である。底部径は15cmを測る。口縁部は大きく外反し、内面にごく浅い凹面がある。外面上半は格子タタキ後、回転ナデで丁寧に整形されている。底部には格子タタキ目が残り、その後カキ目を施している。底部はヘラ切り後回転ナデが施され、高台が貼り付けられている。高台の断面は長方形を呈し、最下部はナデにより僅かに面が作られる。流れ込みによる平安時代以降のものであろう。

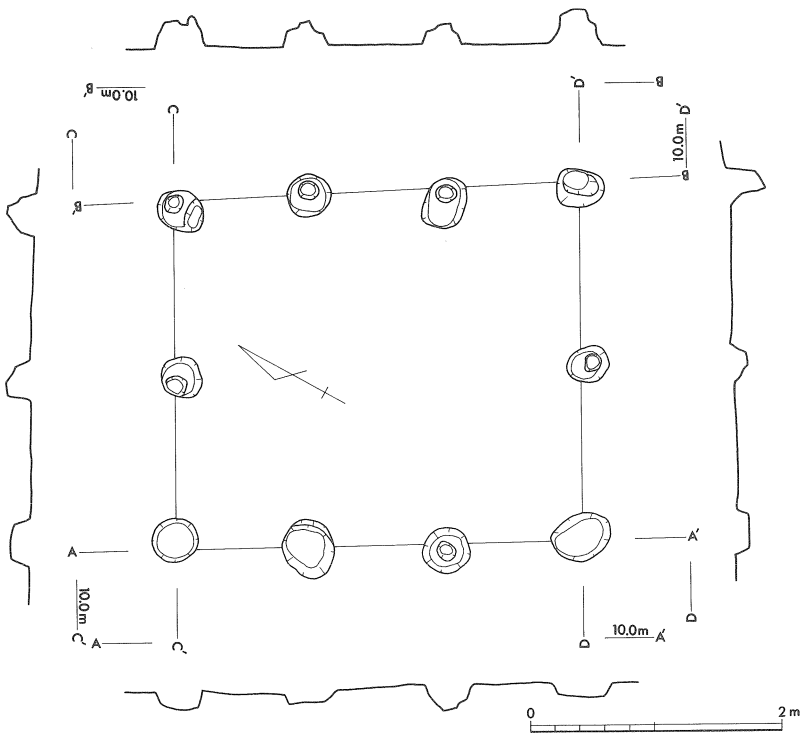
３は口径11.2cm、器高４cm、底径８cmを測る高台付坏である。坏部底部はかなり厚く８cmあり、口縁部は丸みを持ち、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁部の内・外面には回転ナデを施し、底部内面はナデである。高台断面は正方形に近く、丁寧にナデが施されている。７世紀後半以降のものであろう。

４は坏の口縁部の小片である。色調は淡赤褐色を呈す。口縁端部はごくわずかに屈曲して外反する。８Ｃ中葉～末頃と考えられる。

５は須恵器の高坏の坏部で、復元口径19.7cmのものである。内・外面の調整は回転ナデで、底部はナデを施す。口縁部は坏部から緩やかに立ち上がり、大きく開く。

６は底部のみわずかに残る土師器の皿と考えられる。風化が著しいため調整は不明である。

７と８は手づくね土器である。７は口径約４cm、器高3.2cmを測り、粘土の紐積みで成形されている。その後軽くナデが施してあり、指頭圧痕も観察される。粘土のつなぎ目が分かる雑な作りである。８は加工段３の近くから出土した酒杯状のもので、内・外面



第136図　ＳＢ02実測図（Ｓ＝１／60）

ともに丁寧なナデが施されている。

9、10、11は移動式カマドの一部であり、同一個体の可能性がある。9は復元口径27.6cmを測り、口縁内面部分には一部煤の付着が観察される。口縁部は大きく「く」の字状に開き、内面部はヘラ削り、外面部はところどころに縦方向のハケ目が残る。10はカマドのひさし部分である。ひさしは外反し、強いナデが施される。ひさしの先端部はケズリによる面取りが観察される。11はカマドの底部である。縁の下端が突出して、脚を作り出している。稀なタイプで、岡山県津寺遺跡[1]等に類例が見られる。体部はヘラ状工具による削りが施される。ひさし下部には指頭圧痕が1ケ所見られる。

ＳＢ02（第136図）

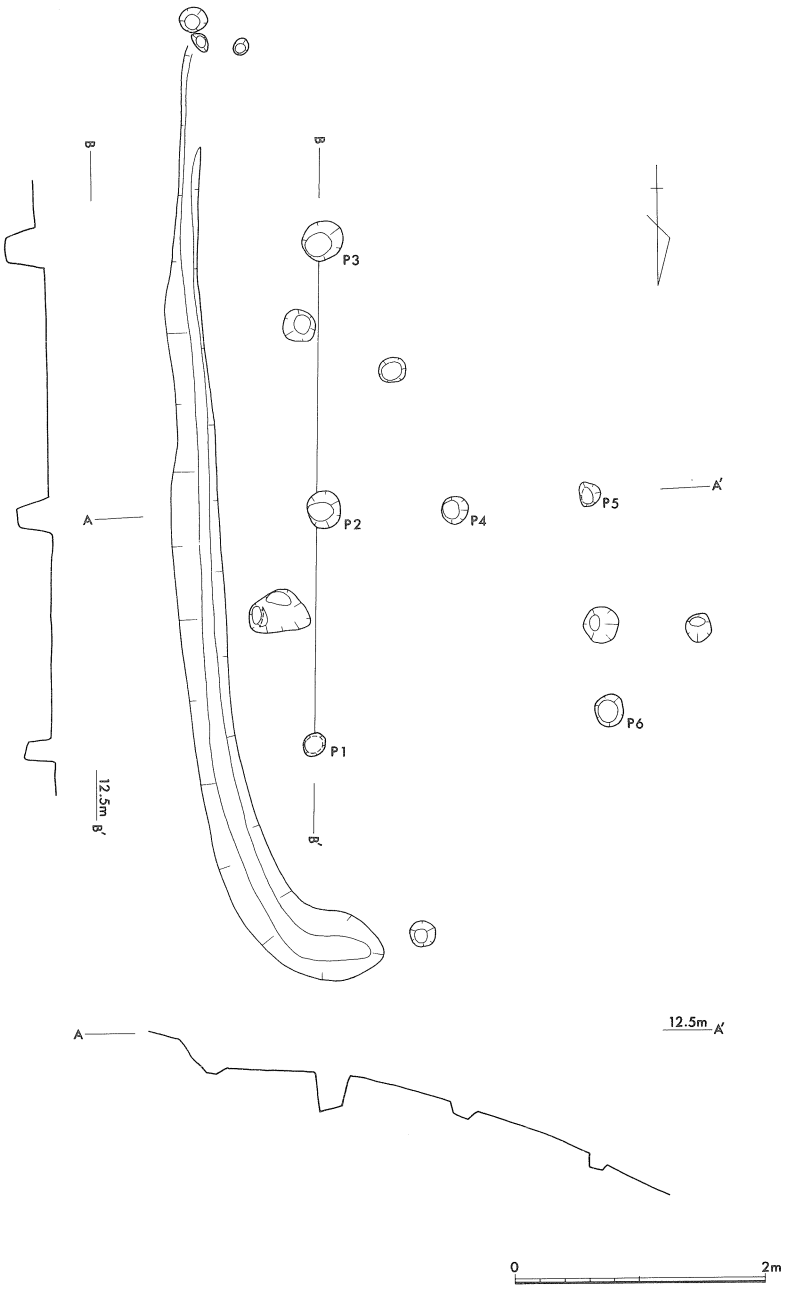
ＳＩ01と重複して検出された堀立柱建物跡で、斜面に平行に建てられている。３×２間（約９ｍ×約5.5ｍ）の柱穴配置であり、建物はＳＩ01の床面で検出された。柱穴の径は15cm～20cm、深さは床面から８～30cm前後で、７つの柱穴に径12cm前後の柱痕が残る。桁行き間の柱穴の間隔は約80cmであるが、梁行き間の柱穴の間隔は1.1ｍを測る。柱穴の上部は削平を受けており、柱穴底部の残りは悪い。柱穴に伴った周溝や溝は検出されなかった。

遺構に伴った遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＢ03（第137図）

Ｖ区の中では最も東に位置する掘立柱建物跡である。標高12～13ｍの斜面を平坦に造成後、斜面に平行に建てられている。

周溝に沿って、Ｐ１～Ｐ３の３つの柱穴が並ぶ。柱



第137図　ＳＢ03実測図（Ｓ＝１／60）

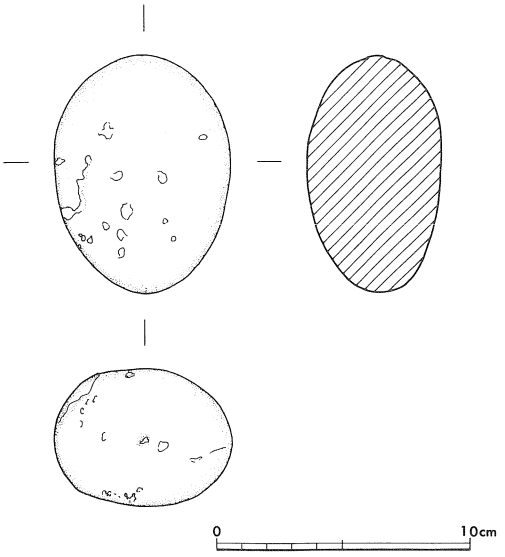
穴は径約19cm～32cm、深さは約30cmで柱穴底面のレベルはほぼ均一である。

周溝の北端はわずかに膨らみ、幅20cm～60cmで柱穴の東側を直線的に伸びているが、南側は細く消えている。

柱穴の間はＰ１からＰ２が1.7m、Ｐ２からＰ３が1．8mである。平面観察ではＰ２、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６も建物に関係する可能性があると思われ、Ｐ２～Ｐ４、Ｐ４～Ｐ５の柱穴の間隔は1.1mである。

周囲からは小さなピットを多数検出しているが、きれいに並ぶものはない。

ＳＢ03からは石器が出土しているが、建物の時期を判断し得る遺物は出土していない。



第138図　ＳＢ03出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

ＳＢ03出土遺物（第138図）

周溝内から見つかった、磨石もしくは敲石で、長径1.9cm、短径７cm、厚さ5.2cm、重さ437.11ｇを測る。石材は風化が進んでいるが、半花崗岩である可能性が高い。

ＳＫ03（第139図）

Ｖ区中央部付近にＳＩ01を切って作られた性格不明の土坑で、床面は標高10m付近に位置する。平面は長楕円形で、断面は逆台形を呈し、長径2.4m、短径1.6m、最深部で65cmを測る。底部には平坦面が作り出されている。

覆土は３層に分かれ、最下層は明赤褐色粘質土、２層は明黄褐色土、最上層は炭化物と遺物を含んだ暗黄褐色粘質土が堆積している。

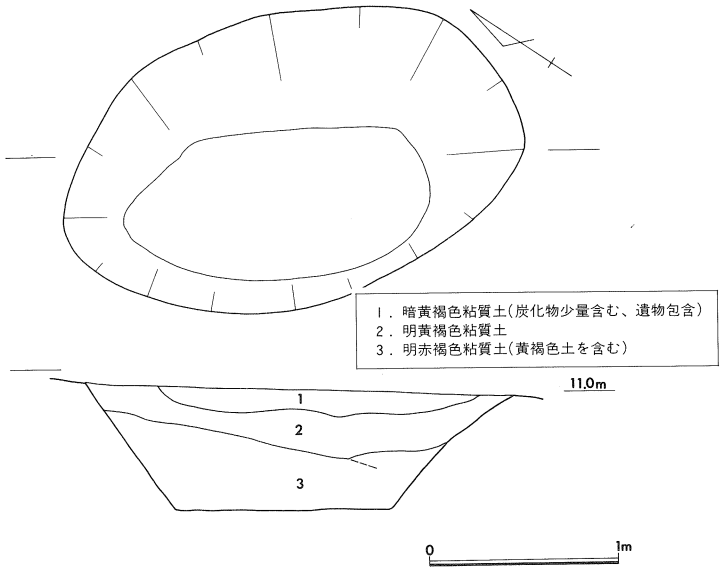
ＳＫ03出土遺物（第140図）

１層から出土した甑の把手部分である。ナデと指頭押さえにより丁寧に形づくられている。断面は不整円形である。色調は淡黄褐色を呈し、胎土はやや粗く、１㎜以上の砂粒を多く含む。

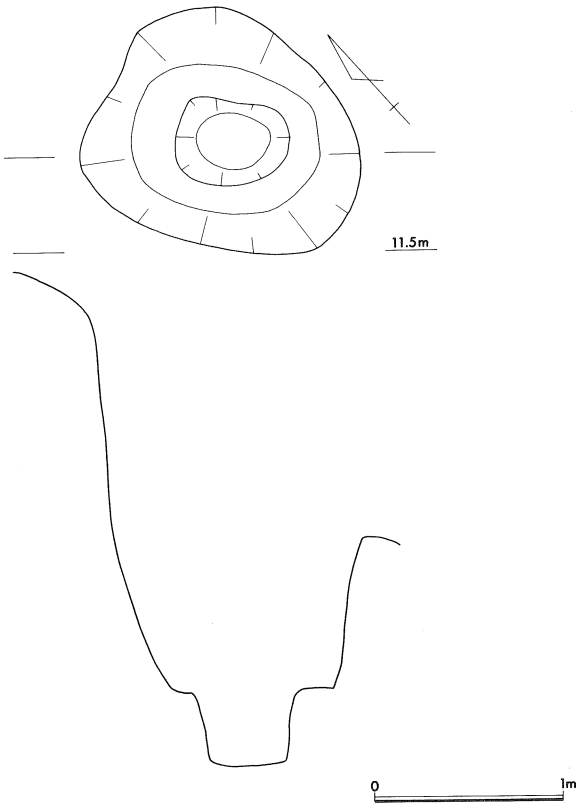
ＳＫ04（第141図）

ＳＫ03より３ｍ東側にある、高低差50cmの斜面に作られた落し穴である。平面は不整円形で、断面はやや下膨れ状となってほぼ垂直に立ち上がる。最深部で2.5mを測る。底面中央には径約40cm、深さ39cmとかなり大きめの底面ピットがある。遺物は検出していない。

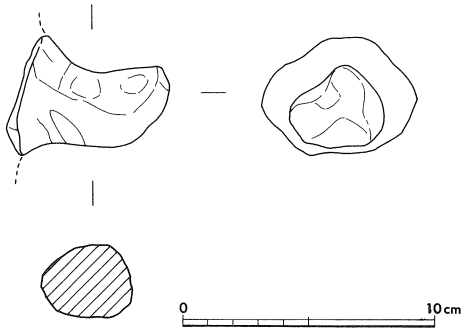
なお、当遺跡の東に続く渋山池遺跡では、26個に及ぶ落し穴が検出されている。



第139図　ＳＫ03実測図（Ｓ＝１／40）



第141図　ＳＫ04実測図（Ｓ＝１／40）



第140図　ＳＫ03出土遺物実測図（Ｓ＝１／３）

１号窯（第142図）

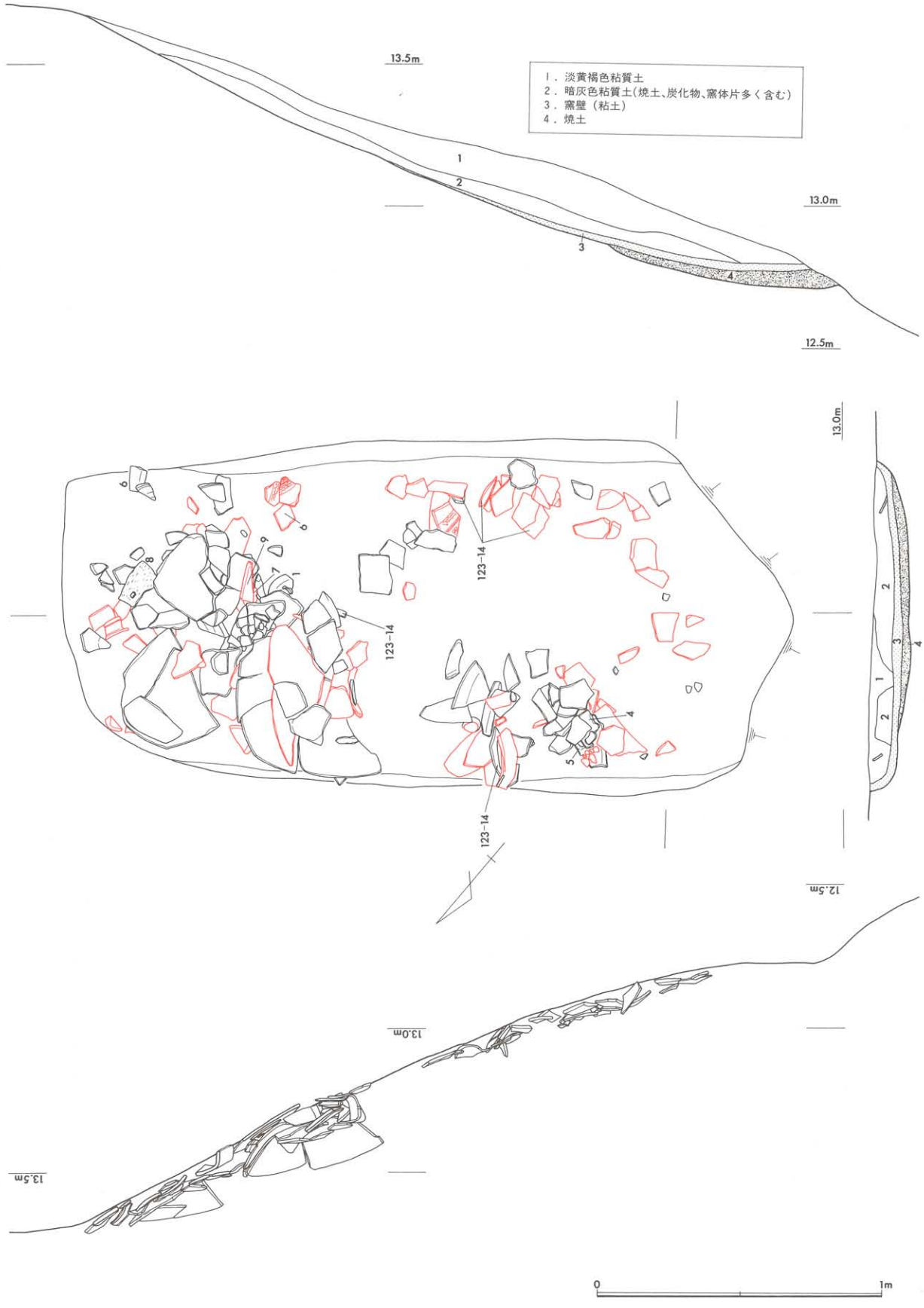
床面標高12.7m～13.7mに位置する。平面は長方形で下部はやや掘り過ぎと思われる。煙道はなく、残存長2.70m、最大幅1.13m前後を測るが、遺存状態はきわめて悪く、本来の規模は不明である。床面は約23°傾斜する。深さは最深部で20cmで、土層は４層に分かれる。最下層に34cmの長さで焼土があり、ここが燃焼部であろうと判断される。焼土の厚さは８cmを測る。さらに1.46mにわたって粘土を貼った窯壁が観察された。窯壁は２～３cmの厚さで、両端部は緩やかに立ち上がる。

灰原は検出されず、長く熱を受けた痕跡もないため使用された回数は少なかったと考えられる。隣接する渋山池遺跡から検出された９世紀末～10世紀初頭頃と考えられる須恵器窯と比較すると、規模や灰原が無く操業回数が少ない点で共通する。

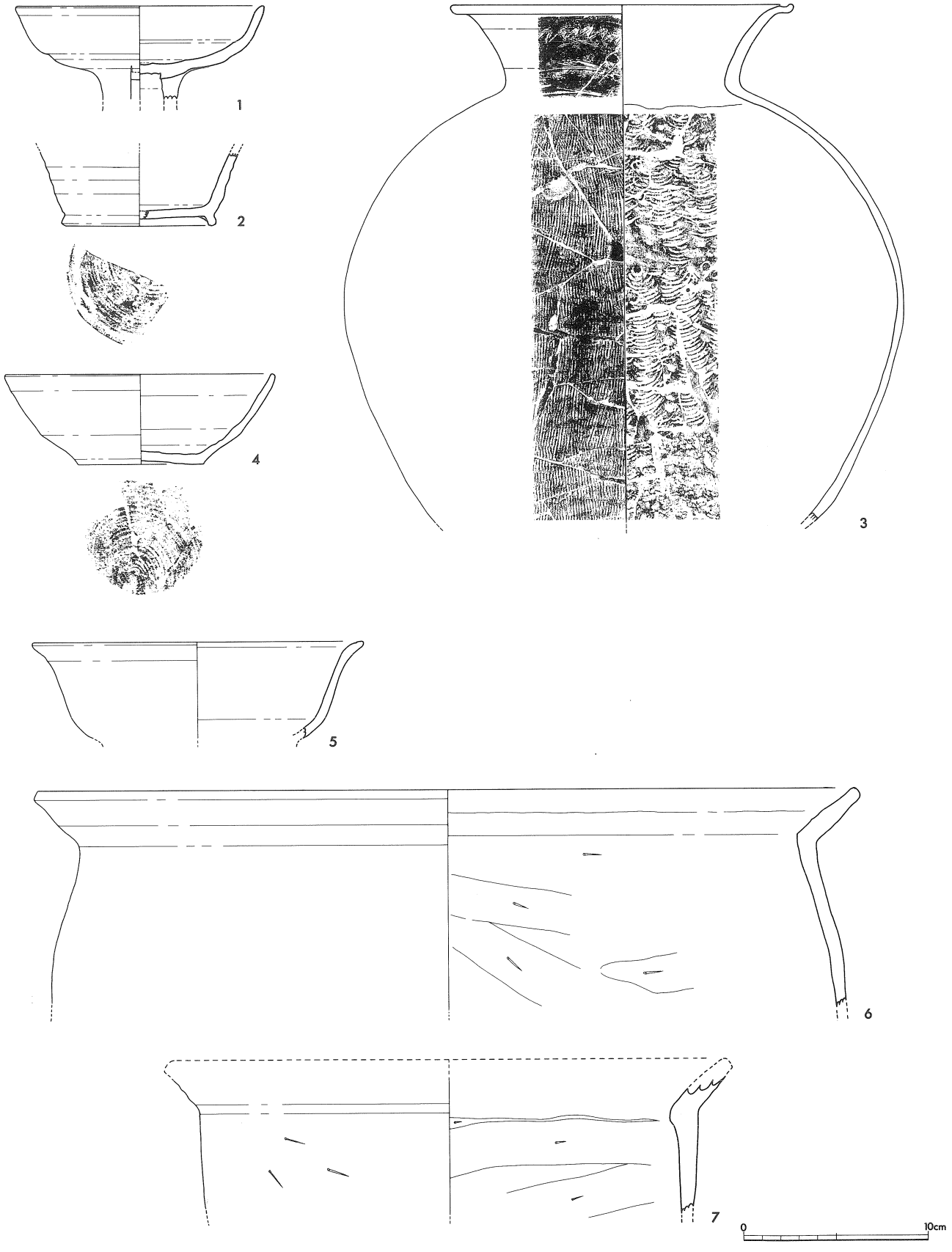
窯体内からは大甕から瓦、坏などの遺物が出土しているが、これらの年代にはばらつきがあり、混入遺物がほとんどである。この窯に伴う遺物は大甕だけと考えられ、時期を明確にいうことは難しい。地磁気年代と遺物から^{2}８世紀後半以降と考えられるが、渋山池遺跡との関連を考慮すると、あるいは10世紀初頭まで下る可能性もあろう。

１号窯出土遺物（第143図・144図）

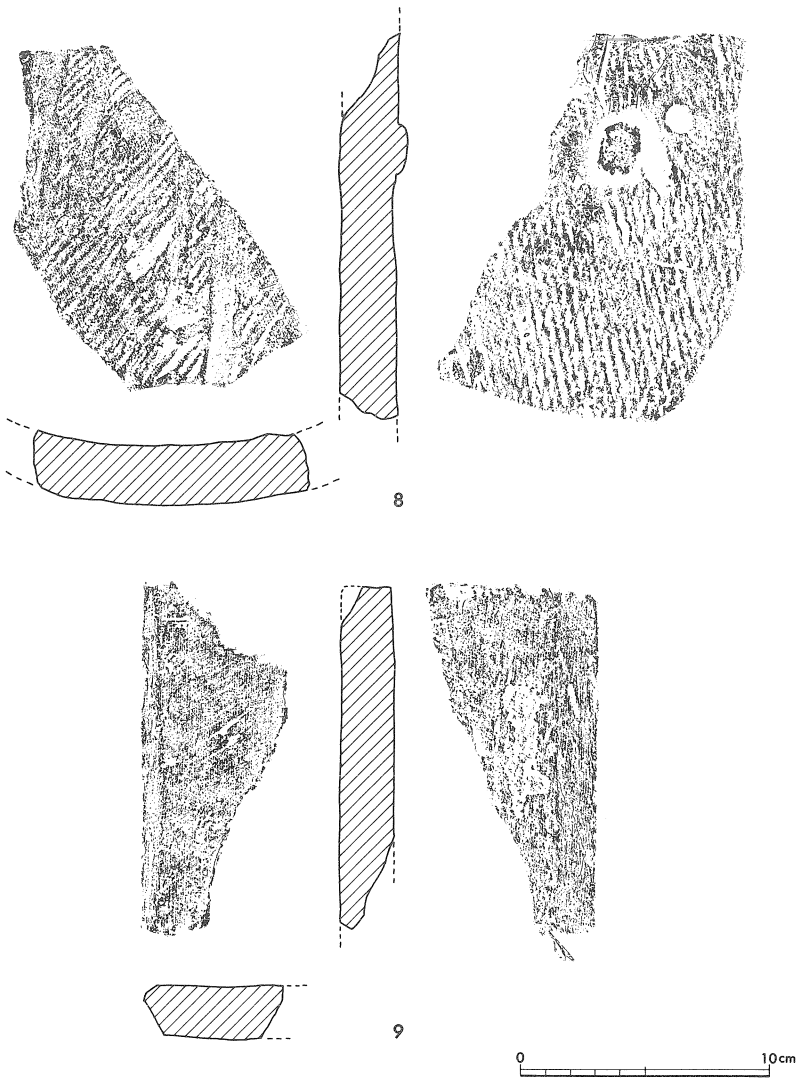
１は低脚無蓋高坏である。口径13.5cmで脚部に２方向透しがあると推定される。口縁部内外面には回転ナデを施す。



第142図　１号窯実測図・遺物出土状況（Ｓ＝１／20）



第143図　１号窯出土遺物実測図(1)（Ｓ＝１／３、３は１／６）



第144図　1号窯出土遺物実測図(2)（S＝1／3）

2は底径約8cmの高台付坏である。回転糸切りの後、高台断面は正方形に近く、一部に重ね焼きの痕跡が見られる。3は須恵器大甕である。口頸部外面には退化した波状文と2条の沈線が廻る。体部外面は平行タタキ、内面には目の粗い青海波文の当具痕が残る。焼成不良で、橙褐色を呈す。4は土師器の杯で、底部は回転糸切りで内・外面ともにナデが施される。色調は淡橙褐色を呈す。5は土師器の坏か椀であろう。口径17.8cmで、口縁部は大きく外反する。6・7は土師器甕である。6は復元口径44.2cmの甕である。口縁部は内・外面ともにヨコナデ、体部の内面はヘラ削りが施される。7は頸部～体部で、内・外面ともヘラ削りが施されている。8・9は平瓦である。8の凸面には縄目タタキを施し、はなれ砂が観察される。凹面はやや湾曲しヘラ状工具による調整痕、糸切り痕、布目痕が残る。厚さ2.3cmで、色調は凸面は黒灰色、凹面は淡黄褐色を呈す。9の凸面には縄目タタキ、はなれ砂が、凹面には糸切り痕が残る。狭端・広端面の区別はつかないが、側面には凹面側からの削りによる面取りで2面が作られている。長辺13.5cm、短辺5.5cmを測る。凸面は黒灰色、凹面は灰白色を呈す。8・9共にはなれ砂が見られることから8C中葉以降の[3]年代が与えられよう。

註

（1）岡山県教育委員会「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116、1997

（2）小松古窯跡群から同様の甕が出土しており、共伴遺物には8C後半～9C初頭の年代が与えられている。

（3）林健亮氏の御教示による。

第５章　まとめ

今回の調査で、丘陵尾根のⅢ区から古墳を、斜面のⅣ区からは横穴墓を多数検出している。尾根上の古墳はいずれも出土遺物から中期後半頃に築造されたものと考えられる。その後は一端墓域としての使用が途絶え、後期後半になって再び尾根部に土壙墓・箱式石棺、斜面に横穴墓を構築し始めていることが判明した。

ここではこれらの調査結果を中心に整理し、若干の検討を加えてまとめとしたい。

第１節　古式群集墳について

丘陵尾根は後世にかなりの部分が削平されており、遺存状態は必ずしも良好ではないものの、不確実なものも含めると計12基の古墳が築造されていたことが判明した。この内、遺物を出土した、確実に時期の分かるものは１号・３号・５号・８号・９号・12号墳の６基である。出土遺物は中期後半の様相を呈し、規模も最大で11mほどで、所謂古式群集墳と呼称されるものである。今回の調査は丘陵頂部と南側斜面を対象に行ったが、丘陵は北側にも舌状に伸びており、古墳群としてはまだ拡大する傾向を見せている。従って、群全体の実態は明らかでないが、今回調査したものについて整理すると次のようになる。

（１）築造順序は遺物が乏しく、且つ時期差が認められないため確言はできないが、西側尾根については選地、切り合い関係から１号墳→２号墳→３号墳の築造順序が想定され、更に東側に向かって丘陵を下降しながら10号墳→11号墳へと続くと考えられる。

　東側尾根については、切り合いと立地から９号墳→８号墳→12号墳と考えられるが、13号墳との前後関係は不明である。５～７号墳は丘陵尾根筋からやや斜面よりに立地し、この状況を尾根筋に築造された８号・９号・13号墳に規制されたものと解釈すれば、これらに後行するとも言える。

（２）主体部を検出出来たのは１号・２号・５号・６号・８号墳である。この内、１号・２号・６号は木棺の長さ1.7～２m内外、幅44～60cmと細長で、６号・８号は長さ1.1～1.4m、幅40～60cmと規模が小さい。また、１号・２号は墳丘の対角線上に主軸を置くのも特徴的である。

（３）１～３号墳はすべて丘陵を切断して盛土を行ったと考えられる方墳で、墳裾及び周溝内からは土師器のみ出土している。６号墳も方墳で、やはり周溝内からは土師器片が出土しているに過ぎない。

（４）５号・８号・９号・12号墳は円墳で、土師器の他に当該期の須恵器を伴う点で上記の古墳とは様相を異にする。

（５）３号墳周溝からは土師器高坏が原位置に並置した状態で出土し、12号墳周溝からもほぼ完形の蓋坏のセットを検出している。

（６）須恵器は５号墳から坏蓋１、12号墳から蓋坏１セット、８号墳から𤭯１が出土しており、これらは大谷編年[1]の出雲１期に相当する。実年代で５世紀末頃に短期間に近接して築造されたものと考えられる。

（７）土師器については時期決定が可能なものとして１号墳出土直口壷、３号・９号墳出土高坏

第3表　出雲東部の主要な古式群集墳　（時期は須恵器：大谷編年、土師器：松山編年）

遺跡名	所在地	墳形	規模	尾根・墳丘に対する位置	須恵器	土師器	その他	時期	文献
大　坪3号墳	安来市早田町	円	径13		壷2、器台1、短頸壷1（主体部）廔1（墳裾土壙）	直口壷1、高坏6（墳裾土壙）		Ⅰ	1
渋山池1号墳	東出雲町揖屋	方	一辺11	対角		直口壷1、高坏片（墳裾）			
2号墳		方	一辺8.5(溝間)	対角					
3号墳		方	一辺6.2(溝間)			高坏7（溝）			
5号墳		円	径7	平行	甕片、坏蓋1	甕片（溝）	鉄鏃1	Ⅰ	
6号墳		方	一辺5.5	平行		破片（溝）			
7号墳		円	径5~6(復元)						
8号墳		円	径9.2	平行	廔1、甕片、小片（溝）	坏（トレンチ）		Ⅰ	
9号墳		円	径11(復元)		小片（溝）	高坏片（溝）			
10号墳		方	一辺6(溝間)						
11号墳		方	一辺5(溝間)						
12号墳		円	径7(推定)		蓋坏1（溝）	甕片、高坏小片（トレンチ）		Ⅰ	
13号墳		方？	6.8(溝間)						
寺　床2号墳		方	13.7×10	対角？			鉄剣1、円筒埴輪		2
3号墳		方	一辺11	対角		甕（棺上）		松山Ⅲ	
4号墳		方	13×8.5	対角	甕（棺上）、坏身1（溝）	高坏7、坏1、低脚付坏1（溝）		Ⅰ	
堤　谷1号墳		方	一辺10	平行	蓋坏2（棺上）		勾玉未製品1（棺上）	Ⅱ・Ⅲ	3
増福寺1号墳	八雲村東岩坂	方	一辺10	直行	坏身1（墳裾）			Ⅱ	4
2号墳		方	一辺12.5			高坏6、直口壷1(溝)		松山Ⅳ	
3号墳		方	一辺14.5	平行		高坏5（墳裾）	鉄剣2、鉄鏃1束（棺内）埴輪（墳端）	松山Ⅲ	
4号墳		方	12×10	平行		高坏6以上（溝）	鉄鏃20（棺内）	松山Ⅳ	
5号墳		方？	一辺8.5			高坏4（溝）		松山Ⅳ	
20号墳		方	10×11	対角	大甕1、子持廔1（墳頂）	高坏、坩1（溝）		Ⅰ	5
21号墳		方	9.5×11	対角		高坏（溝）			
22号墳		方？	？						
23号墳		方	？			高坏9、坩1（溝）		松山Ⅳ	
24号墳		方	？			椀6（溝）		松山Ⅳ	
25号墳		方	10×11		蓋坏、廔、壷1（溝）	小片（溝）		Ⅰ	
26号墳		方	11×12			小片（溝）			
土　井13号墳		方	一辺8.5	対角		椀（溝）		松山Ⅲ	6
中　山2号墳		方	13×9.5	直行	蓋坏3（1棺外）小形壷（2棺外）	手づくね土器（1棺外）	鉄鏃（主体部間）刀子1（2棺内）	Ⅱ	7
勝負谷1号墳	日吉	方	10×11	対角？		高坏（埋土、盛土上面）	円筒埴輪（墓壙上）		8
喰ヶ谷1号墳	松江市東津田	方	一辺7	直行	蓋坏2（棺内）蓋坏2、坏身1（棺外）甕片（溝）	壷（溝）	刀子1鉄鏃1（棺内）	Ⅱ	9
2号墳		方	9×10.5			椀（溝）			
3号墳		略方	一辺10	対角		破片（墳裾）			
荒神谷7号墳	佐草	方	13×11	対角	蓋坏3（棺内）		刀子2（棺内）	Ⅱ	10
井出平山1号墳	山代町	円	13.7~14.8		大形廔1	高坏1（墳裾）	玉類（棺内？）	Ⅰ	11
2号墳		方	一辺9.5	坏身1(溝)				Ⅱ	
八色谷1号墳	上東川津	方	10×11(復元)	対角	甕1（主体部上）		滑石製小玉1（棺内）		12
2号墳		方	6×7						
3号墳		方？	？						
4号墳		方	一辺9	対角	甕1、子持廔1、廔1(溝)	高坏4（溝）		Ⅰ・Ⅱ	
柴　2号墳	西川津	円	径10		大形壷片多数（墳頂）			松山Ⅲ	13
3号墳		方	11.5×10	平行		壷片（礫床中）		Ⅰ	
長　砂1号墳	上乃木	方	16.9×16.6	平行		破片（主体部）高坏2、甕1（墳裾）	直刀1、鉄鏃10（主体部）		14
3号墳		方	12.7×12	対角		壷1（主体部）			
4号墳		方	11.5×12.1	対角	廔2、壷1、坏蓋1(墳裾)	甕1（盛土）ガラス小玉3（主体部）	鉄矛1 瑪瑙勾玉1	松山Ⅲ	
5号墳		略円	径11.9						
6号墳		方	10.9×10	直行	大形廔1(主体部)廔1(墳裾)	破片（墳裾）		松山Ⅲ	
7号墳		方	8.7×10.4	対角？	把手付椀1（墳裾）	壷1（主体部）		Ⅰ	
8号墳		略円	径9.3		廔2（墳裾）	高坏1（墳裾）、破片（主体部）、高坏5、甕1（墳丘斜面）	鉄鏃3（盛土下部）	Ⅰ	
9号墳		方	7.3×8	平行		破片（墳丘斜面）			
10号墳		方	5.4×6.1	平行					
11号墳		方	12.8×13.2	直行	樽形廔1（墳裾）	破片(主体部)、高坏6、壷2、甕1(墳裾)	刀子1（盛土中）	松山Ⅲ	
13号墳		方	8.6×8.3	直行	坏身1（溝）	破片（主体部）壷1（溝）			
14号墳		方	12.2×11	平行	大形廔1（主体部）	高坏3、壷1（墳裾）高坏1（溝）		松山Ⅲ	